

目次

1	研究所の一年.....	1
2	共同研究班	3
2.1	2021 年度 共同研究班一覧	4
2.2	2021 年度 研究班 研究計画申請書	5
2.3	2021 年度 研究班 研究成果報告書	35
3	ブランディング事業	94
3.1	2021 年度 研究所の 2021 年度 全学研究プロジェクト班一覧	95
3.2	2021 年度 ブランディング研究班 研究計画申請書	96
3.3	2021 年度 ブランディング研究班 研究成果報告書	100
4	発行物	107
5	土曜教養講座	109
5.1	2021 年度 土曜教養講座一覧	110
5.2	各回の感想と様子	111
6	公開講座	165
6.1	2021 年度 地域研究所公開講座一覧	166
6.2	公開講座チラシ	167
7	第 1 4 回琉球弧研究支援	172
7.1	2021 年度 琉球弧研究支援（募集要項）	173
7.2	2021 年度 琉球弧支援研究応募者一覧	174
7.3	2021 年度 琉球弧研究支援 最終報告プログラム	175
7.4	2021 年度 琉球弧研究支援 最終報告書	176
8	包括連携協力協定	200
9	委託事業／子どもの貧困対策支援員研修	202
10	環境レポート 2020	204
11	学内所員	212
12	2021 年度地域研究所所長。副所長	214
13	2021 年度地域研究所企画運営委員	216
14	地域研究所規程	218

研究所の一年

2021 年度 研究所の一年

2021 年

- 4月17日 第575回土曜教養講座「コロナ禍だからこそつながろう！子どもと遊び」（オンライン）
- 6月4日 子どもの貧困ソーシャルワーク研修「実情と背景 事例検討の意義と方法」
- 6月8日 子どもの貧困ソーシャルワーク研修「総合支援士は必要なのか スーパービジョン」
- 6月12日 第576回土曜教養講座「琉球列島の自然を考える 世界自然遺産登録に向けた現状と課題」（オンライン）
- 7月3日 第577回土曜教養講座「若年妊婦をどう支えていくのか」（オンライン）
- 7月15日 子どもの貧困ソーシャルワーク「スーパービジョン」
- 8月27日 第1回地域研究所公開講座「コロナに負けない！身近なことから始める健康づくり」（オンライン）
- 8月30日 子どもの貧困ソーシャルワーク研修「スーパービジョン」
- 9月15日 2021年度公開講座 第1回「売場の科学」（オンライン）
- 9月17日 子どもの貧困ソーシャルワーク研修「スーパービジョン」
- 9月25日 第578回土曜教養講座「大切な人を最期に看取ること—終末期ケアを考える」（オンライン）
- 9月29日 第2回地域研究所公開講座「障がい者雇用促進のために—事例報告&ディスカッション—」（オンライン）
- 10月6日 2021年度公開講座 第2回「売場の科学」（オンライン）
- 10月9日 第3回地域研究所公開講座「子どもたちに健康と命の大切さを育む—教師のためのがん教育—」（オンライン）
- 10月12日 子どもの貧困ソーシャルワーク研修「発達障害と愛着障害の相違点と類似点とその対応方法 スーパービジョン」
- 10月27日 2021年度公開講座 第3回「売場の科学」（オンライン）
- 10月28日 子どもの貧困ソーシャルワーク研修「スーパービジョン」
- 10月29日 子どもの貧困ソーシャルワーク研修「スーパービジョン」
- 11月10日 子どもの貧困ソーシャルワーク研修「スーパービジョン」
- 11月16日 子どもの貧困ソーシャルワーク研修「ヤングケアラーを理解する スーパービジョン」
- 11月17日 2021年度公開講座 第4回「売場の科学」（オンライン）
- 11月29日 第4回地域研究所公開講座「女性リーダーの育成—ロールモデルからの提言—」（オンライン）
- 12月4日 第580回土曜教養講座「アフターコロナと自然災害」（オンライン）
- 12月9日 子どもの貧困ソーシャルワーク研修「スーパービジョン」

2021 年

- 1月11日 子どもの貧困ソーシャルワーク研修「子ども家庭福祉」
- 1月21日 子どもの貧困ソーシャルワーク研修「スーパービジョン」
- 2月12日 第581回土曜教養講座「米軍基地と基地労働者」（オンライン）
- 2月17日 2021年度 第14回 琉球弧研究支援 最終報告回（オンライン）
- 2月18日 子どもの貧困ソーシャルワーク研修「実情と背景 事例検討から得られたことをどう活かすか」
- 3月26日 第582回土曜教養講座「沖縄における障がい者スポーツ振興の現在と未来」（オンライン）

【刊行物】

- 2021年4月 『地域研究』26号
- 2021年8月 2020年度『年報』
- 2021年10月 『地域研究』27号

共同研究班

2021 年度 共同研究班一覧

No.	研究班名	研究代表者	研究テーマ	研究概要
1	地域資源の活用方法に関する分析—グスク及び関連遺跡群の事例	石川 公彦	経営学、地域マネジメント	沖縄県の地域資源としてグスク及び関連遺跡群（以下、グスク等）に注目し、各地のグスク等がどのように活用されているのかを事例分析することで、その同一性と相違性が生じる理由を明らかにする。
2	沖縄県内外における中国語標識・案内板、中国における日本語標識・案内板の確認について	王 志英	中国語、日本語	沖縄県内外における中国語標識・案内板、中国における日本語標識・案内板について調査し、間違っていた中国語や日本語を訂正する。
3	沖縄・東アジア地域研究と研究主体養成の基盤に関する発展的研究	我部 聖	沖縄学・地域研究	本研究は、本学大学院現代沖縄研究科沖縄・東アジア地域研究専攻コアキアム形成の授業を利用し、多様化する沖縄やアジアの地域研究に関する共同討議を通じて、地域研究の方法論や研究主体養成の基盤の発展を目指す。
4	琉球弧地域における地域産業振興、地域政策・地方自治問題についての研究	島袋 隆志	産業振興と地域政策・地方自治	本研究班は、琉球弧地域における産業振興と地域政策との歴史的な関係および有効性、そして、そこで生じている地方自治問題の整理をするための調査研究を行い、課題抽出と改善策の展望を目的としている。
5	成人期の栄養摂取の特徴に関する研究	下地 みさ子	食生活学	沖縄県の成人肥満率は全国平均を上回ったままで、県は「2040年に男女とも平均寿命日本一」を長期目標をとし、働き盛りの肥満に焦点を置いた情報を発信している。本研究では働き盛りを対象として食生活に関する調査を行う。
6	沖縄における会計・簿記教育に関する研究	朱 愷雯	九州・沖縄地域	本研究は、九州・沖縄における大学の会計簿記教育の現状を調査し、さらに、コロナの影響により、オンライン試験やオンライン授業が実施されるようになり、大学における会計簿記教育はどのように変化するかについて検討しようとするものである。
7	地域における多機関多職種協働の支援システム構築に関する研究	玉木 千賀子	社会福祉	浦添市をフィールドに地域住民の社会生活支援に携わる社会福祉実践者の実践事例の分析、課題抽出および対応策の検討をおこない、実効性のある多職種多機関協働の支援システムを構築する。
8	沖縄における障がい者スポーツ振興に関する研究	中山 健二郎	障がい者スポーツ	本研究は、沖縄県における障がい者のスポーツ実施に関する実態と課題の把握、およびその課題に対応したスポーツ振興方策の検討を行い、地域障がい者スポーツ振興に寄与することを目的とします。
9	沖縄文学と社会科学（法学・社会学）の交錯にかかわる総合的研究	春田 吉備彦	文学、文学評論、労働社会学、法学	戦後米軍統治下の「軍事要塞基地」であった沖縄においては、基地とのかかわりで、多くの沖縄文学が生まれてきた。そこでは、基地が集中するのが故の矛盾と沖縄民衆の苦渋や喜怒哀楽が文学作品に閉じ込められているといつてよい。文学の言葉を借りてようやく、名前も知らない誰かの痛みに共感できるといえようか。沖縄は米軍基地が集中するが故に、様々な葛藤が地域社会にもたらされる。例えば、土地問題・爆音問題・環境問題・性風俗にかかわる問題などである。本研究班は「沖縄」を舞台にして書かれた文学を社会科学上の視点で捉え直しながら、学術的・総合的な研究を行う。
10	地域の食材を使った様々な「からだ想い昼食弁当」の考案と地域の健康・栄養課題の改善スキルの検討について	逸見 幾代	公衆栄養学、栄養教育論、調理	沖縄県をはじめ中国 広島および北陸 石川県 そして四国 愛媛県など、それぞれの各県食材を取り入れた「からだ想い昼食弁当」の3年目の献立を考慮し、若年者および県民の健康サポートに繋げたい。からだに優しく糖尿病、高血圧、脂質異常症、骨粗鬆症などの生活習慣病の発症・重症化予防とまた一方で若年者に増加している「やせおよび健康やせ」の防止に資する楽しいお弁当を考案する。また3年間の意識調査を分析する。さらに地域の健康・栄養課題の改善スキルの検討を試みる。
11	沖縄における自然災害・戦争災害等の多様な災害の総合的研究	圓田 浩二	社会学、労働法、社会保障法、防災学	災害列島日本では、毎年、台風・豪雨・津波・地震等の多くの自然災害に見舞われるだけではなく、国防政策の変化・国際情勢や国内情勢の緊迫化という事態を受けて、今後、戦争災害(戦災)・労働災害(労災)・NBC災害・CBRNE災害・武力攻撃災害等の多様な災害に被災する可能性が増している。本研究班は、「沖縄」を考察対象として災害概念の再検証と学際的視点から総合的な研究を行う。
12	離島地域における大学の関わる授業実践の創出と実践、及び地域拠点の運営の在り方について	盛口 満	教育	2021年3月世界自然保護基金より白保公民館に移譲された「しらほサンゴ村」を拠点に地域の小・中学生を対象にした自然教育・環境教育の実践と、今後の「白保サンゴ村」の運営・活用について考えるワークショップを実践する。
13	沖縄島嶼部における作物の文化的伝播及び生態的比較—シーブッソパンナとの環境民族的な比較研究—	劉 剛	環境民族学	雲南省における亜熱帯地域であるシーブッソパンナは、中国大陸の最南端に位置し、生態的な自然や植生などの特徴から、沖縄に亜熱帯の類似性が溢れていると同時に人文的な特徴も魅力の充滿されているところである。今回、ハーロッソという沖縄にある民族風食品ムーチにそっくりものの調査・研究に試みをしたい。

2021 年度 研究班 研究計画申請書

新規			
研究名	地域資源の活用方法に関する分析——グスク及び関連遺産群の事例		
代表者名	石川公彦		
研究分野	経営学、地域マネジメント		
対象地域	沖縄県		
内容要約	沖縄県の地域資源としてグスク及び関連遺産群（以下、グスク等）に注目し、各地のグスク等がどのように活用されているのかを事例分析することで、その同一性と相違性が生じる理由を明らかにする。		
研究組織	（研究代表者及び研究分担者） 所員 2 名 / 特別研究員 0 名 / 計 2 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
石川公彦	経法商学部・経法商学科・准教授	経営学	研究代表者
島袋隆志	経法商学部・経法商学科・教授	経営学	研究分担者
研究の目的	本研究の目的は、沖縄県の地域資源としてグスク及び関連遺産群（以下、グスク等）に注目し、各地のグスク等がどのように活用されているのかを事例分析することで、その同一性と相違性が生じる理由を明らかにすることにある。 分析にあたっては、①どのような目的のもとに「ヒト、モノ、カネ、情報」の各要素が結集され、②どのようにマネジメントされ、③どのような効果をあげているのかを、個別事例ごとに具体的に明らかにする。続いて、①から③の項目に関して、事例間の比較分析を行い、地域資源を有効に活用するための一般ロジックを析出する。		
研究項目と方法	【研究項目】 1. 県内の各地のグスク等がどのように活用されているのかを明らかにするために、北部・中部・南部・離島の各エリアにおける代表的な事例を選出する。 2. 事例ごとに、①どのような目的のもとに「ヒト、モノ、カネ、情報」の各要素が結集され、②どのようにマネジメントされ、③どのような効果をあげているのかを、具体的に明らかにする。 3. 上記 2 で明らかになった内容を比較分析し、活用方法等の同一性と相違性が何によって生じるのか分析するとともに、地域資源を有効に活用するための一般ロジックを析出する。 【研究方法】 1. 文献研究、ネット検索などによる事例の選出 2. 第一次資料の収集と分析、現地調査、関係者へのインタビュー調査による事例分析 3. 研究会を通じた分析結果の精査		

期待される成果	従来のまちづくり調査においては、地域特性に規定された地域資源を明らかにし、それがどのように活用されているかを明らかにするというアプローチが多くみられる。このアプローチの場合、各地域に固有の特性に規定された地域資源の事例が、まとまりなく選出される傾向を持つ。そのため、事例間の比較分析することに困難さをともなってきた。 一方、本研究では、分析対象をグスク等という地域資源に統一することで、事例間の比較困難性を相当程度、克服し得ると期待できる。グスク等という、ある意味、「特殊」な地域資源に統一することで、むしろ、その活用にあたっての「一般」的なロジックを明らかにすることを意図する。 まず今年度の成果として、各エリアの代表的なグスク等の活用事例を選出し、事例報告書を作成する。
研究の経緯	研究メンバーはこれまで事例調査の経験を積み、組織やプロジェクトのマネジメントに関する調査分析を重ねてきた。特に本研究と密接な研究としては、様々な主体が連携して取り組むまちづくりの事例分析として『ケースで学ぶまちづくりー協働による活性化への挑戦』（創成社）や「経済社会を創造するまちづくりの論理」『一橋ビジネスレビュー』（61巻2号）などを上梓してきた。 しかし、これらの研究は、先述した従来型のアプローチにもとづく調査研究が中心となっているため、「一般」ロジックの析出に関しては必ずしも十分ではなかった。 今回申請する共同研究班の研究は、その反省に立って、これを補完することをめざす。
今年度研究計画	1. 県内の各地のグスク等がどのように活用されているのかを明らかにするために、北部・中部・南部・離島の各エリアにおける代表的な事例を選出する。この研究作業を行うために図書費を申請した。 2. 事例ごとに、①どのような目的のもとに「ヒト、モノ、カネ、情報」の各要素が結集され、②どのようにマネジメントされ、③どのような効果をあげているのかを、具体的に明らかにする。これらに関して、インタビュー調査なども含めた現地調査を行う必要があり、一般旅費、交通費を申請した。また、必要備品の準備として、その他助成費を申請した。 3. 上記2で明らかになった内容を比較分析し、活用方法等の同一性と相違性が何によって生じるのか分析するとともに、地域資源を有効に活用するための一般ロジックを析出する。この研究作業のために、複写費や会議運営費として、その他助成費を申請した。

2021 年度 研究班 研究計画申請書

新規			
研究名	沖縄県内外における中国語標識・案内板、中国における日本語標識・案内板の確認について		
代表者名	王 志英		
研究分野	中国語、日本語		
対象地域	沖縄県内外、離島、中国西安		
内容要約	沖縄県内外における中国語標識・案内板、中国における日本語標識・案内板について調査し、間違っていた中国語や日本語を訂正する。		
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名 / 特別研究員 1 名 / 計 3 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
王志英	沖縄大学人文学部教授	人間・環境学 言語学、日中対 照研究	研究代表者 報告書の作成、研究成果 のまとめ役、料理講習会を 主催する。
吉井美知子	沖縄大学人文学部教授	社会学	調査・資料収集
泉川友樹	日本国際貿易促進協会	中国経済、日中 関係、通訳・翻 訳	調査・資料収集
研究の目的	沖縄は近年観光客が増加しつつ、大きな経済効果をもたらされている。しかし、観光地などにおける中国語標識、中国語看板などの訳語が不適切な箇所が数多く見られる。外国語の訳が不適切なら、観光客に迷惑をかけるだけではなく、沖縄観光イメージダウンする恐れもある。一昨年までゼミ生と一緒に沖縄県内(那覇市付近)の観光地や、学生のバイト先の中国語標識、中国語看板などの訳語について調査し、冊子にまとめた。調査し、正しい中国語訳にしてから、また各観光地などに手紙、メールなどの方法で送付し、訂正してもらった。このような取り組みは学生の中国語学習意欲向上と、沖縄県観光環境の整備に貢献できたと思う。 一昨年まで沖縄県内の観光地全部調査できなかったため、今年度また引き続き県内(沖縄北部)の調査と離島(久米島、西表島)の調査に取り掛かりたい。石垣島、宮古島についてすでに調査した。 「観光立県沖縄として、多くの観光客を受け入れている沖縄だが、外国人観光客は様々な不便・不満を抱えている。観光客の声を集めた沖縄観光コンベンションビューローの『外国人観光客接客マニュアル』でも観光客の不満の声として、「外国語標識の少なさ」、そして「外国語が通じない」などが挙げられている。」(東門 2017、卒論)。以上のことを解消するには徹底的に各観光地の外国語標識などについて調査し、改正しなければならないと思われる。 同様中国も日本と同じように中国の観光地に日本語の案内板や標識がたくさんある。特に西安は中国の古い都として世によく知られていて、沖縄から西安まで直行便があるほど、多くの日本人が訪れる都市である。十三王朝の都として世界遺産をはじめ多くの遺跡名所がある。しかし、遺跡名所の多くが郊外にあるため、日本語案内板など地元の方々がネットで訳語を調べ、そのまま表示してあるのが普通である。日中の漢字がよく似ているところから、意外に誤訳が多くみられる。中国の観光を促進するため、日本語案内板を調査し、間違っていたのを訂正する必要がある。		

研究項目と方法	● 観光地まで出向いて、中国語標識、日本語標識(空港、店、飲食店、病院など含む)、宣伝用のパンフレットなどについて調査し、収集する。また、間違っていた箇所を訂正し、整理し、収集した先に正しい中国語、日本語を発信する。 ● 可能なら、バス、施設館内の放送、アナウンスーなどの発音、意味もチェックする。また、外国語標識があるべきところについても提案する。
期待される成果	観光地(空港、店、飲食店、病院なども含め)の中国語標識や日本語標識、中国語用語、日本語用語などについて調査や整理する活動を通して、沖縄県内外、中国の観光に貢献することができる。
研究の経緯	2018年、2019年沖縄県内、離島(石垣島、宮古島)の中国語案内板、標識について調査した。多くの間違っていた箇所を指摘し、それぞれの観光地に訂正したものを送った。今年度は更に外国人観光客がよく訪れる離島を中心に役所と連携して、中国語案内板、標識を調査し、正しい表現で表示するよう努力する。
今年度研究計画	今年度調査を予定している箇所 1. 日本 ● 沖縄県内北部のホテル、観光地など ● 離島(久米島周辺、西表島など) 2. 中国(西安) ● 兵馬俑 ● 乾陵 ● 大雁塔 ● 青龍寺

2021 年度 研究班 研究計画申請書

新規			
研究名	沖縄・東アジア地域研究と研究主体養成の基盤に関する発展的研究		
代表者名	我部 聖		
研究分野	沖縄学・地域研究		
対象地域	沖縄・琉球諸島と東アジア地域		
内容要約	本研究は、本学大学院現代沖縄研究科沖縄・東アジア地域研究専攻のコロキウム形式の授業を利用し、多様化する沖縄やアジアの地域研究に関する共同討議を通じて、地域研究の方法論や研究主体養成の基盤の発展を目指す。		
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名 / 特別研究員 0 名 / 計 2 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
我部 聖	経法商学部准教授	沖縄文学思想史	研究代表者
若林 千代	経法商学部教授	沖縄現代史	共同研究者
研究の目的	本研究は、沖縄やアジアにおいて多様化する地域研究に関する共同討議を通じて、地域研究の方法論や研究者主体養成を目的とする。 具体的には、本学大学院現代沖縄研究科沖縄・東アジア地域研究専攻の事例研究コロキウム(「沖縄地域事例研究Ⅰ」「東アジア地域事例研究Ⅱ」)において、講師を招聘して沖縄やアジアの地域研究に関する報告をおこない、招聘した講師との討議を通じて、沖縄・アジア地域研究主体の養成と方法論の学術的発展を目指す。コロナウイルス感染症の影響でオンラインによる報告会になる可能性もあるが、招聘講師や大学院生の意向を尊重しつつ他の所員・特別研究員が参加することで、これまで「中長期経営計画」でも課題とされてきた地域研究所と本学大学院研究科の連携ができると考えている。 本研究は、過去3年の事例研究の取り組みによって形成されつつある研究主体養成の方法論の基盤を発展させることを目指す。		
研究項目と方法	近年専門の垣根を越えて多様化する沖縄やアジアの地域研究の現代性に着目すると同時に、本学現代沖縄研究科の大学院生の修士論文の研究テーマに即して、研究主体養成と大学院教育を目指しつつ、研究実績の豊富な研究者・講師による研究報告を受けて討議する。また可能な限り沖縄で関心の高いテーマを選択し、市民に開かれた研究を模索する。 具体的には、大学院生が研究主体として自主的にコロキウム等の運営に関わり、準備段階において招聘する講師の著書や研究テーマに関する研究論文等を読み合わせて質問項目を作成し、研究報告会当日には招聘講師との討議を通じて研究への理解を深め、その成果を修士論文等にまとめていくことを考えている。 研究項目としては、大学院生の研究テーマに即すと、沖縄における栄養支援(栄養学)、近世琉球における家譜(琉球史)、沖縄における貧困問題(戦後史)等があげられる		

研究項目と方法	近年専門の垣根を越えて多様化する沖縄やアジアの地域研究の現代性に着目すると同時に、本学現代沖縄研究科の大学院生の修士論文の研究テーマに即して、研究主体養成と大学院教育を目指しつつ、研究実績の豊富な研究者・講師による研究報告を受けて討議する。また可能な限り沖縄で関心の高いテーマを選択し、市民に開かれた研究を模索する。 具体的には、大学院生が研究主体として自主的にコロキウム等の運営に関わり、準備段階において招聘する講師の著書や研究テーマに関する研究論文等を読み合わせて質問項目を作成し、研究報告会当日には招聘講師との討議を通じて研究への理解を深め、その成果を修士論文等にまとめていくことを考えている。 研究項目としては、大学院生の研究テーマに即すと、沖縄における栄養支援(栄養学)、近世琉球における家譜(琉球史)、沖縄における貧困問題(戦後史)等があげられる。
期待される成果	大学院生による研究主体の養成を研究室や教員単位の指導だけでは困難であることから、多くの大学院ではコロキウム形式(共同ゼミナール形式)を通じての教育をカリキュラムに取り入れている。本学においても、現代沖縄研究科沖縄・東アジア地域研究専攻に設置された事例研究(「沖縄地域事例研究」「東アジア地域事例研究」)ではコロキウムを実施してきた。過去3年の事例の蓄積により、コロキウム形式の事例研究において、研究主体を養成する方法論の基盤が形成されつつある。 具体的には、事例研究を受講する大学院生の研究テーマに関連した研究者を招聘する研究報告会を定期的におこない、報告に関連する文献の共同討議を通じて研究への理解を深めていくが、報告内容や関連文献の書評等を「地域研究」等に発表することで知的蓄積をおこなう。またコロキウムに参加した本学大学院修了生が特別研究員となり、コロキウムで得られた知見を「地域研究」等に発表することが期待される。
研究の経緯	昨年度まで3年間、沖縄・東アジア地域の人文学と研究主体養成の基盤に関する基礎研究に取り組んできた。共同研究班の研究費により、沖縄の移民と文学、沖縄における持続可能な農業と南米の農業、ニューカレドニアの沖縄移民、琉球料理の復元と研究、テレビと沖縄の基地報道、土地をめぐる琉球・沖縄史、沖縄のこども観の歴史、琉球家譜の歴史、性暴力と刑法、沖縄空手の「型」の変容、沖縄戦後史、進貢貿易などをテーマとする公開研究会を実施することができた。研究会の準備段階から本学大学院生が積極的にかかわり、研究会で得られた知見を修士論文に結実させた。 3年間の蓄積を活かして、引き続き大学院生の研究主体養成に力を入れながら、多様化する沖縄研究を総合的に研究するための基礎を構築する。また本学大学院現代沖縄研究科と地域研究所の連携を
今年度研究計画	2021年度の予定は以下の通りであるが、報告者は大学院生と現在検討中である。 2021年5月 沖縄における栄養学(仮) 研究報告 未定 (謝金) 2021年6月 近世琉球史(仮) 研究報告 未定 (謝金) 2021年7月 沖縄における貧困問題(仮) 研究報告 未定 (謝金) 2021年11月 沖縄研究の現状と課題(仮) 研究報告 未定 (謝金) ※県外講師の場合旅費(感染状況により判断)

	2021 年 12 月 家譜研究（仮） 研究報告 未定 （謝金） 2022 年 1 月 沖縄戦後史研究（仮） 研究報告 未定 （謝金）
--	---

2021 年度 研究班 研究計画申請書

新規			
研究名	琉球弧地域における地域産業振興、地域政策・地方自治問題についての研究		
代表者名	島袋隆志		
研究分野	産業振興と地域政策・地方自治		
対象地域	琉球弧地域		
内容要約	本研究班は、琉球弧地域における産業振興と地域政策との歴史的な関係および有効性、そして、そこで生じている地方自治問題の整理をするための調査研究を行い、課題抽出と改善策の展望を目的としている。		
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名 / 特別研究員 10 名 / 計 12 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
島袋隆志	沖縄大学 経法商学部 教授	経営学 キャリア教育	研究代表者（専任 所員）
石川公彦	沖縄大学 経法商学部 准教授	経営学 経営組織論	研究分担者（専任 所員）
小林 甫	沖縄大学 名誉教授	経営学	研究協力者（特別 研究員）
組原 洋	沖縄大学 名誉教授	法学	研究協力者（特別 研究員）
大城辰彦	沖縄中小企業家同友会 参与	中小企業経営	研究協力者（特別 研究員）
山崎憲昭	社会保険労務士 日本雇用管理協会 専務理事	企業経営と CSR	研究協力者（特別 研究員）
三平和男	社会保険労務士 社会保険労務士法人 三平事務所 代表	企業経営と障がい者雇 用	研究協力者（特別 研究員）
湧田 廣	おきなわ住民自治研究所事務局長 元 那覇市福祉部長	地方自治・福祉	研究協力者（特別 研究員）
米倉外昭	琉球新報社 編集局文化部記者	雇用・労働と報道メデ ィア	研究協力者（特別 研究員）
上平泰博	一般社団法人 協同総研 顧問	社会教育	研究協力者（特別 研究員）
志喜屋盛隆	自治労・自治研センター	労使関係	研究協力者（特別 研究員）
佐渡山要	ていあんだあクラブ 代表	引きこもり児童支援・ キャリア教育	研究協力者・特別 研究員

研究の目的	琉球弧地域における、農業、商工業、サービス産業の盛衰と、産業振興開発や地域政策との関係性を調査研究し、今後の産業政策に関する地方自治および地域活性化の在り方を考える。 とくに、戦前期における与那国、宮古・八重山および本島と台湾との間の住民の労働移動が、戦後の沖縄の雇用・労働の在り方にどのような影響を及ぼしてきたのか検討するのが目的である。
研究項目と方法	上記の目的に沿って、テーマ別に調査を進める。 <u>1. 琉球弧地域における産業振興と地域政策、地方自治問題の調査。</u> ・戦前・戦後の各次振興開発計画における、第一次、第二次、第三次産業がどのように捉えられてきたか整理する。 <u>2. 戦前沖縄の産業政策、地方自治の状況把握と課題</u> ・これまでの政策決定のプロセスと、住民の意見の反映状況について調査整理する。 <u>3. 戦前沖縄から台湾への住民・労働移動の状況把握</u> ・戦前における与那国、宮古・八重山等と台湾との労働移動等が、戦後の沖縄の雇用・労働の在り方に及ぼす影響を整理する。 <u>4. 戦後沖縄への影響調査</u> ・産業団体・労働組合、政策立案者が産業振興にどのように関わり地方自治を形成してきたかについて状況把握と調査整理する。 <u>5. 本研究の検討過程および調査研究結果の公開</u> ・本研究の検討過程および調査研究結果については、論考発表等により一般市民に対して公開する。
期待される成果	本年度は、産業振興、雇用・労働、地方自治の各研究会開催を通じて、各専門領域の基礎的調査研究を進める。 <u>1. 産業振興の実状と展望について、データに基づいた意見集約を図り一般に公表する。</u> とくに、コロナ禍における各産業への影響を測り、適切な産業構造、産業振興について展望につなげる。 <u>2. 内発的な地域政策の構築について、データに基づいた意見集約を図り一般に公表する。</u> 近年広がるSDGs（持続的開発目標）は、従来の「内発的発展」概念に通底するものであり、持続性と域内循環型での経済発展、産業振興の行政施策を検討するためのネットワークを、研究会・シンポジウム等を通じて拡充する。

研究の経緯	以下、各々の調査研究・学習会を関連付けて、その成果を一般向け発表していく。 コロナ感染の状況によってはリモート会議や学習会での発表方法も検討する。 1. 島袋・大城・山崎、他による商工業分野の雇用・労働における研究。 2. 島袋・湧田・上平、他による自治体政策に関する研究 3. 島袋・三平・志喜屋、他による雇用・労働に関する研究 4. 島袋・佐渡山、他による、福祉・雇用連携の研究
今年度研究計画	今年度は、以下の調査研究を進める。 【図書資料の調査整理・その他経費計上分】（¥50,000-） 1. 産業振興開発計画と、その政策の反映がどのように表れているかを調査整理する。 【実地ヒアリング調査（国内）経費計上分】（¥300,000-） 1. 各次産業と政策立案担当者向けに聴き取り調査する。

2021 年度 研究班 研究計画申請書

新規			
研究名	成人期の栄養素摂取の特徴に関する研究		
代表者名	下地 みさ子		
研究分野	食生活学		
対象地域	沖縄県内		
内容要約	沖縄県の成人肥満率は全国平均を上回ったままで、県は「2040 年に男女とも平均寿命日本一」を長期目標とし、働き盛りの肥満に焦点を置いた情報を発信している。本研究では働き盛りを対象として食生活に関する調査を行う。		
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名 / 特別研究員 2 名 / 計 4 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
下地 みさ子	沖縄大学・健康栄養学部管理栄養学科・准教授	栄養学・分子栄養学	研究代表者
逸見 幾代	沖縄大学・健康栄養学部管理栄養学科・教授	栄養学・公衆栄養学	所員研究員
叶内 宏明	大阪府立大学・総合リハビリテーション学研究科・教授	栄養学・食品科学	特別研究員
照屋 潤二郎	株式会社沖縄 TLO・経営企画室兼企業支援室・室長	地域資源を活かした産学官イノベーション	特別研究員
研究の目的	沖縄県の肥満率は全国平均を上回ったままで未だ深刻な問題であり、県は「2040 年に男女とも平均寿命日本一」を長期的な目標とし具体的な健康増進計画として「健康おきなわ 21 (第 2 次) ～健康・長寿おきなわ復活プラン～」を策定し、健康に関わる 8 つの分野における活動を推進している。「食生活」の分野では、働き盛りの肥満に焦点を置いて、ホームページにて肥満の現状や推薦外食店の情報等を発信している。本研究は、働き盛り年齢層の栄養素摂取状況や食生活に関する意識の特徴を見出すことを目的として行う。		
研究項目と方法	沖縄県在住の働き盛り年齢層に対して栄養素摂取状況調査および食生活に対する意識調査を、IT ツールを用いてアンケート方式で行う。		
期待される成果	今年度はコロナ禍の影響を受けると考えられる。食生活はこれまでと異なっていることが予想されるので、むしろその違いについて聞き取ることによって生活環境の変化に伴う栄養摂取状況や意識についての貴重な結果が得られると思う。		

研究の経緯	【発案の経緯】 研究代表者は管理栄養士として病院勤務した経験があり、働き盛りの肥満や糖尿病患者への栄養指導がいかに難しいか身をもって感じてきた。特に外来患者の食事コントロールは、入院患者に比べて目が届かない部分が多く食生活が把握しにくいところが難しい。また、集団を対象とする食事指導には様々なツールと方法があるが、個人を対象とする場合は、多様な生活環境、食べ方、考え方等から食生活をプロファイリングしなければならないというステップが加わる。プロファイリングに利用できるような簡単な調査票があれば、個人指導を効率的に行うことができるであろう。
今年度研究計画	・研究倫理委員会の承認を受ける ・調査票の作成について、栄養調査の専門家である大阪府立大学教授のアドバイスを受けながら作り上げる。 ・調査対象集団の絞り込み、および調査の実施方法について、株式会社沖縄 TL0・経営企画室兼企業支援室室長と企画する。 ・居住区域別に、県内数区域の調査を行う。

2021 年度 研究班 研究計画申請書

継続（3年目）			
研究名	沖縄における会計・簿記教育に関する研究		
代表者名	朱 愷雯		
研究分野	財務会計		
対象地域	九州・沖縄地域		
内容要約	本研究は、九州・沖縄における大学の会計簿記教育の現状を調査し、さらに、コロナの影響により、オンライン試験やオンライン授業が実施されるようになり、大学における会計簿記教育はどのように変化するかについて検討しようとするものである。		
研究組織	（研究代表者及び研究分担者） 所員 2 名 / 特別研究員 2 名 / 計 4 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
朱 愷雯	沖縄大学経法商学部経法商学科・講師	財務会計	研究代表者
石川公彦	沖縄大学経法商学部経法商学科・准教授	日本経営論	所員
佐藤信彦	熊本学園大学大学院会計専門職研究科・教授	財務会計	特別研究員
姚 小佳	近畿大学産業理工学部・准教授	財務会計	特別研究員
研究の目的	現在、大学における会計簿記の教育は、検定試験や資格試験を過度に重視するという問題が指摘されている。学生にとっては、資格を取得する目標を設定することによって、学習のモチベーションを維持できるというメリットがあるが、教育上では、決して問題はないとは言えない。会計処理の方法を理解できないまま会計簿記の資格を取得した学生、また、会計・簿記の重要性を理解できず、簿記・会計の知識が必要ではないというイメージを持つ学生は少なくないと思われる。 さらに、コロナの影響により、今年度から各大学においては、オンライン等の遠隔授業が始まり、また、各種簿記検定試験がオンライン試験に変わるという案内があった。 本研究は、大学における会計・簿記教育の現状を調査し、大学における会計・簿記教育の方法、そして、遠隔授業やオンライン試験の実施に伴って、大学での会計・簿記教育はどのように変化するか、また、どのように行っているのかについて検討しようとするものである。		
研究項目と方法	具体的には、以下の方法を用いて、研究を行う予定である。 ① 研究班のメンバーと意見交換し、インタビュー調査の内容や調査の方向性を決定する。 ② 他大学の教育者の協力を求め、九州・沖縄地域の大学教員を調査対象として、インタビュー調査を行う。 ③ 遠隔授業やオンライン試験の実施に伴って、大学での会計・簿記教育はどのように変化するか、また、どのように行っているのかについて検討する。		

期待される成果	インタビュー調査を行うことによって、オンライン試験やオンライン授業の実施により、大学における会計・簿記教育はどのように変化しているのかを明らかにすることができる。また、今後の会計・簿記教育のあり方を検討しようとしている。
研究の経緯	昨年度は、特に、大学における中小企業会計教育の現状を浮き彫りにし、中小企業会計を大学教育における取り組みの重要性を強調したうえで、その取り組みのあり方について検討した。その研究成果は、『沖縄大学経法商学部紀要』第 1 号に掲載されている。 ● 朱愷雯[2020]「大学における中小企業会計教育の現状と課題」『沖縄大学経法商学部紀要』第 1 号、15-26 頁。 さらに、遠隔授業やオンライン試験の実施に伴って、大学での会計・簿記教育はどのように変化するのか、また、どのように行っているのかについて、研究班のメンバーと意見交換し、インタビュー調査に向けて、問題の設定、調査内容や調査の方向性を決めた。
今年度研究計画	今年度の研究計画は、以下の通りである。 ① 2021 年 4 月～2021 年 5 月 簿記会計科目を提供する沖縄 4 大学における遠隔授業への対応の実態をインタビュー調査を通じて明らかにする。 ② 2021 年 6 月～2021 年 11 月 九州地域の大学教員に協力を求め、インタビュー調査を行う(旅費、交通費)。 ③ 2021 年 12 月～2022 年 3 月 遠隔授業やオンライン試験の実施に伴って、大学での会計・簿記教育はどのように変化するのか、また、今後どのように行っていくべきかについて、研究メンバーと検討し、研究成果を論文として投稿する予定である(旅費、交通費、図書費)。

2021 年度 研究班 研究計画申請書

継続（2 年目）			
研究名	地域における多機関多職種協働の支援システム構築に関する研究		
代表者名	玉木千賀子		
研究分野	社会福祉		
対象地域	浦添市		
内容要約	浦添市をフィールドに地域住民の社会生活支援に携わる社会福祉実践者の実践事例の分析、課題抽出および対応策の検討をおこない、実効性のある多職種多機関協働の支援システムを構築する。		
研究組織	（研究代表者及び研究分担者） 所員 1 名 / 特別研究員 2 名 / 計 3 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
玉木千賀子	沖縄大学人文学部福祉文化学科教授	ソーシャルワーク	研究代表 全体取りまとめ、報告
上地武昭	沖縄大学名誉教授	地域福祉	研究分担者 研究の構想・分析
屋嘉比和枝	浦添市いきいき高齢支援課	高齢者福祉 (認知症施策)	研究分担者 研究の構想・分析
研究の目的	地域住民の社会生活支援に携わる福祉実践者は多忙な業務に追われ、日々の実践を検証して、優れた実践を他者と共有して汎用化したり、地域課題を提起したりするという、全体を見渡して実践の開発に取り組むという視点をもつことが困難な状況にある。しかし、実効性のある社会生活支援のしくみづくりは、日頃の実践を省察し、それを記録として残し、見える化して、検討材料を蓄積するというベースなくしては成り立たない。 このような問題意識に基づき、福祉実践者のネットワークに積極的に取り組んでいる浦添市を研究のフィールドとして位置づけ、研究者と福祉実践者および実践者同士の対話、実践事例の共有・検討、これらの取り組みに関する考察および記録の蓄積をととして、多機関多職種による地域生活支援システムのあり方についての検討を目的としたアクションリサーチに取り組む。		
研究項目と方法	研究期間 1 年目（2020 年度） 研究概要：地域生活における多機関多職種連携の支援システムの構築には、連携に関わる専門機関や実践者、それぞれが担う支援機能を適切に発揮することが不可欠である。このような考えに基づいて、①福祉実践者の支援の現状（到達点・課題等）を踏まえた検討、②研究チームと実践者が課題の認識や研究の意義を共有するための対話の重視、③実践者と協働して研究過程を歩む、という 3 点を基本的なスタンスとして共同研究に着手した。 研究方法・研究成果：共同研究メンバー、研究協力者（社会福祉協議会の福祉実践者 4 人が継続的に参加）による定例研究会（2020 年 6 月～2021 年 3 月、14 回開催）を実施し、地域の福祉実践者が直面している課題解決に関する議論に基づいて研究項目・方法を決定・実施するという帰納的な方法を用いて、コミュニティソーシャルワークに従事する福祉実践者の新人研修プログラム案を作成した。		

期待される成果	研究期間 1 年目に作成したコミュニティソーシャルワークに従事する福祉実践者の新人研修プログラム案についてのヒアリング調査、パイロットスタディを実施する。並行して沖縄県社会福祉協議会の協力を得て、県内社会福祉協議会においても調査を行い、新人研修プログラムを完成させる。
研究の経緯	昨年度までの研究成果 新人コミュニティソーシャルワーカー研修案の作成 発表方法 2021 年度、「地域研究」に投稿予定。
今年度研究計画	・昨年度に引き続き研究会を実施し、調査結果の分析、研修案の見直しを図る。 ・上記の研究活動に伴う情報収集（図書・資料）、消耗品、会場使用料等（その他助成費）を研究費として申請する。

2021 年度 研究班 研究計画申請書

新規			
研究名	沖縄県における障がい者スポーツ振興に関する研究		
代表者名	中山健二郎		
研究分野	障がい者スポーツ		
対象地域	沖縄県		
内容要約	本研究は、沖縄県における障がい者のスポーツ実施に関する実態と課題の把握、およびその課題に対応したスポーツ振興方策の検討を行い、地域の障がい者スポーツ振興に寄与することを目的とします。		
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名 / 特別研究員 1 名 / 計 3 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
中山健二郎	沖縄大学 福祉文化学科 講師	スポーツ社会学	研究代表者
石原端子	沖縄大学 福祉文化学科 准教授	スポーツ心理学	研究分担者
手登根雄次	沖縄県障がい者スポーツ協会 理事	障がい者 スポーツ指導論	研究分担者
研究の目的	本研究は、沖縄県における障がい者のスポーツ実施に関する実態と課題の把握、およびその課題に対応したスポーツ振興方策の検討を目的とする。県内の障がい者スポーツ振興については、「沖縄県スポーツ推進計画」に障がい者のスポーツ参加率向上が重点課題として明記されており、また「沖縄県障害福祉計画(第5期)」でも、障がい者のスポーツやレクリエーション活動参加の取り組みを推進することが謳われている。しかしながら、その基礎となる障がい者のスポーツ実施に関する調査等が行われていない為、実態と課題の把握が十分になされておらず、課題に基づく具体的な方策も設定されていない。そこで本研究では、県内における障がい者のスポーツ実施に関する基礎調査、およびその調査結果に基づいたスポーツ振興事業の実施と成果検証を通じて、沖縄県の障がい者スポーツ振興に関する現状と課題を整理し、課題に基づくスポーツ振興計画の具体化に寄与することを目指す。		
研究項目と方法	本研究は、主に以下3つの取り組みから構成される。 ①沖縄県における障がい者のスポーツ実施に関する量的調査 スポーツ庁(2019)「障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究」の調査項目を参照し、県内の「身体障害者手帳」(身体障がい)、「療育手帳」(知的障がい)、「精神障害者保健福祉手帳」(精神障がい) 保持者を対象に、スポーツ実施状況に関する質問紙調査を行う。 ②調査結果に基づく障がい者スポーツ振興事業の実施と成果検証 スポーツ実施状況の調査結果をもとに、課題解決に寄与する障がい者スポーツ教室を開催し、参加者へのヒアリング調査によって事業の成果検証および量的調査の結果を補足する個別具体的な課題の抽出を行う。 ③沖縄県の障がい者スポーツ振興に関するシンポジウムの開催 上記 2 つの調査結果から沖縄県の障がい者におけるスポーツ実施に関する実態と課題を整理し、その課題に対応する振興計画や今後の方策を検討する。検討された内容をもとに、沖縄県の障がい者スポーツ振興に関する啓発シンポジウムを開催し、現状と課題、課題解決に向けた計画と方策、検討すべきアクションプ		

	ランについて、関係諸団体と共有・議論する。
期待される成果	本研究により、主に以下2点の成果が期待される。 ①障がい者スポーツ振興に関する県内独自課題の把握 障がい者スポーツ振興に関しては、環境や施設のバリアフリー化、指導員やボランティアの充実などの面で、各都道府県や地域がそれぞれ異なる課題を抱えているものと思われる。本研究で県内の障がい当事者に対する横断的な量的調査、およびスポーツ教室参加者への質的調査を行うことで、沖縄県固有の障がい者スポーツに関する実態を把握し、課題を明確化することが可能となる。 ②沖縄県の障がい者スポーツ振興に関する効果的な計画の検討および啓発 上記の課題を明確化することにより、県内の障がい者スポーツ振興に向けて、まず「誰に対して」「どのような施策を」提供していくことが重要なのか、必要な施策と優先順位、考慮すべき点などを具体的に検討することが可能となる。また、シンポジウム等を通じて調査結果を関係諸団体と広く共有することで、実践現場における課題に基づく効果的・体系的な活動づくりに寄与する。
研究の経緯	福祉文化学科では、2020年度より沖縄県障がい者スポーツ協会と連携し「障がい者スポーツ指導員」養成カリキュラムの強化を実施している。具体的には、現場で活躍する指導者を積極的に外部講師として招聘し、学生の指導スキル向上を図るとともに、本学体育館で5回にわたり障がい者スポーツ教室を開催し、学生が実践経験を積みつつ地域の障がい者スポーツ振興に寄与する取り組みを行ってきた。この取り組みの成果は、研究代表者によって「第33回九州レジャー・レクリエーション学会」にて報告された。2021年度は上記プロジェクトの継続ならびに共同での調査研究活動を念頭に、本学と県障がい者スポーツ協会とで包括連携協定を取り結ぶ方向で調整を進めている。以上の経緯を踏まえ、県内の障がい者スポーツ振興に関する課題を把握し、課題に対する効果的な施策について、県協会と本学が連携して検討していくことを志向し、本研究が計画された。 なお、研究代表者は過去にNHKと共同し「平昌パラリンピック視聴者の意識調査」の企画・実施を担当しており、当該研究領域の社会調査に関する知見を有している。また、研究分担者2名は、県内のスポーツ団体、障がい者スポーツ団体、福祉団体等とのネットワークを持ち、調査を実現可能とする実務的な知見を有している。
今年度研究計画	○4月～5月 ・ 先行研究の検討 ○6月～7月 ・ 調査設計および調査実施に関する事務手続きの検討 ○8月～9月 ・ 質問紙の作成および送付・回収（500部を予定） ※送付・回収に関わる消耗品費（封筒、切手等）：¥90,000 ※障がい当事者への質問紙送付に関わる業務委託費：¥21,000（¥7,000×3団体） ○10月～2月 ・ 質問紙調査の結果分析・考察 ・ スポーツ教室の実施およびヒアリング調査 ※教室講師および調査協力謝金：¥48,000（¥12,000×4名） ・ ヒアリング調査結果の分析・考察 ・ 報告書作成 ○3月 ・ シンポジウム開催 ※講師謝金：¥12,000（1名）

2021 年度 研究班 研究計画申請書

新規			
研究名	沖縄文学と社会科学(法律学・社会学)の交錯にかかわる総合的研究		
代表者名	春田吉備彦		
研究分野	文学、文学評論、労働社会学、法律学		
対象地域	沖縄本島および離島		
内容要約	戦後米軍統治下の「軍事要塞基地」であった沖縄においては、基地とのかかわりで、多くの沖縄文学が生まれてきた。そこでは、基地が集中するが故の矛盾と沖縄民衆の苦渋や喜怒哀楽が文学作品に閉じ込められているといっていよい。文学の言葉を借りてようやく、名前も知らない誰かの痛みに共感できるといえようか。 沖縄は米軍基地が集中するが故に、様々な葛藤が地域社会にもたらされる。例えば、土地問題・爆音問題・環境問題・性風俗にかかわる問題などである。本研究班は、「沖縄」を舞台にして書かれた文学を社会科学上の視点で捉え直しながら、学際的・総合的な研究を行う。		
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名 / 特別研究員 3 名 / 計 5 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
春田吉備彦	沖縄大学経法商学部教授	労働法	研究代表者
我部聖	沖縄大学経法商学部准教授	沖縄文学評論	沖縄の文学評論
糸数晃	文学者(沖縄大学職員)	文学作品制作	文学執筆論
浜川智久仁	文学者(沖縄大学職員)	文学作品制作	文学執筆論
伊原亮司	岐阜大学准教授	労働社会学	社会学的分析
研究の目的	沖縄は戦後、米軍統治下にあり、その後も、米軍基地が集中する。このことから様々な葛藤が地域社会にもたらされる。例えば、土地問題・爆音問題・飛行機部品の落下物問題・環境問題・基地労働問題・性風俗にかかわる問題などである。文学の言葉を借りてようやく、名前も知らない誰かの痛みに共感できるというしかない。 戦後の米軍統治下の「軍事要塞基地・沖縄」では、基地とのかかわりで、多くの沖縄文学が生まれた。この点を分析した、マイク・モラスキーのいう、いわゆる「占領文学」である。これは、すなわち、戦後日本で書かれた「アメリカ人占領者と占領下の民衆との間のかかわりを描写した、文学作品などの作品」である。ここに掲げられた文学作品の読解を進めることで、50 年代の多くの男性作家が米兵に犯される日本の女たちを描くことで、逆にどのように自らの男性性、またはそれを基礎にしたナショナルな主体を再構築していったのかをあらため検証できよう(マイク・モラスキー『新版 占領の記憶 記憶の占領―戦後沖縄・日本とアメリカ』(岩波書店、2018 年)。なお、最近の基地文学にかかわる作品としては、末吉節子『基地と心中』(文芸社、2017 年)、佐川和茂『青春の光と影 在日米軍基地の思い出』(大阪教育図書、2019 年)、真島丈『宝島』(講談社、2018 年)などがある。 本研究班の特徴は、自ら文学作品の執筆に取り組む作家たちと社会学者が対話しながら、一つ一つの小説から社会科学から何がいえ、それを文学はどう表現		

	するのかということを交差させながら検証していくことにある。一例をあげると、例えば、「モリモトさんがレイコさんの美貌と甘言に惑わされてレイコさんに破格の安値でマンションを売ってしまった。カネモトさんはそのことを知らずにレイコさんからマンションを買った」というシナリオに基づき小説を書くとしよう。この場合、(1)レイコの悪女的な女性的魅力に焦点をあてて描写する、(2)トラブルに巻き込まれる男どもの愚かさや女性のしたたかさを描く、(3)このような関係を持たなければそもそも他人であった三人のこれまでの人生をそれぞれ描くという主題設定となろう。この点、社会科学とりわけ法律学からは、人間関係よりも裁判の行方に関心を持つことになる。その帰結は、極めて凡庸なものとなってしまう。モリモトさんはレイコさんに対して詐欺を理由に売買契約を取り消すことが出来るか否かという周知の凡庸な問題である。結論は、カネモトさんに対しては、「レイコに騙された。詐欺なのでマンションは返してください」ということはできない(民法 96 条 1 項・2 項参照)。このように同じ社会的現象を取り扱っても、文学は人間の心や営みに関心を持つが、社会科学は、法的問題などの枠組みと紛争解決方法に関心を持つ。 本研究班では、同一の問題に対する学問的アプローチの違いのある、文学者と社会科学者の対話を通じて、その学問のずれと共通理解となりうるものを抽出しながら、新たな視点を開拓していく。
研究項目と方法	研究項目としては、つぎの通りである。 研究班の文学上の課題としては、マイク・モラスキー『新版 占領の記憶 記憶の占領一戦後沖縄・日本とアメリカ』(岩波書店、2018 年)に掲げられた、一連の文学作品を、熟読精査し、それぞれ文学者の立場と社会科学者の立場から分析し、それら素材を通した双方向的な対話から、同一の素材から、なぜ、そのような捉え方の違いが出るのかを抽出していく。文学者の考察は必然的に文学評論のようなものとなるであろうし、社会科学者の立場からは、例えば、多様な法的論点を見出していくという作業になるであろう。 本研究班では、まず、①戦後沖縄文学上の文献上の基礎的共通理解を涵養し、②文学の視点から解析する、③社会科学の視点から解析する、④同一の素材を両者の視点からとらえ直して、併記したものを統一の論稿として実験的にまとめていく(この作業はおのずと両分野の研究者の共著とならざるを得ない)。かかる学際的研究を通じて、多様な文学作品を再検証することで、各学問領域の今後の議論に向けたプラットフォームを構築していく。沖縄文学の作品の特徴として、「法」に守られない、法の埒外にある人たちの生を描いている、ということがあるといえよう。この点を社会学者や法学者が、どう読み解き整理するかは興味のつきないところがある。 本研究活動は、ともすると、各学問領域の枠内での専門的知見の細分化に留まってしまう、その全体像を通底するアプローチや各学問領域の連携が脆弱になりがちな傾向がある。本研究班の特徴は、学問領域の横断を図りながら、しかも、沖縄を主要な舞台として文学作品に考察を加えていくことに特徴がある。
期待される成果	各文学者は、本研究会の議論にインスパイヤーされ、その対話を通して、独自の文学作品の公表していくことになる。社会科学者は、例えば、「労働経済」「労働法律旬報」「沖縄大学経法商学部紀要」「地域研究」などの専門雑誌への論文掲載が見込まれる。

研究の経緯	これまでの研究において、春田吉備彦「フェンスの外から見た『米軍』とフェンスの中から見た『基地労働』」『労働法律旬報』第 1917 号(旬報社) (2020 年 11 月) (6 頁～15 頁)は、我部聖(文学研究者)の一連の研究に大きな影響を受けて執筆したものである。米軍基地で働く基地警備員は米軍憲兵隊からは「自分で考えるな! 判断するな!」という軍事的規律にその心身が同化できているかどうかを監視されながら、ゲートの部外者を監視するという「監視され・監視する」両義性のジレンマの中で職務を担う。基地警備員の感じるこのようなジレンマについては、米軍統治下の沖縄で米軍の直接雇用のもとにあった「軍雇用員」としての琉球警備連隊にかかわる、屋嘉比収「米軍占領下沖縄における植民地状態」岩崎稔実他編『戦後スタディーズ① 40・50 年代』163 頁が「ガードは、米軍施設に侵入する沖縄人の『同胞』の窃盗を見逃したら米軍より即解雇され、その後は、生活苦にあえぐ多くの沖縄人が生活の糧としての軍作業にも従事できなくなるという厳しい境遇を強いられた。……沖縄人の侵入を確認すると、『同胞』に銃口を向けなければならない、文字通り生活か発砲かという二重二者択一を強いられる『基地の島の矛盾を背負った職業』であった。」と述べられている。我部聖「継続する戦争への抵抗—池沢聰『ガード』論」日本近代文学七八集(2008 年)195 頁は、これらの構造を分析している。このように文学者の研究は社会科学者の有しない視点を提供するものであり、これを触媒として社会科学の論文が生まれたことから、新たな研究手法の確立を予感させるものである。
今年度研究計画	今年度もコロナ禍が継続することが見込まれるため、各メンバーの研究課題に即した共通文献の購入とその研究が中心とならざる得ないとも予測される。それぞれの研究テーマに即した、大学紀要、専門雑誌上の業績公開のためには基礎的資料や文献購入などは必須である。また、コロナ禍の制御が見通せた時期に文学作品の舞台への出張旅費関係を計上しており、さらにこれらの研究成果発出のためのリーフレット発行にかかわる経費を計上している。これらの点に研究費は用いることから、費用計上は適切である。

2021 年度 研究班 研究計画申請書

継続 (3 年目)			
研究名	地域の食材を使った様々な「からだ想い昼食弁当」の考案と地域の健康・栄養課題の改善スキルの検討についてー継続その3		
代表者名	逸見幾代		
研究分野	公衆栄養学、栄養教育、調理		
対象地域	沖縄、中国、北陸、四国		
内容要約	沖縄県をはじめ中国 広島県および北陸 石川県 そして四国 愛媛県など、それぞれの各県食材を取り入れた「からだ想い昼食弁当」の3年目の献立を考案し、若年者および県民の健康サポートに繋げたい。からだに優しく糖尿病、高血圧、脂質異常症、骨粗鬆症などの生活習慣病の発症・重症化予防とまた一方で若年者に増加している「やせおよび健康やせ」の防止に資する楽しいお弁当を考案する。 また、3年間の意識調査を分析する。 さらに地域の健康・栄養課題の改善スキルの検討を試みる。		
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名 / 特別研究員 3 名 / 計 5 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
逸見幾代	沖縄大学健康栄養学部・教授	公衆栄養学、 栄養教育総論	研究代表者 データ 作成・分析・まとめ
山代寛	沖縄大学健康栄養学部・教授・ 沖縄大学副学長	健康スポーツ福祉専 攻	調整
木村留美	広島国際大学健康科学部・講師	給食経営管理 調理学	研究実践・データ処理
西村栄恵	金沢学院大学人間健康学部・准 教授	調理学、応用栄養学	研究実践・データ処理
三木章江	四国大学短期大学部・准教授	公衆栄養学 調理学	研究実践・データ処理
研究の目的	本研究の目的は、特に本県の深刻な課題である肥満および生活習慣病の発症・重症化予防に資する適正エネルギー、減塩、野菜たっぷりの高繊維で、ヘルシーかつ低価格な「からだ想い昼食弁当」を考案し、本学学生および県民の健康をサポートすることである。肥満、糖尿病、高血圧、脂質異常症、骨粗鬆症など様々な健康課題別のお弁当なども考案する。献立作成、試作、学生喫食し、意識調査までを目指したい。この取り組みにより、喫食者の食に対する興味・関心ならびに栄養に関する知識や健康意識を高め、健康づくりにつなげるツールの検討を試みる。		
研究項目と方法	～7月 8月 10月 12月 2020年2月 3月 ① 第1回研究会 (方向性の 検討) ② 第2回研究会 (弁当献立検討 同検討会 沖大・広国大・金沢学院大合) ③ 第3回研究会 (弁当試作 検討) ④ 第4回研究会 (調査まと め) 弁当の試食・調査 ⑤ 第5回研究会 (調査まとめ) ⑥ 弁当調査 最終まとめ		

	【調査対象】 からだ想い昼食弁当試食参加者（本学管理栄養学科の学生） 【調査方法】 アンケート調査 【調査内容】 1) お弁当を選ぶ基準 2) お弁当への要望 3) からだ想い昼食弁当の評価：①おいしさ ②見た目 ③価格 ④満足度 4) 食習慣 5) 運動習慣 6) その他の生活習慣 【倫理的配慮】 文部科学省・厚生労働省の「疫学研究に関する倫理指針，人体から採取された試料を用いない観察研究の場合」の手続きに従う。															
期待される成果	沖縄県は男女ともに平均寿命全国 1 位の健康長寿県から転落し、現在は、肥満率や早世率が全国 1 位と県民の健康状態は非常に深刻である。本研究では、本県の喫緊の課題である肥満および生活習慣病の発症・重症化予防に資することを目的とし、適正エネルギー、減塩、野菜たっぷりの高繊維でヘルシーかつ低価格な‘からだ想い昼食弁当’を昨年度同様考案する。また昨年の‘からだ想い昼食弁当’を再調査し、‘からだ想い昼食弁当’を通して、<u>喫食者の食に対する興味・関心ならびに食意識、健康意識の変容の実態を確認し、健康づくりにつなげる</u>。また、沖縄県産の食材を使用することにより<u>地産地消、地域理解、地域活性</u>を促し、栄養・健康課題解決のツールの検討につなげる。															
研究の経緯	この「からだ想い」弁当による、若年者の食生活の現状の把握と、健康サポートにつなげるための意識変化の導入部分の把握をし、これを地域啓発につなげることとした。 またこれをもとに、地域の健康・栄養の課題を改善するスキル検討の一助とした。 発表① 第 8 回日本食育学会（東京 5 月）において誌上発表した。 『「からだ想い弁当」提供による生活の周りにおける食環境と食意識への影響について』 ○逸見幾代¹⁾、木村留美²⁾、渡部亜裕子³⁾、山代寛¹⁾、香川明夫⁴⁾、田中弘之⁵⁾ ¹⁾ 沖縄大学健康栄養学部 ²⁾ 広島国際大学健康科学部 ³⁾ 今治明德短期大学 ⁴⁾ 女子栄養大学・短期大学、⁵⁾ 東京家政学院大学人間栄養学部 発表② 第 68 回 日本栄養改善学会（札幌 9 月中止により、誌上発表） ○木村留美¹⁾、逸見幾代²⁾、山代寛²⁾、香川明夫³⁾ 1) 広島国際大学健康科学部 ²⁾ 沖縄大学健康栄養学部 ³⁾ 女子栄養大学・短期大学部															
今年度研究計画	<table><tr><td>一般旅費 (所員国内)</td><td>松山⇄広島＝¥20,000（カーフェリー） 松山⇄金沢＝¥100,000（1泊） 松山⇄那覇＝¥40,000（2泊）</td><td>計 ¥90,000</td></tr><tr><td>交通費 (所員国内)</td><td>1 回往復分 ¥2,000×2 名×5 回</td><td>計 ¥20,000</td></tr><tr><td>図書</td><td>図書、文献複写など</td><td>計 ¥10,000</td></tr><tr><td>その他助成費</td><td>試作制作・試作食材費・一般試食会 ¥50,000</td><td>計 ¥60,000</td></tr><tr><td colspan="2">合 計</td><td>＝ ¥180,000</td></tr></table>	一般旅費 (所員国内)	松山⇄広島＝¥20,000（カーフェリー） 松山⇄金沢＝¥100,000（1泊） 松山⇄那覇＝¥40,000（2泊）	計 ¥90,000	交通費 (所員国内)	1 回往復分 ¥2,000×2 名×5 回	計 ¥20,000	図書	図書、文献複写など	計 ¥10,000	その他助成費	試作制作・試作食材費・一般試食会 ¥50,000	計 ¥60,000	合 計		＝ ¥180,000
一般旅費 (所員国内)	松山⇄広島＝¥20,000（カーフェリー） 松山⇄金沢＝¥100,000（1泊） 松山⇄那覇＝¥40,000（2泊）	計 ¥90,000														
交通費 (所員国内)	1 回往復分 ¥2,000×2 名×5 回	計 ¥20,000														
図書	図書、文献複写など	計 ¥10,000														
その他助成費	試作制作・試作食材費・一般試食会 ¥50,000	計 ¥60,000														
合 計		＝ ¥180,000														

2021 年度 研究班 研究計画申請書

継続 (3 年目)			
研究名	沖縄における自然災害・戦争災害等の多様な災害の総合的研究		
代表者名	圓田浩二		
研究分野	社会学、労働法、社会保障法、防災学		
対象地域	沖縄本島(を中心とした自然災害・戦争災害等の被災地域)		
内容要約	災害列島日本では、毎年、台風・豪雨・津波・地震等の多くの自然災害に見舞われるだけではなく、国防政策の変化・国際情勢や国内情勢の緊迫化という事態を受けて、今後、戦争災害(戦災)・労働災害(労災)・NBC 災害・CBRNE 災害・武力攻撃災害等の多様な災害に被災する可能性が増している。本研究班は、「沖縄」を考察対象として災害概念の再検証と学際的視点から総合的な研究を行う。		
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名 / 特別研究員 3 名 / 計 5 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
圓田浩二	沖縄大学経法商学部教授	社会学	研究代表者
春田吉備彦	沖縄大学経法商学部教授	労働法	災害直撃時の労働問題
稲垣暁	沖縄国際大学非常勤講師	防災学	防災学から見たリスク管理
河合壘	岩手大学人文科学部准教授	社会保障法	災害復興と法
藤井怜	岩手大学大学院	社会法	地域と若者と雇用問題分析
研究の目的	災害列島日本では、毎年、台風・豪雨・高波・津波・地震等の多くの自然災害に見舞われる。2018 年度には、大阪北部地震・北海道胆振地方の地震・台風 21 号等の自然災害が発生し、社会の混乱を招いた。例えば、2018 年 6 月の大阪北部地震では、広範囲で鉄道が朝から夜まで運休し、道路も渋滞し、街中に大量の通勤困難者や帰宅困難者があふれることとなった。自然災害時直撃時においても、例えば、高齢者の在宅介護を支えるために利用者宅での訪問介護を担うケースワーカー等、「命」がけの業務を要求される労働者は少なくない。企業は「事業継続計画(BCP=Business Continuity Plan)」を意識しながら企業活動に取り組もうとする。BCP には、例えば、「自然災害」「戦争災害(戦災)」「労働災害(労災)」「NBC 災害」「CBRNE(シーバーン)災害」「武力事態災害」等の多様な災害概念が組み込まれているといっている。 社会学上は、これまで多様な災害概念について論じられてきたものの、未だ通説的な共通理解は確立していない。防災学上は、これまで自然災害を中心に「減災」「防災」対策を進化・深化させてきたものの、多様な災害概念に即応した包括的な検証は十分なされていない。労働法学上は、従来の多くの考察対象が平常時の労働問題を取り合うものであり、多様な「災害概念」が織りなす、有事の労働問題について本格的に取り組まれてきたわけではない。本研究では、「沖縄」を中心に考察しながら、これまで、分断的に研究が進められてきた「災害にかかわる問題領域」を多様な学問的アプローチによって解明していくことが研究の目的である。		
研究項目と方法	社会学上は、これまで多様な災害概念について論じられてきたものの、未だ通説的な共通理解は確立していない。防災学上は、これまで自然災害を中心に「減災」「防災」対策を進化・深化させてきたものの、多様な災害概念に即応した包括的な検証は十分なされていない。労働法学上は、従来の多くの考察対象が平常時の労働問題を取り合うものであり、多様な「災害概念」が織りなす、有事の労働問題について本格的に取り組まれてきたわけではない。		

	本研究班では、まず、①社会学上の災害概念の定義づけ、②防災学上の「自然災害」「戦争災害(戦災)」「労働災害(労災)」「NBC 災害」「CBRNE 災害」「武力事態災害」等の様々な災害との関係の整理、③労働法上は、とりわけ、有事の労働者の労働義務の問題、④東日本大震災を経験し、復興プロセスの途上にある、岩手大学から見た災害問題といった学際的研究を通じて、多様な災害概念を再定義し、各学問領域の今後の議論に向けたプラットフォームを構築していくことにする。 本研究課題は、ともすると、各学問領域の枠内で、専門的知見の細分化してしまい、その全体像を通底するアプローチや各学問領域の連携が脆弱になりがちな傾向がある。本研究班の特徴は、学問領域の横断を図りながら、しかも、沖縄を主要な舞台として考察を加えていくことに特徴があり、東日本大震災を実際に経験した地域の研究者がこれに加わっているという特徴がある。
期待される成果	観光地としての「パラダイス:沖縄」も、災害によっては、容易に「ディストピア:沖縄」になりうる可能性を秘めている。最近の沖縄経済のけん引役の一翼を担っている観光業・ビックデータを活用した IT 産業の隆盛を念頭においても、多様な災害リスクを踏まえた対策を講じることは欠くべからざる課題である。 今年度は、本研究班の最終年度ということもあり、研究員それぞれの問題意識に即して、①社会学上の災害概念の定義づけ、②防災学上の「自然災害」「戦争災害(戦災)」「労働災害(労災)」「NBC 災害」「CBRNE 災害」「武力事態災害」等の様々な災害との関係の整理、③労働法上は、とりわけ、有事の労働者の労働義務の問題、④東日本大震災を経験し、復興プロセスの途上にある、岩手大学から見た災害問題といった学際的研究を通じた、多様な災害概念にかかわる議論のためのプラットフォームを構築する。その研究成果は、『地域研究』『沖縄大学法経学部紀要』等の学内雑誌に掲載するとともに、『労働法律旬報』『労働と経済』等の全国雑誌に広く公表する。また、土曜教養講座を開催し、その内容をリーフレット化する。
研究の経緯	2019 年度(1 年目)は、9 月 8 日に 546 回土曜教養講座として「沖縄と自然災害」を開催したことが大きな成果といえる。2020 年度(2 年目)は、沖縄大学経法商学部紀要第二号に、地域研究所本研究班の特集として「沖縄における自然災害・戦争災害等の多様な災害の総合的研究」を組み、それぞれ、春田吉備彦・河合壘・藤井怜が執筆して三本の業績を発出したことが大きな成果といえる。 このほか、例えば、春田吉備彦「災害看護グローバルリーダー養成プログラムにかかわる不更新条項付きの労働契約と労働契約法 18 条および労働契約法 19 条の解釈について」『沖縄大学経法商学部紀要』第 1 号(27～36 頁)、春田吉備彦「交通事故に被災した労働者のリハビリ出勤等への使用者の安全配慮義務を理由に行った転居命令とワーク・ライフ・バランス」『沖縄大学経法商学部紀要』第 1 号(37～46 頁)など、この研究班にかかわる業績発出が多い年であったといえる。
今年度研究計画	今年度は本研究班の最終年度であるので、その研究成果を広く地域社会に還元するため土曜教養講座を開催し、その内容をリーフレット化する費用、又刻一刻と変化するコロナ禍・自然災害の発生・地震の発生等の状況を反映するなどこの分野にかかわる文献は立て続けに発行されており、その図書を購入する費用、被災地を訪問するための費用を本研究班の予算に計上している。このため、本研究活動と研究費の計上には整合性がある。

2021 年度 研究班 研究計画申請書

新規			
研究名	離島地域における大学の関わる授業実践の創出と実践、及び地域拠点の運営の在り方について		
代表者名	盛口満		
研究分野	教育		
対象地域	石垣島白保集落		
内容要約	2021年3月世界自然保護基金より白保公民館に移譲された「しらほサンゴ村」を拠点に地域の小・中学生を対象にした自然教育・環境教育の実践と、今後の「白保サンゴ村」の運営・活用について考えるワークショップを実施する。		
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名 / 特別研究員 1 名 / 計 3 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
盛口満	こども文化学科教授	自然教育	研究代表者
喜屋武政勝	こども文化学科教授	国語教育	
後藤亜樹	環境教育プランナー	環境教育	
研究の目的	石垣島白保集落にある「しらほサンゴ村」は 2000 年春、白保の貴重なサンゴ礁を保全するために WWF ジャパン（世界自然保護基金）により設置された。以後 20 年間、白保を中心とするサンゴ礁の保全調査活動を実施してきたが、2021 年 3 月、地元白保公民館に移譲された。盛口班では 2011 年から 10 年間しらほサンゴ村の地域のこども達への自然教育・環境教育活動の実践を行ってきたが、しらほサンゴ村を運営する NPO 夏花の意向で今後もこれまでと同様、教育活動の実践に関わることとなった。 また、しらほサンゴ村の白保公民館の移譲に当たっては、未確定な部分も多く、2021 年度は、盛口班においてもどのようにしらほサンゴ村を運営・活動していくかについて一緒に考える。そのための参加型のワークショップを実践する。 離島における教育の実践例を作り上げるとともに、離島の子どもたちへの教育実践を経験することで大学生の教育力の拡充がどのようになされるかを引き続き調査・研究する。		
研究項目と方法	1. 授業の実践 ①研究班において、これまでの石垣島（しらほサンゴ村、海星小学校）に置ける授業実践を振り返り、各主体（NPO 夏花、海星小学校）との今後の協働について在り方を考える。 ②授業実践においては、これまでと同様、こども文化学科の学生が授業内容を作成し、模擬授業を経て、授業内容を改善した後、実践の場として石垣島で授業を行う。さらに、離島で展開した授業を応用し、沖縄本島での授業展開を行う（昨年同様コロナの影響もあり、授業や離島への移動制限も考えられたため、本島内の学校の授業に振り返るなど臨機応変に対応する）。 ③これらの過程（準備—実践—振り返り）において、大学のない離島地域においてどのような大学の教育的関わりが必要とされ、かつ効果的であるかを検証する。 2. しらほサンゴ村の運営に関わるワークショップ ①2021 年 3 月に WWF ジャパンから白保公民館に移譲されたしらほサンゴ村の今後の活動、運営について、NPO 夏花、地域みなさんとともに他の事例を参考にしながら考えていく。		

	②ワークショップに際しては、白保集落の未来像（30年後など）を地域の小・中学生とともに考えながら、その中でのしらほサンゴ村の位置付けを考えていく予定。
期待される成果	1. 教育面 昨今、教育現場では、先生たちの負担が大きくなりなかなか教科外の授業ができない現状がある。また、こうした特別授業には予算がつくこともなく、外からの持ち込み授業が唯一の機会となっている学校現場も多い。コロナの影響下、各地で授業の遅延や中断あり、教育の在り方そのものについて考える局面も迎えている。 大学では教員養成の学生はいるものの、授業の実践は教育実習に限られていることも多い。こうした背景からも、教育実習とは異なる現場で授業を実践し、その成果を他の学生とわかちあうことは、学生にとって貴重な機会となり、授業を受ける子供達にとっても新しい出会いの場となる。特に大学のない離島地域において大学と地域の教育現場が結びつくことで、新しい形の教育の機会の提供の場が創出できることが成果として考えられる。 2. 地域づくり 観光庁は「住んでよし訪れて良しの国づくり」を理念に観光を進めてきたが、以前、着地型と言える観光は多くはない。白保ではこうした現状も踏まえ、自然環境の保全を念頭におきながら、地域活動に基点をおいた日曜日や集落散策などの「小さな観光」を実施してきた。これらは全て「しらほサンゴ村」とその活動で生まれたNPO 夏花によって行われてきたが、今後は、全てNPO 夏花としらほサンゴ村運営委員会で実施していくこととなる。「地域にとって大切にしたいものは何か」「地域の規模にあった観光とは何か」「自然との共生とは何か」を地域全体でじっくり考え、模索する機会を地域で持つことができる。
研究の経緯	2011年-2019年 石垣島白保しらほさんご村における環境教育の実践 ・ 盛口ゼミ生によるしらほこどもクラブの活動支援（2012-2015） ・ やまんぐうキャンプの開催（2011-2018） 2013年-2015年 白保集落の昔の暮らしに関する聞き書き ・ 3年間にわたり、白保集落14名の方にインタビュー ・ 「石垣島白保における環境学習の実践・暮らしと文化の調査についての5年間の取り組み」作成 ～2017年 ・ 川井ゼミによる海星小学校出前授業 2018年 盛口ゼミによる海星小学校出前授業 2019年 喜屋武ゼミによる海星小学校出前授業 2018年、19年 サンゴ礁保全推進協議会において学生による成果報告の実施 *2019年度はコロナにより移動規制があり予定していたやまんぐうキャンプは中止
今年度研究計画	1. NPO 夏花と今年度の計画について打ち合わせ 2. 沖縄大学こども文化学科ゼミにおける授業内容の検討と作成（7月-9月） 研究班メンバーによる指導で、しらほサンゴ村及び海星小学校における授業の内容計画を立て、実践の準備を行う。 3. しらほサンゴ村の今後の運営に関わるワークショップを実施（2回） 4. しらほこどもクラブややまんぐうキャンプの開催（10月予定） しらほさんご村にて、WWF ジャパン、NPO なつばなの協働の下、環境教育と地域文化の体験をテーマにしたキャンプを行う。*研究費に於ける旅費 5. 沖縄本島内小学校における授業の実施

2021 年度 研究班 研究計画申請書

継続 (3 年目)			
研究名	沖縄島嶼部における作物の文化的伝播及び生態的比較 ——シーブソンパンナとの環境民族的な比較研究——		
代表者名	リュウゴウ		
研究分野	環境民族学		
対象地域	沖縄・中国南部地域・台湾など		
内容要約	雲南省における亜熱帯地域であるシーブソンパンナは、中国大陸の最南端に位置し、生態的な自然や植生などの特徴から、沖縄に亜熱帯の類似性が溢れていると同時に人文的な特徴も魅力の充満されているところである。今回、ハーロッソという沖縄にある民俗風食品ムーチにそっくりものの調査・研究に試みをした。		
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名 / 特別研究員 0 名 / 計 2 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
リュウゴウ	人文学部・国際コム教授	環境民俗学	研究代表者
王志英	人文学部・国際コム教授	環境言語学	研究補助 鑑賞植物の資料担当
研究の目的	沖縄県は亜熱帯にあるし、人間の飲食や植生的な利用などは特色がつけられている。その相対に、だいたい同じ緯度帯にあるシーサンパンナは雲南省の最南端にあたる北緯 21～22 度に位置し、28 度から 30 度ぐらいの間、唯一無二なグリーンオアシスである。インドシナ半島の北部に隣接し、かつメコン川の上流域（瀾滄江）の両側に跨って展開している。世界 3 大熱帯雨林の一つである東南アジア熱帯雨林の北限になる。シーサンパンナのある雲南省南方は一般的に標高が低い、シーサンパンナのなかでは西北に行くほど標高が高くなる。気候は 6 月初旬～10 月中旬の雨季と 10 月下旬～5 月下旬の乾季に分かれ、乾季はさらに霧旱季（10 月下旬～11 月下旬）、霧冷季（12 月上旬～2 月中旬）、乾旱季（2 月下旬～3 月下旬）、乾熱季（4 月下旬～5 月下旬）の 4 つに分かれる。乾季には大気が安定し、盆地には霧が多く発生する。1950 年代は霧の出る日は年平均で 166.3 日、多い場合は年 210 日に達することもあった。霧の連続日数は 10 日程度が多く、一日平均 8.1 時間も霧が出て、霧露量は一日 0.4mm に達し、霧の厚さは地表から 1000m の高さまでであった[楊世俊 1987 : 55-56]。そのためシーサンパンナは「霧州」とも呼ばれた。シーサンパンナは 49 の大小の盆地からなっており、地形の関係で北からの寒気の流入が妨げられているので、ぎりぎり亜熱帯地域になる。それらの多くの盆地に霧が発生する。気候は高温多湿で台風の被害はまったくなく、盆地であるなどの特殊な地理的・地形的・環境的な条件により、数十 k m²以下の狭い地域内で現れる特徴的な気候、小気候とも呼ばれる「局地気候」が発生する。すなわち、一般的に標高が高くなると温度は低くなるのだが、シーサンパンナでは盆地という地形と熱帯雨林の存在によって、標高 900m あたりを境目に逆転層が発生する。そのため、ほぼその高さにある山地民の集落では冬季は暖かく、山地の少数民族の生活を成り立たせている [西双版纳州政務信息网 2010]。山地民の生活にとってこのことは重要である。このような地形と気候のもとで、盆地平野にタイ族、山地にその他少数民族という民族間の棲み分けがおこなわれ、かれらの生活・文化様式は大きな影響をうけている。 その州は、野生動物が中国全土の 25%、雲南省の 46% にあたる 756 種が生息しており、国内では最も多い地域となる。そのうちの哺乳類は雲南省の 43% にあたる 108 種があり、貴重なアジア象・虎なども数多く見られ、鳥類では中国全土の 36% にあたる 427 種がいる。広い熱帯雨林の存在が各種植物の成長に適した気候をもたらし、「植物王国」として、中国全土の 5 分の 1 の種の野生植物が見られ、		

	薬用植物は 1000 種以上に及び、植物遺伝子の宝庫ともいわれている[許再富 2011 : 58-63]。シーサンパンナは面積は 2,883.5 万畝 (1 万 9,223k m²) で中国全土のわずか 0.2%にすぎないが[劉隆ほか 1990:4]、このように非常に生物多様性に富んだ地域であり、またタイ族をはじめ独特のシーサンパンナ民族文化を生みだす基盤となっている。 タイ族は現在、中国全土で約 120 万人おり、ほとんどは雲南省南西部に、最も多くはシーサンパンナに居住している。かれらは文化的・生業的な特徴から幾つかのグループに分けられ、最も人数が多いのがシーサンパンナのタイ族を含む水タイ（ダイール）である。彼らは低い標高の平地や小盆地に住み、主に水稻作を中心に生活している。タイ族が集住する小盆地では、「木があるから水があり、水があるから水田があり、水田があるから食糧があり、食糧があるから人の暮らしができる」という言い伝えがあるように、稲作文化が発展していた。この言い伝えはタイ族の自然に対する観念を表し、またその考えによって自然環境も大きな影響をうけ、衣食住の生活すべてが熱帯雨林と密接に関わっていた。シーサンパンナは 20 世紀初め頃まではあまり外部に知られず、1949 年まではタイ族を中心にした孤立的な王国であり、未開というイメージを外部世界に与えていたが、世界的にも珍しい森林農耕文化が発展し、貴重な「自然・生態・人文圏」をなしていた。いわば陶淵明が描いた桃源郷のように、俗世（国内の他地域）から隔絶し、戦争災害に見舞われることもない平和な美しいところであった。彼らの観念は森・水・土地・食物・人間の 5 つの組み合わせからなり、そのライフスタイルはゆったりとし、寛容と思いやりのある大らかな性格で、争いごとや喧嘩はめったに見られず、小乗仏教を敬う雰囲気の中で暮らしていた。8 世紀以後に仏教が普及し、シーサンパンナには寺がかつて 360 ヲ所あり（現在は 220 ヲ所）、8 万 4000 部の仏教典籍が所蔵され、男子は 9 歳から寺に入って修行していた。そのため対人、対異民族、対物（自然環境）関係には調和や友愛の思想が浸透していた[徐為山 1989 : 13-15]。
研究項目と方法	・ムーチの宗教的・民俗的な研究 ・広域的な民族植物などの環境民族学的な生態と意味 ・ハーロツソの環境民族学的な意味と生態 ・納豆などの発酵食品の実態 ・ユシ豆腐のあり方と違い ・その他 方法、事例研究手法 比較文研究、参与観察法、実地フィールド・ワーク、体験 文献解説・多様性理論 インタビュー訪問など。
期待される成果	生態的な類似性から文化的な類似性の発生やその論理への解明及び理解、一つの事例として、一般的な生態・環境民族学理論と実践への事例研究の提供。

研究の経緯	昨年度、県内島嶼部における作物の文化的伝播及び生態的比較というテーマで、沖縄地域に数種類の野菜を注目して、視野を東アジア、台湾島嶼部も含む投射したが、以外に山菜まで注目を拡大した。確かに、生態的、地理的に類似性があるので、大陸南部の幾つよく知られている野菜の以外、例えば、近年から普及されたチンゲン菜、空芯菜、百葉菜、ゴーヤー、ヤインゲン、レタス、バレイショ、オクラ、カボチャ、トウガン、スイカなどの野菜、山菜の中、特にハーロツソという特殊なエスニック的な食品を発見して、今年度それを明らかにまいりたい。
今年度研究計画	特に、シップッソソパンナは、遠いなので、研究費を主に旅費として（航空運賃やレンタカーなど）を使い、宿泊ホテルなども費用かかるそうである。その他の調査備品なども使う予定。

2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	地域資源の活用方法に関する分析——グスク及び関連遺産群の事例
代表者名	石川公彦
分野／対象地域	経営学、地域マネジメント
研究期間	開始 2021 年 4 月 ～ 終了 2022 年 3 月 （ 1 年目／ 1 年間 ）
研究成果要約	グスク及び関連遺跡群の関係者へのインタビューとフィールド調査を中心とする本研究は、新型コロナウイルス感染症の状況に鑑みて実施困難な状況が続き、研究予算を一切執行できずに終えることとなった。
研究組織	（研究代表者及び研究分担者）所員 2 名、 特別研究員 0 名、 計 2 名
研究成果	本研究の目的は、沖縄県の地域資源としてグスク及び関連遺産群（以下、グスク等）に注目し、各地のグスク等がどのように活用されているのかを事例分析することで、その同一性と相違性が生じる理由を明らかにすることにあった。分析にあたっては、①どのような目的のもとに「ヒト、モノ、カネ、情報」の各要素が結集され、②どのようにマネジメントされ、③どのような効果をあげているのかを、個別事例ごとに具体的に明らかにする。続いて、①から③の項目に関して、事例間の比較分析を行い、地域資源を有効に活用するための一般ロジックを析出することをめざした。 研究項目として以下の 3 項目を設定した。 1. 県内の各地のグスク等がどのように活用されているのかを明らかにするために、北部・中部・南部・離島の各エリアにおける代表的な事例を選出する。 2. 事例ごとに、①どのような目的のもとに「ヒト、モノ、カネ、情報」の各要素が結集され、②どのようにマネジメントされ、③どのような効果をあげているのかを、具体的に明らかにする。 3. 上記 2 で明らかになった内容を比較分析し、活用方法等の同一性と相違性が何によって生じるのか分析するとともに、地域資源を有効に活用するための一般ロジックを析出する。 研究方法として以下 3 つを設定した。 1. 文献研究、ネット検索などによる事例の選出 2. 第一次資料の収集と分析、現地調査、関係者へのインタビュー調査による事例分析 3. 研究会を通じた分析結果の精査 期待される成果として、以下の内容を設定した。すなわち、従来のまちづくり調査においては、地域特性に規定された地域資源を明らかにし、それがどのように活用されているかを明らかにするというアプローチが多くみられる。このアプローチの場合、各地域に固有の特性に規定された地域資源の事例が、まともなく選出される傾向を持つ。そのため、事例間の比較分析することに困難さをともなってきた。一方、本研究では、分析対象をグスク等という地域資源に統一することで、事例間の比較困難性を相当程度、克服し得ると期待できる。グスク等という、ある意味、「特殊」な地域資源に統一することで、むしろ、その活用にあたっての「一般」的なロジックを明らかにすることを意図する。そして、まずは 21 年度の成果として、各エリアの代表的なグスク等の活用事例を選出し、事例報告書を作成することとした。 以上の研究計画にもとづき、第二次資料と第三次資料を活用した事前調査と事例選取を進めつつも、新型コロナウイルス感染症の状況に鑑みて、グスク及び関連遺跡群という沖縄固有の地域資源に係る関係者へのインタビューとフィールド調査の実施を控えざるを得ない状況が継続した。その結果、研究予算を一切執行できず、研究成果を得られないまま 21 年度の研究を終えることとなった。 研究対象や研究方法の見直し、翌年度以降に実施することも考え得るが、新型コロナウイルス感染症の影響によってグスク及び関連遺跡群への入場制限や利活用の制限が課されている状況下においては、本研究の主題である「地域資源の活用方法に関する分析」は限定されたものとならざるを得ないことから、研究方法と研究対象の見直しを図りつつ、新型コロナウイルス感染症の終息を待って改めて本研究の実施を期すこととしたい。

研究成果の 発表実績	なし。
---------------	-----

2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	沖縄県内外における中国語標識・案内板、中国における日本語標識・案内板の確認について
代表者名	王 志英
分野／対象地域	中国語、日本語／沖縄県内外、離島、中国西安
研究期間	開始 21 年 4 月 ～ 終了 22 年 3 月 （ 1 年目／ 3 年間）
研究成果要約	沖縄県内外の観光地における中国語標識・案内板について調査し、間違っていた中国語を訂正した。
研究組織	（研究代表者及び研究分担者）所員 2 名、 特別研究員 1 名、 計 3 名
研究成果	21 年度は沖縄県内と久米島について調査を行いました。 1. 8 月 8 日から 8 月 12 日の間沖縄本島の観光施設などの中国語案内板について調査を行いました。 ● 北谷公園、イオン美浜タウンリゾート、メイクマン、アメリカンビレッジなどの場所を中心に調査したが、英語標識が多くて、中国語標識が極めて少なかった。北谷あたりは中国人観光客にも人気がある場所なので、中国語標識がもっとあったほうがよいと思われる。特に公園でのごみ捨て、路上喫煙などの標識が必要だと思う。 ● 平和記念公園、平和創造の森公園、ひめゆりの塔、喜屋武岬などの場所を調査した。中国語標識が少ないが、英語や韓国語が多い。ひめゆりの塔に新しい資料館ができたが、やはり説明などは英語のみになっている。 ● 幸せの架け橋、ハートの鐘、知念岬公園、キノコの岩などの場所について調査した。ここあたりは中国語人観光客に人気がある観光地であるが、中国語標識が少ない。 ● イオンモール沖縄ライカム、大里内原公園、黄金森公園。ライカムに中国語標識があるが、間違っていた看板があった。大里内原公園、黄金森公園にはコロナ注意についての中国語標識があって、問題はなかった。 ● おもろまち駅周辺、モノレール駅（おもろまち駅～那覇空港）那覇空港、国場から那覇空港高速バスについて調査した。中国語案内があるが、間違っていたもの、気になる標識を見つけた。間違っていた標識について今後何かの方法で先方に伝えたいを考えている。 2. 12 月 12 日中国人観光客に人気のあるパワーポイントを回りました。 今回バスツアーに参加して、中国人の目線からみた中国人観光客に人気のある観光地なので、中国語標識や案内板調査にちょうどいい機会でした。ガイドは日本語で説明してくれましたが、内容は中国の歴史や文化と切っても切れない関係にある話をしてくれました。中国語掲示板を調査するのがメインですが、日本語、英語のみの掲示板の写真も撮りました。中国語は正確だと言えないが、意味は何となく通じる場合は修正しないことにしました。問題のある掲示板だけをピックアップし、修正しました。 ① EM ウェルネス暮らしの発酵 全体的に中国語標識が極めて少ない。日本語と英語の説明があります。近年中国人は健康食にとっても関心が高いので、レストランなどの個所に中国語による標識があればと思いました。アピールと宣伝が必要だと思われます。銭湯もありますが、今の時期開放していなかったなので、調査ができません。

	せんでした。 ② めちまーす観光製塩ファクトリー 店内に殆ど中国語の標識が見当たりませんでした。以前そこに行ったことがあります。塩工場だけではなく、パワースポットとしても有名だということは知りませんでした。以前塩工場だけを見て帰りましたが、今回はガイドの説明を聞いて、3か所のパワースポットを見ましたが、圧倒されました。パワースポットのところに、中国語の看板や、説明などが必要だと痛感しました。 ③ 浜比嘉 沖縄ではとても人気が高いパワースポットとして有名ですが、海外の観光客には宣伝が足りないようです。道の標識に中国語があるだけで、観光地に中国語の説明が一切ありません。以前何回も浜比嘉に行ったことがありますが、有名なパワースポットがあるということが知りませんでした。中国人は信仰を持っている人が多くはないようですが、パワースポットに興味を持っている人が多くなってきて、中国語表示の設置など改善する余地があると思います。
研究成果の発表実績	④ 斎場御嶽 パワースポットとして沖縄でナンバーワンだと言われていますが、やはり中国語の標識、説明が少なかったです。一か所はあって、何となく通じる中国語でした。外の店には多少中国語があります。音声ガイドは英語のみです。 3. 12月19日県庁前、国際通りについて調査をしました。 県庁前、パレット久茂地、国際通りを調査しました。ここは海外観光客が必ず足を延ばす場所です。しかし、県庁前は以前ほどの賑やかさがありませんでした。県庁前のデパート内に中国語標識がありますが、それほど多くとは言えません。以前中国人観光客がたくさんいた時、間違っていた中国語の標識がよく目にしたのですが、最近観光客が激減したため、中国語の標識が撤去されたようです。今ある中国語標識が意味が何となく分かるが、不自然なものが多いようです。 4. 2021年12月25日～2022年1月3日の間沖縄本島の観光施設、久米島などの中国語案内板について調査を行った。今回は今までまだ調査したことがない場所を中心に回りました。中国からの観光客には以下の特徴が見られます。 ● 小さな子供を連れてくる家族が多く見かけます。 ● 中国は海に面している都市が少ないため、中国人は海が好きな人が多いです。 ● また自然豊かな公園などが好きです。 ● ブランド品や日本製の品物が好みます。 ● 健康にいい日本食にも興味があります。 日中の文化の違いにより、特に各観光地は下記のことについて配慮し、中国語で注意書きを掲示したほうがいいかと思われます。 ① トイレの使い方（中国は使った紙は流さず、籠の中に捨てる） ② 買い物の時、品物を籠の中ではなく、レジ台に置く。 ③ ゴミを勝手に捨てる（吸い殻も）（中国で常に片付けや掃除をしてくれる人がいる）

	④ 煙草を吸う人口が多くて、中国に禁煙する場所がまだ多くはない。 ⑤ 中国でバスや電車の中で携帯電話で通話しても問題はない。 ⑥ 子供がどこでも小便などをしても普通は怒られない。 ⑦ 中国でバスや電車に乗る時老人に席を譲るべきである。 ⑧ 公共施設で大声話しても問題はない。 ⑨ 列を並ぶ習慣があまりない。 ⑩ よく歩きながら物を食べる。 ⑪ 買い物する時値段交渉するのが普通です。 今回は回った箇所のトイレの中国語表示を殆ど見てきました。昔よりかなり改善されました。トイレの中国語表示はほぼ統一されたので、問題はありませんでした。 今回調査した場所の写真の中から代表的なものを三つに分けました。 ● 中国語標識がある看板 ● 日本語や英語のみある看板 ● 中国語標識が間違っている看板 今回久米島の観光地を含めて全部 51 か所の観光地を回ってきました。中国語標識が間違っていた看板を訂正し、その店か観光施設に届きました。
--	---

2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	沖縄・東アジア地域研究と研究主体養成の基盤に関する発展的研究
代表者名	我部 聖
分野／対象地域	沖縄学・地域研究 沖縄・琉球諸島と東アジア地域
研究期間	開始 2021 年 4 月 ～ 終了 2022 年 3 月 （ 1 年目／ 3 年間）
研究成果要約	大学院生が修士論文のテーマに関連した講師を招く公開研究会の企画・運営に関わり、事前に講師への質問項目を作成した上で研究会での討議に積極的に参加するなど本研究が目指す研究主体養成の基盤作りができた。
研究組織	（研究代表者及び研究分担者）所員 2 名、特別研究員 0 名、 計 2 名
研究成果	本研究は、大学院現代沖縄研究科沖縄・東アジア地域研究専攻の事例研究コロシアム（「沖縄地域事例研究Ⅰ」・「東アジア地域事例研究Ⅱ」）を利用し、県内外の人文領域の先端的な沖縄研究・アジア研究に関する報告をおこない、その討議を通じて、沖縄学および沖縄研究、アジア研究の地域学の研究主体の養成と学際的发展のための方法論について検討することを目的とする。また本学大学院生の修士論文の研究テーマに則し、研究主体養成と大学院教育の付加価値を意識しつつ、研究報告を受けて討議した。具体的には、研究主体が自主的にコロシアム等を運営し、その方法を身につけることや、先端的研究や萌芽的研究の報告等に際し、関連する文献の共同討議を通じて研究成果を理解することにつとめた。また沖縄において関心の高いテーマを選択し、市民に開かれた研究を目指したが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により対面での実施が難しかった上に、Zoom での実施に講師の了解を得られず、4 回実施した研究会のうち公開研究会は 2 回のみであった。 2021 年度における公開研究会は以下の通りである。4 回実施したが、非公開の 2 回については、本研究の目的が公開研究会であるため、助成金を使用しなかった。 なお公開研究会に際し、専門領域に関わる大学院生が講師との交渉にあたり、公開研究会に向けて、講師の著書、発表テーマに関連する論文等、大学院生が参考文献を選定し、事前学習をおこなった。 ①公開研究会：2021 年 7 月 24 日（土）13 時～15 時（会場：H201 と Zoom 併用） 講師：田里修（本学名誉教授） テーマ：琉球・沖縄土地の歴史研究の余韻 本学名誉教授の田里修氏を招いて開催した。琉球史を専攻する学生が企画に関わった。準備にあたっては、田里氏の琉球・沖縄土地の歴史研究に関する論文を読み、質問事項を作成した。当日は、コロナ感染防止対策をとりながら、教室で大学院生 3 名、教員 1 名が参加し、オンライン（Zoom）で、教員、大学院生らの参加を得て活発な討議をおこなった。 ②（非公開）研究会：2021 年 7 月 30 日（金）18 時 30 分～20 時（会場：H104） 講師：安次富順子（琉球料理保存協会理事長） テーマ：琉球料理と文化 琉球料理保存協会理事長の安次富順子氏を招いて開催した。臨床栄養学を専攻する学生が企画に関わった。準備にあたっては、安次富氏が琉球新報で連載中の新聞記事（「琉球料理は沖縄の宝」）を読み、質問事項を作成した。当日は、コロナ感染防止対策をとりながら、教室で大学院生 3 名、教員 2 名が参加し活発な討議をおこなった。 ③公開研究会：2021 年 12 月 3 日（金）18 時 30 分～20 時（会場：H201 と Zoom 併用） 講師：嘉納英明（名桜大学教授） テーマ：「子どもの貧困」考 名桜大学の嘉納英明氏を招いて開催した。沖縄の子どもの貧困問題と教育をテーマにする学生が企画に関わり、準備にあたっては、嘉納氏の子どもの貧困問題に関する論文を読み、質問事項を作成した。当日は、コロナ感染防止対策をと

	りながら、教室で大学院生 2 名、教員 1 名が参加し、Zoom にて参加した教員、特別研究員らと活発な討議をおこなった。 ④（非公開）研究会：2022 年 1 月 28 日（金）18 時 30 分～20 時（会場：Zoom） 講師：平良勝保（本学非常勤講師） テーマ：先島の家譜と身分 本学非常勤講師の平良勝保氏を招いて開催した。琉球史を専攻する学生が企画に関わり、準備にあたっては、平良氏の宮古の家譜に関する論文や琉球の家譜と社会に関する論文等を読み、質問事項を作成した。当日は、Zoom で教員 2 名、大学院生 2 名、学部生 1 名が参加し活発な討議をおこなった。
研究成果の 発表実績	田里修氏の公開研究会を『地域研究』に発表することを考えているが、現在文字起こしが難航している。 また 2022 年度以降、本研究に関わった本学大学院生が修士論文をまとめ、その成果を発表することが期待される。

2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	琉球弧地域における地域産業振興、地域政策・地方自治問題についての研究
代表者名	島袋隆志
分野／対象地域	産業振興と地域政策・地方自治／琉球弧地域
研究期間	開始 2021 年 4 月 ～ 終了 2022 年 1 月 （1 年目／1 年間）
研究成果要約	本研究班は、琉球弧地域における産業振興と地域政策との歴史的な関係及び有効性、そして、そこで生じている地方自治問題の整理をするため、4 つの研究グループ（商工業分野、自治体政策、雇用・労働、福祉・雇用）に分けて調査研究を行い、課題抽出と改善策の展望を目的とした。
研究組織	（研究代表者及び研究分担者） 所員 2 名 ／ 特別研究員 10 名 ／ 計 12 名
研究成果	本研究班は、琉球弧地域における産業振興と地域政策との歴史的な関係及び有効性、そして、そこで生じている地方自治問題の整理をするため、4 つの研究グループ（商工業分野、自治体政策、雇用・労働、福祉・雇用）に分けて調査研究を行い、課題抽出と改善策の展望を目的とした。 商工業分野においては、女性企業家によるシンポジウムの議論から男性社会からの脱却し性別に関係なく活躍できる社会作りのために、これまでの「常識」「慣例」とらわれることなく起業しやすい社会へつなげるなど、若者から意識変革することを導いた。 また自治体の研究領域については、自治体業務自体が指定管理、外部委託等の管理契約の進捗管理が業務主体となりつつある中で、あらためて「公務労働」とは何かを再考する必要性を議論した。一般には「ジョブ型雇用」と呼ばれる職務型雇用が進むとする認識がある中で、民間セクターと公務セクターとの違いは何か、また、その内にある各職務（ジョブ）は民間・公務でどのように違いがあるのかを、セクター毎に比較して浮かび上がらせることができるか議論した。例えば、公務セクターでの警察職と民間セクターでの警備業、公務・行政事務と民間・一般事務、そして公立学校と私立学校での教職員の職務において、どのように「公務労働」の特徴があるのか。また、これらに対する一般のイメージはどのようになっているのかについて、業務内容に加え、当事者および他者への意識調査をする必要性があることを確認した。次には調査対象や調査方法を具体化していきたい。 雇用・労働、および福祉・雇用については、コロナ禍の及ぼす雇用への影響を各機関による調査報告から収集し、それらをもとに影響の度合いを議論した。コロナ禍が長期化するにつれて地域経済に及ぼす影響は大きい。例えば、有効求人倍率の低下、失業率の上昇、非正規雇用職員のシフト日数や時間数の減少による所得額の減少、正規雇用職員の整理解雇までに及んでいる事が分かった。ただし、業種別には「コロナ需要」とも呼ばれる好況な部門もあることから、次には、そのような業種別の影響度を調査することで、今後の事業展開等への示唆を得られるような資料を作成へつなげることを試みたい。 福祉分野においては、キャリア教育コーディネート体験学習会（ワークショップ）として、2021 年 4 月 9 日に、キャリア教育コーディネートの意義および技術を修得する機会として体験学習会（ワークショップ）を行った。こうした場を通じて障がいの有無に関係なく技術習得できる環境整備に向けた取り組みが必要とされていることが分かった。関連して、沖縄県における福祉分野における雇用問題では、障がい者雇用枠で就労していた者が整理解雇される事案が生じている。経済状況に左右されず、また障がいの有無に関係なく働き甲斐、生き甲斐を感じられるような安定した経済・雇用環境を構築するための方策を探る必要がある。

研究成果の 発表実績	2021/11/29 沖縄大学 地域研究所公開講座④ 『女性リーダーの育成ーロールモデルからの提言ー』 沖縄県中小企業家同友会「碧の会」共催 登壇者：友寄 利律子 氏（ライフサポートてだこ代表）/介護業 与那覇 依子 氏（株式会社 樹来代表）/トラック物流業 大城 恵美 氏（株式会社 近代美術代表）/広告印刷業 2021/8/30 三平和男「中小企業の障がい者雇用への取り組みと『働き方改革』について（概要）」『月間社労士』8月号。
-----------------------	---

2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	成人期の栄養素摂取の特徴に関する研究
代表者名	下地 みさ子
分野／対象地域	食生活学／沖縄県内
研究期間	開始 2021 年 5 月 ～ 終了 2024 年 3 月 （1 年目／3 年間）
研究成果要約	沖縄県の成人肥満率は全国平均を上回っており対策が求められる。県在住働き盛年齢層における食生活の特徴を知るため調査を行った。BMI $\geq$ 25 の肥満者において選択頻度が高いメニュー等がわかった。人数を増やし検討を続ける。
研究組織	（研究代表者及び研究分担者）所員 2 名、特別研究員 2 名、計 4 名
研究成果	沖縄県の成人肥満率は全国平均を上回っており対策が求められる。県在住働き盛年齢層における食生活の特徴を知るため調査を計画した。 インフォームド・コンセントを得た県内 A 社に勤める成人 19 名（男性 9 名、女性 10 名）について、ビタミン D 欠乏に関する質問調査、食生活に関する調査（外食の利用頻度、持ち帰り弁当・惣菜等の利用頻度、健康メニュー選択の意識、配食サービスの利用頻度、健康食品の利用頻度・利用目的、肉類摂取頻度、魚介類摂取頻度、卵摂取頻度、大豆・大豆製品摂取頻度、乳類摂取頻度、緑黄色野菜摂取頻度、海藻類摂取頻度、いも類摂取頻度、果物類摂取頻度、油料理摂取頻度、独居／同居、大きな体重変化、喫煙歴、朝食について、カレーライスや丼・沖縄そばの頻度、菓子類頻度、飲酒習慣）、身体活動に関わる調査、身体計測（身長：自己申告、体重：実測値）、肌の水分/油分測定を行った。調査票には事前に自己記載していただき、調査日に管理栄養士によるヒアリングを行い記載内容の確認および修正を行った。その他、身長と体重の計測および肌の水分/油分測定（ANLAN、スキンチェッカー）を行った。今後、人数を増やす必要があるが、19 名のデータについて統計解析を行った結果を報告する。 参加者の平均年齢は男性 46.6$\pm$3.0 歳、女性 38.5$\pm$2.9 歳であった。そのうち BMI$\geq$25 の肥満は全て男性 4 名であり、女性是一名も該当しなかった。沖縄県において BMI が 25 以上の割合は 45.2%であるのに対して本調査では低かった。その理由は参加者を選出した方法に問題があった可能性がある。本調査に協力していただいた会社が健康に関連する業務を行っており、社員の健康への意識が比較的高いことが推察される。実際、身体活動レベルが普通もしくは高い人数は半数以上の 12 名であった。また、健康メニューの選択意思があるもしくは健康食品を利用している人数が 14 名と 73%の参加者が健康を意識した食生活をしていた。2021 年度の参加者は沖縄県全体の代表とみなすには不適格であり、次年度以降、さらに様々な環境にある沖縄県民に声かけをして参加者を募る必要がある。 今回の BMI25 以上の参加者で食生活上気になる点として、カレーライスや丼もの・沖縄そば等の単品料理摂取頻度は BMI25 以上の者で 1.9 回/週、BMI25 未満の者で 0.6 回と有意な差が認められた（$p=0.042$, t 検定）。ただし、男性のみでのサブ解析では有意な差は認められないが同様な傾向が窺えた。カレーライスや丼物は炭水化物および脂質の割合が高くなりがちで、逆に食物繊維の摂取量が少なくなるとされる（農林水産省フードガイド検討会報告書、第一出版、2005）。摂取頻度が高い習慣を改善する施策が必要である。 各食品群の簡易な摂取頻度を点数化（ほとんど食べない=0、週に 1, 2 回食べる=1 点、2 日に 1 回食べる=2 点、ほぼ毎日食べる=3 点）し、その合計を食品摂取頻度スコア（最高 30 点）、すなわち食品摂取の多様性の指標とした。成田らによると、食品摂取頻度スコアが低いと摂取栄養バランスが悪くなるが（成田美紀, 2.

	食べよう！いろいろな食材, 1) 食材食品摂取の多様性スコア (DVS). 東京都健康長寿医療センター研究所健康長寿新ガイドライン策定委員会編著. 健康長寿新ガイドラインエビデンスブック. P. 6-8. 社会保険出版社 (東京), 2017.), 肥満者と非肥満者の間で食品摂取頻度スコアに有意な差は認められなかった。摂取食品を各項目別で見ると、緑黄色野菜の摂取頻度が低いほど BMI が高く、週に 1, 2 回食べる群 ($n=4$, 28 kg/m^2) は 2 日に 1 回食べる群 ($n=3$, 22 kg/m^2, $p=0.0409$) および毎日食べる群 ($n=12$, 22 kg/m^2, $p=0.0075$) に比べてそれぞれ有意に高かった (Tukey-Kramer 検定)。ただし、男性のみでのサブ解析では有意な差は認められないが同様な傾向が窺えた。また、摂取エネルギーが過剰になりがちな外食および飲酒との関係を検討したが、外食利用頻度もしくは飲酒頻度と肥満に有意な関係性は認められなかった。さらに、消費エネルギーを増やすことは肥満改善のための重要な因子であるが、今年度の調査では身体活動レベルと肥満との間にも相関性はみられなかった。 乾燥肌は痒みの原因となるだけでなく皮膚におけるバリア機能低下から感染症につながる場合もある。乾燥肌は肌方面の水分と皮脂が低下した状態であり、本研究では肌水分もしくは肌油分と食品摂取頻度スコアとの関係を調べた (年齢と性別を因子に加えた重回帰分析)。その結果油分と食品摂取頻度スコアに有意な関係性は認められないが、肌水分は食品摂取頻度スコアと有意な関係性が認められた (自由度調整 R^2 乗 $=0.297$, $p=0.041$)。標準偏回帰係数 (p 値、95%CI、分散拡大要因) はそれぞれ、年齢が -0.70 ($p=0.011$, $-0.92 \sim 0.14$, 1.5)、性別 (女性) が -0.26 ($p=0.251$, $-5.32 \sim 1.50$, 1.2)、食品摂取頻度スコアが 0.569 ($p=0.020$, $0.18 \sim 1.81$, 1.23) であった。肌水分に年齢は有意に負の相関を食事摂取頻度スコアが有意に正の相関を示すことが明らかになった。個々の食品群と肌水分に相関は見られなかったため、肌水分維持に良い食品の推定はできないが、様々な食品を摂取することが良い効果を持つことが示唆された。 ビタミン D の欠乏判定は、桑原らの方法で行った。(Kuwabara A, et al. A simple questionnaire for the prediction of vitamin D deficiency in Japanese adults (Vitamin D Deficiency questionnaire for Japanese: VDDQ-J). J Bone Miner Metab. 2019 Feb 5. doi: 10.1007/s00774-018-0984-2. [Epub ahead of print]) 栗原式質問票の解析から、19 名中 11 名においてビタミン D 欠乏の可能性が疑われた。 冒頭で示したように 2021 年度の参加者は沖縄県全体の代表とみなすには不適合であるので、次年度は A 社以外の県内企業へも協力依頼を行い、様々な職場環境における働き盛り年齢層のデータを幅広く収集したい。
研究成果の発表実績	未発表

2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	沖縄における会計・簿記教育に関する研究																																											
代表者名	朱 愷雯																																											
分野／対象地域	財務会計／九州・沖縄地域																																											
研究期間	開始 2019 年 4 月 ～ 終了 2022 年 3 月 (3 年目／ 3 年間)																																											
研究成果要約	本研究は、沖縄における大学の会計簿記教育の現状を調査し、コロナによる会計教育の変化について検討することを目的としている。このような研究目的を照らして、今年度は、簿記会計科目を設置する沖縄 4 大学（沖縄大学、沖縄国際大学、琉球大学、名桜大学）における遠隔授業への対応の実態を、インタビュー調査を通じて明らかにした。																																											
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名、特別研究員 2 名、計 4 名																																											
研究成果	本研究は、簿記会計科目を設置する沖縄 4 大学（沖縄大学、沖縄国際大学、琉球大学、名桜大学）における遠隔授業への対応の実態を、インタビュー調査を通じて明らかにすることを目的としている。インタビュー調査は、沖縄 4 大学の計 6 名の簿記会計科目担当者を対象に、対面またはオンライン（ZOOM）により実施された。調査は、遠隔授業の実施方法とそのメリット・デメリットおよび遠隔授業の実施による簿記会計教育の変化を中心に、質問を行った。 ① 遠隔授業の実施方法と実施効果 表 1 は、各回答者が遠隔授業を実施する際の実施方法に基づいて作成したものである。遠隔授業の実施方法については、オンデマンド型またはオンデマンド併用型が半数以上を占めている。オンデマンド型を選択する理由の 1 つとして、学生側の視聴環境への配慮が考えられる。 表 1 遠隔授業の実施方法 <table border="1"> <thead> <tr> <th></th><th>授業形式</th><th>教材・資料</th><th>ツール</th><th>課題と試験の有無・実施方法</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A 先生</td><td>オンデマンド型</td><td>文書 (A4 紙、4～5 枚)</td><td>学務システム</td><td>両方あり。 受験可能期間：1 週間程度</td></tr> <tr> <td>B 先生</td><td>オンデマンド型</td><td>NHK 基礎講座</td><td>学務システム</td><td>両方あり。 試験実施方法：対面</td></tr> <tr> <td>C 先生</td><td>オンデマンド型</td><td>テキストの補足資料</td><td>学務システム</td><td>両方あり。 受験可能期間：通常より短縮</td></tr> <tr> <td>D 先生</td><td>オンデマンド型</td><td>レジュメ、パワーポイント</td><td>学務システム</td><td>両方あり。 試験実施方法：エクセルファイルで出題。 受験可能期間：1 週間程度</td></tr> <tr> <td>E 先生</td><td>前期：同時双方向型とオンデマンド型の併用 後期：ハイフレックス型とオンデマンド型の併用</td><td>パワーポイント、動画</td><td>ZOOM YouTube WebClass</td><td>両方あり。 試験実施方法：数パターン の問題を作成し無作為にメールを通じて配付。 受験可能期間：3 時間</td></tr> <tr> <td>F 先生</td><td>ハイフレックス型</td><td>パワーポイント、一部は YouTube の動画を活用。</td><td>Microsoft Teams</td><td>課題なし、テストあり。 試験実施方法：時間内に学内 SNS に問題をアップ。 受験可能期間：90 分（通常通り）</td></tr> <tr> <td>朱</td><td>オンデマンド型</td><td>レジュメ、動画</td><td>Moodle、Microsoft Stream</td><td>課題あり、テストなし。 試験実施方法：期末課題。 受験可能期間：1 週間程度</td></tr> </tbody> </table> 課題の有無や提出方法については、表 1 に示したように、遠隔授業を実施する際に、課題を課すケースが多くみられる。特に、オンデマンド授業を実施する					授業形式	教材・資料	ツール	課題と試験の有無・実施方法	A 先生	オンデマンド型	文書 (A4 紙、4～5 枚)	学務システム	両方あり。 受験可能期間：1 週間程度	B 先生	オンデマンド型	NHK 基礎講座	学務システム	両方あり。 試験実施方法：対面	C 先生	オンデマンド型	テキストの補足資料	学務システム	両方あり。 受験可能期間：通常より短縮	D 先生	オンデマンド型	レジュメ、パワーポイント	学務システム	両方あり。 試験実施方法：エクセルファイルで出題。 受験可能期間：1 週間程度	E 先生	前期：同時双方向型とオンデマンド型の併用 後期：ハイフレックス型とオンデマンド型の併用	パワーポイント、動画	ZOOM YouTube WebClass	両方あり。 試験実施方法：数パターン の問題を作成し無作為にメールを通じて配付。 受験可能期間：3 時間	F 先生	ハイフレックス型	パワーポイント、一部は YouTube の動画を活用。	Microsoft Teams	課題なし、テストあり。 試験実施方法：時間内に学内 SNS に問題をアップ。 受験可能期間：90 分（通常通り）	朱	オンデマンド型	レジュメ、動画	Moodle、Microsoft Stream	課題あり、テストなし。 試験実施方法：期末課題。 受験可能期間：1 週間程度
	授業形式	教材・資料	ツール	課題と試験の有無・実施方法																																								
A 先生	オンデマンド型	文書 (A4 紙、4～5 枚)	学務システム	両方あり。 受験可能期間：1 週間程度																																								
B 先生	オンデマンド型	NHK 基礎講座	学務システム	両方あり。 試験実施方法：対面																																								
C 先生	オンデマンド型	テキストの補足資料	学務システム	両方あり。 受験可能期間：通常より短縮																																								
D 先生	オンデマンド型	レジュメ、パワーポイント	学務システム	両方あり。 試験実施方法：エクセルファイルで出題。 受験可能期間：1 週間程度																																								
E 先生	前期：同時双方向型とオンデマンド型の併用 後期：ハイフレックス型とオンデマンド型の併用	パワーポイント、動画	ZOOM YouTube WebClass	両方あり。 試験実施方法：数パターン の問題を作成し無作為にメールを通じて配付。 受験可能期間：3 時間																																								
F 先生	ハイフレックス型	パワーポイント、一部は YouTube の動画を活用。	Microsoft Teams	課題なし、テストあり。 試験実施方法：時間内に学内 SNS に問題をアップ。 受験可能期間：90 分（通常通り）																																								
朱	オンデマンド型	レジュメ、動画	Moodle、Microsoft Stream	課題あり、テストなし。 試験実施方法：期末課題。 受験可能期間：1 週間程度																																								

場合に、課題の提出を出席とするパターンがほとんどである。一方、課題の提出方法は、オンラインのみならず、紙ベースでの提出も可能とされているケースが多い。これも、学生の視聴環境への配慮と考えられる。

他方、オンライン試験の実施方法については、ほとんどが学務システム等によって試験問題を学生に配信する形で実施された。学生の受験場所が自由であり、不正行為の防止が困難であるため、試験といっても事実上の課題と捉えて実施したことがわかった。また、通信状況や技術的なトラブルを考慮して、オンライン試験の受験可能時間や受験期間は通常の対面試験よりも長く設けられるケースが多かった。一方、テキストを見たり、友人と相談する時間が取れないようにするために、通常より試験時間を短縮したケースもあった。

遠隔授業の実施効果に関して、毎年に行われている授業評価アンケートの結果、およびクラス規模と遠隔授業の実施効果との関係という 2 つの側面から、質問を行った。表 7 は、各回答者から得られた回答を示したものである。2020 年度の授業評価アンケート調査の結果では、例年より評価が高い、または例年と変わらないという回答が多く得られた。個別のコメントとして、スライドに図を載せたこと、分かりにくい場合にはホワイトボードを活用したこと、わからない点を質問できたこと等がメリットとして挙げられていた。一方、講義の進捗度が早い、説明の時間をもっとかけてほしいなどの改善要望もあった。また、授業評価アンケートの結果ではないが、受講生の成績から見れば、成績上位者と下位者との差が前年度より広がったこともみられた。

クラス規模と遠隔授業の効果との関係について、多くの回答者から、「対面授業であれば、クラスが小さい方が学習効果は高いとはいえるが、遠隔授業の場合、クラス規模は学習効果に関係しない」という回答がえられた。

② 遠隔授業のメリットとデメリット

教員の立場からは、遠隔授業の 1 つのデメリットとして、学生の理解度を把握しにくいという問題が挙げられた。受講生の理解度を適時に把握し、講義の進行速度を随時調整することが遠隔授業を実施する際の大きな課題といえる。

また、簿記講義の特徴ともいえるが、「授業形式の多様化やネットの普及等に伴って、日商簿記を教科の主体とする場合、大学教員が作る動画より分かりやすい動画が YouTube にあり、学生は市販のテキストやネット上の動画を通じて学修できるため、簿記を担当する大学教員の存在意義が薄くなっている」という指摘もあった。

そして、教員側からみれば、遠隔授業を実施するにあたっては、講義の準備に時間がかかるというデメリットがあるが、遠隔授業のために作成した資料を今後の対面授業で活用したいと回答した担当者もいた。

一方、学生の立場からは、遠隔授業を実施する際の一番大きな問題点として、視聴環境の影響が指摘された。また、学生は講義の課題に追われ、心理的な負担が大きくなったことも指摘された。

なお、各回答者は、今後、遠隔授業を行う際の改善点についても提言した。まず、遠隔授業を実施する場合には、学生の視聴環境に格差があるため、その視聴環境の確証と平準化をする必要がある。配信側においても、音響や画質など設備面で授業間の格差があるため、改善する必要がある。また、学生の理解度の確認や日頃のモチベーションにつながらないため、Google Form 等の活用や確認のためのミニテストの実施も考えられる。

③ 遠隔授業の実施による簿記会計教育の変化

まず、大学における簿記会計教育の目的について、各回答者から以下のような回答が得られた。共通点として、会計データを作成するスキル、そして、会計データを読む能力を身に付け、内部の経営管理の意思決定や外部の適切な情報開示に活用できることが大学における簿記会計教育の第 1 の目的であるとみられる。

また、「日商簿記検定試験のネット試験の開始に伴って、大学における簿記会計教育の方法や内容等について変化するか否か」という質問については、回答者から「ネット試験が開始になっても、大学における簿記会計教育の方法や内容が変化することはない」という意見があった一方で、「検定にとらわれない講義の構築が必要と考えるものの、就活を踏まえた社会での客観的な評価となる

	ため、ネット試験の内容を考慮した講義になるだろう」という回答もあった。 2021 年度から、文部科学省の通知に応じて、多くの大学は新型コロナウイルス感染症の感染防止措置を徹底的に対策したうえで、積極的に対面授業を再開したが、急速の感染拡大により、遠隔授業に切り替える措置をとらなければならないところも少なくない。今後も、遠隔授業の実施はしばらく続くと思われる。このような背景のもとで、遠隔授業を実施する場合の課題として、オンライン試験の実施方法および不正行為の防止問題が考えられる。また、今後、遠隔授業を前提にした大学における簿記会計教育の意義を再考し、その方法や内容をどのように改善すべきかについても、検討する必要があることが明らかになった。 一方、今後、対面授業が実施できるようになったとしても、遠隔授業の経験をどのように生かして、そのメリットを対面授業に取り入れるのかについても、考える必要がある。
研究成果の 発表実績	〈学会報告〉 「沖縄 4 大学における遠隔授業への対応状況－簿記会計科目担当者に対するインタビュー調査を踏まえて」日本簿記学会第 37 回関西西部会・統一論題（近畿大学主催、ZOOM による開催）、2021 年 5 月。

2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	地域の食材を使った様々な「からだ想い昼食弁当」の考案と地域の健康・栄養課題の改善スキルの検討について ―継続その3
代表者名	逸見幾代
分野／対象地域	公衆栄養学、栄養教育、調理／ 沖縄、中国、北陸
研究期間	開始 2019 年 4 月 ～ 終了 2021 年 3 月 （3 年目／3 年間）
研究成果要約	沖縄県や他県（中国地方）の郷土料理弁当を作成、サンプルとした。これらの「給食弁当」や「郷土料理弁当」は、給食施設などで実施されている「展開献立」の考案でなく、栄養、調理法、価格、衛生面、喫食者を全体的に網羅した地域への発信とした【公衆 栄養活動「からだ想い弁当」としての意識の検討や、食のイノベーションに向けた 「食育教材」としての活用や有効性の検討を試みた。 この弁当による、若年者の食生活の現状の把握と、健康サポートにつなげるための意識変化の導入部分の把握をし、これを地域啓発につなげることにした。 またこれをもとに、地域の健康・栄養の課題を改善するスキル検討の一助とした。
研究組織	（研究代表者及び研究分担者）所員 2 名、特別研究員 3 名、計 5 名
研究成果	コロナ禍で、「からだ想い弁当」を試作しながら着手することが、困難であった。 そこで、沖縄県においては「給食経営管理実習」で作成・販売された健康的な集団調理による 9 回分の給食弁当を対照群サンプル（2 食分ずつ購入し、試食と冷凍保存）とした。 また、一方、中国地方の他県の郷土料理弁当を作成し、サンプルとした。 これらの「給食弁当」や「郷土料理弁当」は、献立をベースに、給食施設などで実施されている「展開献立」の考案でなく、栄養、調理法、価格、衛生面、喫食者を全体的に網羅した地域への発信とした【公衆栄養活動「からだ想い弁当」としての意識の検討や、食のイノベーションに向けて「食育教材」としての活用や有効性の検討を、アンケート調査で試みた。その結果の概要をまとめた。 目 的 近年では中食や外食の増加が問題となっており、若い世代である大学生は 1 人暮らしを始めたり活動の場が増えるなど生活環境の変化により、食生活が大きく乱れやすい時期である。農林水産省による食育に関する意識調査でも、食育に関心がないと回答した人の割合が 20～29 歳男女でやや高く若い世代の食育への関心の低下が懸念されている。 そこで、本研究では地元の食材を使用した弁当を作成し、食育の教材として活用できるのか、有効性を図るための基礎資料を得ることを目的とし、石川県内の大学生を対象としアンケート調査を実施した。 方 法 石川県の郷土料理である「治部煮」、地場産物である金時草などを使用した弁当を作成し、弁当の名前を「あんやと弁当」（学生命名）とした。実食無し（コロナ禍）で、弁当帯の熨斗と食育冊子を作成し、グーグルフォームを使用して食生活や食意識、作成弁当に関するアンケート調査を実施した結 果 弁当の内容は、「ごはん(ごま)、菜飯、金時草のちらし寿司、治部煮、卵焼き(カニカマ入り)、豚こまボール、甘えびフライ、金時草の酢の物、ブロッコリーの胡麻和え、スイートかぼちゃ」で作成した。栄養価は、前回の沖縄の「からだ想い弁当」とほぼ同じ、「エネルギー」622kcal、「たんぱく質」30.1g、「脂質」21.3g、

	「炭水化物」84.3g 、「食塩相当量」1.8g で、野菜量は 126.3g であった。 ① 「からだ想い弁当：ちゃーがんじゅーしー：沖縄」 ② 「「気どらないからだ想い沖縄弁当」 ③ 「あんやと弁当：石川郷土料理」 ④ 結果は、次の通りであった。 (1) 平日の昼食について：昼食の摂取は、大半が「弁当(手作り)」で、次いで「学生食堂」 、「市販弁当」は、わずか 10%程度であった。 昼食を選ぶ際の重視点は、「味」、「値段」、「量」、「見た目」、「栄養価」、「食材料」などの順であった。 (2) 郷土料理や地場産物について：郷土料理や地場産物への興味・関心の有無は、ほとんどが「ある」で、「ない」はわずかであった。 郷土料理や地場産物の認識は、「治部煮」や「加賀野菜(金時草、五郎島金時など)」が高く、郷土料理は、月 1 回以上食べている者合は少ない傾向。理由は「特に理由はない」が多かった。 (3) 作成弁当と普段の昼食との量を比較 8：全体量、主食量、主菜量については、「ほぼ同じ」、野菜の量は、「多い」、購入上限金額は、「400~600 円」との回答が多かった
研究成果の発表実績	弁当の写真および熨斗、食育冊子を見て、郷土料理や地場産物の知識が深まったとほぼ全員の興味・関心が高まったことから、弁当による食育の有効性が考えられ、レシピを配布などの働きかけの重要性が示唆された。 まとめ 作成した弁当を食育に用いることで適切な 1 回分の食事量を示すことができ、利用者が普段の食事と比較することができ、食育として利用できることが示唆された。 本研究の対象者は、一地域、一集団であり、選択バイアスもある。普遍的なものとするためには調査対象を広げて行う必要がある。また、今回は、コロナ禍における実食なしの、写真による調査であったが、昼食を選ぶ際の重視点である「味」から、実食により、弁当の食育の有効性を図ることができると考える。 2021 年度までの既存の集積データや人的資源の活用により基礎的分析結果を発表。 1) 沖縄・中国地域(広島)の食材を使った健康弁当の考案作成 ① 第 8 回日本食育学会(東京) ② 第 68 回日本栄養改善学会(札幌)紙上発表 ③ 沖縄大学紀要、地域研究、26 巻 4 号、1-11、2021 2) 生活習慣と健康弁当に関する意識調査、相対的貧困と食環境・食生活との関連に関する分析(学会発表 5 件、論文 1 件) 2021 年 6 月 第 9 回日本食育学会 誌上発表(2 件)、 ・「からだ想い弁当」によるコロナ禍における食意識様相について ・「青年期の相対的貧困と食環境・食生活・社会環境との関聯について」

	2021 年 9 月 第 68 回日本栄養改善学会（新潟県立大学）誌上 Zoom 発表、 ・「大学生の食生活状況と相対的貧困、居住形態との関連」栄養学雑誌 79、5、141、202021 ・若年女性の弁当作り支援による栄養教育効果の検討 栄養学雑誌 79、5、147、202021 2021 年 10 月 第 54 回 日本栄養・食糧学会 中国・四国支部大会 第 7 回 日本栄養改善学会四国支部学術総会合同大会（於：松山 愛媛大学 Zoom 開催） ・四国地区大学生の相対的貧困と食環境・食生活・社会環境との関連について論文 日本食育学会誌 第 16 巻 第 1 号、2022（1 月）
--	---

2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	地域における多機関多職種協働の支援システム構築に関する研究
代表者名	玉木千賀子
分野／対象地域	社会福祉
研究期間	開始 2020 年 6 月 ～ 終了 2023 年 3 月 (2 年目／ 3 年間)
研究成果要約	社会福祉協議会のコミュニティソーシャルワーク従事者向けの新人研修プログラムの作成、活用のための研修会、新人職員研修に関する課題のヒアリング調査の実施など、多機関多職種協働を阻害する要因についての対応策の検討・実施に取り組んだ。
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 1 名、 特別研究員 2 名、 計 3 名
研究成果	(研究概要) 地域生活支援のための多機関多職種協働（以下、チームアプローチとする）には、各専門職が自らの支援機能を適切に発揮することが必要不可欠である。しかし、現状では、社会福祉協議会や地域包括支援センター等、地域生活支援を担う支援機関の福祉実践者に対する研修プログラムが未整備のため、連携の機能不全、業務負担の荷重に起因する早期離職などの課題が生じている。 本研究チームは、これらチームアプローチの阻害要因への対応策の検討を研究課題として位置づけ、研修プログラムが特に未整備な新人のコミュニティソーシャルワーク従事者の研修プログラムの構築を目標に 3 年間の共同研究に着手した。2021 年度の研究内容および研究成果は次の通りである。 効果的なチームアプローチの展開 (2021 年度 研究成果) (5) 新人研修プログラムに関するヒアリング調査 (2021 年 4 月) 浦添市社会福祉協議会コミュニティソーシャルワーカー（以下、CSWr とする）10 人を対象に新人研修プログラムに対する意見・提案についてヒアリング調査を実施した。ヒアリングデータの分析から、説明の補足やわかりやすさへの工夫等、研修プログラムに対する疑問・要望、組織の運営や業務体制等に関する意見・提案等の項目が抽出された。 (2) 市町村社協へのアンケート調査の実施 (2021 年 9 月) 新人研修プログラムの活用についてのアンケート調査を実施。回収率、記述内容から、新人 CSW の研修の実態（研修の実施状況、必要性についての認識）を把握した。 (3) 県社会福祉協議会地域福祉部への研修プログラムの紹介・意見交換 県社協の研修体系の現状・課題、市町村社協の取り組み状況についての情報収集、研修プログラムの活用に関する協力依頼等を行った。 (4) 研修プログラムの活用に向けた研修会および意見交換会の実施 (2021 年 12 月) 浦添市、那覇市、宜野湾市、北谷町、八重瀬町、南風原町の実務経験 1 ～ 3 年の CSWr13 人を対象として研修プログラムの意義、活用方法についての講義、各々の参加者がどのように実践スキルの習得に取り組んできたのか情報共有を行なった。プログラムの活用を通して実践の根拠の確認、中堅・ベテランの管理者を含めた組織的な研修体制の必要性等の課題が抽出された。 (5) 新人研修プログラムのパイロットスタディ (2021 年 12 月～) 上記(4)の研修参加者を対象とした、新人研修プログラム活用の効果、課題等に関するインタビュー調査を実施 2022 年 3 月から実施、5 月に終了予定。

	2022 年度はこれらの研究結果をまとめる。
研究成果の 発表実績	県内市町村社会福祉協会への「コミュニティソーシャルワーカー新人研修プログラム」(別添資料) の紹介

1 か月～3 か月 目標	職場および地域の人の顔と名前と場所を覚える									
コミュニティ ソーシャルワー クの機能	(1) ニーズキャッチキャッチ (2) 家族全体を視野に入れた相談機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支えあい活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づく り機能									
I 組織										
✓	No.	機能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No	機能	(2) 行動	(2) 行 動の 実施方法	

目標達成のための 具体的活動	☐	1	10・11	法人理念・社協の方針を理解している。	1. 社協の事業計画を一読する。 事務局長から 2. 浦添社協の地域福祉の説明を受ける。 3. 「社協職員になる為に」を唱和する。 4. 社会福祉法第4条、109条を一読する。	☐	1	2・5	地域福祉課の職員の顔と名前がわかる。	1. 自分の名刺を作成 2. 社内の職員と名刺交換をする。 3. 組織図、座席表を活用して顔と名前を一致させる。
	☐	2	2・5	他職員の業務内容の概要を知る。	1. 事務分掌を読む。 2. 部署に出向いて説明を聞く。	☐	2		相談することができる。	1. あいさつをする。 2. 日頃から雑談する。
	☐	3	4	相談システムの使い方を知る。 (相談記録の入力方法)	1. 操作マニュアルを読む。 2. 業者からレクチャーを受ける。	☐	3		Jdoc (社内イントラネット) を使うことができる。 todo(メール)、掲示板、スケジュール	1. 総務からアカウントを取得する。 2. 説明を聞く。 3. 使って慣れる。

1 カ月～3 か月 目標				職場および地域の人の顔と名前と場所を覚える							
コミュニティ ソーシャルワー クの機能				(1) ニーズキャッチキャッチ (2) 家族全体を視野に入れた相談機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支えあい活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり 機能							
I 組織											
	✓	No.	機能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No.	機能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法	

目標達成のための 具体的活動	☐	4	4	社会福祉センターの構造を知る。 (中研・大研・倉庫の場所)	1. センターの役割、概要図（利用団体含む）を見る・読む。 2. 総務担当者の説明を受ける。	☐	4		事務作業ができる。(出退勤簿の管理、年休病休申請、月末書類の提出)	1 タイムカード、年休・病休カード、超勤簿の書き方の説明を受ける。
	☐	5	1～11	自身の業務内容を把握する。(一日の業務の流れ)	1. 1日の業務の流れの資料を読む。	☐	5		各中学校区の相談者・訪問者への対応ができる。(電話対応、来訪者への対応)	1 対応マニュアルに沿って電話を取る、かける。
	☐	6	2・5	所属部署の会議を理解する。	1. 会議資料を読む。 2. 上司・先輩から説明を受ける。 3. 会議に参加する					
	☐	7	9・11	社協全体の会議を知る。	1. 資料を読む。 2. 上司・先輩から説明を受ける。					

1 カ月～3 か月 目標				職場および地域の人の顔と名前と場所を覚える							
コミュニティ ソーシャルワー クの機能				(1) ニーズキャッチキャッチ (2) 家族全体を視野に入れた相談機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支えあい活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり 機能							
I 組織											
	✓	No.	機能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓		No.	機能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法

目標達成のための 具体的活動	☐	8	社会福祉センター の備品管理ができる ☐ コピー機の使用 方法 ☐ 公用車の給油場 所 ☐ 研修室の電機使 用方法	職員の説明を 受ける。					
	☐	9	各中学校区の事務 所・備品管理ができ る。(鍵の開 閉、湯茶の準備、コ ピー機の使用方法、 公用車の給油場所、 公用車の駐車方法、 掃除方法、トイレの 使用)	備品管理マニ ュアルを読 む。					
	☐	10 ～ 9	各中学校区の相談 者・訪問客、電話へ の対応方法を知る。	対応マニユア ルを読む。					

1 か月～3 か月 目標	職場および地域の人の顔と名前と場所を覚える									
コミュニティ ソーシャルワー クの機能	(1) ニーズキャッチキャッチ (2) 家族全体を視野に入れた相談機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支えあい活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づく り機能									
I 組織										
✓	No.	機 能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No.	機 能	(2) 行動	(2) 行動 の 実施方法	

目 標 達 成 の た め の 具 体 的 活 動	☐	11	1 ～ 11	CSW の基本的な 役割を知る。	1. CSW 活動事 例集を読む 2. CSW の活動 事例集を職員 間で読み合わ せをしながら 疑問点の確認 をする（学習 会） 3. 他市町村の事 例を情報収集 して読む。					
---	--------------------------	----	--------------	---------------------	---	--	--	--	--	--

1 カ月～3 か月 目標	職場および地域の人の顔と名前と場所を覚える									
コミュニティ ソーシャルワーク の機能	(1) ニーズキャッチキャッチ (2) 家族全体を視野に入れた相談機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支えあい活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり機能									
I 組織										
	✓	No.	機能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No.	機能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法

目標達成のための 具体的活動	☐	12	1 ～ 11	業務に関する法律・計画を知る。 ☐ 社会福祉法第3条「福祉サービスの基本的理念」 ☐ 社会福祉法第4「地域福祉の推進」 ☐ 社会福祉法第5条「福祉サービスの提供の原則」 ☐ 社会福祉法第106条の3「包括的な支援体制の整備」 ☐ 社会福祉法第107条「市町村地域福祉計画」 ☐ 社会福祉法第109条「市町村社会福祉協議会及び地区社会福	職員必携の中に入れて法律の条文を読む。					
-------------------	--------------------------	----	--------------	--	---------------------	--	--	--	--	--

			祉協議会」 ☐ 社会福祉法第 112 条 ～ 第 124 条「共同募 金」						
	☐	13	1 ～ 11	社会福祉の動向 を 知る習慣をつけ る。	厚生労働省 HP を日常的にチェ ックする。				

1 カ月～3 か月 目標	職場および地域の人の顔と名前と場所を覚える									
コミュニティ ソーシャルワー クの機能	(1) ニーズキャッチキャッチ (2) 家族全体を視野に入れた相談機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支えあい活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり機能									
Ⅱ 地域										
	✓	No.	機 能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	N o.	機 能	(2) 行動	(2) 行動の実 施方法

	☐	1	1 4 8	校区内自治会の場所を知る。	1. 自治会一覧表、 地図を見る。	☐	1	1 ～ 6	相談対応の方法を把握している。	1. 先輩の対応に同席する
	☐	2	1 4 8	自治会長の名前と顔が一致する。	1. 名前の一覧表を見る。 2. 会って名前と顔を一致させる。	☐	2	1	担当地区の地理が頭に入っている。地図と実際の場所が一致している。	1. 実際に運転する。
	☐	3	4	関係機関・部署の名称と役割の概要を知る。	1. 関係機関の情報ファイルを見る。	☐	3	1 4 6	校区内の民生委員を知る。	1. 実際に会いに行く。
目標達成のための	☐	4	1	地図がわかる（道路、名称）。	1	☐	4		中学校区コミュニティづくり推進委員会の委員を知る。	1 係長や先輩 CSW と一緒に委員会のお知らせを兼ねて挨拶に行く

1 カ月～3 か月 目標				職場および地域の人の顔と名前と場所を覚える					
コミュニティ ソーシャルワーク の機能				(1) ニーズキャッチキャッチ (2) 家族全体を視野に入れた相談機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支えあい活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり機能					
Ⅱ 地域									
✓	No.	機能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No.	機能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法

具体的活動	☐	5	1 ～ 9	校区の概要を把握する。①人口、②自治会加入率、③高齢化率	1. 概要一覧を見る。	☐	5	1 ， 9	中学校区コミュニティづくり推進委員会の委員に知ってもらう。	係長や先輩CSW と一緒に委員会のお知らせを兼ねて挨拶に行く。
	☐	6	1 ～ 10	災害時等要援護者避難支援制度を理解する。	1. 「災害時等要援護者避難支援制度のご案内」を見る。 2. 福祉総務課の職員からの説明会に参加する。	☐	6	1 ， 9	行政区コミュニティづくり推進委員会（支援会議）を開催する。	係長や先輩CSW と相談しながら会議資料を作成する。
	☐	7	1 ～ 10	校区内の災害時登録者人数を把握する。	1. 登録者名簿を確認する。 2. 登録者数一覧を確認する。					
	☐	8	1 ～ 11	校区内の民生委員を知る。	1. 「浦添民児協便り」を見て覚える。					
	☐	9	1 6	校区内の地域福祉協力員の数を把握する。	1. 地域福祉協力員一覧名簿を見る。					

1 カ月～3 か月 目標				職場および地域の人の顔と名前と場所を覚える						
コミュニティ ソーシャルワーク の機能				(1) ニーズキャッチキャッチ (2) 家族全体を視野に入れた相談機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支えあい活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり機能						
Ⅱ 地域										
✓	No.	機能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No.	機能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法	

□	10	10 11	浦添が目指す地域福祉の全体像を知る。	1. 「地域福祉のめざす支え合いの図」を見る。 2. 中学校区ごとの福祉計画を読む。					
□	11	1 2 4 6 8 9	行政区コミュニティづくり推進委員会（支援会議）の内容を知る。	1. 他の中学校区の委員会に参加して様子を見る。 2. 委員会の議事録を読む。 3. 先輩 CSW と相談しながら会議資料を作成する。					

1 か月～3 か月 目標				職場および地域の人の顔と名前と場所を覚える							
コミュニティ ソーシャルワー クの機能				(1) ニーズキャッチキャッチ (2) 家族全体を視野に入れた相談機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支えあい活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づく り機能							
Ⅱ 地域											
✓	No.	機 能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No.	機 能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法		

☐	12	1 2 4 6 8 9	中学校区コミュニ ティづくり 推進委員会の 内容を知る。	1. 他の中学校区の 委員会に参加し て 様子を見る。 . 2. 委員会の議 事録を読む。 3. 先輩 CSW と相 談しながら会議 資料を作成する。					
☐	13	1 ～ 11	地域の各会議の 種類を知る。 ☐ 包括連携会議 ☐ 民協定例会 ☐ 地域福祉協力 員定例会	1. 各種会議に対す る CSW の役割 についての資料 を見る。					
☐	14	1 4 6	中学校区コミュニ ティづくり推 進委員会の委員 を覚える。	1. 名簿を見る。					

4ヶ月～6ヶ月 目標				社協およびCSWの役割を理解する							
コミュニティ ソーシャルワー クの機能				(1)ニーズキャッチ機能 (2)家族全体を視野に入れた相談支援機能 (3)ケア方針立案機能 (4)コーディネート機能 (5)対人援助機能 (6)インフォーマルケア (7)新しい福祉サービス開発機能 (8)当事者同士の支え合い活動の組織化機能 (9)個別問題の一般化機能 (10)地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11)地域福祉計画づくり 機能							
I 組織											
	✓	No	機 能	(1)知識	(1)知識の習得 方法	✓	No	機 能	(2)行動	(2)行動の 実施方法	

目標達成のための 具体的活動	☐	1	10 ・ 11	赤い羽根共同募 金を理解する (仕組み、目的、 使われ方、事業)	1. 説明会に参加す る。 2. 社会福祉法第 112 条～第 124 条「共同 募金」を確認す る。	☐	1	1・ 4・ 6・ 10 ・ 11	企画総務課の職 員の顔を覚える	1. 組織図や座席 表を印刷 名刺交換会の 2. 参加
	☐	2	4	社会福祉センタ ー内会議室の予 約方法を知る	1. 上司、先輩に聞 く。	☐	2	1 ～ 9	CSW 職員との 関係構築	1. ランチ会に参 加する
	☐	3	1・ 4・ 6・ 10 ・ 11	他校区の事務所 の場所を把握す る	1. 地図を見る。	☐	3	1 ～ 9	上司との信頼関 係構築	1. ランチ会に参 加する
	☐	4	1・ 4・ 6・ 10 ・ 11	他部署（たんぽ ぽ、てだこ未来） の場所を把握す る	1. 地図を見る。					

4 か月～6 か月 目標				社協および CSW の役割を理解する							
コミュニティ ソーシャルワ ークの機能				(1) ニーズキャッチ機能 (2) 家族全体を視野に入れた相談支援機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支え合い活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づく り機能							
Ⅱ 地域											
✓	No	機能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No	機能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法		

目標達成のための 具体的活動	☐	1	1,2 , 3,4 , 5,6 , 7,9	民生委員の担当 地区を知る。	1. 民生委員担当区 域一覧を見る。	☐	1	1 9	校区内ペアで 相談対応でき るようになる。	1.実際に相談対 応をしてみ る。
	☐	2	1,2 , 3,4 , 5,6 , 7,9	民生委員の役割 を理解する。	1.民生委員法・児 童福祉法を読 む。 2. 研修会に参加す る。	☐	2	1 9	地域福祉協力 員の役割、顔、 名前を覚える。	1. 担当校区の地 域福祉協力員 に会いに行 く。
	☐	3	1,2 , 3,4 , 5,6 , 7,9	地域福祉協力員 の役割、顔、名前 を覚える。	1.「地域福祉協力 員の運用に関す る要綱」を読む。 2.「あなたの街の 地域福祉協力 員」を読む。	☐	3	1 9	自治会内の組 織（老人会・ 婦人会・青年 会）を知る。	1. 自治会長に聞 く。
	☐	4	1,2 , 3,4 , 5,6 , 7,9	自治会内の組織 （老人会・婦人 会・青年会）を知 る。	1.各自治会の役員 名簿、組織図を もらう 2.「うらそえの ボランティア・ 福祉教育活動 の記録きりん」 を見る。	☐	4	1 9	自治会の主な 行事を知る。	1. できる範囲 で自治会の 夏祭りなど の行事を見 に行く。

4 か月～6 か月 目標	社協および CSW の役割を理解する									
コミュニティ ソーシャルワー クの機能	(1) ニーズキャッチ機能 (2) 家族全体を視野に入れた相談支援機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支え合い活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づく り機能									
Ⅱ 地域										
✓	No.	機 能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No.	機 能	(2) 行動	(2) 行動 の 実施方 法	

目標達成のための 具体的活動	☐	5	1,2, 3,4, 5,6, 7,9	自治会の主な行事を知る。	1. 「うらそえのボランティア・福祉教育活動の記録きりん」を見る。	☐	5	1 ” 9	校区内でケース会議の必要性を検討できる。	1. ケース会議の必要性を書き出す。
	☐	6	1,2, 3,4, 5,6, 7,9	地域の各会議の目的（行政区コミュ・中学校区コミュ・包括連携会議・民協定例会・地域福祉協力員定例会）を知る。	1. 行政区コミュニティづくり推進委員会設置要綱」を見る。 「中学校区コミュニティづくり推進委員会設置要綱」を見る。 「浦添市民生委員・児童委員連絡協議会設置要綱」を見る。	☐	6	1 ” 9	自治会の歴史、これまでの取り組みを知る。	1. 自治会長にインタビューする。

4 カ月～6 カ月 目標			社協および CSW の役割を理解する					
コミュニティ ソーシャルワー クの機能			(1) ニーズキャッチ機能 (2) 家族全体を視野に入れた相談支援機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支え合い活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり 機能					
Ⅱ 地域								
✓	No	機 能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No	機 能	(2) 行動 (2) 行動の 実施方法

目標達成のための 具体的活動	☐	7	1,2,3,4,5,6,7,9 行政や担当区内の 包括や相談支援事 業所等の関係機 関・部署の名称や 役割を理解する。 (顔・名前・役割)	1. 「浦添市保健福 祉の概要」(福祉 保健部作成) を 見る 2. 『てだこゆいぐ くるプラン』の 「主な相談 窓口 P.118」を 見る。	☐	7	1 "9	校区内災害 時登録者を 知る。	1. 登録者宅 を訪問す る。
	☐	8	1,2,3,4,5,6,7,9 自治会の歴史、こ れまでの取り組 みを知る。	1. 担当区内の 自治会の資料(チラシ) を見る。	☐	8	1 "9	中学校区コ ミュニティ づくり推進 委員会の目 的を理解す る。	1. 先輩 CSW のサポー トを受け て資料を 作成する。
	☐	9	1,2,3,4,5,6,7,9 校区内災害時登 録者を知る。	1. 「市町村防 災計画」を見 る。 2. 「災害時要 援護者支援 制度」を見 る。 3. 登録者宅を 訪問する。	☐	9	1 "9	民協(民生委 員)と自治会 の関係性を 知る。	1. 民生委員・ 自治会長 に話を聞 く。

4 カ月～6 カ月 目標				社協および CSW の役割を理解する							
コミュニティ ソーシャルワーク の機能				(1) ニーズキャッチ機能 (2) 家族全体を視野に入れた相談支援機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支え合い活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり機能							
✓	No	機能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No	機能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法		
□	10	1,2, 3,4, 5,6, 7,9	行政区コミュニティづくり推進委員会の目的を理解する。	1. 「行政区コミュニティづくり推進委員会設置要項」を見る。 2. 地域福祉計画を見る。							
□	11	1,2, 3,4, 5,6, 7,9	中学校区コミュニティづくり推進委員会の目的を理解する。	1. 「中学校区コミュニティづくり推進委員会設置要綱」を見る。 地域福祉計画を見る。 2. 3. 過去の推進委員会の資料を見る。							
□	12	1,2, 3,4, 5,6, 7,9	民協（民生委員）と社協の関係性を知る。	1. 民児協と社協の関係性を説明した資料を見る。 2. 活動記録を見る。							

4 カ月～6 カ月 目標				社協およびCSW の役割を理解する						
コミュニティ ソーシャルワー クの機能				(1) ニーズキャッチ機能 (2) 家族全体を視野に入れた相談支援機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支え合い活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり機能						
Ⅱ 地域										
	✓	No.	機能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No.	機能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法
	□	13	1,2, 3,4, 5,6, 7,9	自治会と社協の 関係性を知る。	1. 自治会と社協の 関係性を説明し た資料を見る 活 動 記 録 を 見 2. る。					
	□	14	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9	民協(民生委員) と自治会の関係 性を知る。	1. 民協(民生委員) と自治会の関 係性を説明し た 資 料 を 見 る。					

7ヶ月～9ヶ月 目標		実践に結びつけて法の根拠および歴史を理解する									
コミュニティ ソーシャルワー クの機能		(1) ニーズキャッチ機能 (2) 家族全体を視野に入れた相談支援機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支え合い活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり機能									
I 組織											
✓	No.	機能	(1) 知識	(1) 知識の習得 方法	✓	No.	機能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法		

目標達成のための具体的活動								事務担当職員に協力することができる ☐ 共同募金 ☐ たんぽぽ ☐ 総務 ☐ 遊友 ☐ てだこ未来 ☐ リフトバス ☐ りんどう ☐ 生活福祉資金 ☐ ボランティア センター	1. 担当部署・職員が何をしているのかを職員と共に行動してつかむ。
---------------	--	--	--	--	--	--	--	--	-----------------------------------

7ヶ月～9ヶ月 目標				実践に結びつけて、法の根拠および歴史を理解する							
コミュニティ ソーシャルワー クの機能				(1) ニーズキャッチ機能 (2) 家族全体を視野に入れた相談支援機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支え合い活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり機能							
II 地域											
✓	No	機能	(1) 知識	(1) 知識の習 得方法	✓	No	機能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法		

目標達成のための具体的活動	☐	1	1～11	地域(行政区)の違いを把握する。	1. 統計から読み取る。 2. コミュニティづくり推進委員会 3. 個別相談	☐	1	1～11	地域(行政区)の違いを把握する。 (ヒト・モノ・雰囲気・強みなど)	1. 地域住民との日常会話 2. 地域住民からの相談などから地域に対する思いを意図的に聞かせてもらう。 地域に出向いて人の動き、物理的環境から把握する
						☐	2	1～11	多機関と連携して支援に取り組むことができる。	1. 先輩 CSW の相談の仕方を見て学ぶ。CSW 間 2. で事例検討をする。 多機関との事例検討の機会を積極的につくる。
						☐	3	1～11	主担当として関わるができる地域(行政区)を複数箇所つくる。	1. 行政区コミュニティづくり推進委員会の進行之をしてみる。

10 ～12 ヶ月 目標		「こういう地域だったらいいな」という自分なりの地域の姿を描いて活動している。 住民の話を丁寧聴いて相談対応ができる。							
コミュニティ ソーシャルワー クの機能		(1) ニーズキャッチ機能 (2) 家族全体を視野に入れた相談支援機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支え合い活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり機能							
I 組織									
✓	No.	機能	(1) 知識	(1) 知識の習 得方法	✓	No .	機能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法

目標達成のための 具体的活動	☐	1	1 ～ 11	CSW の役割 について理解 している。(ソ ーシャルワー ク機能の理解 を含む)	1. 1 ヶ月から 9 ヶ月まで の研修内容 からつかむ。	☐	1	1 ～ 11	CSW の役割 について説明 できる。(ソー シャルワーク 機能を含む)	1. 課内の事例検討 会の意見交換を 通して CSW の役割を理解す る。
						☐	2	1 ～ 11	地域特性(強み 等)について自 分の言葉で説 明することができる。	1. 収集した情報 を整理してま とめる。
						☐	3	1 ～ 11	地域支援につ いて自分の言 葉で説明する ことができる。	1. 業務を通して 自分で考えて みる。 2. 先輩 CSW と 意見交換した り助言を受け る。 3. 地域の人たち の考えとすり 合わせをする 。

10 ヶ月～12 ヶ月 目標	「こういう地域だったらいいな」という自分なりの地域の姿を描いて活動している。住民の話を丁寧 に聴いて相談対応ができる									
コミュニティ ソーシャルワー クの機能	(1) ニーズキャッチ機能 (2) 家族全体を視野に入れた相談支援機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支え合い活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり機能									
Ⅱ 地域										
✓	No.	機能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No.	機能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法	

目標達成のための具体的活動						☐	1	1 ～ 11	CSW がもっている地域の課題と住民が感じている課題をもとに取り組む内容の優先順位を決める。	1. 地域の人々の思いやモチベーションを大事にして目標を設定することから取り組む。 (地域、CSW 共に無理をしない)
						☐	2	1 ～ 11	決めた優先順位に沿って地域の課題に取り組む。	1. これまでの研修で修得した内容をもとにすることから取り組む。 (地域、CSW 共に無理をしない)
						☐	3	1 ～ 11	地域の人たちが目標設定し取り組むことができるために CSW には多様な役割があることを理解する。	1. これまでの研修で習得した内容を整理してまとめる。
						☐	4	1 ～ 11	相談対応ができる。	1. 実践する。

10 ヶ月～12 ヶ月 目標				「こういう地域だったらいいな」という自分なりの地域の姿を描いて活動している。住民の話を丁寧に聴いて相談対応ができる							
コミュニティ ソーシャルワー クの機能				(1) ニーズキャッチ機能 (2) 家族全体を視野に入れた相談支援機能 (3) ケア方針立案機能 (4) コーディネート機能 (5) 対人援助機能 (6) インフォーマルケア (7) 新しい福祉サービス開発機能 (8) 当事者同士の支え合い活動の組織化機能 (9) 個別問題の一般化機能 (10) 地域福祉行政に関するアドミニストレーション機能 (11) 地域福祉計画づくり機能							
Ⅱ 地域											
	✓	No.	機能	(1) 知識	(1) 知識の 習得方法	✓	No.	機能	(2) 行動	(2) 行動の 実施方法	

目標達成のための 具体的活動						□	5		地域福祉協力員 とディスカッション ができる。	1. 地域福祉協 力員と頻 回に話を する機会 をつくる。
								1 ～ 11		

2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	沖縄県における障がい者スポーツ振興に関する研究
代表者名	中山健二郎
分野／対象地域	障がい者スポーツ
研究期間	開始 2021 年 4 月 ～ 終了 2024 年 3 月 (1 年目／ 3 年間)
研究成果要約	本研究は、沖縄県における障がい者のスポーツ実施に関する実態と課題を分析し、地域の障がい者スポーツ振興に寄与する方策を検討することを目的とする。初年度は、県内の障がい当事者を対象にスポーツ実施状況に関するアンケート調査を行い、スポーツ実施率や期待される支援等の傾向を抽出した。この結果を踏まえ、2 年目以降は、障がい種別の状況に関するより詳細な分析や、把握された課題に対応する施策の検討などを行う予定である。
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名、 特別研究員 1 名、 計 3 名
研究成果	1. 背景 県が策定した「沖縄県スポーツ推進計画」ならびに「沖縄県障害福祉計画（第 5 期）」では、県内における障がい者スポーツ振興の重要性が謳われているが、障がい者のスポーツ実施状況を明らかにする調査・研究等これまでみられていない。この課題を踏まえ、県内の障がい者におけるスポーツ実施頻度や必要な支援等を明らかにし、スポーツ振興に関する有効な施策を検討するための基礎的知見を整理することを目的とし、下記の調査を実施した。 2. 調査概要 県内の障がい当事者 700 名に対しアンケート調査を実施した。主な質問項目は、「基本的属性」「スポーツ実施率」「期待する支援」「コロナ禍の影響」「スポーツの価値」「運動不足意識」「スポーツ活動に対する態度」などである。郵送法により配布・回収し、232 部の有効回答を得た（回収率 33.1%）。調査にあたっては「沖縄大学人を対象とする研究倫理審査」の承認を得て実施した。 3. 結果の概要 本調査で得られた沖縄県における障がい当事者の週 1 回スポーツ実施率は 61.7%であった。この結果は、2021 年度の全国平均（30.4%）を大きく上回っている。ただし、70.3%が「運動不足を感じている」、69.9%が「現状のスポーツ活動に満足していない」などの結果も得られた。このことから、たとえ実施率が高くても、「やりたいことをやりたいようにできる環境であるのか」という点を注視し、スポーツ教室等の内容や質を高める重要性が示唆された。属性別にみると、特に入所型の福祉サービス利用者は、通所型のサービス利用者比べ、スポーツ実施率が二極化傾向にあり、「やりたいけどできない」と感じている人の割合が多い傾向にあることが示された。 また、他県の調査等と比較した県内の特徴について、必要な支援として「適切な指導者」「一緒に行う仲間」などの人的資源にニーズが多い傾向、種目として「ボッチャ」が多く行われている傾向などが看取された。 4. 残された課題 調査用紙の配布を福祉協会等に委託し、手の届く範囲で郵送法により実施したため、サンプル抽出の妥当性には課題が残る。より信頼性の高いデータを得るためには、行政と連携し手帳のデータを基に全数調査を行うなどが望ましい。また、データでは把握しきれないミクロなスポーツ課題や困難性について、質的調査によって分析していくことも重要である。
研究成果の発表実績	1. 第 582 回土曜教養講座 2022 年 3 月 26 日に開催された上記講座にて、「沖縄県における障がい者スポーツの現在と未来」と題し、当該研究の成果発表、および地域で活動する障がい者スポーツ関連団体の方々との討論を行った。討論においては、主に「学校期から就労期に至る過程でのスポーツ活動との出会い方」「指導者教育の重要性」「競技団体の資金造成」「県障がい者スポーツ協会のビジョン」「行政と連携したより信頼性の高い調査の必要性」「スポーツ実施率のみでなく当事者の満足につながる活動の質向上」などの点が議論された。 2. 地域研究所紀要『地域研究』への投稿（予定） 当該研究で行われたアンケート調査の詳細な分析結果は、2022 年 10 月に発

	行される地域研究所紀要『地域研究』への投稿を予定している。
研究成果の 発表実績	1. 第 582 回土曜教養講座 2022 年 3 月 26 日に開催された上記講座にて、「沖縄県における障がい者スポーツの現在と未来」と題し、当該研究の成果発表、および地域で活動する障がい者スポーツ関連団体の方々との討論を行った。討論においては、主に「学校期から就労期に至る過程でのスポーツ活動との出会い方」「指導者教育の重要性」「競技団体の資金造成」「県障がい者スポーツ協会のビジョン」「行政と連携したより信頼性の高い調査の必要性」「スポーツ実施率のみでなく当事者の満足につながる活動の質向上」などの点が議論された。 2. 地域研究所紀要『地域研究』への投稿（予定） 当該研究で行われたアンケート調査の詳細な分析結果は、2022 年 10 月に発行される地域研究所紀要『地域研究』への投稿を予定している。

2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	沖縄文学と社会科学(法律学・社会学)の交錯にかかわる総合的研究
代表者名	春田吉備彦
分野／対象地域	文学、文学評論、労働社会学、法律学
研究期間	開始 2021 年 5 月 ～ 終了 2024 年 3 月 (1 年目／3 年間)
研究成果要約	本研究班では、①戦後沖縄文学上の文献上の基礎的共通理解を涵養し、②文学の視点から解析する、③社会科学の視点から解析する、④同一の素材を両者の視点からとらえ直すという作業を行っている。学際的研究を通じて、多様な文学作品を再検証することで、各学問領域の今後の議論に向けたプラットフォームを構築してことを目指している。試行錯誤の 1 年目の研究となったが、多角的視点から土曜教養講座やシンポジウムなどを複数回開催する等、一定の成果を出しているところである。
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名、 特別研究員 3 名、 計 5 名
研究成果	シンポジウム実績 作家・大城立裕の一周忌を機に、2021 年 10 月 24 日に県立博物館・美術館で開催された「大城立裕追悼記念シンポジウム」にて崎浜慎がパネリスト参加。以下の内容で研究成果を報告した。 大城立裕は 1967 年に「カクテル・パーティー」で芥川賞を受賞して以降、沖縄文学を牽引してきた作家である。大城の育った時代背景を見ていくと、幼年期から少年期にかけては、日本語と自らの言葉（シマクトゥバ）の間で揺れ動く、「バイリンガル」的な時期にあたる。大城が学生時代を送った上海は租界（外国人居留地）であり、東亜同文書院は中国語を主として使用していた大学である。そこで他者と交流するためには、何よりも他言語や母国語（日本語）の使用による複雑な操作が必要だったにちがいない。 代表作「カクテル・パーティー」は、1960 年代の米軍統治下の沖縄が舞台で、米国から被害を受ける沖縄は、日中戦争では中国に対して加害者でもあったという複雑な構図を描いている。基地内で行われる社交パーティーでは、中国・日本・米国・沖縄による国際交流の場として多言語が頻繁に交わされる。複数の言語が遭遇することによって生じる葛藤を描くなど、大城は多言語が交錯する事件の場に意識的である。「法」やアイデンティティや文化の問題を描いた「カクテル・パーティー」は、「米軍基地」という「場」を舞台にしながらも、当時の沖縄の実相を象徴的に反映しているといえる。 なお、このシンポジウムの内容は 2022 年 4 月に『大城立裕追悼論集』（インパクト出版会）として発刊予定。崎浜慎が編集委員として関わっている。 研究会テーマのうち、いくつかのものを例示する。 第 3 回研究会 2021 年 7 月 28 日 大城立裕『カクテル・パーティー』を研究テーマに、米軍統治下の沖縄における法を検討した。軍政の時代（沖縄諮詢会と沖縄民政府）から USCAR と琉球政府の時代へと向かうなかで、琉球政府の統治構造（立法院・行政主席・裁判所等）の複雑な形態を見ていった。また沖縄の主権の問題について意見を交わした。意見として、この小説からは「新たな共同体の可能性」が見えるのではないかと、いうものがあつた。沖縄がある種、法の外に置かれた状況であるということにこそ、逆説的に「開けた」空間が生まれるのではないかと。例として、中国・日本・米国・沖縄による国際交流の場＝カクテル・パーティー。上海との比較が挙げられる。 第 7 回研究会 2022 年 1 月 26 日 目取真俊「平和通りと名付けられた街を歩いて」を研究テーマに、以下の論点について研究会メンバーで意見を交換した。①不敬罪と表現の自由②権力一。どこまで天皇を批判的に描けるのかについて、深沢七郎「風流夢譚」とそれに関わる右翼テロ事件を検証。また、天皇を頂点とした権力機構（警察機構→民衆（パレードへの参加、献血））のしくみを見ていった。その権力に抗う力として、子供と老婆の抵抗の表象を検討した。 土曜教養講座開催実績 第 579 回沖縄大学土曜教養講座「共生社会をめざして コロナ禍における外国

	人の法政策」を実施した。 第 581 回沖縄大学土曜教養講座「米軍基地と基地労働者」を実施した。
研究成果の 発表実績	以下のものは、春田吉備彦のものである。 ・「契約社員の正社員登用にかかわる面談とうつ病発症・休職の業務起因性」『労働法学研究会報』第 2742 号(労働開発研究会、2021 年 6 月)12 頁～17 頁。 ・「高年法と継続雇用後の中高年の労働条件」『Leadership Development Note』2021 年 7 月(キャリアクリエイツ、2021 年 7 月)16 頁～17 頁。 ・「最近の精神障害労災事案における『生存事案』裁判例の動向について」『労働法学研究会会報』第 2744 号(労働開発研究会、2021 年 7 月)4 頁～13 頁。 ・「米軍基地の中の日本の飛び地で生活する日本国民(神奈川県民)(横浜市民)と国の損害賠償―根岸住宅地区三裁判例と米軍の排他的管理権に関する一考察」『賃金と社会保障』第 1781 号(旬報社、2021 年 7 月)5 頁～14 頁。 ・和田肇編著『コロナ禍に立ち向かう働き方と法』(日本評論社、2018 年)(書評)『労働と経済』第 1664 号(労働開発研究会、2021 年 7 月)44 頁～47 頁。 ・「シフト労働者のシフトカットにかかわる最近の二裁判例と民法 536 条 2 項と労基法 26 条の解釈について」『労働法学研究会報』第 2742 号(労働開発研究会、2021 年 9 月)4 頁～13 頁。 ・「建設作業に従事する一人親方等の石綿関連疾患被害につき、安衛法上の規制権限不行使の国家賠償責任を肯定した事例」『TKC ローライブラリー新・判例解説 Watch 労働法 No.113 Web 版』(日本評論社、2021 年 9 月)1 頁～4 頁。 ・春田吉備彦＋全駐労中央本部編『基地労働者から見た、日本の「戦後」と「災後」と「今後」』(労働開発研究会、2021 年 9 月)序章「災害列島日本と『BCP』と『戦争災害』?」(10 頁～20 頁)、第一章第二節「基地労働と間接雇用の出発点」(38 頁～50 頁)、第二章「米軍統治下の沖縄から見た軍労働」(89 頁～112 頁)、終章「主権侵犯のゆくえ」(217 頁～225 頁)、「あとがき」(226 頁～231 頁)を執筆。 ・「労働者派遣法 40 条の 6 の定める「労働契約申込みみなし」の状態は認められるものの、「申込期間」を徒過したため、労働者の承諾は認められないとされた事例の検討」『沖縄大学経法商学部紀要』第 3 巻(沖縄大学経法商学部、2021 年 9 月)73 頁～84 頁。 ・「偽装請負と発注者との労働契約の成否―日本貨物検数協会(日興サービス)事件」『労働と経済』第 1668 号(労働開発研究会、2021 年 11 月)2 頁～8 頁。 ・「私傷病休職期間中の地方公務員に対する産業医面談の不実施と地方公務員の安全配慮義務」『労働と経済』第 1669 号(労働開発研究会、2021 年 12 月)2 頁～9 頁。 ・「三者間関係である派遣労働者と駐留軍等労働者にかかわる懲戒処分手続きの比較検討」『労働法学研究会会報』第 2756 号(労働開発研究会、2022 年 1 月)4 頁～12 頁。 ・「組合内少数派の活動と労働組合の行為―北辰電機製作所事件」村中孝史・荒木尚志編『労働判例百選[第 10 版]』(有斐閣、2022 年 1 月)206 頁～207 頁。 ・「組織変更時の労働組合による除名処分に係る労働組合代表者の損害賠償責任と組合財産の帰属」『法律時報』第 1173 号(日本評論社、2022 年 2 月)143 頁～146 頁。 ・「内灘闘争―あらためて、戦後日本の反米基地運動の原点を振り返る」『労働と経済』第 1671 号(労働開発研究会、2022 年 2 月)2 頁～7 頁。 ・「団交時の組合員の言動および社労士批判 SNS 投稿等に対する社労士からの名誉棄損を理由とする損害賠償請求 首都圏青年ユニオン執行委員長ほか事件・東京地判令和 2. 11. 13 労判 64 頁」『労働法学研究会会報』第 2760 号(労働開発研究会、2022 年 3 月)8 頁～13 頁。

2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	沖縄における自然災害・戦争災害等の多様な災害の総合的研究
代表者名	圓田浩二
分野／対象地域	社会学、労働法、社会保障法、防災学
研究期間	開始 2019 年 4 月 ～ 終了 2022 年 3 月 (3 年目／ 3 年間)
研究成果要約	2021 年度は、これまでの共同研究班の研究成果を踏まえて、12 月 4 日(土)の 14 時～17 時に、第 580 回土曜教養講座「アフターコロナと自然災害」についてのシンポジウムを行った。また、2016 年の起こった熊本大震災の事後調査のため、熊本県益城町でフィールドワークを行い、町役場職員 1 人と被災者 2 人にインタビューを行った。この研究成果は、2022 年度の地域研究所紀要に掲載する予定である。さらに、研究業績として、『沖縄大学経法商学部紀要』、『白門』、『労働と経済』等の雑誌において多数公刊することができた。
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名、 特別研究員 3 名、 計 5 名
研究成果	1. 第 580 回土曜教養講座「アフターコロナと自然災害」 稲垣暁(防災士)「コロナ禍における沖縄の避難所検証と『防災うみやま連携』」、谷口友一(沖縄大学経法商学部専任講師)「企業の有事に備える平時からの取り組み—企業の BCP (事業継続計画) 策定のススメ」、山田克宏(秋田看護福祉大学助教)「災害時の施設・地域における災害時要援護者(避難行動要支援者)に対する支援～BCP(災害時対応事業継続計画)からの視座～」、河合壘(岩手大学人文社会学部准教授)「自然災害と使用者の安全配慮義務」、以上 4 つの研究報告を行った。 今後のポストコロナの沖縄社会・日本社会でも、台風・豪雨、大津波、地震等の自然災害が発生することは必定である。災害は、複合的に起こり得るリスクであるが、防災・減災に対する行政・地域住民の取り組みや意識は希薄である。防災・減災対策としては、災前の日常的な備えの拡充、災害直撃時の地域住民の救出・救護・避難に対する管理の仕組、災害復興時の円滑な復興・生活支援、起業の BCP といった方策の構築が必要である。 2. 熊本県益城町でのフィールドワークとインタビュー調査 熊本県益城町は、2016 年 4 月 16 日に、大震災に見舞われた。震度 7 の地震が 2 回襲い、壊滅的な被害を受けた。震災から 5 年、益城町の復興について、フィールドワークとインタビュー調査を行った。 2021 年 10 月 22 日に、益城町役場の園田さんと木山地区(最も被害の大きかった地域)の津田さんと、お目にかかって、資料に基づきながら、当時の状況やそれからの復興について話を聞きながら、適宜質問を行った。約 2 時間のインタビュー調査であった。2021 年 10 月 22 日は、津田さんに、写真や資料に基づきながら、木山地区を歩きながら、当時の状況と復興施策について、説明を受けた。復興はまだ道半ばという感じだった。また、木山食堂を訪れ、被災者でありながらも地域住民のために食事を提供する経営者の岩崎さんに、食堂の役割と地域の人々の震災後の生活について話をうかがった。被災者側の住民も一枚岩でなく、資産や被害程度で温度差があることがわかった。 この研究成果は、2022 年度の地域研究所紀要に掲載する予定である。 3. 今年度も、上述の土曜教養講座を開催しただけではなく「研究成果の発表実績」欄に記載した如く、本研究班にかかわる多数の業績を発出できた。この点は、本研究班が、沖縄だけではなく、東北在住の研究所員と遠隔会議等を通じて情報交換を重ねたことが大きかった。コロナ禍が物理的移動を制約したことが、本研究班としては、プラスに働いたと評価できようか。
研究成果の発表実績	1. シンポジウム第 580 回土曜教養講座「アフターコロナと自然災害」(2021 年 12 月 4 日) 2. 春田吉備彦「最近の精神障害労災事案における『生存事案』裁判例の動向について」『労働法学会研究会会報』第 2744 号(労働開発研究会)(4 頁～13 頁)

	3. 春田吉備彦・和田肇編著『コロナ禍に立ち向かう働き方と法』（日本評論社、2018年）『労働と経済』第1664号（労働開発研究会）（44頁～47頁） 4. 春田吉備彦「私傷病休職期間中の地方公務員に対する産業医面談の不実施と地方公務員の安全配慮義務」『労働と経済』第1669号（労働開発研究会）（2頁～9頁） 5. 河合壘「大規模自然災害と自治体職員の労働環境に関する調査（1）」『沖縄大学経済法学部紀要』第2号（43頁～53頁） 6. 河合壘「大規模自然災害と使用者の安全配慮義務」『白門』849号（70頁～75頁）。 7. 藤井怜「東日本大震災を契機とした解雇・雇止めについての法的規制」『沖縄大学経済法学部紀要』第2号（55頁～69頁）
--	---

2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	離島地域における大学の関わる授業実践の創出と実践、及び地域拠点の運営の在り方について
代表者名	盛口満
分野／対象地域	石垣島白保集落
研究期間	開始 2022 年 4 月 ～ 終了 2026 年 3 月 （1 年目／ 3 年間）
研究成果要約	今年度は、しらほこどもクラブと沖縄大学の教員養成過程の学生をオンラインでつなぎ、さらに数人のスタッフが現地へと赴くハイブリッド型の体験交流「やまんぐうキャンプ」を実施した。コロナ禍で直接的な交流が難しくなり、当初予定を大幅に変更することとなったが、結果的には離島での新しい環境教育の展開を見出せることとなった。
研究組織	（研究代表者及び研究分担者）所員 2 名、 特別研究員 1 名、 計 3 名
研究成果	別紙添付 ① 研究成果 ② 「Covid-19 パンデミック下における WWF サンゴ礁保護研究センター（しらほサンゴ村）における環境教育の実践」 盛口 満 ③ 募集チラシ
研究成果の 発表実績	「Covid-19 パンデミック下における WWF サンゴ礁保護研究センター（しらほサンゴ村）における環境教育の実践」 盛口 満

背景 ～「しらほサンゴ村」のWWFから白保公民館への移譲～

「しらほサンゴ村」は2000年春、石垣島白保の貴重なサンゴ礁を保全するためにWWFジャパン（世界自然保護基金）により、白保集落内に設置された。以後20年間、白保を中心とするサンゴ礁の保全調査活動を実施してきたが、2021年3月、白保公民館に移譲された。盛口班では2011年から10年間しらほサンゴ村を拠点にWWFジャパン、NPO夏花との協働事業として、白保集落のこども達への自然教育・環境教育活動の実践を行ってきた。2021年3月の移譲後も、しらほサンゴ村を運営予定のNPO夏花（公民館より委託運営の予定）の意向でこれまでと同様、教育活動の実践に関わるることとなっている。

しらほサンゴ村の白保公民館の移譲に当たっては、未確定な部分も多く、2021年度は、盛口班においてもどのようにしらほサンゴ村を運営・活動していくかについて一緒に考え、参加型のワークショップを実践する予定であった。しかし、コロナによる緊急事態宣言のため、現地でのワークショップの実施が難しくなり、電話やメールにおいて今後の指針の参考となる事例についてなど紹介するにとどまることとなった。

研究の目的

離島における教育の実践例を作り上げるとともに、離島の子どもたちへの教育実践を経験することで大学生の教育力の拡充がどのようになされるかを引き続き調査・研究する。

1. 授業の実践

- ①研究班において、これまでの石垣島（しらほサンゴ村、海星小学校）における授業実践を振り返り、各主体（NPO夏花、海星小学校）との今後の協働について在り方を考える。
- ②授業実践においては、これまでと同様、こども文化学科の学生が授業内容を作成し、模擬授業を経て、授業内容を改善した後、実践の場として石垣島で授業を行う。さらに、離島で展開した授業を応用し、沖縄本島での授業展開を行う（昨年同様コロナの影響もあり、授業や離島への移動制限も考えられたため、本島内の学校の授業に振り返るなど臨機応変に対応する）。
- ③これらの過程（準備―実践―振り返り）において、大学のない離島地域においてどのような大学の教育的関わりが必要とされ、かつ効果的であるかを検証する。

2. しらほサンゴ村の運営に関わるワークショップ

2021年3月にWWFジャパンから白保公民館に移譲されたしらほサンゴ村の今後の活動、運営について、NPO夏花、地域のみなさんとともに他の事例を参考にしながら考えていく。

*ワークショップについては、緊急事態とコロナ感染予防のため実施は取りやめとなった。

実施概要

1.NPO夏花との打ち合わせ

2.沖縄大学こども文化学科ゼミにおける授業内容の検討と作成（7月-11月）

研究班メンバーによる指導で、しらほサンゴ村及び海星小学校における授業の内容計画を立て、実践の準備を行う。

3.しらほこどもクラブやまんぐうキャンプの開催（12月）

しらほさんご村にて、WWFジャパン、NPO夏花の協働の下、環境教育と地域文化の体験をテーマにしたハイブリッド授業を行う。

4.沖縄本島内小学校における授業の実施

5.NPO夏花との今後の協力体制についての打ち合わせ（2月）

実施成果 教育面)

昨今、教育現場では、先生たちの負担が大きくなりなかなか教科外の授業ができない現状がある。また、こうした特別授業には予算がつくこともなく、外からの持ち込み授業が唯一の機会となっている学校現場も多い。コロナの影響下、各地で授業の遅延や中断あり、教育の在り方そのものについて考える局面も迎えている。

一方、大学では教員養成の学生はいるものの、授業の実践は教育実習に限られていることも多い。こうした背景から、教育実習とは異なる現場で授業を実践し、その成果を他の学生とわかちあうことは、学生にとって貴重な機会となり、授業を受ける子供達にとっても新しい出会いの場となる。特に大学のない離島地域において大学と地域の教育現場が結びつくことで、新しい形の教育の機会の提供の場が創出できる。

今年度においては、長期に渡る緊急事態宣言を鑑みの「一部対面」と「オンライン」のハイブリッド型「やまぐうキャンプ」(＝しらほこどもクラブサマーキャンプ)を実施することとなった。その理由として以下が挙げられる。

- ・「やまぐうキャンプ」は、しらほこどものメインイベントとなっているため、できれば続けて欲しいとのリクエストが現地より寄せられる。

- ・盛口ゼミでは、対面型授業をこれまでメインとしてきたが、今後もコロナ禍の状況や他の自由でオンライン授業が学校で実施されることになることを考慮すると、教員養成過程においてオンライン授業の構想・準備・実践を行うことは、今後、教育現場で役立つことにつながる。

こうした経緯を経て、当初とは大幅に内容を変更し、対面とオンラインツールを取り入れたハイブリッド型の「やまぐうキャンプ」を実施した。

詳細については、別紙にまとめた。

「Covid-19パンデミック下におけるWWFサンゴ礁保護研究センター(しらほサンゴ村)における環境教育の実践」 盛口 満

地域づくり)

観光庁は「住んでよし訪れて良しの国づくり」を理念に観光を進めてきたが、依然として着地型と言える観光は多くはない。白保ではこうした現状も踏まえ、自然環境の保全を念頭におきながら、地域活動に基点をおいた日曜市や集落散策などの「小さな観光」を実施してきた。今後は、白保公民館のサンゴ村運営委員会、NPO夏花とともにサンゴ村を拠点とした「着地型の小さな観光」を実践していくこととなる。

地域づくりに関しては、夏花担当者、筑紫女学園大学担当者と電話と対面(那覇)による打ち合わせを実施し、しらほサンゴ村の課題と夏花の今後の関わり方について整理を行った。また2022年4月より、しらほサンゴ村の運営主体が、NPO夏花(白保公民館しらほサンゴ村委員会の委託を受けることとなる)と正式決定したため、2022年2月沖縄大学において、担当理事、担当者とともに今後の研究班との関わり方を含めた打ち合わせを行った。

まとめ

2020年、21年の2年間はコロナ禍の影響を受け、特に離島地域への移動制限がかかり、研究班においても様々な変更を余儀なくされた(20年は研究取り下げ)。しかし、コロナ禍でもできることが徐々にわかる中、オンライン会議、ハイブリッドと、これまであまり活用されてこなかったITネットワークを活かした新しい活動のあり方が見えてきた。

これまで盛口ゼミでは、実物標本を用いた体験型、対面型授業を実施してきたが、展開方法によって

は、あらかじめビデオツールを作成することで、よりわかりやすい授業を作ることも可能であることが今回わかった。NPO夏花からは、ハイブリッド型の「やまぐうキャンプ」の実施を経て、今後も年に1回の「やまぐうキャンプ」に限らず、オンラインを活用した授業や交流を継続的に実施してほしいとのリクエストも上がっている。

また、今年度は、小学生からやまぐうキャンプに参加していた少年が新入生として沖縄大学国際コミュニケーション学科に入学している。12月に実施されたやまぐうキャンプでは、現地スタッフとして一緒に活動していた方の息子が参加者としてキャンプに参加した。さらに、白保では、これまでのやまぐうキャンプの参加者が中心になり、地域作りに関わり初めている。

今年で11年目を迎えたしらほこどもクラブとの交流、およびやまぐうキャンプは、次世代へのバトンを渡す時期にかかってきている。今後は、NPO夏花スタッフ（白保生まれ白保育ちの若者2名が担当）と共に、これまでのノウハウと今後の大学との連携方法を一緒に考えながら、次世代の新しい実施方法を考え、実践していくことが次の大きな課題として見えてきた。

Covid-19 パンデミック下における WWF サンゴ礁保護研究センター (しらほサンゴ村) においての環境教育の実践

盛口 満

要約

沖縄大学盛口ゼミでは 2011 年より継続して、WWF サンゴ礁保護研究センター（しらほサンゴ村）において、地域の子どもたちを対象とした環境教育の実践を続けている。2020 年初春より世界各地に広がった Covid-19 パンデミック下において、遠隔と対面のハイブリッド型環境教育実践を行ったので報告をする。

キーワード：WWF 珊瑚サンゴ保護研究センター（しらほサンゴ村）、環境教育、Covid-19

はじめに

沖縄は日本の中でも固有の生態系を保持し、生物多様性の高い地域としても知られる。こうしたことから、2021 年には、沖縄島北部及び西表島が世界自然遺産に登録されたのは耳目に新しい。しかし、その一方、沖縄の自然の保全に関してはさまざまな問題が存在している。地球温暖化といった世界的な環境問題に加え、米軍基地の新建設、および米軍基地からの環境汚染物質の流出など、地域固有の問題がある。また、沖縄島中南部は急速に都市化が進み、かつての伝統的な人と自然の関係は忘れ去られつつあり、そこに暮らす若者、子どもたちは自然体験が圧倒的に不足している。

石垣島・白保はかつて空港建設問題で揺れた集落である。その白保集落前には豊かな珊瑚礁が広がっており、2000 年に WWF がサンゴ礁保護研究センター（愛称：しらほサンゴ村）を開設して今に至っている。なお、しらほサンゴ村は、「地域の自然を保全する主役は地域の人たちである」という方針の元、2001 年に WWF から白保公民館に委譲された。なお、このような方針は委譲に当たる以前から明示されており、委譲に先立ち、すでに 2012 年にはしらほサンゴ村内に NPO 夏花が設立され、地域の自然を保全する諸活動や村づくり活動を担ってきた（沖縄大学地域研究所 2015）。

沖縄大学人文学部こども文化学科・盛口ゼミは、2011 年より、しらほサンゴ村、および NPO 夏花と協働で白保の子どもたちへの環境教育活動の一端に関わってきた。こども文化学科は、2007 年に開設された、定員 50 名の学科である。こども文化学科の理念は「地域に根ざし、地域で活動できる、子どもに関わる人材を広く育成すること」となっている。こども文化学科の学生のほとんどは沖縄県内のしかも沖縄島中南部出身者であり、卒業後は県内の小学校教員になることをめざしている。一方、白保のある石垣島には大学がない。このようなこともあり、島の子どもたちの多くは、高校卒業後、島を後にする。地域の子どもたちが、ゆくゆく島に戻り、島の自然を保全してゆくようになるには、島を離れる以前に島の自然や文化を十分に体験、理解することが必要であるとの考えから、盛口ゼミへの環境教育実践への協力が依頼されたわけである。また、この環境教育実践は、県内で小学校教員をめざす学生にとっても、離島の自然を体験し、また子どもたちへの環境教育を実践してみる貴重な機会となっている。

2011 年以降、毎年 9 月の大学の夏季休暇期間の土日を利用して、白保で子どもたちとキャンプ（やまんぐうキャンプ）を実施してきた。このキャンプの日程の中で、刺し網漁の体験や、海遊びといった自然体験に加え、盛口ゼミの学生たちが島の自然・文化に関わる授業を 2～3 コマ実践するというのが恒例となっている。参加するのは、NPO 夏花が呼びかけ集めた、白保の小学校 4 年～中学 2 年生の子どもたちである。

ところが 2020 年初春より Covid-19 パンデミックが世界的に広がった。このため 2020 年度は、日程を設定し、学生たちによる授業案などもすべて準備したのだが、キャンプは中止せざるを得なくなった。2021 年度においても、沖縄県内は 5 月の連休明けより 9 月までという長期にわたり緊急事態宣言が発令されたままという厳しい状況が続いた。このため、当初 10 月に予定していたキャンプは中止となった。しかし、NPO 夏花と協議の結果、いざという場合は中止、または遠隔での実施も視野に入れ、12 月に再度の日程を設定して、プログラムを執り行うこととなった。本報告は、Covid-19 パンデミック下において、遠隔と対面のハイブリッド型による環境教育実践例の報告である。

1・実践報告一日程

2021 年度の盛ロゼミ（こども文化学科 3 年 8 名 沖縄島出身 5 名、宮古島出身 3 名）では、NPO 夏花と相談の元、9 月または 10 月の土日にやまぐうキャンプを行うという予定を立て準備を始めることにした。しかし、5 月以降の Covid-19 の蔓延状況から、9 月の実施をあきらめ、10 月の土日に日程を設定、その後、10 月も感染状況の明らかな改善が見込めないということで、さらなる延期を決定し、結局のところ 12 月 25 日土曜日、一日だけの日程で授業と交流の場を設けることとなった。

直前まで感染状況が読めないということもあり、いざとなった場合は遠隔での実施も見込む必要があった。また、感染状況が緩和されていた場合であっても、リスク軽減の面から、現地へ行く人数は最低限に絞ることとした。現実問題として、例年は大学からのゼミ旅行費を学生たちの旅費補助にあてていたが、Covid-19 パンデミック下ではゼミ旅行費の補助も中止されていたため、全員分の旅費の補助を見込めないということもあった。そのため、6 名が大学から遠隔での授業、交流を行い（遠隔班）、2 名の学生と著者が白保に行くこととした（対面班）。

当日の日程（1～5 のプログラムは午後 1 時～4 時の間に実施）は以下のようであり、この日程にあわせ、対面班は日帰りで石垣島と那覇を往復して主にワークショップを担当し、遠隔班は沖縄大学アネックス共創館から授業の配信をおこなった。

- 0・会場設営、接続テスト
- 1・ゼミおよびメンバー紹介（動画による紹介も含む）
- 2・授業とワークショップその 1
- 3・授業とワークショップその 2
- 4・交流（クリスマスにちなんだビンゴゲーム）
- 5・まとめ（感想発表）など
- 6・現地反省会

2・実践報告—授業とワークショップ

盛ロゼミ 3 年生に対しては 4 月の授業開始にあたり、これまでの白保での授業実践（沖縄大学地域研究所 2015、盛ロ 2018 など）について説明を行った。先に少しふれたように、こども文化学科の学生は沖縄島中南部出身者が多く、石垣島を訪れたことがない学生も少なくない。そのような学生が白保の子どもたちに、白保や石垣の自然や文化についての授業をするというのは、一見、困難なことのように思える。しかし、ゼミの中で「石垣島やサンゴ、海といったことをキーワードとして、自分なりに授業を考えるように」という課題を出すと、毎年、学生たちはそれぞれに個性的な授業案を提出する。むろん、そのままでは実践するのは難しいので、個々の学生の考えた授業案をゼミ内で検討し、2 つまたは 3 つの授業案にセレクトしなおして実践の場に望むのである。

この数年の授業実践例は以下のようになる。

- ・16 年度「サンゴの形」「海岸の砂を使った砂絵づくり」
- ・17 年度「サンゴの分類」「八重山の歴史」
- ・18 年度「台風」「サツマイモの歴史と郷土料理」「漂着物から楽器を作る」
- ・19 年度「虫とカニのからだ」「パイナップルの観察」「砂くらべと砂時計づくり」
- ・20 年度「食べられる野草」「紫外線と生き物」「石灰岩と水」

なお、20 年度は上記のようなテーマで授業案を作成したものの、Covid-19 のために実施できなかったものである。

上記授業案をみてわかるように、「砂絵づくり」や「楽器作り」のように、ワークショップを組み込んだプログラムが散見できる。テーマを見ただけではそれとわからない授業であっても、実物標本を見せたり、絵を描いてもらったり、実験を組み込んだりと、いずれも何らかの体験を含んだ授業となっている。これはキャンプのおりに行う授業なので、何より楽しんでもらいたいと思っているからである。また、参加する子どもたちは小学 4 年～中学 2 年と幅広い学年にまたがっているため、学年による知識差が生じない授業内容とするためという面もある。そして、「環境を学ぶ」という身構えなしに、自然と地域の自然や文化に興味を持つきっかけをつくってほしいという思いがあることが一番の理由である。

2021 年度においても、このような先行例の紹介をおこなったのち、各自に興味ある授業テーマの設定を課題としたところ「クラゲの一生」「天気」「貝」「バイオミネラルリゼーション」「チョウ

とガの違い」といった、様々なテーマが提出された。このテーマにそって、各自で考えた内容による模擬授業を発表し、その授業を盛口ゼミの4年生（前年度、白保の授業案を作成したメンバー）も含めて相互評価を行い、3つのテーマに絞った。結果は、「チョウとガ」「貝」「クラゲの一生」というものであり、このテーマに肉付けを行い実際の授業案を練り上げていくこととした。

ところが、当初予定していた、学生たち全員が参加した1泊2日のキャンプでの授業実践が不可能であることがはっきりし、半日のみ、しかも遠隔を中心とした授業実践をすることとなり、当初の授業案を大幅に変更することが余儀なくされた。また、遠隔の授業だけでは、子どもたちの満足度が下がることが予測され、遠隔授業に対面によるワークショップも組み込んだハイブリッド型の授業実践を試みることにした。

結果、作り上げた授業案は次のようなものである。

P・・・パワポを利用した遠隔授業

D・・・動画の配信

T・・・対面でのやりとり

W・・・ワークショップ

授業①「硬い生き物 柔らかい生き物」

- 1・動物の骨を見て何の動物かをあてる (T)
- 2・硬い「骨」を持つ動物はいろいろいる (P)
- 3・海の中には体の柔らかい動物もいる (P)
- 4・クラゲの赤ちゃんの姿を予想して絵に描く (W)
- 5・クラゲの一生の紹介 (D)
- 6・クラゲとサンゴは同じ仲間 (P)
- 7・貝の仲間にも殻がないものがある (P)
- 8・体の硬い部分は化石になって残ることがある (P)
- 9・アンモナイトの化石のレプリカの作り方 (D)
- 10・アンモナイトの化石のレプリカ作り (W)

授業②「チョウとガ」

- 11・子どもたちとやりとりしながら、好きな虫を聞く (T)
- 12・石垣島の虫を紹介する。(P)
- 13・種類の多い生き物のグループは何？ (T)
- 14・虫の種類が多いわけ (P)
- 15・虫の天敵 (P)
- 16・鱗粉のあるチョウはクモの網につかまらない (D)
- 17・鱗粉転写標本の作り方 (D)
- 18・鱗粉転写標本をつくる (W)

学生たちは日ごろ教員養成に関する授業を受けているとはいえ、実際の子どもたちを相手とした授業やワークショップに慣れているわけではない。加えて、遠隔での授業実践という事態を迎えて、正直、どのようなことになるのか不安があった。が、学生たちの工夫、対応は著者の予想を超えたものであった。例えば子どもたちが飽きないように、クラゲの一生(5)やチョウがクモの巣にかからないわけ(16)を、劇仕立ての動画にして(それもおもしろく)、授業者の話がつづくといった一本調子の授業にならないような工夫をしていたのである。また、ワークショップに取り掛かる前にも、ワークショップの手順をやはり動画にして配信し(9)(17)、子どもたちのモチベーションを高めていた。また、この動画には、失敗事例の紹介なども含めるなどの細やかな気配りもなされていた。

沖縄大学アネックス共創館で実施した遠隔の授業においては、パワポを手許のパソコンから操作するとともに、その様子をカメラで配信した。しらほサンゴ村の会場では、沖縄大学から送られてくる映像をスクリーンに投影すると同時に、会場全体の様子をパソコンのカメラで映し、沖縄大学へ配信、また子どもの様子(子どもの画像、子どもの発言内容)は学生のスマホを活用して、遠隔担当の学生へ通信した。

なお、対面でのやりとり、ワークショップに使用するものとして、以下のものを準備し、当日、白保まで対面班が運んだ。

頭骨標本(リス、タヌキ、ワニ)

化石レプリカ用（アンモナイトの化石 6 個、油粘土人数分、プラスチックコップ人数分、割りばし、石膏人数分、画用紙、）

鱗粉転写用（チョウの翅人数分、紙人数分、ロウ人数分、スプーン人数分、クリアファイル人数分）

そのほか（紙、交流会のビンゴ大会用賞品）

3・結果

幸い、2021 年 12 月は県内の感染者数が一時的に減少・安定しており、予定通り 2 名の学生と著者が白保に飛ぶことが出来た。一方、プログラムの実施日を土曜日に設定し、それがクリスマスと重なってしまったため、例年参加していた小学校の高学年、中学生といった、やまぐうキャンプの対象者の子どもたちの参加が少なくなってしまった。そのため急遽、地域の学童に通う小学校低学年の子どもたちを呼び集めての授業実践となった（当日参加したのは、小学校高学年以上が 4 名、低学年が 7 名）。授業案自体は低学年を想定して考えられたものではなかった。また低学年の子どもたちにとって、このプログラムに参加するのは初めてであり、プログラム冒頭時は騒然とするような雰囲気も見受けられた。ところが授業者や対面班の学生の、子どもたちへのていねいな声掛けや、プログラムの内容自体が徐々に子どもたちをプログラムに引き付け、結局、飽きることなく 3 時間のプログラムに参加する子どもたちの姿をみることができた。

プログラムの終了時に、子どもたちに感想を聞いたところ、予想以上に多くの子どもたちが手をあげ、感想を口にしてくれた。中でも「最初は気乗りしなかったけど、とてもおもしろかった」といった感想を、低学年の子どもが口にしてくれたのが印象深かった。

今回のプログラムの内容が、すぐに子どもたちの地域や環境への意識を変えるとは思はない。しかし、地域の自然・文化に興味を持つ、あらたな何かのきっかけになるのではないかな。また、一回のプログラムだけでははっきりしないが、プログラムを継続する中で、なにかが生み出されていくものがあるのではないかなとも思う。

プログラム終了後の反省会の中で、NPO 夏花のスタッフからは、「このような形で実施ができて本当によかった。つながりが確保できた。それに遠隔というあらたな手だてをもつことで、今後、もっとプログラムに幅をもたせることができるかもしれない」という声をかけていただいた。

Covid-19 のパンデミックにより、盛口ゼミでも従来通りのフィールドワークやワークショップが実施できなくなっている。そのような中、こうした形で白保のプログラムを実施することが出来たのは大変貴重だった。また、このような状況下であるからこそ、あたらしい挑戦ができえたこともあると思う。この実践をまた次につなげていくこととしたい。

さいごに

2021 年度の沖縄大学の入学者の一人に、山ぐうキャンプに長年参加してくれていた男子学生がおり、彼は入学式の後、わざわざ著者のところへ挨拶をしにきてくれた。しらほサング村を会場とした、やまぐうキャンプでの環境教育の実践の試みは、当初は思ってもいなかったことであるが、すでに 10 年を超える長期的な取り組みとなっている。実は今回の低学年の子どもの中に、一人、2011 年のプログラム開始時に強力なサポートを行ってくれた地域の青年の長男がいることに、プログラムの途中で気づくことが出来、このことからこのプログラムが、思っていた以上に長期的に継続されていることを自覚することになった。この子らが成長していく過程を今後、プログラムの中で見ていくことが出来たら望外の喜びであると思っている。

謝辞

当日は、アネックス共創館に地域研究所特別研究員・後藤亜樹さんが学生たちの授業配信のサポートを行った。また、地域研究所職員の方々のほか、通信環境に手間取ったためマルチメディア研究センターの職員の方にもお世話となった。白保においては NPO 夏花の山口美樹さんに会場設営、運営、旅費の助成の手続き等々で大きなお世話になった。記して感謝したい。

引用文献

沖縄大学地域研究所 石垣島白保における環境保全および地域社会維持に関する共同研究班・盛口ゼミ 2015 「石垣島白保における環境学習の実践・暮らしと文化の調査についての 5 年間のとりくみ」 沖縄大学地域研究所

盛口満 2018 「2018 年度・石垣島における教育実践（盛口ゼミ）の記録」 『こども文化学科紀要』 5:21-41



しらほこどもクラブ開催！

今年はオンラインと先生たちとのハイブリッド！？



やまぐうクリスマス会 げっちょ先生と沖大生がやってくる！

2021年12月25日 土曜日

13時から16時まで

しらほサンゴ村

13時から 虫の体の不思議（オンライン）

14時から 生物の作る石（化石を作るよ！）

15時から クリスマスビンゴ大会！

ビンゴ大会は、賞品ももらえるよ！

*緊急事態宣言などが出た場合はオンラインのみになります



2021 年度 研究班 研究成果報告書

研究名	沖縄島嶼部における作物の文化的伝播及び生態的比較 ——シーブッソンパンナとの環境民族的な比較研究——
代表者名	リュウゴウ
分野／対象地域	環境民族学、沖縄・中国南部地域・台湾など
研究期間	開始 2021 年 04 月 ～ 終了 2022 年 03 月 （ 3 年目／ 3 年間）
研究成果要約	雲南省における亜熱帯地域であるシーブッソンパンナは、中国大陸の最南端に位置し、生態的な自然や植生などの特徴から、沖縄に亜熱帯の類似性が溢れていると同時に人文的な特徴も魅力の充満されているところである。今回、ハーロッソという沖縄にある民俗風食品ムーチにそっくりものの調査・研究に試みをしたい。
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 2 名、 特別研究員 0 名、 計 2 名
研究成果	春秋・戦国の中国、伝統的な祭りのひとつとして、太陰暦の 5 か月目の 5 日目にドラゴンボートフェスティバル（舟競い）が開催される。当初は、五つの疫病の神々を送り出し、疫病を祓う夏の祭りでした。戦国時代、愛国心が強い詩人のク・ユアン（屈原）がこの日に投江自殺したので、屈原（ク・ユアン）を記念してドラゴンボートフェスティバルに由来して発展した。とくに、その日、民衆は、粽というつぶまれた食品を汨羅江に沢山投げ、屈原さんを記念する意味の祭りになる。このような祭りは、文化的に、その後、中国南部、東南アジア北部（シーサンパンナを含む）、横にある日本、琉球沖縄にも伝わった。 この竜船の漕ぎは、北と南の特色があり、粽に甘いまたは塩辛いご飯の団子で分けられる。 ドラゴンボートに加えて、…（端午时节划龙舟 南北粽派有讲究 你是甜粽派还是咸粽派？） 下周一，6 月 14 日就是 2021 年端午节啦！端午除了龙舟还有…） この祭りは二つの最も重要な活動は、竜舟競渡とちまきを食べることである。 竜舟競渡の起源は、最愛の詩人屈原が川に落ちた後、人々がボートを漕いで彼の体を見つけるために競争したことです。実際、ドラゴンボートの伝統はドラゴンボートフェスティバルに限らず、クユアン以前にもドラゴンボートレースの習慣があった。たとえば、ガスは潮の神であるウージクスをドラゴンボートで迎える習慣がある。古代人は船で悪霊を追い払う道具として使っていたので、悪霊が追い出されたので、早いほど良いので、ドラゴンボートレースの習慣が生まれた。 龍船節でちまきを食べる習慣は、後漢王朝に端を発していた。当時、楚の地域では、もち米や蒸し餃子を炊き、川に投げ入れて屈原を祀っていたが、この習慣は今も続いています。後に、包種茶＝包中茶（当たり意味、同名）という人がいたが、これは試験タイトルの良い兆候を意味します。人々は食べ物を天国と見なしており、中国人は食べ物についてある程度の研究を行っている。北と南で同じ名前ですが、小さなちまきで完全に異なる食べ物である可能性があるが、ちまきの形や内容に関係なく、場所によってさまざまな変化がある。浙江省の湖州粽、四川省の山椒塩粽子、広東省の中山芦兜粽など。形に関しては、さまざまな場所のちまきは、三角形、四角形のピラミッド、枕の形、小さな塔の形、丸い棒の形などである。ゾングの素材も場所によって異なる。 南部には笹が豊富にあるため、笹の葉は多くの場所で餃子を包むために使用されます。北部の人々は、葦の葉を使って餃子を結ぶことに慣れています。葦の葉は細くて細いので、2～3 枚重ねて使います。また、ちまきの大きさもかなり異なります。2～3 匹の巨大な餃子があり、長さが 2 インチ未満の小さくて絶妙なもち米餃子もある。 味の面では、ちまきの詰め物は肉と野菜の両方で、甘くて塩辛いです。北のちまきは主に甘いですが、南のちまきは甘くなく塩辛いです。形と比較して、ちまきの材料は地元の特徴の最も顕著な部分である。

	作り方について、ひとつ目は材料の準備：ゾンの葉、味噌、もち米、綿ロープ、ピーナッツ、レーズンなどのドライフルーツ。二つ目は、材料の準備ができたなら、塩に浸す必要がある。たとえば、豆、もち米、ゾンの葉、特にゾンの葉は一晩浸す必要がある。 三番目のステップはパックすること：最初にゾングの葉をコーンに丸め（一方の開口部、一方の端は開いてない）、次にゾングの葉に囲まれたコーンに浸して洗った材料を入れる。次に、ゾングの葉を綿糸でしっかりと包む。最後のステップは調理である。圧力鍋を使って餃子を調理することをお勧めする。すべての材料を柔らかくなり、味が良くなるまで調理できる。手遅れです、餃子を作る！
--	--

画像資料：



芦苇叶



箬叶



粽巴叶



“黄金裹玛瑙”。



广东中山芦兜粽,



浙江湖州粽子

ブランディング事業
(全学研究プロジェクト)

2021 年度 研究所の 2021 年度 全学研究プロジェクト班一覧

No.	研究班名	研究代表者	研究分野	研究概要
1	地域の健康・栄養課題改善における実践、支援法のスキルの検討—ライフステージにおける子どもの相対的貧困と食環境・食生活・社会環境との関連に関する研究：(2) 幼児期	逸見 幾代	公衆栄養、社会と健康、調理、給食経営管理	厚生労働省国民生活基礎調査の概況（2019）によると、わが国の子どもの7人に1人（相対的貧困率約15.7%、子どもの貧困率13.5%）と言われている。沖縄県においても深刻な課題になっている。そこで養育が必要な乳幼児期から青年期に至るまでの特に幼児期の相対的貧困と食環境・食生活・社会環境における生活の質（QOL）と親の社会関係資本などとの関連・実態を把握し、支援の方向性を示唆するものである。
2	子どもの貧困対策支援員の研修ニーズに関する研究	島村 聡	子どもの貧困	本員は2018年度に子どもの貧困対策支援員が抱える課題について調査研究を行った。その後3年が経過し支援員の入れ替わりや市町村行政の体制変化に伴い、状況が大きく変わっている地域もあれば、順当に支援を浸透させている地域もある。その差について検討するとともに、必要な研修ニーズを導き出す。

2021 年度 ブランディング研究班 研究計画申請書

新規			
研究名	子どもの貧困対策支援員の研修ニーズに関する研究		
代表者名	島村 聡		
研究分野	子どもの貧困		
対象地域	県内全域		
内容要約	本員は 2018 年度に子どもの貧困対策支援員が抱える課題について調査研究を行った。その後 3 年が経過し支援員の入れ替わりや市町村行政の体制変化に伴い、状況が大きく変わっている地域もあれば、順当に支援を浸透させている地域もある。その差について検討するとともに、必要な研修ニーズを導き出す。		
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 1 名 / 特別研究員 1 名 / 計 2 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
島村 聡	人文学部福祉文化学科教授	社会福祉	研究代表者
二宮千賀子	沖縄県学童保育支援センター	学童保育	
研究の目的	本員は 2018 年度に子どもの貧困対策支援員が抱える課題について調査研究を行った。 その際に、県内の各圏域や市町村において支援員の教育レベルや専門性に大きな差が有るとともに、行政の姿勢がまちまちであることが判明した。 その後 3 年が経過し支援員の入れ替わりや市町村行政の体制変化に伴い、状況が大きく変わっている地域もあれば、順当に支援を浸透させている地域もある。この間の変化について支援員や行政担当者に尋ね、その差について検討するとともに、体制の課題や必要な研修ニーズを導き出す。		
研究項目と方法	沖縄県の実施する子どもの貧困対策支援員の研修時に、支援員および行政担当者に対するアンケート調査を実施し、必要な地域には直接出向いて実情をインタビューする。 項目は、2018 調査に準じ、以下の 3 カテゴリー（8 項目）を想定している。 1. 支援員が感じる活動効果・課題と意義 ①これまでの活動から最も効果的だと感じた点は何か？ ②この 1 年間を振り返り、最も課題であったことは何か？ ③2018 年以降で支援員活動の意義はどう変化したか（具体的に）？ 2. 地域／学校とのやりとり ④地域とのやり取りで困っていることは何か？ ⑤地域との関係で工夫していることは何か？ ⑥学校とのやり取りで困っていることは何か？ ⑦学校との関係で工夫していることは何か？ 3. 今後の活性化に向け ⑧今後、この地域で支援員活動が活性化するために必要なことは何か（具体的に）？ ⑨そのためにどのような体制づくりが望まれるか？ ⑩そのためにどのような研修や実習が望まれるか？		

期待される成果	成果はご協力を頂く沖縄県の子どもの貧困対策支援員研修のプログラム改善に繋げるとともに、地域研究所が実施している那覇市・豊見城市の支援員研修事業に還元する。
研究の経緯	本員は 2018 年度に子どもの貧困対策支援員が抱える課題について調査研究を行った。 その際に、県内の各圏域や市町村において支援員の教育レベルや専門性に大きな差が有るとともに、行政の姿勢がまちまちであることが判明した。 今回の調査はその時の経験を活かして、調査項目を調整し、その後の変化を見るものである。 2018 年調査の概要と合わせて紀要「地域研究」に掲載する。
今年度研究計画	2021 年 5 月 調査項目の確定 6 月～11 月 沖縄県研修事業に合わせてアンケート方法を説明 (グーグルフォームと紙による回収双方を想定) 8 月～12 月 地域を設定してインタビュー調査を実施 離島旅費 (石垣・宮古 1 回ずつで計 20,000 円) 交通費 (県内北部・中部・南部各 1 回の交通費計 5,000 円) 2022 年 1 月 分析作業 インタビュー調査同行と概要作成、アンケート調査の概要作成は業者委託 (200,000 円)。分析は、島村と二宮が実施。

2021 年度 ブランディング研究班 研究計画申請書

継続 (2 年目)			
研究名	地域の健康・栄養課題改善における実践、支援法のスキルの検討—ライフステージにおける子どもの相対的貧困と食環境・食生活・社会環境との関連に関する研究：(2) 幼児期		
代表者名	逸見幾代		
研究分野	公衆栄養、社会と健康、調理、給食経営管理		
対象地域	沖縄県、広島県、徳島県、愛媛県、石川県		
内容要約	厚生労働省国民生活基礎調査の概況（2019）によると、わが国の子どもの 7 人に 1 人（相対的貧困率約 15.7%、子どもの貧困率 13.5%）と言われている。沖縄県においても深刻な課題になっている。そこで養育が必要な乳幼児期から青年期に至るまでの特に幼児期の相対的貧困と食環境・食生活・社会環境における生活の質（QOL）と親の社会関係資本などとの関連・実態を把握し、支援の方向性を示唆するものである。		
研究組織	（研究代表者及び研究分担者） 所員 2 名 / 特別研究員 4 名 / 計 6 名		
氏名	所属機関・部局・職	現在の専門	共同研究上の役割分担
逸見幾代	沖縄大学健康栄養学部・教授	公衆栄養学 栄養教育	研究代表者 研究マネジメント・実践・データ処理
山代寛	沖縄大学副学長・健康栄養学部・教授	健康スポーツ福祉専攻	研究倫理、
中村富予	龍谷大学農学部食品栄養学科・教授	公衆栄養学	研究実践・データ処理
木村留美	広島国際大学健康科学部・講師	給食経営管理	研究実践・データ処理
西村栄恵	金沢学院大学人間健康学部・准教授	調理学、 応用栄養学	研究実践・データ処理
三木章江	四国大学短期大学部・准教授	公衆栄養学 調理学	研究実践・データ処理
研究の目的	厚生労働省が発表した国民生活基礎調査の概況によると、平成 28 年の我が国の子どもの 7 人に 1 人が貧困（相対的貧困率は約 14.0%）と言われるほど、日本社会で子どもの貧困が問題となっている。近年報道情報でも、子どもの貧困の支援の一つに「子ども食堂」などの機会が増えていることを見聞きする。 この子どもの貧困の背景には、様々なことがあげられる。 昨年度の研究からも食環境が子どもの生活に関係していることを確認した。子どもの健康を考える時、疾病の予防や治療も重要であるが、生活の質（Quality of Life：QOL）の観点で子どもの健康を捉える必要もある。社会関係資本と子どもの QOL に関する国内の先行研究はほとんど見当たらない。社会関係資本のような社会環境要因と子どもの QOL との関連性を明らかにすることは、子どもの健康を守るための地域支援のあり方を考えるうえで重要な情報源となり得る。 そこで本研究の目的は、子どもを養育する親と子ども自身に対して横断的調査を行い、子どもの生活の質（QOL）と社会関係資本との関連性が要になってくるものと考えられる。 本研究の目的は、養育が必要な乳幼児期から学齢児・青年期に至る相対的貧困の子どもの食環境・食生活・社会環境における生活の質（QOL）と親の社会関係資本との関連・実態を把握し、支援の方向性を示唆することである。		

研究項目と方法	【方法】 2021 年 9 月から、沖縄県をはじめ徳島県・愛媛県などの乳幼児期に有る幼稚園・保育園の子どもとその保護者を対象に自記式の質問紙調査を実施する。調査後、相対的貧困児を無作為抽出し、を実施、変化を観察する。世帯収入の貧困基準以下の群とそれ以外の群に分け、各項目ごとの集計、さらに世帯環境と子どもの QOL と関連する要因、社会関係資本要因、経済状況などの関連について、統計解析する。
期待される成果	今年度は、幼児期にある子どもの相対的貧困の実態が、確認でき、食環境・社会環境と子どもの QOL との関連性の一端を明らかにする。 子どもの健康を守るための地域支援のあり方を考えるうえで重要な情報源となり得る。
研究の経緯	昨年のサイド調査で、子どもの食選択が、世帯構成数・家族形態に影響があることを確認している。 さらにこの子どもの食環境・社会環境と子どもの QOL との関連性の一端を明らかにし、子どもの健康を守るための地域支援のあり方を示唆できるものと考え る。 研究報告は、地域研究所紀要と 2021 年第 9 回日本食育学会および 2021 年第 69 回日本栄養改善学会等で発表予定である。 さらに 2022 年第 10 回日本食育学会および、2022 年第 70 回日本栄養改善学会 投稿予定。
今年度研究計画	2021 年 5 月下旬 第 1 回 調査票案作成会議① 2021 年 6 月下旬 第 2 回 調査票案作成会議② 2021 年 7 月下旬 第 3 回 調査票案作成会議③ 2021 年 8 月初旬～9 月中旬 倫理審査、調査依頼 2021 年 10 月中旬～11 月中旬 調査開始・回収 2021 年 12 月～ 調査票確認・介入説明 2021 年 12 月～2022 年 2 月末 調査票 分析（データ入力・分析） 2022 年 3 月～ まとめ

2021 年度 ブランディング研究班 研究成果報告書

研究名	子どもの貧困対策支援員の研修ニーズに関する研究
代表者名	島村聡
分野/対象地域	子どもの貧困/県内全域
研究期間	開始 2021 年 6 月 終了 2022 年 3 月 (1 年目/1 年間)
研究成果要	2018 年度の調査時に比べ、「学校での支援員の理解と連携の進展」「関係者会議に支援員が参画」「支援員のスキルアップ」など支援員活動の改善が見られた。一方、研修ニーズに繋がる支援員の困りごとの多くは「家庭」(アプローチ・介入)「学校」(体制・対応・関係性)であった。
研究組織	(研究代表者及び研究分担者) 所員 1 名、 特別研究員 1 名、 計 2 名
研究成果	この研究は、子どもの貧困対策支援員が抱える課題を 2018 年の同様の調査との比較から明らかにし、今年度から実施する研修事業に活かすことを目的としている。インタビュー調査実施状況(調査方式はいずれも zoom)とインタビュー項目は、経過報告書を参照されたい。 すべての地域のインタビュー調査を終了し、目的である研修ニーズについて概ね目標通り把握できた。現在報告書を作成中であるが、既に実施された沖縄県の貧困対策支援員の研修(9 月 2 日(木)および 9 月 9 日(木)実施の第 2 回企画研修「関係機関との連携」)において、本調査で得られた結果を先行して活用した。以下に、調査の結果のまとめを記す。 事業の蓄積によるネットワーク拡大・技術熟練・組織熟成・周知の広がり 2018 年度の調査時に比べ、支援員活動の改善や子どもの状態の改善が進んでいると見られる回答が随所にあった。それは、ネットワーク拡大や技術的な熟練、組織としての熟成、周知の広がりなど「時間の経過と事業の積み重ねによる知見や実績の蓄積」によるところが大きいと見られる。「学校での支援員の理解と連携の進展」「関係者会議に支援員が参画」「支援員のスキルアップ」などである。 また、支援員制度やシステムについてイノベーションが起きていることも感じられた。代表的なものは、通信アプリ LINE を使って保護者とのやりとりが進んだことだ。メール、電話ではむづかしかった保護者へのアクセスが、LINE を使ったインフォーマルなやりとりができるようになったことでハードルが下がった。ケータイメールでは保護者にも通信料がかかっていたのが、無料でやりとりできるようになったことも大きい。那覇市教委のように支援員に提供されている端末がガラケーであることから L が使えないケースも残っている。改善が求められる。 一方で、LINE でのやりとりが日常になったことで、業務外のやりとりが増えたことや、個人情報の管理、保護者や子どもの状態にどこまで関わるかなどの課題も検討する必要がある。読谷では、支援員が直営居場所スタッフを兼務するため LINE での通信内容が混乱しがちになっているのを、支援員が保護者にきちんと説明することで、やりとりできる情報の範囲や内容を整理できている。 雇用契約が継続している支援員はスキルアップが図られる一方、雇用形態が嘱託や会計年度任用職員のためスタッフの変動が激しく、組織としての熟練が進まないことや新採用で経験不足のため支援員だけでなく学校や家庭も戸惑っているケースは相変わらず多く見られた。全体的な福祉人材不足による、有資格者の採用が減っているであろうことも推察できる。 ただし、中城や石垣の支援員や読谷の居場所スタッフのように、無資格で未経験なためいわゆる「手垢のついていない」状態の支援員が経験不足なりに努力した結果、福祉の枠組みにとらわれない新鮮で柔軟な動きとなり、家庭や所属課から評価

	されている事例も今回の調査では目立った。 新採用者であっても、前職をうまく生かして有効な活動をしている支援員も多くいた。「過去の経歴が生かされた」とした支援員は少なくとも大宜味、金武、国頭、北中城、宜野湾など多自治体にわたる。特に、地域連携やキーパーソンの掘り起こし、彼らとのネットワーク拡張に機能しているようだ。 国頭のように支援員として採用後、福祉課から教育委員会に異動があったことで、さらに能力を開花させ、地域や家庭に寄与した中堅支援員の事例も見られた。支援員の困りごとの多くは「家庭」(アプローチ・介入)「学校」(体制・対応・関係性)困りごとの対象として今回対象とした「家庭」「地域」「学校」「行政/居場所」を見ると、インタビューのボリュームや内容の多様性から、支援員が困りごとを抱えるケースが多いのは「家庭」「学校」であることがわかる。 「家庭」は、「家庭へのアプローチの仕方」「アプローチはできていても家庭状況の関与・介入することの難しさ」が大半を占めた。アプローチの仕方では、経験不足による関係づくりの難しさ、返信がない時の行動のとり方、保護者による行政への拒否感、そもそも「困り感」を持っていないことなどがハードルになっていた。家庭状況については、保護者の状態や父母間の意見の相違、関係づくりができていないことによる課題介入の難しさなどが上げられる。「学校」は、「学校の体制」「支援員への対応」「家庭や子どもとの関係」「支援員の立ち位置」などが多かった。全般的に学校の支援員に対する理解は進んでいるが、そうでない学校との格差が拡大している様子がうかがえる。また、既卒生で支援が必要なケースなど、学校の関与を外れた子どものケアに関する課題も、回答数としては多くなかったものの前回調査に比べ実態は変わっていない様子だった。 学校に関しては、やはり「不登校」に傾注する学校が多く、「学校に来たらそれでOK」という考え方が支援員の「背景にある課題への寄り添い」とマッチしないことや、居場所のことを知らない先生がまだまだ多いことなど、前回調査とあまり変わっていない実感があった。支援員への理解が進んではきたものの、さらなる変化が期待される。 「地域」に関しては、そもそも地域へアクセスできていない支援員が多いと見られる。自治体や所属課で定めた支援員の業務内容や守備範囲に縛られているケースもありそうだ。 「困っていること」の多くは連携協働で、特に民生委員との連携がない点がよく見られた。支援員のジレンマに「地域にどこまで個人情報を出してよいか」という問題があり、この点も地域や民生委員との連携におけるハードルになっている可能性がある。 「行政/居場所」については、新型コロナの感染拡大の影響もあり、要支援の子どもが増えていることやニーズが多様化していることから、居場所が足りないだけでなく、これまでの居場所の機能を再定義・再整理する必要があると考えている支援員が目立った。機能拡張の必要性や拠点型居場所ニーズの拡大が訴えられる一方で、誰でもが気軽に行くことができるライトな居場所が、つなぎ先としてももっと欲しいという支援員もいる。 支援員の立ち位置や「しぼり」に改善の余地あり すべての対象において、「支援員の立ち位置に改善が必要」と考える支援員は少なくなかった。特に、前回調査で課題とされた支援員の業務範囲が今回も変わっていない自治体の支援員の意見として見られた。宜野湾では、役所の担当課間の連携がうまくいっていないと見られることから、ニーズがあっても支援員が動けず、対象となる子どもが放置といえる状態になってしまうジレンマを今回も訴えた。石垣からは、地域の行事への積極参加や地域と連携してのイベント企画が支援員の活動としては認められていないため、地域と有機的な動きができないジレンマが続いていることが上がった。2市のこの課題は、前回調査でも改善が訴えられていた。 このほか、支援員の業務時間と学校教員や家庭とやりとりできる時間にミスマッ
--	--

	チがあり、業務外時間となって活動不可になる課題なども、前回に引き続き多く見られた。 その中で、支援員による新しい取り組みやアイデアによる活動も進んでいる。那覇保護管理では、ケア対象のうち「もっと動ける世帯」の後押しや、保護者や子どもの就労支援面でパーソナルサポートとの連携を模索している。他の地域でも、学校の会議や要対協議会への入り方、家庭児童相談員との連携など、これまでの蓄積を活用しながら新しいニーズに対する新しい取り組みを試行錯誤ながら始めている支援員の姿が多く見られたことは、今回の調査で非常に印象的だった。
研究成果 の発表実績	次回の紀要「地域研究」に掲載予定。

2021 年度 ブランディング研究班 研究成果報告書

研究名	地域の健康・栄養課題改善における実践、支援法のスキルの検討——ライフステージにおける子どもの相対的貧困と食環境・食生活・社会環境との関連に関する研究（2）幼児期
代表者名	逸見幾代
分野／対象地域	公衆衛生、社会と健康、調理、給食経営管理
研究期間	開始 2019 年 4 月 ～ 終了 2021 年 3 月 （ 2 年目／ 年間）
研究成果要約	厚生労働省国民生活基礎調査の概況（2019）によると、我が国の子どもの7人に1人（相対的貧困率 15.7%、子どもの貧困率 13.5%）と言われている。沖縄県においても深刻な課題になっている。そこで養育が必要な乳幼児期から青年期に至るまでの特に幼児期の相対的貧困と食環境・食生活・社会環境における生活の質（QOL）と親の社会関係資本などとの関連・実態を把握し、支援の方向性を示唆するものである。
研究組織	（研究代表者及び研究分担者）所員 2 名、特別研究員 4 名、計 6 名
研究成果	近年、健康意識は高まってきているが、最終目標の健康維持増進、QOL の向上には直結せず、未だ生活習慣病などは、増加の一途をたどっている。2018 年厚生労働省から、健康支援のために「地域高齢者等の健康支援を推進する配食事業の栄養管理の在り方検討会などでガイドラインが示された。 そこで、公衆栄養活動による健康支援を図る実践法のスキルを検討することを目的とし、特定地域の特定健診・保健指導や食育推進にかかわってきた集積データとエビデンスを基に、地域における健康・栄養課題の改善の実践、支援法のスキルを検討する。 昨年から行っている健康を支援するためにからだに優しい健康的な「からだ思い弁当」を考案し、地域に発信、健康観の情操につなげ、健康支援の一助とする。またそれから得られたデータを資料とし、養育を必要とする青年期（子ども）の相対的貧困と食環境・食生活との関連を検討した 1) 方法：沖縄県を含む西日本を中心とした 5 地域の 5 大学に在籍する大学生 371 名を対象に、調査への参加を依頼した。対象とし 5 大学のうち、4 校は栄養士・管理栄養士養成課程の学生、1 校は経済学部の学生を対象とした。調査は、2021 年 11 月～2022 年 2 月にかけて、大学ごとに集合法により実施した。 2) 倫理的配慮：調査の実施にあたっては、沖縄大学人を対象とする研究倫理審査委員会での審査・承認を得て実施した（承認番号 2020-07）。 3) 調査項目：対象者に属性 4 項目、社会経済状況 11 項目、食生活 12 項目（その中の 1 項目は、22 食品の摂取頻度）、生活状況 13 項目の全質問 61 項目の自記式質問紙を用いて調査を行った。 世帯収入を把握するために、過去 1 年間のおよその年収について 10 択で回答を求めた。同時に、実家の家族数について回答を求めた。 世帯収入の群分けについては、先行研究^{7,15)}の貧困基準を参考に「低収入群」（貧困基準以下）とし、それ以外を「低収入以外群」（貧困基準以上）、「答えたくない・無回答」群群とした。 4) 統計解析：社会経済状況、食生活・生活状況に関する項目と世帯収入別の検討については χ^2 検定を用い、期待度数 5 未満の数値がある場合 Fisher の正確確率検定の結果を用いた。Post hoc 検定に関しては、Bonferroni 型の p 値調整を行った統計解析には IBM SPSS Statistics27（日本ア

	イ・ビー・エム株式会社)を用い、有意水準は両側検定で5%とした。 5) 結果： ①象者の属性：「女性」、「10代」が大半であった。「居住形態」は「実家」が、「家族形態」は「4人」が1番多かった。「家族構成」は「母」が1番多かった。「世帯収入」の「低収入群」、「低収入以外群」24.4%)、「答えたくない・無回答群」53.6%) 地域差が見られた($p < 0.001$)。また、答えたくない・無回答群(13.9%)の「一人暮らし」の割合は、低収入群(9.1%)、低収入以外群(7.1%)に比べて有意ではないが約2倍と高かった($p = 0.203$)。 ②世帯収入と社会経済状況に関する項目との関連 世帯収入別の社会経済状況は、低収入群と低収入以外群の2群間で有意な差があった項目は「奨学金の利用」「家族が金銭的援助が必要な状況」「趣味や贅沢のための経済的余裕」「予想外の出費への不安」「経済的な理由で必要なものが買えなかった経験」であった。答えたくない・無回答群と低収入以外群の2群間で有意な差があった項目は「奨学金の利用」のみであった。 ③世帯収入と食生活状況に関する項目との関連 世帯収入別の食生活状況の差を表3に示した。低収入群と低収入以外群で「野菜を普段から食べるか」の項目に有意な差は見られなかったが、その理由に関し「奨学金の利用」のみであった。 ④世帯収入と食生活状況に関する項目との関連 低収入群と低収入以外群の2群間で「野菜を普段から食べるか」の項目に有意な差は見られなかったが、その理由に関しては、低収入群は低収入以外群に比べて「値段が高い」「その他」と回答した者の割合が高かった。「その他」の理由で1番多い回答は「料理が面倒」、次が「調理に手間がかかる」「食卓に出てこない」であった。「 食事を選択する際に1番重要視すること」では、低収入群は低収入以外群に比べて「価格」と回答した者の割合が1番高かった。答えたくない・無回答群は低収入以外群と比べて「スイーツ」の摂取頻度が有意に低かった。 ⑤世帯収入と食品摂取頻度との関連 低収入群は低収入以外群に比べて「小魚」と「バター・豚脂」の摂取頻度が少ない者の割合が高かった。「白身魚」、「淡色野菜」の摂取頻度は少ない傾向があった。答えたくない・無回答群は低収入以外群に比べて「パン」「豚肉」「牛肉」「種実類」「バター・豚脂」の摂取頻度が少ない者の割合が高かった。 ⑥世帯収入と生活状況に関する項目との関連世帯収入別の食品摂取頻度をみた。低収入群は低収入以外群に比べて「食事中にスマホをみるか」に「毎日する」、「時々する」と回答した者の割合が高かった。 本研究は、西日本を中心とした5地域の大学生を対象として、社会経済状況、食生活・生活状況と世帯収入との関連を検討した。その結果、低収入群は、低収入以外群に比べて「経済的な理由で食物の入手を控えた、入手できなかった経験」を多く持ち、 「小魚」、「野菜」の摂取量が少なく、野菜を食べない理由として「値段が高い」「その他」と回答した者の割合が高く、睡眠時間は長い、食事中にスマホを見る者が多いことが明らかとなった。 1) 社会経済状況と世帯収入 本研究結果では、低収入群は「経済的な理由で必要なものが買えなかった経験」は多いが有意ではなく、「経済的な理由で食物の入手を控えた、入手できなかった経験」が有意に多いという結果になった。これらのことより、本研究対象の大学生は、必要なものにはお金をかけるが食物の入手は控える傾向があると考えられた。 2) 食生活状況と世帯収入
--	--

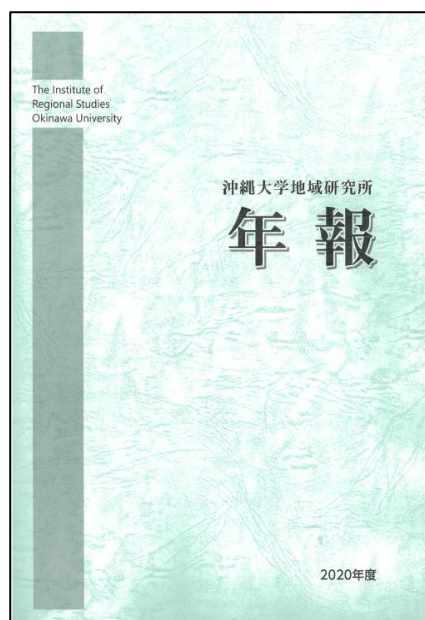
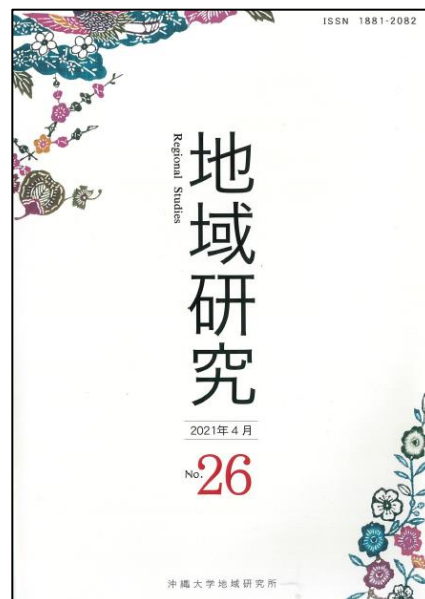
	先行研究では^{12)~14)}、一人暮らしの大学生は、実家暮らしの大学生に比べて野菜、魚介類、果物類などの摂取頻度が少ないことが報告されている。本研究でも、一人暮らし（寮以外）の学生は同居の学生に比べて「青身魚」「白身魚」「小魚」「緑黄色野菜」「淡色野菜」の摂取頻度が少なかった。また、居住形態で補正をしてもなお、低収入群は低収入以外群に比べて「小魚」「緑黄色野菜」「淡色野菜」の摂取頻度は有意に少なかった。 さらに、低収入群は野菜を食べない、摂取できない理由を「値段が高い」「その他（料理が面倒、調理に手間がかかる）」と回答した者の割合が高かった。農林水産省・北陸農政局の「平成 28 年度大学生を対象にした食育アンケート調査報告」²⁰⁾も、野菜を食べない理由として「調理するのが面倒で食べない」「価格が高いから食べない」と回答したものが多かったと報告している。これらのことは、世帯収入の低さに 1 番影響を受けるのは野菜の摂取であることを裏付けている。 本研究結果では、食事が楽しくないことは世帯収入には関連しておらず、一人暮らしと関連していた。本研究が調査した時期は、新型コロナウイルス感染症予防対策のために他の人と一緒に食事することが制限されていたことも、一人暮らしの学生が食事を楽しくないと感じた要因の 1 つとなった可能性もある。 低収入群は生活に必要な収入を得るためにアルバイトをしている者が多く睡眠時間が短いと想定していたが、本研究では「睡眠時間」と居住形態や世帯収入との間には有意な関連はみられなかった。本調査実施時は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、大学生のアルバイト時間の減少等が生じていることが報告されている²⁹⁾。本調査対象学生も、これらの影響を受けている可能性がある。 これらのことより、大学生の食生活・生活状況は、世帯収入が関連している可能性が示唆された。しかし、これらの状況には、一人暮らしとの関連がより強い項目もあった。そのために、大学生の食生活・生活状況の改善には、一人暮らしの学生の食生活の自立支援や食を楽しむ場の設定、それに加えて勉強時間の確保の視点も必要と考えられた。 本研究の限界の 1 点目は、世帯収入に関して、答えたくない・無回答の者が約半数いたことである。また、その割合には地域差が見られたことから、選択バイアスが存在する可能性が考えられた。「答えたくない」と回答した者、無回答の者の気持ちを汲みながら、これらを減らす方法と、選択バイアスの本質を明確にすることは今後の研究課題といえる。 2 点目は、本研究は、西日本を中心にした 5 地域の学生のための結果であり、その中の 4 大学は栄養士・管理栄養士養成課程の大学生を対象としたことである。そのために本調査では、高い回答割合が得られているが、対象地域を無作為に抽出したものではないことから、調査結果の外的妥当性は決して高いとはいえない。 3 点目は、本調査では世帯収入をカテゴリで回答させたために、貧困の指標である相対的貧困率を用いることができなかったことである。そのために、先行研究で用いられている貧困基準を用いた。 4 点目は、本研究では各ライフステージ別に調査を実施し比較検討するために、主に世帯収入について聞きアルバイトについては詳細な調査はしなかったことである。今後の大学生を対象とした調査には、アルバイトも含めて行う予定である。 最後に、本研究は、新型コロナウイルス感染拡大の影響がある時期に調査を行ったことである。本研究対象者は、これらの影響を受けている可能性があるが、今回はこの点については詳細に検討できていない。 上記のように本研究には選択バイアスや調査限界があるものの、西日本を中
--	--

	心とした5地域の学生を対象として世帯収入が大学生の社会経済状況、食生活・生活状況と関連していることを明らかにしたことは意義があると考えられる。 今後は、本研究で明らかになった研究課題を解決するために、さまざまな工夫に基づいた研究を行い、貧困が食生活・生活状況に及ぼす影響を明らかにし、青年期の心身の健康を支援する方法や方向性を検討していく予定である。
研究成果の 発表実績	・2021 今年度の成果 これまでの既存の集積データや人的資源の活用により基礎的分析結果を発表。 生活習慣と健康弁当に関する意識調査、相対的貧困と食環境・食生活との関連に関する分析（学会発表 5 件、論文 1 件） ＊2021 年 6 月 第 9 回本食育学会 誌上発表（2 件）、 ・「からだ思い弁当」によるコロナ禍における食意識様相について ・「青年期の相対的貧困と食環境・食生活・社会環境との関聯について」 ＊2021 年 9 月 第 68 回日本栄養改善学会（新潟県立大学）誌上 Zoom 発表、 ・「大学生の食生活状況と相対的貧困、居住形態との関連」栄養学雑誌 79、5、141、202021 ・若年女性の弁当作り支援による栄養教育効果の検討 栄養学雑誌 79、5、147、202021 ＊2021 年 10 月 第 54 回 日本栄養・食糧学会 中国・四国支部大会 第 7 回日本栄養改善学会四国支部学術総会合同大会（於：松山 愛媛大学 Zoom 開催） ・四国地区大学生の相対的貧困と食環境・食生活・社会環境との関連について ＊論文 日本食育学会誌 第 16 巻 第 1 号、2022（1 月） 「大学生の相対的貧困と社会経済状況、食生活・生活状況に関する研究」

発行物

2021 年度 刊行物一覧

件数	発行日	タイトル
1	2021年4月	地域研究 No.26
2	2021年8月	沖縄大学地域研究所年報 2020年度
3	2021年10月	地域研究 No.27



土曜教養講座

2021 年度 土曜教養講座一覧

回数	講座日	テーマ	講師
第575回	4月17日	コロナ禍だからこそつながろう！ 子どもと遊び	司 会：山崎 新【国場児童館館長】 講 師：岡花 祈一郎【琉球大学】 講 師：上運天 健【うるま市こども部こども未来課課長】 講 師：菅原 耕太【ももやま子ども食堂】 講 師：天願 順優【コスモストーリー保育園園長】 講 師：山城 康代【みどり町児童センター館長】 講 師：山野 良一【沖縄大学人文学部福祉文化学科教授/沖縄大学地域研究所副所長】
第576回	6月12日	琉球列島の自然を考える 世界自然遺産登録に向けた現状と課題	コーディネーター：城ヶ原 貴通【沖縄大学経済法学部経法商学科准教授】 講 師：五箇 公一【国立環境研究所生態リスク評価・対策研究室室長】 講 師：山田 文雄【沖縄大学客員教授/世界自然遺産候補地科学委員会委員】 講 師：盛口 満【沖縄大学学長】 挨 拶：東岡 礼治【環境省沖縄奄美自然環境事務所所長】
第577回	7月3日	若年妊婦をどう支えていくのか	コーディネーター：山野 良一【沖縄大学人文学部福祉文化学科教授/沖縄大学地域研究所副所長】 講 師：山内 優子【一般社団法人おきなわ子ども未来ネットワーク】 講 師：島村 聡【沖縄大学人文学部福祉文化学科教授/沖縄大学地域研究所所長】 講 師：平安名 萌恵【立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程】
第578回	9月25日	大切な人を最期に看取ること —終末期ケアを考える	司 会：山代 寛【沖縄大学副学長/医師】 講 師：大下 大圓【飛騨千光寺住職、名古屋大学医学部講師(非)、日本ホスピス在宅ケ ア研究会理事】 講 師：上原 弘美【サバイバーナースの会「びあナース」代表・看護師】 講 師：金城 ユカリ【中頭病院勤務・緩和ケア認定看護師】
第579回	10月30日	共生社会をめざして コロナ禍における外国人をめぐる 法政策	司 会：春田 吉備彦【沖縄大学経済法学部経法商学科教授】 講 師：奥貫 紀文【相模女子大学社会マネジメント学科准教授/東ゼン労組執行委員長】 講 師：グェン ド アン ニュン【名桜大学大学院言語文化研究科修士課程終了/日越翻訳家】 講 師：岩垣 真人【沖縄大学経済法学部経法商学科准教授】
第580回	12月4日	アフターコロナと自然災害	司 会：圓田 浩二【沖縄大学経済法学部経法商学科教授】 講 師：稲垣 暁【災害ソーシャルワーカー/(一社)災害ブラットホームおきなわ】 講 師：谷口 友一【沖縄大学経済法学部経法商学科講師】 講 師：山田 克宏【秋田県社会福祉士会理事、秋田看護福祉大学看護福祉学部助教】 講 師：河合 呈【岩手大学人文社会科学部准教授】
第581回	2月12日	米軍基地と基地労働者	講 師/司 会：春田 吉備彦【沖縄大学経済法学部経法商学科教授】 講 師：ハサンボイ ラヒムベルガノフ【名古屋大学修士課程2年生】 講 師：紺谷 智弘【全駐労中央執行委員長】 講 師：伊原 亮司【岐阜大学地域科学部准教授/社会科学博士(一橋大学)】
第582回	3月26日	沖縄における障がい者スポーツ振興の 現在と未来	講 師：手登根 雄次【沖縄障がい者スポーツ協会理事/(一社)琉球スポーツサポート代表】 講 師：屋良 景斗【沖縄盲学校高等部専攻科教員/ブラインドサッカーチーム琉球agachi代表】 講 師：中山 健二郎【沖縄大学人文学部福祉文化学科講師】

第575回 土曜教養講座
2021年4月17日(土)

コロナ禍だからこそつながろう！子どもと遊び



講師：岡花 祈一郎
【琉球大学】



講師：上運天 健
【うるま市こども部
こども未来課課長】



講師：山城 康代
【みどり町児童セン
ター館長】



講師：菅原 耕太
【ももやま子ども食堂】



講師：天願 順優
【コスモストーリー保育園園長】



講師：山野 良一
【沖縄大学人文学部教授・
沖縄大学地域研究所副所長】



司会：山崎 新
【那覇市・国場児童館館長】

オンライン講座

NPO法人沖縄県学童・保育支援センター、沖縄大学地域研究所 共催



コロナ禍だからこそ つながろう！ 子どもと遊び

子どもにとって遊びとは、「自発的、自主的に行われるものであり、子どもにとって認識や感情、主体性等の諸能力が統合化される他に代えがたい不可欠な活動」(放課後児童クラブ運営指針解説書)です。しかし、コロナ禍において、その遊びが大きく制限される事態となりました。そのようななか、現場ではどのような取組がなされたのでしょうか。本シンポジウムでは、実践者、研究者、行政とともに各施設の取り組みを振り返りながら、戸惑いや学びを共有し、今後に向けての展望を探りたいと思います。

視聴料
無料

2021.4.17(土)

Zoom ウェビナー 13:30~17:00

プログラム

- | | | | |
|-------|---------------------------------|-------|---------|
| 13:30 | 司会あいさつ／オープニングムービー | [10分] | 山崎 新 |
| 13:40 | 趣旨説明／登壇者の自己紹介 | [5分] | 山野 良一 |
| 13:45 | 報告①学童・児童館の取り組み | [20分] | 山城 康代 |
| 14:05 | 報告②保育所の取り組み | [20分] | 天願 順優 |
| 14:25 | 報告①②をうけてのコメント
コロナ禍における遊びについて | [20分] | 岡花 祈一郎 |
| 14:45 | ディスカッション 登壇者で | [15分] | |
| 15:00 | 休憩(参加者からの質問・コメント受付) | [10分] | |
| 15:10 | 報告③行政の取り組み | [20分] | 上運天 健 |
| 15:30 | 報告④困ってつながって学んだこと | [20分] | 菅原 耕太 |
| 15:50 | コメント | [10分] | 岡花 祈一郎 |
| 16:00 | ディスカッション① | [30分] | 登壇者で |
| 16:30 | ディスカッション② | [25分] | 参加者とともに |

登壇者

お花 はな き いち ろう
岡花 祈一郎 [琉球大学]

広島大学大学院教育学研究科博士課程を経て、現在、琉球大学教育学部准教授。専門は、幼児教育学・保育学。主な研究テーマは、子どもの発達と遊び、保幼小接続など。主な著作としては、『遊びをつくる、生活をつくる』(かもがわ出版)など多数。

かみ うん てん けん
上運天 健 [うるま市こども部こども未来課課長]

平成7年に市役所に採用され、「商工観光の部署」や「まちづくり課」等を経て平成23年より学童クラブや児童館事業に携わっております。趣味は、囲碁やアイロンにゴルフです。現在は、待機児童対策の他、子育て支援全般に関わっております。

すが わら こう た
菅原 耕太 [ももやま子ども食堂]

沖縄生まれ、千葉県育ち。大学で国際協力を学び青年海外協力隊としてマダガスカルへ赴任。帰国後に教育関係の仕事に就く。2015年沖縄に移住。現在はももやま子ども食堂主任。歩く子どもの居場所プロデューサーを目指す。

てん がん じゅん ゆう
天願 順優 [コスモストーリー保育園園長]

コスモストーリー保育園園長。琉球大学大学院教育学研究科修士課程修了。うるま市社会福祉法人勇翔福祉会コスモストーリー保育園で主任を経て現職。主な研究課題は、保幼小接続における「子どもの声」の検討で、理論と実践を往還することを大切にしている。

やま しろ やす よ
山城 康代 [みどり町児童センター館長]

一般社団法人りあん代表理事、みどり町児童センター館長、うるま市3児童館(学童含む)b & g うるまのまわいどを運営。児童館で子ども食堂・中学生の居場所づくり・障がいの子を持つ親の会を開催。沖縄県子ども未来県民会議委員。沖縄県子ども未来プロジェクト委員。

やま の りょう いち
山野 良一 [沖縄大学]

専門子どもの福祉。職歴として、神奈川県児童相談所児童福祉司等を経験。社会的活動として、現在「なくそう!子どもの貧困」全国ネットワーク世話人。著書に『子どもに貧困を押し付ける国・日本』(光文社新書)などがある。

司会

やま ざき あらた
山崎 新 [国境児童館館長]

沖縄大学卒業後、環境教育や自然体験学習の企画、学生支援、放課後児童クラブや児童デイサービスの運営に携わる。2012年に一般社団法人沖縄じんぶん考房を設立し、2013年より指定管理者として那覇市国境児童館を運営する。

オンラインの講義であり「Zoomウェビナー」を使って行います。Wi-Fiなどネット接続ができる環境で、PC・スマホ・タブレットなどから視聴できます。お申し込みされた方には、講義開始前日までに、接続先の情報(ログインURL)をメールにてご案内します。

■申込先 【MAIL】chiken-staff@okinawa-u.ac.jp
(件名は「4月17日土曜教養講座申込」本文で氏名・電話番号の記載をお願いします)
■問い合わせ先 沖縄大学地域研究所 沖縄県那覇市国境405番地 【TEL】098-832-5599



今後の公開講座等の情報をご希望の方へLINEで配信を行っております。左のQRコードよりご登録ください!

第575回 沖縄大学土曜教養講座

コロナ禍だからこそつながろう！子どもと遊び

【日 時】 2021 年 4 月 17 日(土) 13:30～17:00
【会 場】 みらいファンド沖縄
【登壇者】 岡花祈一郎（琉球大学教育学部准教授）
上運天健（うるま市こども部こども未来課課長）
菅原耕太（ももやま子ども食堂主任）
天願順優（コスモストーリー保育園園長）
山城康代（みどり町児童センター館長）
山野良一（沖縄大学人文学部福祉文化学科教授/地域研究所副所長）

【司会】 山崎新（国場児童館館長）

【聴講料】 無料

【申込人数】 122 名

【参加者内訳】 ※アンケート回答数 35 人

(年代別)		(所属別)		
10 代	0 人	一般	3 人	放課後児童クラブ 5 人
20 代	3 人	地域住民	1 人	児童館 2 人
30 代	7 人	本学同窓会	0 人	子どもの居場所 3 人
40 代	12 人	本学後援会	0 人	その他 10 人
50 代	6 人	沖大生	0 人	
60 代	5 人	学生	2 人	
70 代以上	2 人	本学教員	0 人	
		保育所	9 人	

(都道府県別)		(講座を知った方法)	
沖縄県	31 人	友人・知人	13 人
福岡県	2 人	メール	9 人
大阪府	1 人	チラシ	7 人
東京都	1 人	LINE	2 人
		沖大ホームページ	2 人
		その他	2 人
		ラジオ	0 人
		新聞	0 人

■感想（漢字表現等は原文のまま。）

1. 遊びを保障するという点について、保護者にも行政にも訴えていかねばと思います。（40 代放課後児童クラブ）
2. とても、幅の広い学びになりました。（30 代保育所）
3. 3 時間半の長きにわたるオンラインイベントに参加するのは初めてでしたが、最後まで集中力が途切れたり飽きが来たりすることが全くありませんでした。ありがとうございました。（50 代一般）
4. 「コロナ禍だからこそ」というお話のなかにも、子どもに向き合う本質的な視点を改めて触れる機会となりました。「意味のない時間・遊び」の大切さ、改めて「意味のないことに意味づけることに絡め取られること」といった岡花先生のコメントをいろいろ考えています。

考えるほどにループすることと感じて答えを見いだしづらいとも思いますが、ひとまず「考え続けることが大切」として捉えておくとういとも思いました。その他、各方面の具体的な実践も拝聴でき、今後の刺激となりました。ありがとうございました。(40代地域住民)

5. 那覇市内の公私連携型認定こども園に勤務しています。今回の講座、大変興味深く拝聴しました。こども園(3~5歳児)で関わる子ども達以外の、子どもを取り巻く県内(那覇市以外)の状況を知る事ができました。また、コスモストーリー保育園さんの保育実践がとても参考になりました。今後も継続してお話を伺えると幸いです。高山先生と子ども達のコラボ配信実現も楽しみにしています!パネリストの皆さまの、和気藹々和やかな雰囲気がとても良かったです。(40代)
6. 資料をダウンロードできるようにしてほしい。(20代学生)
7. 本日は素晴らしいお話を聴かせて頂きありがとうございました。子どもの遊びの場が失いつつある社会、外で遊ぶ事も失われていくのかと思うと、これから子ども達に私達大人がどう関わって、どう環境を作っていくのか真剣に考えてあげなくてははいけませんね。子どもの声を、社会全体が聴いて頂ける環境作りを、微力ながら共に創り上げていけたらと思います。(40代保育所)
8. 現場の方からは「行政がもっと…」っという声が多いと思います。今回、行政の方も大変だったということが、上運天さんの柔らかいお人柄のおかげで、嫌味なくお伝えできたのではないかと思います。それぞれのお立場の方が、同じ場でお話する機会はなかなかないので、場を設けていただけたこと、企画してくれたこと、ありがとうございます。菅原さんの、子ども達が遊んでいるのをみてニヤニヤする気持ち、ナイスです!気持ちに余裕をもって、色々な視点で子ども達がわくわくドキドキしながら遊べる環境、時間、場所、方法等を一緒に考えられるってステキな場だと感じました。準備、企画、開催、おつかれさまです!(40代)
9. 行政、様々な事業所の取り組みを聞かせて頂き改めて、子どもにとって遊びの大切さを学ぶことが出来ました。(50代放課後児童クラブ)
10. コロナ禍の下で子ども達のために奮闘しておられる各現場の方々の努力を知りました。(70代)
11. それぞれの現場での取り組みや工夫が知れてよかった。遊びの大切さを伝えていく上で、価値や意味があるから、だと、結局価値や意味のあるものじゃないと必要じゃなくなるという矛盾が生まれてしまう、という意見が印象に残った。(20代子どもの居場所)
12. 子供教育に関する専門的で深いお話を聞くことができ、大変勉強になりました。具体的には、「遊びの大切さ」、「遊びを通じて、こういう事が見えたよ」と表面的な部分でなく、本質的な部分を見出す視点の大切さや、「自由と選択」というワードに対して、選べない子を気に掛ける視点の重要性について等、多くの事を学ぶことができました。今回、貴団体の社会貢献活動にとっても感謝しています。ありがとうございました。(40代一般)
13. 登壇者の皆さんの熱量がすごく伝わってくる講座だった。コロナ禍においても行事等やることを前提に工夫するという姿勢に感動した。まだ先が見通せない中であって、より多くの関係者に周知したい内容である。(50代)
14. 保育関係の講座は、あまり聴く機会がないので、大変貴重でとても勉強になりました。特に今回良かったのは、研究者だけの講座ではなく、保育現場の方々が、数名いて、内容もリアルで、深く学ぶことが出来ました。(40代)

15. コロナ禍の子ども達の遊びについて気になっていたもので、色々な方から話を聞けて良かったです。コロナが流行って、子ども達の遊びが制限され、感染症対策をしながら、工夫して遊ぶことが必要になったことが分かりました。子ども達は、アタッチメント、くっつくことを必要としていますが、感染症対策で距離を取ることが呼びかけられ、不安と葛藤があったことに共感しました。ももやま子ども食堂の菅原さんの子どもに「お尋ねし続ける」という言葉が印象に残り、子ども達をみるだけではなく、自分から働きかけることを意識していきたいと思いました。お話ありがとうございました。(20代学生)
16. コロナ渦中で対応に柔軟さを求められる中、大変参考になりました。ありがとうございます。(30代子どもの居場所)
17. コロナ禍の中で、どのように保育活動をされているのかが知りたかった。様々な考え方を拝聴する事ができました。ありがとうございました。(40代)
18. 子どもの代弁者として素敵な実践をされている方々の報告はとても参考になりました。行政の方の参加も画期的で八方美人ぶりが現場にとってもたいへん心強いと感じました。ただ居ることで良いという場所が子どもたちに用意される重要性を改めて再認識しました。(50代放課後児童クラブ)
19. 保育所、児童館、行政等、それぞれの立場からのお話しが聞けて、良かったです。(40代)
20. 都合で3時半までの参加でした。岡花先生の分析の視点が大変参考になりました。また、うま市の放課後児童クラブの運営システムに大変興味を持ちました。(50代放課後児童クラブ)
21. コロナ禍の中、公園でお弁当を広げて子ども達が楽しそうな光景を久しぶりに見られて、感動したねですが、当たり前でできた事ができない中で、どう過ごせばいいのか、すごいお勉強になりました。ありがとうございます。(50代一般)
22. とても勉強になりました。子ども達の笑顔の為に自分にできる事をやっていきたいと思えます。(30代)
23. コロナ禍になかでの子供の育ち、心情を大切にしながらの子育ての工夫が感じられました。(60代保育所)
24. 時間は長かったが、とても面白かった。 コロナとどう共存し、子どもの遊びや居場所を担保していくのか、などとても興味深い話が多方面から聞けて参考になった。 話の中にもいくつか出てたが、子どもの権利についてもっと議論していく必要と、その権利をどう地域や施策などに落としていくのかも重要だと思った。 企画も大変だったと思いますが、お疲れ様でした。(30代子どもの居場所)
25. コロナだからこその取り組み方 参考になりました (40代保育所)
26. コロナ禍の中、やはり気になるのが日々の遊びや子ども達の関わり方です。他園の情報をお聞きしながら、実践できる内容もあり参考にしたいと思います。(60代保育所)
27. 長時間でしたが楽しんで参加できました。(30代保育所)
28. 内容が充実していて飽きさせませんでした。運営もスムーズでした。(60代)
29. いろんな分野からの先生方のお話を拝聴してよかったです。(70代保育所)

30. 各施設の取り組みや難しさ等、現状を知ることが出来て良かったです。(30代児童館)
31. コロナ社会の中で「遊び」というものは、すぐに切り捨てられるものだと思いました。しかし、子どもにとって遊びとは生きていくために必要不可欠なものであるとも知ることができ、今後考えていきたいテーマになりました。(20代学生)
32. いろいろな立場の方から、様々な取り組みの報告を聞け良かったです。コロナ禍は、まだ続きそうなので、行事の持ち方や遊びの工夫等、ヒントがもらえました。「子供の居場所の感染症ガイドブック」の紹介もしていただきありがとうございます。(60代保育所)
33. 新型コロナ感染対策の状況下で、子供たちが仲間と遊べる方法を探る考えを学んだ。(60代放課後児童クラブ)

■大学の取組等にご意見・ご要望

1. 貴校の開放的な校風が全国的にも広まっていますよう、私からも発信していきたいと思っています(50代一般)
2. これまでも土曜講座ではいろいろ勉強させて頂く機会となっており、ありがとうございます。特に、今回のように「持ち込み企画」を受け入れて頂けるスタンスが、改めて「地域に拓かれた」大学と感じ入りました。今後とも、学ばせて頂くことが多々あると思うので、よろしくお願いします。(40代地域住民)
3. オンラインでのこうした公開講座の開催がとてもありがたいです。今後も参加させていただきたいと思います。(個人的には、教育分野と沖縄の地質や歴史の分野に興味があります)(40代)
4. また、オンラインなどで参加できるものがあったら、お知らせいただきたいです。(40代放課後児童クラブ)
5. これからも続けて欲しいと願います。(40代保育所)
6. どの事業所にも家庭に問題を抱えている児童がいると思いますが、それぞれの対応や行政との繋がりや、繋げていくためにどうしているかを聞いてみたいです。(50代放課後児童クラブ)
7. タイムリーな内容で、受講の機会を与えていただき、ありがとうございました。(60代)
8. パワーポイントの共有があり、有り難かったです。(20代学生)
9. 第2弾の講座をぜひお願いします。ありがとうございます。(50代)
10. 研修を企画して下さい感謝です。(60代保育所)
11. 長年の継続、素晴らしいです。これからも期待しています。(60代)
12. コロナ禍真ただ中に貴重な情報を知る事の出来る良い取り組みだと思います。また機会があれば是非参加させていただきたいです。(30代児童館)

【講座の様子】



【登壇者：岡花 祈一郎】



【登壇者：上運天 健】



【登壇者：菅原 耕太】



【登壇者：天願 順優】



【登壇者：山城 康代】



【登壇者：山野 良一】



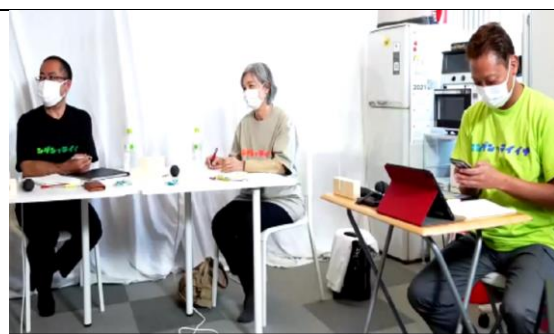
【司会：山崎 新】



【登壇の様子①】



【登壇の様子②】



【登壇の様子③】

第576回 土曜教養講座
2021年6月12日（土）

琉球列島の自然を考える
世界自然遺産登録に向けた現状と課題



講師：五箇 公一
【国立環境研究所生態リスク
評価・対象研究室室長】



講師：山田 文雄
【沖縄大学 客員教授・世界
自然遺産候補地科学委員会】



講師：盛口 満
【沖縄大学人文学部教授・学長】

コーディネーター：城ヶ原 貴通
【沖縄大学経法商学部准教授】



現在、「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」は世界自然遺産登録に向けた動きの最中にあります。5月10日には、自然遺産の評価を行う国際自然保護連合（IUCN）の評価結果が公表され、世界遺産登録表への「記載」が適当との勧告が出されました。正式には7月に開催されるユネスコの世界遺産委員会において決定されることとなりますが、上記地域の世界遺産への登録が決定的になったといえます。世界遺産への登録には、顕著で普遍的な価値（OUV）の評価基準を満たすと共に、「完全性」を満たすことが求められます。地元自治体、地元関係者、国など関係者の尽力もあり、多くの対策が講じられていますが、一方で現存・新規の危機への対応も求められます。本講座では、外来種に焦点をあて、その対策の現状と課題について概観していきたいと思います。

2021.6.12 土 先着 100名
14:00～17:00 ※視聴は無料ですが、事前申込が必要です

プログラム

14:00～14:05 開会挨拶

沖縄大学 学長 盛口 満

14:05～14:10 趣旨説明

沖縄大学経済法学部准教授 城ヶ原 貴通

14:10～15:40 「日本および南西諸島の生物多様性保全を目指した外来種対策、その現状と課題」

五箇 公一

15:40～15:50 休憩

15:50～16:20 「琉球列島の中琉球における二つの国立公園と世界自然遺産候補地としての課題～哺乳類学の視点から～」

山田 文雄

16:20～16:50 「世界遺産登録と沖縄大学一地域の大学がなうSDGsへの取り組み」

盛口 満

16:50～17:00 閉会挨拶

環境省沖縄奄美自然環境事務所 所長 東岡 礼治

登壇者



ご 五 公 一 五箇 公一 [国立環境研究所 生態リスク評価・対策研究室室長]

富山県生まれ。1990年、京都大学大学院修士課程修了。同年、宇部興産株式会社入社、農薬研究部に於て殺虫剤開発に従事。1996年、博士号取得。同年12月から国立環境研究所に転じ、現在は生態リスク評価・対策研究室室長。専門は保全生態学、農薬科学、ダニ学。著書「クワガタムシが語る生物多様性」（集英社）、「終わりのなき侵略者との闘い」（小学館）、「これからの時代を生き抜くための生物学入門」（辰巳出版）など。



や ま だ ふ み お 山田 文雄 [沖縄大学 客員教授・世界自然遺産候補地科学委員会 委員]

国立研究開発法人森林総合研究所に40年近く勤務後に現職。森林と野生動物の保全管理の研究、希少種アマミノクロウサギやトゲネズミの保全、外来種マングースやイエコ対策の研究などに従事。著書「日本の外来哺乳類」、「ウサギ学」（東京大学出版会）、訳書「ネコ・かわいい殺し屋」（築地書館）など。世界自然遺産候補地科学委員会。



も り ぐ ち み つ る 盛口 満 [沖縄大学 学長]

1962年千葉県生まれ、1985年千葉大学理学部卒業後学校法人自由の森学園の理科教諭となる。その後2000年に沖縄移住し、NPO法人珊瑚舎スコーレの講師となる。2007年から沖縄大学人文学部准教授として教鞭をとり、2015年に沖縄大学人文学部教授、2018年には同大学副学長、2019年4月から同大学長となる。専門分野は理科教育。所属学会は日本生態学会、漂着物学会。

オンラインの講義であり「Zoomウェビナー」を使って行います。Wi-Fiなどネット接続ができる環境で、PC・スマホ・タブレットなどから視聴できます。お申し込みされた方には、講義開始前日までに、接続先の情報（ログインURL）をメールにてご案内します。

■申込先 【MAIL】 chicken-staff@okinawa-u.ac.jp

（件名は「6月12日土曜教養講座申込」本文で氏名・電話番号の記載をお願いします）

■問い合わせ先 沖縄大学地域研究所 沖縄県那覇市国場405番地 【TEL】 098-832-5599



今後の公開講座等の情報をご希望の方へLINEで配信を行っております。左のQRコードよりご登録ください！

琉球列島の自然を考える 世界自然遺産登録に向けた現状と課題

【日 時】 2021 年 6 月 12 日(土) 14:00～17:00
【会 場】 アネックス共創館
【登壇者】 五箇公一（国立環境研究所 生態リスク評価・対策研究室 室長）
山田文雄（沖縄大学客員教授・世界自然遺産候補地科学委員会委員）
盛口満（沖縄大学 学長）

【聴講料】 無料

【申込人数】 101 名

【参加者内訳】 ※アンケート回答数 35 人

(年代別)		(所属別)	
10 代	1 人	一般	22 人
20 代	6 人	地域住民	4 人
30 代	8 人	本学同窓会	1 人
40 代	4 人	本学後援会	0 人
50 代	12 人	沖大生	0 人
60 代	3 人	学生	4 人
70 代以上	1 人	本学教員	0 人
		その他	4 人

(都道府県別)		(講座を知った方法)	
沖縄県	12 人	その他	11 人
鹿児島県	4 人	メール	9 人
東京都	2 人	チラシ	6 人
神奈川県	2 人	友人・知人	6 人
千葉県	1 人	沖大ホームページ	2 人
青森県	1 人	LINE	1 人
福島県	1 人	ラジオ	0 人
岐阜県	1 人	新聞	0 人
千葉県	1 人		
栃木県	1 人		
京都府	1 人		
兵庫県	1 人		
香川県	1 人		
ハワイ	1 人		

■感想（漢字表現等は原文のまま。）

1. 外来種に焦点を当てるとしながら、演者ごとにその程度が違い、三者の講演の関係も意味不明な感じでした。（50代一般）
2. 上手くアクセスできず、不参加になってしまいました。申し訳ありません。（40代一般）
3. 奄美琉球地方のユニークな生物やそれに根差した文化、それらを保全する意義などとても勉強になりました。（20代一般）
4. 初めて参加させて頂きました。五箇先生のプレゼンがすごく聴き易く分かりやすかった。

またこういった機会があるなら是非聴きたいと思った。琉球列島の特殊な環境のことや生物多様性に始まり、日本の社会のあり方について考えさせられた。すごく有意義な時間でした。(30代一般)

5. 非常に面白かったです。時間帯や時間の長さも良かったです。ありがとうございました。(50代一般)
6. 五箇先生の話はわかりやすく勉強になった。2部の講師の先生方の話も面白かったが、レジュメの棒読み感が強くて単調に感じました。毎回楽しみに講座を受けさせてもらっています。準備等ご苦労様です。また、次回もよろしくお願いします。(30代一般)
7. 講師の方の説明が専門的にもかかわらず、大変わかりやすかったです。(50代一般)
8. 持続可能な社会の実現はすなわち世界遺産を守る、絶滅危惧種を守る、日々の生活の中で自然環境を守ることが大事だとよくわかりました。(60代一般)
9. 非常に勉強になりました、このような講演会をオンラインで開催していただき、感謝しかありません(40代一般)
10. タイムリーな話題について、素晴らしい講師からの講義を受けられて良かったです。(50代一般)
11. たいへん興味深く受講しました。とくに五箇さんのお話は伺えて幸運です。皆さまの講義から、沖縄の自然の置かれた状況がよく分かりました。八重山についても積極的に言及されていたのが率直に嬉しく思いました(50代一般)
12. 大変勉強になりました。特にげっちょせんせいの話が面白かったです(60代地域住民)
13. 同じ世界自然遺産地域として参考になりました。(30代一般)
14. 大変勉強になりました。参加できて良かったです。Youtubeなどで配信はされないのでしょうか。(30代一般)
15. とても興味深いお話を聞くことができました。面白かったです！(20代学生)
16. 今回のシンポジウムは大変興味深く拝聴しました。特に個々の生物種に関する詳しい話は初めて聴くことも多く、とても楽しかったです。また、生物多様性が、私たちのライフスタイルや社会のあり方と深く関わっていることにも言及されていて、とても良かったと思います。沖縄総合事務局や商工会・コンベンションビューローの方達にも聴いて欲しい内容でした。自然環境が生活から乖離してしまっている今、日々の暮らしとどのように結びついているのかを丁寧に伝えていくことの大切さを改めて感じています(大学生のアリの絵にはショックを受けました！)。今回の世界遺産登録は、ゴールではなく始まりですね。今後とも、地域の自然を守るものの意味や課題に関する講座やシンポジウムの開催を期待します！(50代)
17. コロナ対策とはいえ、県外在住者も学べる、このようなオンライン講座は素晴らしいことだと思います。(60代一般)
18. 世界遺産へ登録される顕著な普遍的価値についての説明、今後の取り組み等、もう少し深い話が聞きたかったです(50代)
19. 3時間があっという間に感じられるほど、内容が濃くとても勉強になりました。世界自然

遺産登録が目の今、地域の人々がしっかりと島の自然の素晴らしさを理解し、保全と活用をバランスよく両立させるための方法を考え、「自分たちの島をどうしていきたいか」を議論していく必要があると改めて感じました。(60代一般)

20. 先生方大変貴重なご講演を拝聴させて頂き、感激いたしました。本来日本は貴重な生きものの宝庫であったこと、それを失ってしまっていること、その損失の大きさ、いまでも生き続けている固有種がどんなに大切で、かれらを守り続けることが、絶対に必要であることが、よくわかりました。守り続けるために、私たち自身と社会がどうあるべきか、真剣に考えなければと思います。ありがとうございました。(50代一般)
21. とても楽しく聴講できました。(50代沖大同窓会)
22. 五箇先生のお話、とてもわかりやすく興味深かったです。新たな学びになりました。ありがとうございました。(50代一般)
23. 非常に興味深い内容でした。講義形態(ZOOM ウェビナー)も大変合理的で受講しやすかったです。(20代)
24. 楽しく拝聴させていただきました。絵での振り返りが良かったです。(30代一般)
25. 五箇さんのお話がめちゃくちゃ面白かったです。ダニの専門家でいらっしゃるんですが、今回は、外来種に関しては超一流のインタープリターだと感じました(失礼でしたらすみません)。ほぼ興味のない人にもあれだけ外来種のことをわかりやすく説明できるのは今は他にいらっしゃらないのではないかと思います。宮古島のクワガタもなかなかショッキングな事実でした。山田先生のお話、外来種駆除と在来種の関係も素晴らしかったです。奄美外来種駆除、すごいですね。しかし、外来種に関しては、やはり持ち込んだ人間に一番の責任があり、今後も人間サイドのライフスタイル(ゴミがあればカラスがやってくる。可愛いからと安易に野生生物を移入する)をもっと考え、規制しなくてはならないことを感じました。そういう意味では、盛口学長の話は、本来の持続可能性、私たちがゴールとするところの未来像のお話でもあったことを感じます。そもそも自然界とのバランスの取れたライフスタイルとはどうであったのか、そこに立ち戻るためには、どう私たちが自身をコントロールしなくてはならないのか、大きな課題だと思います。世界遺産地域の海域について、そういえば、グレートバリアリーフでは、前回の保全地域の見直しにかなりの時間をかけたことを思い出しました。研究者、漁業者、アボリジニの方、観光業、一般の人を対象に地図つきアンケートを実施して、その整理に5年かかったと聞いています(担当者は気が遠くなりそうだったと話していました)。今回のように遺産地域の指定は陸域だけでも相当大変ですが、もし、保全の希少価値があるのならば、ぜひ、次のステップとして、海域の遺産地域指定もあるのではないかと思います。そのためには、相当の時間と尽力が必要となりますが。。。 (その工程については、確か2005年にGreat Barrier Reef公園局が、INPACというワークショップを開催しているので、どこかに資料はあるかと思います)。今回は貴重な機会をありがとうございました。(50代地域住民)
26. 奄美、沖縄の世界自然遺産登録について身近に聞くことが出来て、大変貴重な機会でした。趣味ですが生き物に興味があるので、専門的なお話もたくさん聞けて嬉しかったです。本島には旅行で何度もお邪魔していますが、次回はまた違う楽しみ方が出来そうです。廉価なものではない世界遺産ツアーに参加できるのを楽しみにお金を貯めておきたいと思います。(40代一般)

27. 様々な視点からのお話が聴けて、どの講演も大変勉強になりました。最後の盛口学長のお話を、ゆっくり聞けなかったのが残念でした。またの機会がありましたらぜひ詳しく聞いてみたいです。（５０代地域住民）
28. 知識がない人にも向けて、世界遺産登録の経緯を教えていただき、わかりやすくとても勉強になりました。（２０代一般）
29. 興味深いお話が多く、とても勉強になりました。次があればぜひまた視聴したいと思います。（１０代学生）
30. 盛り沢山な内容で聞きごたえがありました。私は修論でヤンバルクイナを扱っていますが、コロナでやんばるの状況を実際に見に行けていないのでとても参考になりました。貴重な機会をありがとうございました。（２０代学生）

■大学の取組等にご意見・ご要望

1. 今後も、様々な視点からの取り組みを期待しています。（４０代一般）
2. 南西諸島全域で地域性の関わり、島嶼環境の研究を推進できたら、もっと大琉球としての沖縄の知見が深まりそうだと感じました。（３０代地域住民）
3. 今後とも web を活用した公開講座の実施をお願いします。（５０代一般）
4. とても内容の深い、面白いセミナーでした、ありがとうございます。（６０代一般）
5. 今後も企画をお願いします。（５０代一般）
6. 素晴らしい理念でいらっしゃいます。それだけ地域に根差した学校が内地にあるだろうか？と考えてしまいました。もしそうであれば、その地域と同様に沖縄のことも尊重されるはずだと思います。それぞれの地域に対する興味の浅さが、結果的に、沖縄への関心の低さを構成しているのではないのでしょうか？（５０代一般）
7. よい取り組みをたくさんしていると思います（６０代地域住民）
8. 今後ともどうぞよろしくお願いいたします。（３０代一般）
9. 理系学部がないにもかかわらず、社会科学と自然科学とを関連付けて地域の課題に取り組み、また地域に開かれた大学として、このように講座の開催を続けておられることに、敬意と感謝を表します。（５０代）
10. 40 年近く前、沖縄に住んでいた時に「土曜講座」に何度か参加しました。この講座が現在まで継続されていることに感動しています。（６０代一般）
11. このように貴重なご講演を、自分のような一般の人間も拝聴させていただけるのは、夢のようです。感謝と感激でいっぱいです。ありがとうございます。（５０代一般）
12. これからも期待しています。（５０代沖大同窓会）

【講座の様子】



【登壇者：五箇 公一】



【登壇者：山田 文雄】



【登壇者：盛口 満】



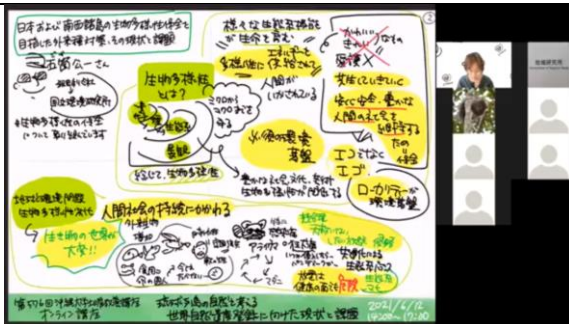
【城ヶ原 貴通】



【東岡 礼治】



【登壇の様子①】



【登壇の様子②】



【登壇の様子③】

第577回 土曜教養講座
2021年7月3日(土)

若年妊婦をどう支えていくのか



講師：山内 優子
【一般社団法人 おきなわ
こども未来ネットワーク】



講師：島村 聡
【沖縄大学人文学部教授・
沖縄大学地域研究所所長】



講師：平安名 萌恵
【立命館大学大学院 先端
総合研究科一貫制博士課程】

コーディネーター：山野 良一
【沖縄大学人文学部教授・沖縄大学地域研究所副所長】

第577回沖縄大学土曜教養講座 オンライン講座

若年妊婦を どう支えていくのか

児童虐待事件がここ数年相次いでいます。特に、生まれたばかりの赤ちゃんを遺棄したり、殺害したりして、若い女性が逮捕される報道が連続しています。そうした若年女性は、みな孤立したまま出産を迎えており、本来SOSを出せる環境や支援があれば子どもも母親も多くの場合最悪のシナリオにはならなかったはずです。

今回の土曜教養講座では、県内で初めて妊産婦の支援に特化した宿泊型居場所を開設した、一般社団法人おきなわ子ども未来ネットワークの代表理事、山内優子先生をお招きし、居場所を開設した経過や理念、支援方法などをお話いただきます。ひとりぼっちの環境で出産を迎える若年妊婦をどう支えるべきか、児童虐待による不幸な事件を生まないために私たちに何ができるか、みなさまと一緒に考えたいと思います。

2021.7.3 土

14:00~16:00 ※視聴は無料ですが、事前申込が必要です

先着
100名

プログラム

14:00~14:05 開会挨拶・趣旨説明

沖縄大学 山野 良一

14:05~15:05 生まれてくる子と母の未来を紡ぐ

山内 優子

15:05~15:35 鼎談

山内 優子・島村 聡・平安名 萌恵

15:35~15:55 質疑応答

15:55~16:00 閉会挨拶

登壇者



やまうち ゆうこ 山内 優子 [一般社団法人
おきなわ子ども未来ネットワーク]

琉球大学心理学科卒業後、沖縄県庁に入庁し、児童相談所や女性相談所など福祉の現場に30年勤務。在職中、わが子と同年齢の子どもが虐待を受けているのを目の当たりにし衝撃を受け、児童虐待問題を調査。退職後は沖縄大学で非常勤講師をする傍ら、沖縄の子どもの貧困問題に取り組み、2019年4月一般社団法人おきなわ子ども未来ネットワークを立ち上げ、若年妊婦問題に取り組み本年4月妊産婦の宿泊型居場所を立ち上げた。



しまむら さとる 島村 聡 [沖縄大学人文学部福祉文化学科 教授
沖縄大学地域研究所 所長]

那覇市役所での福祉実務経験を経て、2013年から沖縄大学で、障がい者自立支援制度や福祉コミュニティに関する講義を担当。県内の子どもの居場所の抱える課題や貧困対策支援員の実情を調査し政策提言を行っている。内閣府振興審議会委員、沖縄県障がい者施策推進協議会委員を務める。



へん な も え 平安名 萌恵 [立命館大学大学院
先端総合学術研究科一貫制博士課程]

沖縄県出身。沖縄県内で、シングルマザーの生活史インタビュー調査と、母子世帯の支援施設等で参与観察調査を実施。公益財団法人沖縄協会『第29回金城芳子基金』助成者に選定。

オンラインの講義であり「Zoomウェビナー」を使って行います。Wi-Fiなどネット接続ができる環境で、PC・スマホ・タブレットなどから視聴できます。お申し込みされた方には、講義開始前日までに、接続先の情報（ログインURL）をメールにてご案内します。

■申込先 【MAIL】 chicken-staff@okinawa-u.ac.jp

（件名は「7月3日土曜教養講座申込」本文で氏名・電話番号の記載をお願いします）

■問い合わせ先 沖縄大学地域研究所 沖縄県那覇市国場405番地 【TEL】 098-832-5599



今後の公開講座等の情報をご希望の方へLINEで配信を行っております。左のQRコードよりご登録ください！

若年妊婦をどう支えていくのか

【日 時】 2021 年 7 月 3 日(土) 14:00～16:00
【会 場】 アネックス共創館
【登 壇 者】 山内優子（一般社団法人おきなわ子ども未来ネットワーク）
島村聡（沖縄大学人文学部社会文化学科 教授）
平安名萌恵（立命館大学先端総合学術研究科一貫性博士課程）

【聴 講 料】 無料

【申込人数】 199 名

【参加者内訳】 ※アンケート回答数 75 人

(年代別)		(所属別)	
10 代	2 人	一般	44 人
20 代	6 人	地域住民	9 人
30 代	7 人	本学同窓会	1 人
40 代	19 人	本学後援会	0 人
50 代	26 人	沖大生	1 人
60 代	10 人	学生	2 人
70 代以上	5 人	本学教員	1 人
		その他	17 人

(都道府県別)		(講座を知った方法)	
沖縄県	57 人	チラシ	19 人
東京都	8 人	その他	18 人
福岡県	3 人	メール	17 人
静岡県	2 人	友人・知人	16 人
千葉県	2 人	沖大ホームページ	3 人
北海道	1 人	LINE	2 人
岐阜県	1 人	ラジオ	0 人
愛媛県	1 人	新聞	0 人

■感想（漢字表現等は原文のまま。）

1. 有益な講座であり、色々と具体的な課題を確認することができた。（60代沖大教職員）
2. とても勉強になりました。ありがとうございました！（40代一般）
3. 大変濃い内容で、非常に勉強になりました。ありがとうございました。（50代一般）
4. 仕事で若年出産された方に関わりがあるので、具体的な現在の状況を知ることができました。研究が沖縄の現状に活かされていくといいです。ありがとうございました。（50代一般）
5. 本日の聴講で、あらためて産官民学の 四つに組んだ、地域コミュニティーの 力が必要なんだと感じました。山内先生をはじめ、皆様の取り組みが 実り多きもので有る事を願うと共に、微力ながら協力できる 所から出来る事をさせて頂きます。（50代その他）
6. 具体的な取り組みで、救われている若年妊婦さんがたくさんいらっしゃるんだと感心致しました。とても、興味深く拝聴させて頂きました。ありがとうございました。（50代一

般)

7. 大変素晴らしい内容でした。 山内さんのグループの取り組みに感謝です。 関心の有ることなので、県民の一人としてなにが出来るか。関心有る人達と話し合いたいと思いました。ありがとうございました。(70代一般)
8. 山内先生の行動力に感銘を受けました。(40代地域住民)
9. 今、必要と思った支援を始められたというスピード感が、暖かくさわやかな感じがしました。 大変なときは寄り添いなが、本人達が自ら望む未来に進むための支援をされていて、とても、大切な活動だと思いました。 講師の山内先生、平安名先生 企画、進行して下さいました。皆様、ありがとうございました。(50代地域住民)
10. 若年妊婦をどう支えているのか、実際のお話が聞けて良かったと思います。ありがとうございました。児童虐待や乳児を捨てるなど、悲惨な問題が沖縄で起こっていて、その背景には(若年)女性の孤立があり、困っている人が少なからずいる事を改めて認識できました。沖縄は、76年前の戦争で社会が崩壊した地域です。その中で生きてきた人の中には、様々な能力を育てるだけの十分な環境が整っていなかった事も多かったのではないかと推測できます。悪循環が引き継がれたり、本人の選択による場合もあるかもしれません。どのようなことが原因でも困っている人を放置せず、誰がこの子らを救うのかとの思いで行動されている事に感銘を受けました。少しでも応援できればと思いました。頑張ってください。今日は、大変勉強になりました。ありがとうございます。(50代地域住民)
11. 性教育の必要性と男女共に避妊する。(70代)
12. 若年妊婦の支援について、実践のうえでも身近にあるため、非常に参考になりました。 山内先生の取り組みは本当に学びが多く、ヒントを得ることができました。(40代一般)
13. とても参考になりました。大学院生の先生が、妊娠している方たちが自分のことを伝える為のスキルは、凄く難しいことだとおっしゃったことが、とても印象に残りました。彼女たちを理解してあげるためにも、じっくり聴いてあげることは、本当に大切だと思いました。今日は、ありがとうございました。(50代一般)
14. 勉強出来る機会を頂きありがとうございました。これからは私に出来ることを模索しながら勉強し一支援者であり続けたいと思います。(50代地域住民)
15. 昨今の「若年妊娠・出産・遺棄・逮捕」などのニュースに「彼女たちだけが悪いのか？」と胸を痛めていた折、沖縄県でもこのようなサポートが始まった事を知り、とても素晴らしい取り組みだと思いました。 本当に偶然ですが最近、今回のお話をドラマ化したかのような「朝が来る」という映画を無料配信サイトで見たところだったので、皆様のような活動や、若年妊娠した子達の居場所作り、養子縁組の仕組み、喜びや悲しみなど、もっと多くの人に理解してもらうにはすごくいい映画じゃないかなと思いました。 本当に子供達の命や生きる権利を守るための貴重な取り組みをして下さってありがとうございます。私も今後何らかのお役に立てるようにアンテナを張って、受信発信できるよう努力したいと思います。(40代一般)
16. 若年妊産婦と生まれてくる子ども達の置かれた状況等について、私たちは社会的課題の一つとして認識し、今後も興味・関心を持ち続ける必要があると痛感させられました。 また、当事者がもっと「助けて」と声があげられるようにしていくために、幼少期から「自分を大事にする」ことをもっと教育していくことが大事なことで、自己責任論にしてしまう歪んだ(未成熟な)社会からもっと寛容な社会にしていく道筋をどう描いていくのか、私たち一人ひとりが考え、そして行動していく当事者であること等を考えさせられました。今日は貴重な機会をいただき、ありがとうございました。(40代)

17. 素晴らしい取り組みだと思いました。ちょこさん今日もすごかったです。（30代地域住民）
18. 率直にとっても良かったと思います。こういう話合いがもっと早くになされていればとも思いました。一番印象的な事は最後に平安名さんが仰った当事者の彼女達にとって相談すると言う事はとてもスキルが高いという事。やはり大人の側が彼女達に近づき支援をする必要があるという自覚が大切だと思います。中学生で妊娠してしまう子供は家庭に問題を抱えていて経済、教育、社会との関係性、色んな貧困を抱えている事が分かりました。ありがとうございました（60代一般）
19. 沖縄の若年妊婦の課題などを知ることができ、それを解決しようと活動している山内先生のような方々が様々な支援を行なっていることを知ることができました。貴重なお話ありがとうございました。（20代一般）
20. チャットにいろいろ書かせていただきました。今後、グラレコの活用を他でもできたらいいなと思いました。ありがとうございます。（60代）
21. 若年妊産婦支援事業所で勤務しています。山内先生の想いに感銘を受けました。今後のさらなる活躍に期待しています。チャコさんのまとめに感動しました。素晴らしい（40代一般）
22. 大変よくわかりました 日頃から若年妊婦への関わりについて悩むことがありましたが今日の講演を聞いて居場所づくりが実現した事に感銘を受けました 更なる活動に期待しています（60代一般）
23. 未来ネットワークの活動内容が全国に拡がり、社会全体で支援をしていくことの意義を様々な人が考え、実践していくことに繋がることを願います。（50代一般）
24. 沖縄の現状について学ぶ貴重な機会でした。ありがとうございます。（50代一般）
25. 貴重な講座を有難うございました。大変勉強になりました。ぐられこ画面は理解しやすくまとめられ有難かったです。音声はちょこさん以外は聞き取りにくかったです。（70代以上）
26. 今日の講義で、若年妊婦を助ける取り組みとして、具体的にどういった活動をしているのか学ぶことができました。私は、大学で福祉を専攻している学生で、若年妊婦が多い沖縄の現状からどう支援していくのか、考えていたので、大変勉強になりました。日本は、申請主義の制度が多いので、社会に助けてもらうには自分から行動しなければなりません。この「まりやハウス」もより多くの人たちに知ってもらうには、知ってもらう活動をしななければならないと感じました。学校などの教育機関との連携も強化して、妊娠や出産で悩んでいる女の子や女性が1人で抱え込まないでいいような環境を作っていけるといいなと思いました。（10代学生）
27. 自分自身が性教育や性の多様性などを中心に、若者（場合によっては子供）と性そして若者の孤立や貧困について関心を持っていたので今回の公開講座を受講した。沖縄で若年妊娠・出産が多いというのは知っていたが、全国平均に比べて2倍という具体的な数字には驚いた。今日の講座を通して実際に課題と向き合い実行に起こしている方のお話を伺うことが出来たのは、自分にとって大きな学びがあった。このような問題は、常に自己責任論の下、当事者を見捨てるという社会の流れがあったように考えるが、「弱いものは弱いらしく」という社会構造的な暴力が顕著に表れている部分だと感じる。そこに一石を投じる形で、「彼女たちの不安によりそう支援」「彼女たちとその子供たちの居場所を作る支援」「彼女たち自身の自立への支援」「公的支援への接続を目指す地域全体でのケアとしての支援」という4段階にわかれ

た支援のあり方はとても印象的だった。当事者が自ら支援を拒んでしまうという、一見矛盾した出来事も、その裏に彼女たちの「不安」が必ずどこかに存在しているということを発見されるのが素晴らしいと感じた。支援が当事者に届くものでなければいけないという当たり前の姿勢で有りながら、現在新たなプラットフォームとして機能しているという側面を見れば、「(公的) 支援」はまだ当事者の目線に立っていないのだろうと考えた。現在の課題としてあげられていた「予算と公的機関との連携」が必須となってくることは、先述の4つの支援フェーズを見ても明らかである。最終的に彼女たちは自立し地域に戻っていく必要があるわけで、そのためには地域レベルのケアが求められ、つまり公的部分への接続が求められるようになるからである。簡単に答えが出ることではないが、少なからず「生命」を取り扱う議論としてより多くの関心が払われるべきであるし、社会的関心の高まりに合わせて、当たり前前に話せる環境・社会が整備されていくにはなにができるか考えようと思った。(20代学生)

28. 色々なすばらしい支援があることがわかった。社会で育てる世の中になるように支援したいと思った。最後のイラスト解説もたいへんよかった。(50代一般)
29. 本日の講義もとても有意義でした。スタッフの皆様、登壇者の方々お疲れ様でした。有り難う御座いました。(30代一般)
30. 山内さんの活動に興味を持っていたのでお話を聞けて良かったです。(60代一般)
31. 若年妊婦の支援は、いろいろな制度からこぼれ落ちてしまう支援だと思います。若いからうめない、育てられない社会にならないように、各地で取り組めたらと思います。(50代)
32. 沖縄県の抱えている若年妊娠の実態や課題、支援の現状について知る機会となり、とても興味深い内容でした。地域で子どもを育てることが沖縄の未来につながる、私自身もそう強く思ったので何らかの形で支援や応援をしていきたいと思います。(40代一般)
33. 仕事で若年出産された方に関わりがあるので、具体的な現在の状況を知ることができました。研究が沖縄の現状に活かされていくといいです。ありがとうございました。(50代一般)
34. 沖縄の切実な問題を「考えるだけでなく、課題解決のためにまずは、動くそこからまた疑問や新たな課題解決へ向けて動く待つのでなく、動きエビデンスを結果世論が味方に、行政の支援につながる真剣に悩み、真剣に考えることで、仲間が賛同!!そして小さな一歩の歩みが勇気ある行動に」私自身も山内先生の行動に勇気をもらい未来の沖縄の人材育成につながることにチャレンジいたします。素晴らしい内容の講座に感謝申し上げます。(60代 沖大同窓会)
35. 養育里親をしている繋がりや、若年の妊娠、出産に興味があります。大人の都合で振り回されるお子さん達に接する機会が多く、早い時期からの性教育、予期しない妊娠予防のための知識の必要性を強く感じます。妊娠初期からの寄り添い、宿泊型のケア施設、特別養子縁組の斡旋機関の設立と切れ目のない支援は素晴らしいと思います。もし愛知で支援の手が必要な時は、是非お声掛け下さい！今日は内容濃いお話をありがとうございました。(50代)
36. 公開講座に参加させていただき、本当にありがとうございました。学校で支援職に携わっております。こんな施設があつたらいいな…そう思っていた中、まりやハウスの立ち上げに尽力された皆様に頭が下がるばかりです。また、山内先生が中絶と養子縁組の選択肢もお示し下さり、あらためて、生徒にとってこれから続く人生にとって何が大切なのかを丁寧に寄り添いながら考えていきたいと思いました。個人的には、男性パートナーへのケアと教育や、若年カップルの保護者との橋渡しも同時平行で不可欠な支援だと感じており

ます。 今後は、予期せぬ妊娠出産の背景にある男性側の課題について、女性支援と両輪で教育と支援の輪が（特に男性の間から）広がっていくことを期待しております。（50代一般）

37. いつも、心に響くテーマを有難うございます。リアルタイムで支援を行う中で、興味深いテーマでした。今日の登壇者様のお話をうかがい、直近の経験から思うことは、当事者の人生は続くなか、やれることが決まっている支援側は、とある部分的に関わりを持つだけなので、当事者を支援機関が奪い合うことなく、あらゆる視点に立ち、各支援機関が支援を行う目的や意味、役割を互いに確認しあい、隙間を埋めあうことは、大切だなと感じました。そして、当事者含め支援者同士の真の信頼関係が構築ができてこそ、地域での見守りや重層的支援は可能になるなと思いました。また、男性視点で、若年層に対する支援を行うことも大切で、妊娠を告げられ、逃げる選択をせざるを得なかった男性自身の悩みはどこにあるのか、その視点にたつことも次のフェーズとして最も大切ではないか？と感じます。（40代一般）
38. 有意義な時間でした。若年層だけではなく、ひとり親家庭の課題やニーズもわかりやすかったです。山内先生の活動は、本当に素晴らしいと思いました。平安名さんの聞き取り調査での真摯な姿勢が感じられました。これからも、応援しています。（40代一般）
39. 周りでこどもが出来た人が増えてきて、自分が実際に妊娠してしまった場合のためと、そういった妊娠してしまった友達に協力したくて参加しました。ボランティアにも関わらず山内さんを初め多くの方が若者妊娠への、対策を行っており本当にすごいなと感じました。また、妊娠、出産の手助けだけでなく、夢や自立するための相談なども受け付けており、若い子が妊娠しても安心して通える環境が本当に素晴らしと思いました。こういった場所があることを妊娠で悩んでいる友達が居れば伝えたいと思いました。（10代学生）
40. 沖縄の若年妊婦の状況や支援の実際について知ることが出来ました。具体的な活動がわかり貴重な学びでした。継続して息の長い支援ができるようになることを願います。併せて性教育の必要性を感じました。（50代地域住民）
41. 話しも聞きやすく良かったと思います。母親、子ども共に支援していくことが大事だと改めて思いました。そして、沖縄県で特別養子縁組の認知がもっと広がってくれたらいいなと思いました。（30代一般）
42. 若年妊娠 SOS のサポーターとしてもボランティア活動していますが、本日の優子先生のお話を聞いて、さらに地域の若者の困難としている状況に寄り添いながら、活動に力を入れていきたいと思いました。「なければ創ればいい」という優子先生の言葉にもとても勇気を頂きました。なにかしら発信していればお金もついてくるかも（笑）しれないと思いました。SOSサポーターとして、また地域の活動をするものとして学校との連携がとても課題だと感じています。そこへのテコ入れは誰が先頭に立つべきでしょうか？是非、その課題・話題にも切り込みいれていってほしいなと感じました。（50代一般）
43. 素晴らしい取り組みです。長年の課題でした。山内さんの取り組みに感謝しています。（70代以上一般）
44. 若年の妊娠出産について、0歳児、生後一日で死亡している事に驚きました。そして、何週目かによって中絶費用が、大幅にあることは知りませんでした。妊娠に気づかず何ヶ月も経って、妊娠に気づけば産んでそのまま置き去りしかないと、理解してはいけなはずだけど、多額の費用が準備できないのだからだと理解できました。責める事はできない、不安と怖い思いをしているのは本人達、守ってあげたいと痛感しました。相談できる人と機関、安心していられる場所、情報を知る事ができました。私も、山内先生の所でボランティアをしたいと思いました。主催の、沖縄大学に心から感謝申し上げます。（50代地

域住民)

45. 若年妊婦の支援の他 望まない妊娠をどう支援できるのか多くの示唆がございました。貧困の連鎖を断ち切る事や虐待予防にもつながるものです。公的機関だけでは、このような宿泊型やリングキャンペーンの取り組みは難しいものです。沖縄県は若年妊婦 子ども貧困問題を官民一体となって取り組む必要性を感じました。(50代一般)
46. 若年妊産婦の居場所についてとても興味深く拝見しました。どこにいても安心して出産、子育てができて、こどもだけではなく母となった女性も自分のやりたいことに希望が持てる場と人が各地にできたらいいなと思いました。私も静岡でプチ家出ができる場所をつくりたいと思います。道がないならつくればいい、力をいただきました。ありがとうございました。(40代一般)
47. 若年妊婦の問題に具体的に寄り添って考える姿に感銘しました。(50代一般)
48. 若年妊婦の支援の大切さや社会全体で見守り安心して子育てができる長期的な支援の大切さも学ばせて頂きました。今後、若年妊婦に出会って関わる際、今回学んだことを生かしていきたいと思います。ありがとうございました。(50代)
49. 沖縄未来子どもネットワークの活動について知ることが出来ました。また、グラフィックレコードを初めて見たのですが、とても興味深かったです(よりわかりやすくまとめられていてとても良かったです！(30代一般)
50. 今現在進行中の活動について、やっていく中で見えてきたことなど、聞けてよかった。(30代一般)
51. 課題解決に行動する山内先生始め皆さんに先ず敬意を表します。沖縄県の若年妊産婦の状況を理解することができました。教育や医療を含め、協働していくことが必要だと感じました。当事者(男性側も含めて)の声が集まる、そして発信できると影響は大きいのではないかと思います。(60代)
52. 山内先生の行動力に感銘をうけました。(40代地域住民)
53. 必要なことを次々と取り組まれていることに敬服しています。性教育と産前産後子育て支援と自立支援で命と女性の人権が守られる社会をめざすモデルとして素晴らしいです。(60代)
54. 普段あまり身近に感じていない問題を考えるきっかけになりました。ありがとうございました。(20代一般)
55. 山内優子先生の「道がないならつくればよい」との取組みに敬意を表します。1日も生きられなかった子ども達も含めて児童虐待致死は悲惨過ぎる。1日もわが子を慈しんであげられなかったお母さん達も含めてわが子を手にかけてしまった女性達の生は悲惨過ぎる。。どちらにも手を差し伸べてあげる支援の仕組みに着手されたのですね。(70代)
56. 若年妊娠について理解しました。(20代一般)
57. とても意義深いテーマの講座だったと思います。コロナ渦において外出自粛が続く中で若年層の望まない妊娠が増えたという新聞記事を目にしたことがあります。若年カップルで誰にも相談できずに時が過ぎてしまったという例もあると思います。最後のお話で100%の避妊方法は性行為をしないこと、というお話がありましたが、性行為を断れない女性、避妊をパートナーにお願いがしづらい状況もあるかもしれません。妊娠は相手が必

ずいて成立することですが、女性ばかりに責任を負わせる結果となっていたり、責めることになる社会風潮もやはりおかしいことをあらためて感じました。姓へのとらえ方、命の大切さを社会全体でとらえなおす機会が必要ではないかと思います。また、若年層の妊娠のケースには家庭環境の問題が背景で放任家庭、虐待やネグレクト等、十分な愛情を得られず、付き合った異性と性的な関係を結ぶことで寂しさを紛らわす、気持ちを慰めるということもあるかと思います。そうした子どものサインを学校関係や周囲の大人が気づいていくことも合わせて必要だと思いました。ありがとうございました。(40代)

58. 沖縄県で行っている妊産婦の支援の実態がわかりました。(60代一般)
59. 平安名さんのお言葉一つひとつに大変共感しました。若年出産者へ自立を求めたくなる社会ですか、そこを強調するのはより孤立化することを危惧しています。平安名さんの調査が多方面に伝わることを願います。土曜教養講座の企画運営ありがとうございます。受講機会がひらかれていることに感謝します(50代一般)
60. 学ぶ事がたくさんあり、考えさせられる内容でした(40代一般)
61. とても勉強になりました。若年妊婦の現状と課題を改めて考える機会になりました。沖縄の若年妊娠の多さは、予想してはいいましたが、全国平均の2倍というのは驚きでした。学んだことを職場で還元していきたいと思います。本当にありがとうございました。(40代一般)
62. 山内さんは本物の福祉の人だと感動しました。利用者ニーズをとらえて、施策がなければ自分で作ればいいという考え方、本当に賛同いたします。しかし「言うは易し行うは難し」それを実行に移すのは並大抵の事ではありません。情熱と知識と人脈がなければできない事でもあるので、本当に素晴らしいと感動しました。県職員であったことを本当に生かしてらっしゃって、沖縄の誇りだと強く思いました。多くの人が救われていると思います。ありがとうございました。(60代)
63. 若年妊婦を支えていくために、自分自身が知識を持つことや支援してくれる場所を知ることが大切だと感じた。(20代一般)
64. 市町村の母子保健分野で働いています。素晴らしい取り組みについて知ることが出来て大変勉強になりました。ありがとう御座いました。(30代一般)
65. パワポスライドもわかりやすく、最後のちゃこさんのまとめもわかりやすかったです。これまで、一度申しましたが、募集人数に達していて参加することができませんでした。これからも、また、参加したいです。(40代)
66. 今回の講座を拝聴して、沖縄県の若年者の妊娠、出産を支えている組織について理解することができました。ありがとうございます。私も、今後何らかの形で関わっていけたらと思います。(50代)
67. 若年妊娠で悩んでいる方々の相談場所ができたことはとても良いことだと思います。沖縄本島北部地区の10代の女性には、安易な考えで若年妊娠、出産が多く、貧困の連鎖が続いていくのではないかととても心配しています。性教育の重要性や保護者への教育や周知などももっと広めてほしいと思いました。講話ありがとうございました。(30代一般)
68. メディアで報道されていて、他人事の相談内容ではないと思い、現状を知りたくて聴講させていただきました。山内さん・平安名さんの受け止め聴く、耳傾ける姿勢がはじめにありき。決してお叱りご指導から始めては関係が築けないので、そもそもの支援が始まらない。始める心がまえはみな同じですね。(50代一般)

69. 沖縄が抱える若年妊産婦の支援や課題・現状を知ることが出来た。行政・民間が協力して長く続く支援ができれば良いと願う。私たちが出来る形で支援に協力したいと思った。(20代一般)
70. 山内さんの端的な内容、質問回答と最後のチョコさんの振り返り、時間バランスも良かったです。(40代地域住民)
71. 若年のみならず、妊娠した時から子育てまでまるごと支援が必要だと改めて考えました。行政の支援(そもそも行政職員が真剣に考えて行動に移しているかが課題)が不足していて、それを意識ある方が支援を立ち上げるというお粗末なこの社会を変えないといつまでたっても悪循環な印象をいつも受けます。妊娠した時ではなく、幼少期から諸外国のように性教育を人権教育、科学として学校の授業に取り入れるべきですし、中絶の数が諸外国に比べると高いのは、性教育や人権教育が適切に実施されていないことの表れと思います。性交渉するのはお互いの同意があつてのもので、デートDVや暴力、売春で妊娠することもあるため、人権を尊重するということをもっとこの社会で広げる必要があると思います。自分のことで精いっぱい、非常に寂しい社会になったと思います。行政職員だからこそこの感想です。行政は人手不足、団塊の世代が大量退職して技術の蓄積が少なくなり、十分に支援できないことが多々あります。課題です。今回の企画、運営ありがとうございました。

【講座の様子】



【登壇者：山内 優子】



【登壇者：島村 聡】



【登壇者：平安名 萌恵】



【グラフィックレコーディング】



【グラフィックレコーディング】



【登壇の様子】



【登壇の様子】



【登壇の様子】

第572回 土曜教養講座
2021年9月25日（土）

大切な人を最期に看取ること
—終末期ケアを考える



講師：大下 大圓
【飛騨千光寺住職・名古屋大学医学部講師
（非）・日本ホスピス在宅ケア研究会理事】



講師：上原 弘美
【サバイバーナースの会「ぴあ
ナース」代表・看護師】



講師：金城 ユカリ
【中頭病院勤務・緩和ケア
認定看護師】



司会：山代 寛
【沖縄大学健康栄養学部教授
・沖縄大学副学長・医師】

第578回沖縄大学土曜教養講座 オンライン講座

大切な人を最期に看取ること

—終末期ケアを考える—

近年、日本では世界的な流れから、「エンド・オブ・ライフケア」や緩和ケアの領域に、身体的ケアのみならず、「スピリチュアルケア」の必要性が叫ばれています。そして、多くの施設や在宅で、その実践が試されているのです。「スピリチュアルケア」は、医療福祉だけでなく、災害事故などで愛する人を喪失した人のグリーフケア（悲嘆ケア）の分野でも重視されています。

最近「終末期医療」という言い方は、「エンド・オブ・ライフケア」の言い方が増えています。一般の方々には、「終末期のケアとその生き方」という表現がいいかもしれません。医療と介護、福祉を連携して「ケア」していくという包括的な試みです。

真言宗僧侶である大下大圓さんに「人生の最期に、人は何を思い、何を希望するか～スピリチュアルケアの実践から」というテーマで講演をしていただきます。真言密教の大阿闍梨であり、臨床宗教師を多く導いてきた視点から、「大切な人を最期に看取ること」に関して実体験をお話していただきます。また、沖縄県内で活躍なさっている看護師2名をお招きし、沖縄の在宅看取りや沖縄県全体のケアについての現実的な話が伺える機会となることを期待しております。

死は誰にでも訪れるもの・・・そして、大切な人とはいずれ死別することになります。だからこそ、「大切な人を最期に看取ること」を現実的に私事として捉え、終末期ケアについて共有する機会を皆さまと持ちたいと考えています。

2021.9.25 土

 先着
100名

14:00～16:30 ※視聴は無料ですが、事前申込が必要です

プログラム

14:00～14:50 基調講演

テーマ「人生の最期に、人は何を思い、何を希望するか～スピリチュアルケアの実践から」

大下 大圓氏

14:50～15:00 休憩

15:00～16:00 シンポジウム

「大切な人を最期に看取ること—終末期ケアを考える」

大下 大圓氏

上原 弘美氏

金城 ユカリ氏

司会：山代 寛氏

16:00～16:30 質疑応答

講演者／招聘講師


 おおした たいえん
大下 大圓

 「飛騨千光寺住職、名古屋大学医学部
講師（非）、日本ホスピス在宅ケア研究会理事」

1954年、岐阜県高山市生まれ。12歳の時に千光寺で出家。高野山大学文学部仏教学科卒業。岐阜大学教育学部研究生修了。京都大学こころの未来研究センター研修員修了。和歌山県の高野山で修行し（現在高野山傳燈大阿闍梨）、スリランカ国でテーラヴァーダー僧として得度研修。帰国後、地元教育委員会で社会教育担当（3年）。飛騨で約25年前より「いのち、生と死」の学習会として「ビハラー飛騨」を主宰。「ひだ医療福祉ボランティアの会」を結成し、ベットのサイドのボランティア活動を続ける。2000年から15年間、高山市内のクリニックでスピリチュアルケアワーカーとして患者家族の心理支援をする。現在日本スピリチュアルケア学会理事ほか。


 ウエハラ ヒロミ
上原 弘美

 「サバイバーナースの会
「びあナース」代表・看護師」

がん罹患をきっかけに2010年がんを経験した看護師の会サバイバーナースの会「びあナース」を設立。現在、社会医療法人 友愛会 友愛医療センターで勤務しながら、びあナースの活動や24時間がん患者支援チャリティーイベントリレーフォーライフの実行委員として活動をしている。


 キンジョウ
金城 ユカリ

 「中頭病院勤務・
緩和ケア認定看護師」

中頭病院・緩和ケア認定看護師。1991年社会医療法人敬愛会中頭病院へ就職し、内科・外科病棟で勤務。2008年緩和ケア認定看護師資格を取得。現在は、外来にて入院・在宅スタッフと協働し、途切れることのないケアの継続に取り組んでいる。又、2019年度沖縄県看護協会・緩和ケア認定看護師教育課程専任教員を歴任し、緩和ケア人材育成に携わり、同時に、沖縄県看護職人材育成研修において介護施設等で勤務する看護職者の研修指導を行い「看取りケア」に関する学びの輪を広げている。

司会者


 ヤマシロ ヒロシ
山代 寛

「沖縄大学副学長・医師」

1961年、島根県松江市生まれ。沖縄大学教授、副学長、医師。島根県内の高校を卒業後、琉球大学医学部に進学。外科医として医師の道を歩むも、2008年、大学教授に転身、沖縄大学副学長を歴任。緩和医療、災害医療、喫煙対策の3つが天職であると公言している。前職では在宅緩和ケアに積極的に取り組み、沖縄大学では臨床経験をもとに管理栄養学科で生命倫理の講義を担当している。

オンラインの講義であり「Zoomウェビナー」を使って行います。Wi-Fiなどネット接続ができる環境で、PC・スマホ・タブレットなどから視聴できます。お申し込みされた方には、講義開始前日までに、接続先の情報（ログインURL）をメールにてご案内します。

■申込先 【MAIL】 chicken-staff@okinawa-u.ac.jp

（件名は「9月25日土曜教養講座申込」本文で氏名・電話番号の記載をお願いします）

■問い合わせ先 沖縄大学地域研究所 沖縄県那覇市国場405番地 【TEL】 098-832-5599



今後の公開講座等の情報
をご希望の方へLINEで
配信を行っております。
左のQRコードより登録
ください！

大切な人を最後に看取ること—終末期ケアを考える

【日 時】 2021 年 9 月 25 日(土) 14:00～16:30
 【会 場】 アネックス共創館
 【登壇者】 大下大圓（飛騨千光寺住職、名古屋大学医学部講師(非)、日本ホスピス在宅ケア研究会理事）
 上原弘美（サバイバーナースの会「ぴあナース」代表・看護師）
 金城ユカリ（中頭病院勤務・認定緩和看護師）
 山代寛（沖縄大学副学長・医師）

【聴講料】 無料

【申込人数】 140 名

【参加者内訳】 ※アンケート回答数 67 人

(年代別)		(所属別)	
10 代	3 人	一般	43 人
20 代	2 人	地域住民	3 人
30 代	4 人	本学同窓会	0 人
40 代	12 人	本学後援会	0 人
50 代	29 人	沖大生	3 人
60 代	10 人	学生	2 人
70 代以上	7 人	本学教員	1 人
		その他	15 人

(都道府県別)		(講座を知った方法)	
沖縄県	33 人	チラシ	2 人
東京都	5 人	新聞	0 人
愛知県	5 人	ラジオ	0 人
兵庫県	5 人	LINE	1 人
大阪府	4 人	メール	20 人
神奈川県	2 人	知人・友人	26 人
福岡県	2 人	沖大ホームページ	2 人
三重県	1 人	その他	16 人
北海道	1 人		
和歌山県	1 人		
埼玉県	1 人		
山形県	1 人		
滋賀県	1 人		
石川県	1 人		

■感想（漢字表現等は原文のまま。）

1. ホスピスでボランティアをしているので、このテーマにはとても興味がありました。スピリチュアルケア師という有資格者の存在を初めて知りました。ぜひ沖縄大学で資格取得できるように講座を開設していただきたいです。（60代一般）
2. スピリチュアルケアというものを初めて知って、とても勉強になりました。（10代学生）
3. とても興味深く拝聴しました。（60代一般）

4. 講座に関係ない人の名前を出し困らせてしまいすみませんでした。 今回の講座ではスピリチュアルがどのように死生観に繋がるのか、何故自分なりの死生観を持つことが重要なのかを知ることができました。また死生観を持ち死に向き合うことは、生に向き合うことにも繋がるのではないかと感じました。このような講座を開いていただきありがとうございます。(20代冲大生)
5. 自分との向き合い方にも、仕事でも活かしていきたいと思いました。これから生きていく上でも心に留めておきます。(30代一般)
6. とても興味があるお話ありがとうございました。あっという間に時間が過ぎてしまいました。大下先生の話、とても分かりやすかったです。もっとご縁を深めていきたいなと思いました。(60代一般)
7. 死生観と感性の育て方を考えさせられました。(70代)
8. 緩和ケア認定がそれぞれ死生観の違う患者さんと関わる大変さを改めて感じました。そして本当に親身になって関わっているのを強く感じました。全ての人に当てはまる正解はないと思うけれども、その中で何が出来るか考える大切さを気付きました。(50代地域住民)
9. 親が高齢になってきたので、今後に役立つのではないかと思います。参考にしていきます。(50代一般)
10. もう少し現場で患者さんを看取る看護師さんの話が聞きたかったです。スピリチュアルケアについて現実の看護でどのようなジレンマがあるのかディスカッションしてほしかったです。また、座長などあまりなさったことがないのでしょうか、司会の先生の進行・タメ口が気になりました。知り合いの演者・看護師さんでも壇上では演者には敬語で話すのが常識かと思います。トークイベント・座談会ではなく「講座」ですから。2時間30分の長丁場で、司会がダラダラと話をまわす構成よりも、1例でも症例を出してディスカッションする時間があつた方が総合討論としてより有益ではなかったでしょうか。(40代一般)
11. 今後の自分の取り組みを考えるのに大変参考になる講座でした。(50代)
12. 終末期について、本人やご家族はどのような気持ちを抱いているのか、また専門職はどのように寄り添っているかなど学ばせていただきました。何とかして助けなければならぬ・役立たなければいけないと思うのではなく、本人の気持ちを聴くこと、側にいることもケアになるということが印象的でした。自分自身はまだ学生なので相手に寄り添うということは難しいと思ってるのですが、これから感性を高めていければと思います。(20代学生)
13. 大変深い内容でした。受講させて頂いてありがとうございました。(60代一般)
14. 死生観を養うことの大切さを痛感するご講演でした。貴重なお時間を与えてくださりありがとうございました。(50代)
15. エリザベス キューブラロスの「死ぬ瞬間」の本の内容を思い出しながら聴いていました。受け入れるということ、感性を磨くということ、答えはその人の中にある。普段解っていても、自分にとってどうなんだろうと基本にかえる、振り返る。いつも学ぶ姿勢が大事！と、自分自身を振り返りながら参加させていただきました。ありがとうございました。(60代一般)
16. 大圓先生の講義はとてもわかりやすく、仏教の教えも少し知ることができてよかった。先

生方のお話はせっかくなので質疑応答ではなく、何かテーマをもってシンポジウムのかたちで行ってもよかったのではと思った。ナースの方がそれぞれにエンドオブライフケアへの思いがある方々だったので、もっと話を聞きたかった。司会の先生が患者の存命中には家族のケアはやってなかったと言われたがナースと医師の大きな違いだなと感じた(善し悪しではありませんよ)。(50代)

17. 大変興味深い内容の講座を沖縄で開いて下さり感謝します。(50代)
18. 両親の最期を考える良い機会になりました。(40代一般)
19. ぜひ沖縄大学でも、ユタなど沖縄の宗教文化に合ったスピリチュアルケア師や臨床宗教師を育成するコースを設置してほしい。(50代一般)
20. 感性を高める瞑想など勉強になりました。(40代)
21. 大下先生の患者さんに対する寄り添い方にとっても感動しました。死への考え方が変わりました。ありがとうございました。(40代一般)
22. エンドオブライフにおけるスピリチュアルケアやグリーフケアなどスピリチュアルケア師、臨床宗教師の役割なども含め学びを深めることができました。何かしてあげようとか、結果を求めようとか、空気を読まないで「空っぽ」にして向き合う。共にあり続けることの大切さを学びました。ありがとうございました。(50代一般)
23. とても有意義な内容でした。看護師お二人がとても苦しんでいる様に感じました。大下先生のおっしゃる様に成長の過程なのかもしれませんが、もっと楽になって頂きたいなあと思いました。ケア フォー ケアギヴァーですね。(50代一般)
24. 人生の最後を送る方々に向き合うことは、事の重さから身構えてしまうかもしれません。今回の公開講座はそのような中に一歩踏み出していく大きなヒントが多くあったと感じます。コロナ禍がおさまった後は、是非、対面式で拝聴したいと思いました。(50代一般)
25. スピリチュアルケアの基本的な考え方から教えていただき大変参考になりました。(50代一般)
26. 大下先生と現場の看護師さんとのリアルな臨床現場での話、生の声、気持ちを聞けて良かった。(50代学生)
27. 現在、クリティカルケア領域における終末期患者の家族看護について研究しているため、本日の講座から家族ケアへの示唆が得られるかと考えて参加しました。経験からの知見などたくさんのが学べました。患者・家族との距離感を保つことも必要なんだと改めて感じました。ありがとうございました。(50代)
28. 自分のケアを振り返る機会になりました。(50代一般)
29. スピリチュアルケアについて詳しく学ぶ機会となりました。ありがとうございました。(40代一般)
30. 登壇者の方々の生の体験、エピソードが聞けて大変勉強になりました。今後、ますますグリーフケアのニーズが高まると思われます。(40代一般)
31. 寄り添うの意味を間違って解釈していたことに気づきました。やってあげようの意識が強く、相手の思いを優先することが大事だと改めて方法と共に気付かされました。(50代一

般)

32. 患者さんに、何かしてあげよう、しなくては、では無く、空っぽで接する。すると、患者さんの方から言葉を発する事もある。学びました。(70代以上一般)
33. 大圓先生のご講義は何度聞いても勉強になります。今回もとても楽しく聴かせていただきました。(50代)
34. とても貴重なお話をきくことができました。沖縄県内の現状について、もう少し詳しくきくことができたらいいなと思いました。また、個人情報に係ることが多いと思いますが、簡単に事例をお話されていました。老婆心ながら、当事者の方々の了承は得られていたのでしょうか？かなりリアルなお話(しかも死に対してネガティブな印象)だったので、聞く側としてはありがたかったのですが当事者の方が参加されていたら嫌な思いをされていないかなと気になりました。(わたしも元当事者の立場にいましたから。)(40代地域住民)
35. お看取りへの関わり方やグリーフケアについて、学ばせていただきました。今後の活動に活かしたいと考えます。(50代一般)
36. 答えは相手が知っている・・・という言葉が印象に残りました。たくさんの学びがありました。ありがとうございました。(60代一般)
37. 看護師として大下先生の講座は以前参加させていただきました。今回は余命宣告された父の在宅の看取りの準備として、タイムリーに上原弘美さんのフェイスブックから知り、家族としとの視点から参加しました。自分は看護師で頑張って、父の看取りまでみようと思っていましたが、最期はプロの力を借りて家族としと看取ることが良いなと学びました。また、葬儀の時は家族葬であってもお別れの言葉告げる時間を作りたいと思います。また、その経験をスピリチュアルケアを看護に生かしていきたいと思いました。上原さん、金城さんの現場での試行錯誤 自分と向き合う気持ち 素直に話していただき凄くよかったです。これからも地域は違いますが 繋がっていききたいと思いました。(50代一般)
38. 講義の内容が豊富でした。看護師の方はお二人ともご自身の経験を語ってくださいました。多忙な中でいかに終末期ケアを提供すれば良いか、人材育成の観点からみた質問の回答は、金城さんが納得されたかどうか気になりました。(50代一般)
39. 瞑想の大切さを再認識しました。看取ることの重要について深い学びになりました。(70代以上一般)
40. 生きる意味をもう一度確認する大変有意義な研修でした。(70代以上)
41. 看取りについて、宗教観を超えたスピリチュアルを学ぶことができました。死を感じる恐怖は、まだ未体験であるだけに、計り知れません。対人援助の職に就いておりますが、私を迎えようとしている方々に、どんな関わりがいいのか、この公開講座を機に、自分なりに考え、関わって行きたいと思いました。ありがとうございます♪(40代一般)
42. 看取りの講演は今までも聞いた事がありますが、スピリチュアルな部分から大変分かりやすく、腑に落ちてくる場面がたくさんありました。先生の御人柄や語り口が柔らかく、具体性があり更に次回にも聞きたくなりました。(50代一般)
43. 遠隔での質問もたくさんあって、時間が足りない、もっと大圓先生の話をお聞きしたいと思いました。基調講演やシンポジウムにあったように今後、沖縄スピリチュアルケア研究会との連携、沖縄大学での新しい社会人向け講座などの可能性や、ぴあナースの資格認定

講座の模索、総合病院における後継者育成の流れにもつながれば嬉しいです。大圓先生には沖縄や沖縄大学のことを気にかけてくださっていたいただいたのも嬉しかったです。12月に大圓先生の研修会も提案があり、楽しみです。相談援助職を目指す学生さんに限らず、もっとたくさんの沖大生の参加があればよかったなあと思いました。(60代)

44. 分かりやすいお話しで、またそれぞれの方の経験談にも触れられて、とても良かった。(60代)
45. 毎回の案内有難う御座います。寄り添う支援が何よりなも大切だということがわかりました。実母も85になります。何を望むのかしっかりと聴き取りたいと思います。(40代一般)
46. シンポジストの方々が様々な感情を抱きながら、それでも日々がん患者さんのためにとケアし、その方の最善を考えておられるんだと感じました。(50代)
47. 終末期を迎えている身内との関わり方について大変勉強になりました。(50代)
48. 高齢者を抱える年代になってきましたので今後の為にも参考になりました。(40代一般)
49. 緩和ケアに携わる看護師として、最期というゴールまでに逆算し出来る事、希望を叶えるお手伝いをご本人やご家族、友人知人などと共に今後も実践して生きたいと思いました。その中で、ケアする側の死生観や相手を受け入れる事の出来る人間性・器を問われるなあと思いました。また、自分自身が今を大切に生きる事の大切さを感じさせて頂きました。このような機会を頂き、貴重な講演となりました。ありがとうございました。(30代)
50. 講演は、いくつかの気づきが得られた(60代)
51. 今回、「大切な人を最期に看取ることー終末期ケアを考える」に参加を希望したのは、現場で働いていた時に看取りにとっても不安、もっと何かしてあげたんじゃないかと悩んでモヤモヤして過ごしていた時期があり、終末期の患者さんを受けもつ時に出勤時に足どりが重くなることがありました。自分の死生観をしっかりとって、相手の最期の過ごし方などにもっと話を聞いてあげたら、モヤモヤも不安も後悔も軽くなるなり、患者さんの不安や希望に寄り添えられたのかな。と感じました。現場では忙しくて聞けないことが多いと思うので、スピリチュアルケア専門職がいらっしゃると現場はとても助かると思いました。死ぬことについては、みんな話しながらないし考えたくないこと。だけど、講演でお話があったように死ぬこと(死生観)から生きることを考えるって難しいけど必要なことだと学べました。実際に沖縄のお寺などで大下先生がワークショップを開くときは参加したいと思いました。上原先生、金城先生の体験談のお話しも、患者さん、その家族の思いを実際に学ぶことができました。ありがとうございました。(40代一般)
52. 講義聴講に値する。(50代地域住民)
53. 題目の通りの境遇にあったのでとても勉強になりました。(50代一般)
54. いつかは母とも別れなければならないときが来ると分かっていますが、死を受け入れることができるか不安でした。少しはその受け入れ方を、学べた気がしています。ありがとうございました。(40代一般)
55. 終末期の方への関わり方について学ぶことができました。(30代一般)
56. 大下先生のお話が勉強になりました。また、3人で話されたところも、それぞれの立場からの見解がためになりました。スピリチュアルな部分を、憚ることなくもっと普通に話していただきたかったです。(50代一般)

■意見・感想（漢字表現等は原文のまま。）

1. 一部、聞き逃したところもあるので、後日の録画配信もお知らせいただきたいです。（60代一般）
2. さまざまな研修会に参加してみたいです。スピリチュアルケア師にも興味があります。（30代一般）
3. これからも様々な分野の発信を期待しています。（60代一般）
4. 初めて参加させて頂きました。とても興味のある内容で充実しておりました。機会がありましたら今後も参加させて頂きたいと思っております。よろしくお願い致します。（50代）
5. このような取り組みをありがとうございます。大圓先生の言われていた沖縄独特のシャーマニズムや死生観についての講演が聴いてみたいです。（50代）
6. この様なスピリチュアルケアを含めた講座をまた開催して欲しいです。（50代）
7. 参加させて頂きありがとうございました。（40代）
8. このような貴重な学びが家にいながらにできたことに大感謝です。今後もこのような学びの場がございましたらぜひ参加させていただきたいと思います。（50代一般）
9. 沖縄大学の地域研究所の取り組みは大変参考になります。今後も様々なイベントに参加させて頂き、勉強していきたいと思います。（50代一般）
10. 非常に心に響く研修ありがとうございました。（50代一般）
11. 沖縄から発信という響きが、何か嬉しいです。中々行く機会がないので、身近に感じられます。（70代以上一般）
12. とても素晴らしい試みだと感じます。が、内輪話（今回は医療現場がらみ）になりがちな面がありましたので、その点は意識していただくと幅広い方々がもっと快適に参加できるのかなあ、と感じました。（40代地域住民）
13. また、ぜひ参加したいと思いました。（60代一般）
14. 東京からですが、参加させていただきありがとうございました。遠く離れていても zoom という便利な機能で繋がることができ、自分にとってのタイミング良く学ばせて頂きました。また、これからもよろしくお願い致します。（50代）
15. 大変素晴らしい取り組みに一般からも参加できることは有難いです。（70代以上）
16. またこのような機会をお願い致します。（60代）
17. 看取りについての研修会って聞いたことがなかったので、貴重な学びができました。ありがとうございます。（40代一般）
18. お坊さんの木下先生のお話を又聞きたいです。（50代一般）

【講座の様子】



【登壇者：大下 大圓】



【登壇者：上原弘 美】



【登壇者：金城 ユカリ】



【司会：山代 寛】



【登壇の様子①】



【登壇の様子②】



【登壇の様子③】



【登壇の様子④】

第579回 土曜教養講座
2021年10月30日（土）

共生社会をめざして
コロナ禍における外国人をめぐる法政策



講師：奥貫 妃文
【相模女子大学社会マネジメント】
学科准教授・東ゼン労組執行委員長】



講師：指宿 昭一
【暁法律事務所・代表弁護士】



講師：グエン・ド・
アン・ニエン
【名桜大学大学院言語文化研究科
博士課程修了・日越翻訳家】



講師：岩垣 真人
【沖縄大学経法商学部准教授】

コーディネーター：春田 吉備彦
【沖縄大学経法商学部教授】

第579回沖縄大学土曜教養講座 オンライン講座

共生社会をめざして コロナ禍における 外国人をめぐる法政策

外国人法政策は、解雇・雇止め、労災補償などの労働問題だけでなく、
入管法政策、社会福祉法政策、外国籍を持つ児童の教育問題、国籍・民族差別問題など、
様々な事柄が複雑に絡み合う問題です。

今回は、アメリカ国務省から人身取引と闘うヒーローとして表彰された、
労働弁護士、多国籍・多民族で組織された労働組合の執行委員長、
沖縄で活躍する憲法学者、沖縄で生活する外国人当事者が、コロナ禍で複雑に絡み合う外国人問題を解き明かします。

登壇者



おく ふうみ
奥貫 妃文

「相模女子大学社会マネジメント学科准教授」
「東ゼン労組執行委員長」

相模女子大学人間社会学部社会マネジメント学科准教授。
専門は労働法、社会保障法、社会福祉学。現在、外国人の社会
保障権、外国人労働者の労働問題の研究に取り組むとど
もに、東京都新宿区で多国籍労働組合「全国一般東京ゼネ
ラルユニオン(東ゼン労組)」の執行委員長を務める。最新の編著に『リアル労働法』
(法律文化社/2021年刊)。



いぶ すき しゅういち
指宿 昭一

「税法律事務所・代表弁護士」

弁護士、日本労働弁護団常任幹事、外国人技能実習生問題弁護士
連絡会共同代表、筑波大学第二学群比較文化学類卒。労働事件
(労働者側)に専門化した弁護士業務を行っている。外国人研修生
の労働者性を初めて認めた三和サービステクニカル・高裁判決、精神
疾患に罹患した労働者の解雇を無効とした日本にユース・バツ
カード事件最高裁判決、「残業代ゼロ」の賃金制度の下で働くタクシー労働者の残業代請求を
認めた国際自動車事件最高裁判決などを勝ち取っている。現在、外国人労働者弁護団代表。
名古屋入管スリランカ人死亡事件の遺族代理人を務めている。2021年7月、アメリカ国務省から
「人身取引と闘うヒーロー」として認定。著書に「使い捨て外国人～人権なき移民国家、日本
～」(朝陽会/2020年)、「リアル労働法」(共著・法律文化社/2021年刊)など。



NGUYEN DO AN NHIEU
グエン・ド・アン・ニエン

「名桜大学大学院言語文化研究科修士課程修了、日越翻訳家」

ベトナム出身。ベトナム国家大学・ホーチミン人文社会科学大学
卒業後、ベトナムで日本語教師。2007年から、沖縄移住。
2011年から名桜大学で非常勤講師としてベトナムについての
講義を担当。20年近く日越翻訳経験(主な翻訳書:「銀河鉄道
の夜」、「たけくらべ」、「文明論の概略」、「千羽鶴」など)。2019
年からベトナム人技能実習生へのボランティア支援活動を実施している。



いわ がき まさと
岩垣 真人

「沖縄大学経済法学部准教授」

沖縄大学経済法学部准教授。専門は憲法・行政法。埼玉県出身。
一橋大学大学院法学研究科博士後期課程満期退学。東京
学芸大学教育学部特任講師、沖縄大学経済法学部講師
を経て、2019年4月より現職。浦添市情報公開及び個人情報
保護審査会副会長等を併任。

2021.10.30(土)

14:00～17:00

※視聴は無料ですが、
事前申込が必要です

先着
100名

プログラム

14:00～14:40

「在住外国人の労働と社会保障のリアル」

奥貫 妃文

14:40～15:20

「入管政策ならびに技能実習制度」

指宿 昭一

(休憩10分程度)

15:30～16:00

「沖縄におけるベトナム人技能実習生や

そのボランティア支援活動について」

グエン・ド・アン・ニエン

16:00～16:30

「外国籍を有する児童・生徒と教育を受ける権利

～フランスにおける移民と教育についての問題にも触れながら～」

岩垣 真人

16:30～17:00

「質疑応答」

司会: 春田 吉備彦 (沖縄大学経済法学部教授)

オンラインの講義であり「Zoomウェビナー」を使って行います。Wi-Fiなどネット接続ができ
る環境で、PC・スマホ・タブレットなどから視聴できます。お申し込みされた方には、講義開始前
日までに、接続先の情報(ログインURL)をメールにてご案内します。

■申込先 【MAIL】chiken-staff@okinawa-u.ac.jp

(件名は「10月30日土曜教養講座申込」本文で氏名・電話番号の記載をお願いします)

■問い合わせ先 沖縄大学地域研究所 沖縄県那覇市国場405番地 【TEL】098-832-5599



今後の公開講座等の情報
をご希望の方へLINEで
配信を行っております。
左のQRコードよりご登
録ください!

第579回 沖縄大学土曜教養講座

共生社会をめざして
コロナ禍における外国人をめぐる法政策

【日 時】 2021 年 10 月 30 日(土) 14:00～17:00
【会 場】 アネックス共創館
【登 壇 者】 奥貫妃文（相模女子大学社会マネジメント学科准教授・東ゼン
労組執行委員長）
指宿昭一（暁法律事務所・代表弁護士）
グエン・ド・アン・ニエン（名桜大学大学院言語文化研究科
修士課程修了・日越翻訳家）
岩垣真人（沖縄大学経法商学部准教授）

【聴 講 料】 無料

【申込人数】 46 名

【参加者内訳】 ※アンケート回答数 22 人

(年代別)		(所属別)	
10 代	0 人	一般	11 人
20 代	8 人	地域住民	4 人
30 代	0 人	本学同窓会	0 人
40 代	4 人	本学後援会	0 人
50 代	7 人	沖大生	4 人
60 代	3 人	学生	3 人
70 代以上	0 人	本学教員	0 人
		その他	0 人

(都道府県別)		(講座を知った方法)	
沖縄県	21 人	チラシ	3 人
福井県	1 人	新聞	3 人
		ラジオ	0 人
		LINE	1 人
		メール	4 人
		知人・友人	11 人
		沖大ホームページ	0 人
		その他	0 人

■感想（漢字表現等は原文のまま。）

1. 県内で活動している行政書士です。貴重な講座に参加させていただきありがとうございました。普段手続き面を気にする反面、制度の歴史や社会問題について深掘りする機会がなかったように思います。いい経験になりました。今回勉強したことを今後の仕事にも活かし、少しでも外国人の助けになれるよう精進して参ります。ありがとうございました。（60代一般）
2. 各方面で外国人の皆さんに関わっている専門家の方々のお話を聞けて、とても良かったです。入管の問題は報道だけでは知ることができないことを知り、考えさせられました。お疲れ様でした。ありがとうございました。（60代一般）
3. 今回の講座では、外国人が日本に来る際は在留資格というのが必要ということを理解しました。こうした中で、指宿先生もおっしゃったようにスリランカ人の女性が被害者なのに

有罪に問われ、死亡した事例というのもこういった本当の事実というのははっきりしていないといけないなと感じました。(20代沖大生)

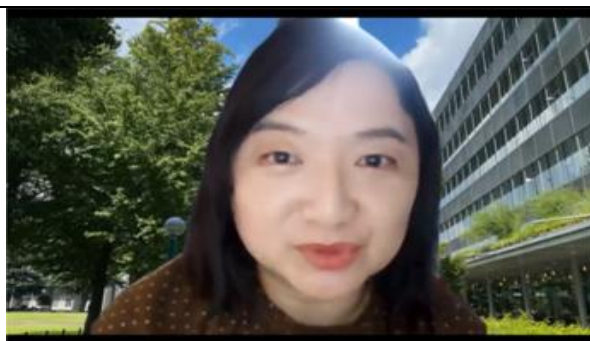
4. グローバル化の推進とは裏腹に外国人への保証が形骸化している状態であると改めて感じました。やはり、法的・財政的裏付けによる制度の構築が必要だと感じました。(20代沖大生)
5. 外国人の就労について関わっております。就労以外での各方面について知ることができました。今後は、就労以外の問題について関わっていこうと思います。ありがとうございました。(40代一般)
6. オンライン講座は、一堂に会する(全員が同じ場所に集まる)事への縛りが少なく、また、遠方の複数の講師のお話を聴くことができ、とても良い機会となりました。それぞれの分野で活躍する講師のお話、自ら入手可能な情報には限りがあるので、とても勉強になりました。他人事でなく自分事、人と繋がり連帯して、声をあげていくことの大切さをヒシヒシと感じました。ありがとうございました。(50代一般)
7. zoom の設定等経験が蓄積されているのでしょう。うまく運営されていると感じました。(50代一般)
8. 外国人労働者、留学生等に対する様々な面からのアプローチによる意見を拝聴することが出来ました。入管事件を中心とした指宿先生のお話では、私が思っている以上に酷い対応をされていたことを知り、重大さを改めて学ぶことが出来ました。奥貫先生のお話では、東ゼン労組を初めとした外国人労働者についての興味深いお話を聞くことが出来ました。グエン先生のお話では、沖縄県内におけるベトナム人実習生の生活の実態などについて聞くことができました。全く外国人実習生と関わる機会が無いので、どのような活動等をしているのかを知ることが出来、とても興味深かったです。岩垣先生のお話では、外国籍を持つ生徒の教育について、そしてそれに関わる問題について聞くことができました。外国籍の生徒に対しては、教育を受ける権利が絶対では無いというのがとても驚き、そして改正すべき法律だと感じました。(20代沖大生)
9. コロナ禍の中でも企業は共生社会を目指し外国人を雇うかめぐる法律があると知った。(20代沖大生)
10. 当事者として関心があったので、実際に困窮する技能実習生に法的に現場で支援する弁護士や団体、個人の活動を聞くことができて良かった。なんとなく感じてはいたが、日本にいる外国人には日本人同様の「義務」は課されるが『人権』はないということを知りショックを受けたが、国の法整備がそうになっているからこそ隣人としての市民の力が重要だと感じた。(40代地域住民)
11. とても勉強になりました。これまでの歴史がつくってきた違いを良しとしない寛容ではない社会や精神性、学校文化をどう変えていけるのか、コミュニケーションと教育の力が必要だと思いました。(50代一般)
12. 外国人実習生の今現在の状況というのがわかる良い機会になりました。(20代沖大生)
13. 外国人労働者の抱える問題について詳しく知ることができ良かったです。(50代一般)
14. とても参考になりました。(50代地域住民)
15. 技能実習生の現状・問題点について学ぶことができました。特に沖縄県の技能実習生について知ることができ参加して良かったです。(40代一般)

16. 内容とてもよかったです。入管制度、技能実習制度等の問題点、また民間レベルでの支援体制などが大きな課題になってくると思います。ニエンさんと同じ名護に住んでおり、このテーマについて活動できる場所などを探しております。名護市交流協会などにコンタクトをすればいいのかなと思いますが、セミナー中には質問ができなかったものですから。ありがとうございました。（５０代地域住民）
17. テレビで話題になっている入管問題について、とても詳しく、正しく情報をいただいたことば大きな学びでした。また、ニエンさんの活動がとても魅力的でした。さまざまな活動をされている方が登壇されていたので、いろんな視点で考えることができました。（２０代地域住民）
18. すごく勉強になりました。（２０代学生）
19. ボランティアで、外国人支援に携わる活動をしておりますが、沖縄県の子供の貧困、ヤングケアラー等地域における県民の課題多き中、今回の研修で、在留外国人にも同様な状況が存在することを知り考えさせられました。また、入管法改正により、外国人の就労規制が緩和され、少子高齢化の波が押し寄せてきている我が国において外国人技能実習生等の外国人の労働力は、有難い存在であるにも関わらず人権を無視した扱いには憤りを感じます。今回も非常に有意義な講義を企画していただき有難うございました。（６０代一般）

■意見・感想（漢字表現等は原文のまま。）

1. 初めて参加させていただきました。非常に良い取り組みだと思います。（６０代一般）
2. 地域に専門家の調査研究を広めることは大事だと思うので、いい取り組みだと感じました。（２０代沖大生）
3. このテーマに関心があるのでまたお願いします。（５０代一般）
4. 今回の講座の内容は家族に外国人いる当事者としてとても参考になった。本講座が市民も参加できる公開講座と言うことは、「市民にも地域の問題を投げかけて共に解決に向けて考え行動しよう」ということだととらえていた。しかし今回の講座の締め方が、学術的関係者向けのものであったのが非常に残念であった。（市民の視点での質問は共有ではなく個人対応にしようとしていた部分）本講座の目的がよく分からなくなった。貴学は地域に根ざして住民とともに地域課題を解決しようとしている大学だと評価していたが、今回の講座ではそういう部分を感じられず、残念であった。（４０代地域住民）
5. このテーマでの講座をここで終わらず、継続的に開催していただきたいです。課題は根深いですから、時間と人の力が必要だと思います。（５０代一般）

【講座の様子】



【登壇者：奥貫 妃文】



【登壇者：指宿 昭一】



【登壇者：グエン・ド・アン・ニエン】



【登壇者：岩垣 真人】



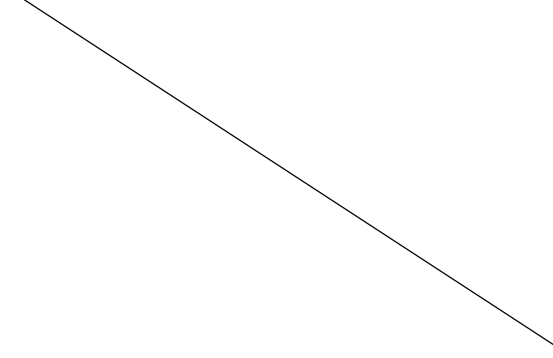
【司会：春田 吉備彦】



【登壇の様子①】



【登壇の様子②】



第580 土曜教養講座
2021年12月4日(土)

アフターコロナと自然災害



講師：稲垣 暁
【災害ソーシャルワーカー・(一社)
災害プラットフォームおきなわ】



講師：谷口 友一
【沖縄大学経法商学部講師】



講師：山田 克宏
【秋田県社会福祉会理事長・秋田
看護福祉大学看護福祉学部助教】



講師：河合 塁
【岩手大学人文社会科学部准教授】

司会：圓田 浩二
【沖縄大学経法商学部教授】

アフターコロナと 自然災害

今後のポストコロナの沖縄社会・日本社会でも、台風・豪雨、大津波、地震等の自然災害が発生することは必定である。災害は、複合的に起こり得るリスクであるが、防災・減災に対する行政・地域住民の取り組みや意識は希薄である。防災・減災対策としては、災害前の日常的な備えの拡充、災害直撃時の地域住民の救出・救護・避難に対する管理の仕組、災害復興時の円滑な復興・生活支援といった方策の構築が必要である。

本講座では、今後予想される、沖縄の自然災害に焦点をあてて、異分野融合型の防災・減災研究の成果を示していく。

登壇者



いりぐち あきら
稲垣 暁

【災害ソーシャルワーカー／（一社）災害プラットフォームおきなわ】
神戸市出身。関西学院大学総合政策研究科修士課程修了。阪神淡路大震災で被災後、毎日新聞社に勤務しながら社会的孤立者へ寄り添う活動継続のため社会福祉士に転身。沖縄の若者とともに東日本大震災被災地・岩手県大槌町住民の訪問交流を行い、学びを沖縄の地域防災に生かす活動を10年続けている。RBCラジオ「アップ!!」コメンテーター。



たにぐち ゆうじ
谷口 友一

【沖縄大学経済学部助教授】
専門は商法・会社法。和歌山県出身。関西学院大学大学院法学研究科修士後期課程満期退学。関西学院大学大学院法学研究科大学院研究員、大阪経済大学経営学部非常勤講師、税務大学校大阪研修所非常勤講師、関西学院大学大学院経営戦略研究科非常勤講師などを経て、2020年4月より現職。



やまだ かずお
山田 克宏

【秋田県社会福祉士会理事、秋田県福祉士会副理事長助役】
専門は高齢者福祉、地域福祉、障害者福祉。現在は、認知リキア、記録を通じた多職種連携、ひきこもりの生きづらさを中心とした研究をおこなっている。鹿児島県出身。京都大学大学院総合福祉研究科修士後期課程満期退学。社会福祉士会、鹿児島国際大学実習センター実習助手、群馬社会福祉専門学校社会福祉士通課程専任教員を経て、2019年4月から現職。



かわい けんじ
河合 暉

【附予大学人文学部社会科学部准教授】
専門は労働法、愛知県出身。中央大学大学院法学研究科修士後期課程修了（博士〔法学〕）。2013年4月より現職。岩手県労働審議会委員、岩手県地域訓練協議会会長等を併任。

2021.12.4(土)

14:00～17:00

※視聴は無料ですが、事前申込が必要です

先着
100名

プログラム

14:00～14:40

「コロナ禍における沖縄の避難所検証と「防災うみやま連携」

稲垣 暁

14:40～15:20

「企業の有事に備える平時からの取り組み——企業のBCP(事業継続計画)策定のススメ」

谷口 友一

(休憩10分程度)

15:30～16:00

「災害時の施設・地域における災害時要援護者(避難行動要支援者)に対する支援～BCP(災害時対応事業継続計画)からの視座～」

山田 克宏

16:00～16:30

「自然災害と使用者の安全配慮義務」

河合 暉

16:30～17:00

フロア討論

司会：園田 浩二（沖縄大学経済学部教授）

協賛 一般社団法人 大学コンソーシアム沖縄

一般社団法人大学コンソーシアム沖縄は、県内11の大学・短期大学・高等専門学校により構成された団体で、地域社会の活性化及び沖縄県の発展と振興に寄与することをめざし、その取組の1つとして、構成機関による連携協力での県民向け公開講座を実施しています。

オンラインの講義であり「Zoomウェビナー」を使って行います。Wi-Fiなどネット接続ができる環境で、PC・スマホ・タブレットなどから視聴できます。お申し込みされた方には、開講前日までに、接続先の情報（ログインURL）をメールにてご案内します。

■申込先 【MAIL】 chiken-staff@okinawa-u.ac.jp

（件名は「12月4日土曜教養講座申込」本文で氏名・電話番号の記載をお願いします）

■問い合わせ先 沖縄大学地域研究所 沖縄県那覇市国場405番地 【TEL】 098-832-5599



今後の公開講座等の情報をご希望の方へLINEで配信を行っております。左のQRコードより登録ください！

4. 自分の世界を広げることができた。(20代沖大生)
5. 内容が濃く、防災意識の醸成にたいへん役立ちました。(60代一般)
6. BCPの基本的な考え方はわかりやすかったですが、企業行動におけるBCPの事例も伺いたかったです。(50代)
7. まあまあ良かった(50代一般)
8. 異分野融合型の内容で構成され、非常に興味深いものでした。音声聴きづらい点があった点は残念でした。(40代一般)
9. 様々な大学の先生方からお話を聞くことができて良かったです。BCPという単語は初めて聞いたので、詳しく知ることができて良かったです。防災活動の中にも生かしていきたいと思います。(20代一般)

■意見・感想（漢字表現等は原文のまま。）

1. 今回は、登壇者からの案内で参加させて頂きましたが、オンライン講座であれば居住地が茨城であっても、「沖縄」を知る貴重な機会であると感じました。私も地方私大出身者ですが、地域に根付いた貴学は素晴らしいと感じました。(60代一般)
2. またこのような機会があれば参加したいと思います。(20代一般)

第581回 土曜教養講座
2022年2月12日（土）

米軍基地と基地労働者



講師：ハサンボイ ライヒム
ベルガノフ
【名古屋大学修士課程2年生】



講師・司会：春田 吉備彦
【沖縄大学経法商学部教授】



講師：紺谷 智弘
【全駐労中央執行委員長】



講師：伊原 亮司
【岐阜大学地域科学部教授・
社会学博士（一橋大学）】

米軍基地と 基地労働者

北部訓練場一部返還後も日本国土の0.6%の狭大な沖縄県に陸軍・海軍・空軍・海兵隊の4米軍(アメリカ合衆国軍隊駐留軍)の米軍基地の約71%が集中する。

米軍基地は、多くの基地被害をもたらすだけでなく、約9000名の大規模な正規雇用を沖縄にもたらす。基地労働者は「沖縄」だけではなく、「三沢」「横田」「厚木」「座間」「横須賀」「呉」「岩国」「佐世保」等の「日本の10都府県」で働いている。

しかし、米軍基地で働く基地労働者の働き方は、あまり知られていない。

本講座でも、明らかにされるように、基地労働者の実像に迫ることは、沖縄や日本の戦後を、あらためて問い直し我々の原点を確認することになる。

登壇者



HASANBOY RAHIMBERGANOV

ハサンボイ ラヒムベルガノフ

ウズベキスタン共和国・ヒヴァ出身。タシケント法科大学卒業。名古屋大学日本法教育研究センター終了。名古屋大学修士課程2年生。



春田 吉備彦

【沖縄大学経済学部教授】

専門は労働法・社会保障法。中央大学大学院法学研究科博士後期課程修了。2009年より現職。沖縄県労働委員会(第17期～第19期)公益委員・会長代理歴任。著書に『沖縄県産品の労働法』(琉球新報、2018年)。論文に『駐留軍等労働者における「間接雇用方式」の歴史的展開と労働法上の課題』新田秀樹・米津孝司・川田知子・長谷川聡・河合盛嗣『現代雇用社会における自由と平等』(信山社、2019年)。



紺谷 智弘

【全駐米中央執行委員長】

1961年東京生まれ。1983年より1998年まで在日米陸軍相模総合補給廠に勤務。1999年金駐留軍労働組合専任役員に就任。2016年より現職。厚生労働省労働政策審議会臨時委員(2015年～現在)。



伊原 亮司

【岐阜大学地域科学部准教授・社会学博士(一橋大学)】

専門は労働社会学、経営管理論、現代社会論。著書、『合併の代償―日産全全プリンス労組の闘いの軌跡』(桜井書店、2019年)、『ムダのカイゼン、カイゼンのムダ―トヨタ生産システムの「浸透」と現代社会の「変容」』(こぼし書房、2017年)、『トヨタと日産にみる「場」に生きる労働現場の比較分析』(桜井書店、2016年)、『私たちはどのように働かされるのか』(こぼし書房、2015年)、『トヨタの労働現場―ダイナミズムとコンテクスト』(桜井書店、2003年)。

2022.2.12 土

14:00～17:00

※視聴は無料ですが、事前申込みが必要です

※オンライン Zoomウェビナーで開催

先着
100名

プログラム

14:00～14:30

「日本の労働組合法制の概観と特徴
―ウズベキスタンの労働組合法制との比較―」

ハサンボイ ラヒムベルガノフ

14:30～15:10

「米軍統治下の沖縄の軍労働と本土復帰」

春田 吉備彦

(休憩10分程度)

15:30～16:00

「基地労働と全駐労の取り組み」

紺谷 智弘

16:00～16:30

「基地労働の「職務給」の意義
―「日本的経営」から「働き方改革」への
経緯と比べて」

伊原 亮司

16:30～17:00

「フロア討論」

司会 春田 吉備彦

オンラインの講座であり「Zoomウェビナー」を使って行います。Wi-Fiなどネット接続ができる環境で、PC・スマホ・タブレットなどから視聴できます。お申し込みされた方には、講座開始前日までに、接続先の情報(ログインURL)をメールにてご案内します。

■申込先 【MAIL】 chicken-staff@okinawa-u.ac.jp

(件名は「2月12日土曜教養講座申込」本文で氏名・電話番号の記載をお願いします)

■問い合わせ先 沖縄大学地域研究所 沖縄県那覇市国場405番地 【TEL】 098-832-5599



今後の公開講座等の情報
をご希望の方へLINEで
配信を行っております。
左のQRコードより登録
ください!

米軍基地と基地労働者

【日 時】 2022 年 2 月 12 日(土) 14:00～17:00
【会 場】 アネックス共創館
【登壇者】 ハサンボイ・ラヒムベルガノフ（名古屋大学修士課程 2 年生）
春田吉備彦（沖縄大学経済法学部教授）
紺谷智弘（全駐労中央執行委員長）
伊原亮司（岐阜大学地域科学部准教授・社会学博士(一橋大学)）

【聴講料】 無料

【申込人数】 52 名

【参加者内訳】 ※アンケート回答数 13 人

(年代別)		(所属別)	
10 代	1 人	一般	10 人
20 代	1 人	地域住民	1 人
30 代	2 人	本学同窓会	1 人
40 代	2 人	本学後援会	0 人
50 代	2 人	沖大生	0 人
60 代	6 人	学生	0 人
70 代以上	0 人	本学教員	0 人
		その他	1 人

(都道府県別)		(講座を知った方法)	
沖縄県	9 人	チラシ	0 人
東京都	1 人	新聞	4 人
京都府	1 人	ラジオ	0 人
愛媛県	1 人	LINE	0 人
長崎県	1 人	メール	5 人
		知人・友人	1 人
		沖大ホームページ	0 人
		その他	3 人

■感想（漢字表現等は原文のまま。）

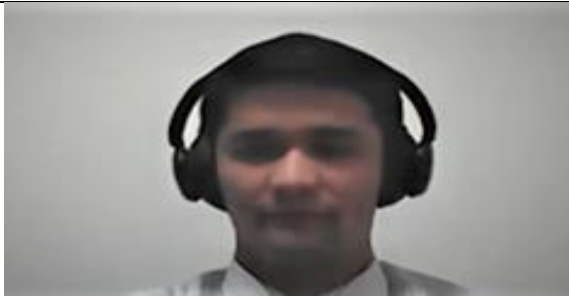
1. 素晴らしいテーマ設定のセミナーでした。（30代一般）
2. 米軍基地での労働問題に関心があり、参加しました。今後も、基地問題そのものと共に、基地労働者について社会全体で考える機会をもつことが重要と思っています。ありがとうございました。（60代一般）
3. とても勉強になりました。2つ質問させていただき、ご回答いただいた kichi です。石川高校で先日、春田先生の出前講座でお世話になった知念勝美でございます。kchi と打つつもりが間違っ、きちになっており、すみません私もびっくりしました。先生にもどうぞよろしくお伝えください。（50代一般）
4. 今日はいつもと違った観点から沖縄に関心を寄せることができ、自分にとってはとても良い機会でした。また、お話や質問に対してもわかりやすく答えて下さったので、助かりました。ありがとうございました。（30代一般）

5. しごとの都合で最後まで聞けませんでした。春田先生につづいて全駐労委員長のお話を聞けて、基地労働者の歴史を概括できました。先人たちの目を見張るような権利獲得の闘争があって、現地点に到達したのだと知れたらいい。大きな壁に直面している現状も、あらためて認識できました。基地労働者だけでなく、「外」が彼らの現状を知り、沖縄県民の状況と一体としてとらえる目を持たないと、前に進まないなと実感できました。(40代一般)
6. 知らない事も多々あったので勉強になりました。個人的に知りたかったのは、軍雇用員の平均年齢 平均年収 昇給率 でした。それを踏まえて、基地返還後の就労保障を皆で考える目安にもなるかと。(40代一般)
7. 雇用形態から歴史まで概観できて興味尽きない時間でした。ありがとうございました。(60代)
8. 約3時間、じっくり聴きました。大変勉強になり感謝しております。(60代一般)
9. 内容が少し難しくついていけませんでした。PPTの資料が手元があれば分かりやすかったかと思います。あと、発表されていたのが男性が多かったので、女性の研究者も入れてほしかったです。(20代一般)
10. 途中で音声途切れで視聴不可能でした。(60代地域住民)
11. 沖縄県基地労働者の現状を中心に知りたかった。(60代沖大同窓会)
12. 基地従業員の不安定さがあらためて認識することができました。また、国内労働法が適用されないなかで、JOB型雇用の動向が気になります。(50代一般)
13. ほとんど知らなかった基地従業員の労働環境等に触れる良い機会となった。(60代一般)

■意見・感想（漢字表現等は原文のまま。）

1. 今日の問題を深く学ばさせていただけるので、とてもありがたいです。(50代一般)
2. 千葉の安房高との教員養成がうまくいきますように。ゲッチョ学長は母校 安房高の1年後輩で、また沖縄暮らしの先輩で著書も楽しく拝見しています。ますますのご活躍を！(60代)
3. 土曜講座をこんなに長く続けていることに驚きました。ジェンダー等の講座も取り上げてほしいです。(20代一般)
4. 日米が煽っている台湾危機の実態、県民はどう対応すればいいのか考える材料が欲しい。(60代沖大同窓会)

【講座の様子】



【登壇者：ハサンボイ・ラヒムベルガノフ】



【登壇者：春田 吉備彦】



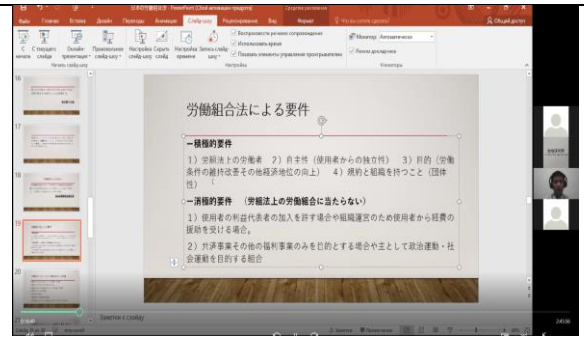
【登壇者：紺谷 智弘】



【登壇者：伊原 亮司】



【講座の様子①】



【講座の様子②】



【講座の様子③】



【講座の様子④】

第582回 土曜教養講座
2022年3月26日(土)

沖縄における障がい者スポーツ振興の現在と未来



講師：手登根 雄次
【沖縄県障がい者スポーツ協会理事】
・(一社)琉球スポーツサポート
代表】



講師：屋良 景斗
【沖縄盲学校高等部専攻科教員】
・ブラインドサッカーチーム
琉球 agachi 代表】



講師：中山 健二郎
【沖縄大学経人文学部講師】

第582回沖縄大学土曜教養講座 オンライン講座

沖縄における 障がい者スポーツ振興の 現在と未来

2021年、「多様性と調和」をコンセプトの一つに掲げた東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。大会の遺産(レガシー)として、国際的な競技力の向上のみならず、より多くの人々が自分の体や心の状態に合わせてスポーツに親しめる社会の構築が期待されています。とりわけ、障がいの有無に関わらずスポーツ活動を楽しめる環境を整備することは、スポーツ庁が策定した「スポーツ基本計画」でも示されている重要な課題です。

スポーツの振興については、地域の独自性・固有性を踏まえながら進めていくことが大切です。そこで、本講座ではまず、沖縄県の障がい者におけるスポーツ実施状況についての調査結果を報告し、現状と課題について検討します。また、沖縄県障がい者スポーツ協会理事、および県内で活動する選手をお招きし、現場の取り組み事例や視点を示していただきながら、沖縄における障がい者スポーツ振興の未来について考えていきます。

登壇者



て ど こん ゆう じ
手登根 雄次

[沖縄県障がい者スポーツ協会 理事、
(一社) 琉球スポーツサポート 代表]

沖縄国際大学出身。大学卒業後13年間、教員として主に特別支援教育に携わる。特支教育の現場で感じたスポーツ課題を解決するため、2013年に(一社)琉球スポーツサポートを設立。現在、同法人にて障がいの者の総合型地域スポーツクラブ運営や運動療育指導などを行っている。沖縄県障がい者スポーツ協会理事、浦添市教育委員会教育委員を併任。



や ら けい と
屋良 景斗

[沖縄盲学校高等部専攻科 教員、
ブラインドサッカーチーム琉球 agachi 代表]

筑波技術大学にてあはき免許(あんま・鍼・灸)取得後、筑波大学理療科教員養成施設を卒業し、理療科教員として沖縄盲学校で勤務。視覚に障がいのある方を対象にあはきの指導をしている。2017年に、ブラインドサッカーの社会人チームである琉球Agachiを設立。障がいのある人も無い人も共に過ごせる余暇活動の場を目指して活動している。



なか やま けん じ ろう
中山 健二郎

[沖縄大学人文学部福祉文化学科 講師]

立教大学大学院コミュニティ福祉学専攻修士課程前期課程修了。修士(スポーツウェルネス学)。専門はスポーツ社会学、メディア・スポーツ論。広告代理店勤務、日本財団パラリンピックサポートセンター(現パラスポーツサポートセンター)非常勤研究員、聖路加国際大学看護学部非常勤講師などを経て、2020年4月より現職。現在、障がい者スポーツ関連カリキュラムの担当として、地域で活動する団体と連携した指導者養成の拡充に取り組んでいる。

2022.3.26^土

14:00~16:40

※視聴は無料ですが、事前申込が必要です

※オンライン Zoomウェビナーで開催

先着
100名

プログラム

14:00~14:10 開会挨拶・趣旨説明 中山 健二郎

14:10~14:40
「沖縄県の障がい者スポーツ振興に関する現状と課題
—スポーツ実施状況調査の分析から—」
中山 健二郎

14:40~15:10
「沖縄県障がい者スポーツ協会および
関連団体の取り組み」
手登根 雄次

15:10~15:40
「選手・チームの活動現場からみた
沖縄の障がい者スポーツ」
屋良 景斗

(休憩10分程度)

15:50~16:20
「フロア討論」 手登根氏 屋良氏 中山氏

16:20~16:35
「質疑応答」

16:35~16:40 閉会挨拶 中山 健二郎

オンラインの講義であり「Zoomウェビナー」を使って行います。Wi-Fiなどネット接続ができる環境で、PC・スマホ・タブレットなどから視聴できます。お申し込みされた方には、講義開始前日までに、接続先の情報(ログインURL)をメールにてご案内します。

■申込先 【MAIL】 chiken-staff@okinawa-u.ac.jp

(件名は「3月26日土曜教養講座申込」本文で氏名・電話番号の記載をお願いします)

■問い合わせ先 沖縄大学地域研究所 沖縄県那覇市市場405番地 【TEL】 098-832-5599



今後の公開講座等の情報をご希望の方へLINEで配信を行っております。左のQRコードよりご登録ください!

沖縄における障がい者スポーツ振興の現在と未来

【日 時】 2022 年 3 月 26 日(土) 14:00～16:40

【会 場】 アネックス共創館

【登壇者】 手登根雄次（沖縄県障がい者スポーツ協会理事、(一社)琉球スポーツサポート代表）

屋良景斗（沖縄盲学校高等部専攻科教員、ブラインドサッカーチーム琉球 agachi 代表）

中山健二郎（沖縄大学人文学部福祉文化学科講師）

【聴講料】 無料

【申込人数】 26 名

【参加者内訳】 ※アンケート回答数 10 人

(年代別)

10 代 0 人

20 代 2 人

30 代 1 人

40 代 2 人

50 代 3 人

60 代 1 人

70 代以上 1 人

(所属別)

一般 4 人

地域住民 0 人

本学同窓会 0 人

本学後援会 0 人

沖大生 1 人

学生 1 人

本学教員 1 人

その他 3 人

(都道府県別)

沖縄県 10 人

(講座を知った方法)

チラシ 1 人

新聞 1 人

ラジオ 0 人

LINE 3 人

メール 0 人

知人・友人 3 人

沖大ホームページ 0 人

その他 2 人

■感想（漢字表現等は原文のまま。）

1. 大変勉強になった。（30代一般）

2. 私自身、大学の卒業論文で「沖縄県の障がい者スポーツの現状と課題」について取り上げようと考えていたため、今回のお話は本当にためになるものばかりでした。今後もイベント等に参加し、障がい者スポーツについてさらに深めていこうと思います。ありがとうございました。（20代学生）

3. 沖縄県内の障害者スポーツの現状を知らなかったなので、今回の研修でおおよそ理解することができた。（50代）

4. 障がい者スポーツについて幅広いお話が聞けました。今回の取り組みで障害者スポーツに関する様々な課題を把握できたのではないのでしょうか。（50代一般）

5. オンライン開催のおかげで視聴が容易となり良かった。多様な競技の現場をより沢山紹介して欲しかった。(40代)
6. ズームで講義を受けるのは、慣れてなくてどうなるかと思いましたが、パネリストの方が分かりやすく説明して下さったので良かったです。(70代一般)
7. いろいろな障害種別の障がい者スポーツ競技団体の声も聴きたい。(60代一般)
8. 障がい者のスポーツ実施率が6割を超えているのことに驚きました。実施内容の充実、運営費、遠征費の課題については、今後も注目したいと感じました。(50代)
9. 大変素晴らしい内容でした。講師の先生の人選も良かったです。また参加したいです。(40代)

■意見・感想（漢字表現等は原文のまま。）

1. 学べる場を無料で提供して頂けることが、本当にありがたいです。今後も関心のある分野について学習出来ればと思っています。(20代学生)
2. 今後もこのようにズームで講座をして下さるといいなと思います。(70代一般)
3. 今後も誰もが注目しないマニアックな障がい者スポーツもいいのでは。(60代一般)
4. 研究者の考察や当事者の意見を聴くことができ有意義な講座と感じました。(50代)

【講座の様子】



【手登根 雄次】



【屋良 景斗】



【中山 健二郎】



【登壇の様子①】



【登壇の様子②】

公開講座

2021 年度 地域研究所公開講座一覧

	講座日	テーマ	講師
公開講座	9月15日(水) 10月6日(水) 10月27日(水) 11月17日(水)	売場の科学 ～コロナ後の売れるお店の作り方～	講 師：渡辺 隆之【沖縄大学客員教授・東京未来大学教授】
		共催：沖縄大学／(株)セブン-イレブン・沖縄	
公開講座	8月27日(金)	コロナに負けない！ 身近なことから始める健康づくり	コーディネーター：嘉数 健吾【沖縄大学人文学部 福祉文化学科教授】 講 師：宮本 晋一【沖縄大学人文学部 福祉文化学科教授】 講 師：喜屋 武ゆりか【沖縄大学健康栄養学部 管理栄養学科講師】
		主催：沖縄大学地域研究所、協力：沖縄大学人文学部福祉文化学科、健康栄養学部管理栄養学科	
公開講座	9月29日(水)	障がい者雇用促進のために —事例報告＆ディスカッション—	司 会：島村 聡【沖縄大学人文学部福祉文化学科教授/ 沖縄大学地域研究所所長】 講 師：比嘉 めみ子【(南)やんばるライフ専務取締役】 講 師：下田 美智代【(株)共栄環境代表取締役】 講 師：仲本 和美【(南)仲松ミート執行役員】
		主催：沖縄大学地域研究所、共催：沖縄県中小企業家同友会	
公開講座	10月9日(土)	子どもたちに健康と命の大切さを育む —教師のためのがん教育—	コーディネーター：嘉数 健吾【沖縄大学人文学部 福祉文化学科教授】 講 師：山代 寛【沖縄大学健康栄養学部管理栄養学科教授】 講 師：笠原 健市【沖縄県立開邦中学校保健体育教諭】 講 師：砂川 龍馬【那覇市立石田中学校保健体育科教諭】
		主催：沖縄大学地域研究所、協力：人文学部福祉文化学科、健康栄養学部管理栄養学科 後援：沖縄・南部こだまの会	
公開講座	11月29日(月)	女性リーダーの育成 —ロールモデルからの提言—	コーディネーター：島袋 隆志【沖縄大学人文学部福祉文化学科教授/ 地域研究所副所長】 挨拶：石川 京美【沖縄県中小企業同友会 碧の会 副部長】 講 師：友寄 律子【ライフサポートでこ代表】 講 師：与那覇 依子【株式会社 樹来代表】 講 師：大城 恵美【株式会社近代美術代表】
		共催：沖縄大学／沖縄県中小企業家同友会「碧の会」、協力：沖縄大学経法商学部経法商学科	

【公開講座チラシ】



2021年度 沖縄大学公開講座

沖縄大学／(株)セブン-イレブン・沖縄：共同主催

売場の科学

～コロナ後の売れるお店の作り方～



講師／「売場の科学」著者
渡辺 隆之氏
沖縄大学客員教授・エムアイディ・ラボ代表

「昨年来より世界中がコロナ禍に見舞われています。日本においても沖縄は首都圏や京阪神に劣らず、人口10万人当たりの感染者数は際立っています。このような状況下で、アマゾンや楽天などのインターネット通販が急激に売り上げを伸ばし、果ごもり需要の拡大から小売店舗ではスーパーやドラッグストアなど家庭内の消費需要に支えられた業態の成績は伸びています。コンビニもニーズの変化への対応を余儀なくされました。」

しかし、コロナ特需が消えた後もすべての店舗の業績が良いとは限りません。むしろ、業績の違いは際立つてくることでしょう。このタイミングで、改めて基本を徹底し変化に対応していく努力を怠らないことが重要です。リアルな店舗にしかない、リアルな店舗だからこそできることを改めて見直してみませんか。」



オンライン (Zoomウェビナー) 開催予定

※視聴は無料ですが、メールでの事前申込が必要です

講座対象者／沖縄県民を対象 ※先着100名

本講座は新型コロナウイルス感染拡大防止の為、各回とも原則オンライン開催を予定しておりますが、感染状況により主催者が対面での実施が可能と判断した場合には、対面とオンラインでの同時開催を実施します。その際には、お申込み頂いている方へメール等で連絡をさせていただきます。

各回日程とテーマ (時間/各回: 16:30~18:30)

■第1回 9/15 水

「売場がマーケティングする！」

売ろうとするから売れない。マーケティングを再認識し、リアルな店舗が今何をすべきか、「売れるお店」になるためにできることを明らかにしましょう！

■第2回 10/6 水

「基本を忘れていませんか？」

店内のお客様の行動と心理を知ると売場づくりの仕方が変わるはず。コロナ特需に頼らない「売場づくりの基本」をおさらいしましょう！

■第3回 10/27 水

「お客様の価値を高めるとは？」

日々のお買物で「価値ある買物」をしていただくことがお店への支持を高める基本です。「顧客ライフタイムバリュー」の高め方をやさしく学びましょう！

■第4回 11/17 水

「お客様を飽きさせない売り方の極意とは？」

いつ行っても代わり映えない売り方、いつも同じ販促の繰り返し。これでは売上の向上は期待できません。「商い」の原則は「飽きない」。飽きない売り方を考えてみましょう！

オンラインの講義であり「Zoomウェビナー」を使って行います。Wi-Fiなどネット接続ができる環境で、PC・スマホ・タブレットなどから視聴できます。お申し込み頂いた方には、各回の講義日前日までに、接続先の情報 (ログインURL) をメールにてご案内します。

■申込先 【MAIL】 chiken-staff@okinawa-u.ac.jp

(件名は「売場の科学申込」本文で氏名・電話番号・居住地町村名の記載をお願いします)

■問い合わせ先 沖縄大学地域研究所 沖縄県那覇市国場405番地 【TEL】 098-832-5599



今後の公開講座等の情報をご希望の方へLINEで配信を行っております。左のQRコードよりご登録ください！



沖縄大学
OKINAWA UNIVERSITY

沖縄大学地域研究所 公開講座

コロナに負けない！

身近なことから始める

健康づくり

新型コロナウイルスの世界的大流行から1年以上が経過し、健康を取り巻く環境も変化しています。特に、コロナ禍における身体活動や栄養状態の低下が課題となっています。

そこで、本講座ではコロナ禍における身体活動と食生活の充実・改善を目指した健康づくりについて実践的な話題を提供します。

申込先

メール：chiken-staff@okinawa-u.ac.jp

(件名に「8月27日公開講座申込」、本文に「氏名・電話番号」を記載)

Zoomウェビナーにてオンライン講座をお申し込みます。ネットに接続し、PC・スマホ・タブレットなどから視聴できます。事務局より、視聴する際に接続するロケーションURLを講座の前日までにメールにて案内します。



今後の公開講座等の情報
を配信するメールマガジンを
ご登録ください。下のQR
コードを登録してください。

開催概要

日時：2021年 **8月27日(金)**

14時半～16時

形式：オンライン(Zoomウェビナー)

参加：無料

主催：沖縄大学地域研究所 (お問合せ：TEL 098-832-5599)

協力：人文学部福祉文化学科、健康栄養学部管理栄養学科

宮本 晋一
沖縄大学人文学部福祉文化学科教授 博士 (社会学)
愛媛大学「食と栄養とライフスタイル」を研究し、担当科目：スポーツ・レクリエーション・食と栄養と健康の統合研究

宮城武 ゆりか
沖縄大学健康栄養学部管理栄養学科講師 博士 (食生活)
資格：管理栄養士、栄養教諭、社会教育主事、担当科目：食生活
経歴：栄養教諭、研究：学校給食における食育のあり方

高橋 健悟
沖縄大学人文学部福祉文化学科教授 博士 (食生活)
専門は食生活教育、食生活と健康、沖縄大学では、食生活
の科目を中心に健康教育関連の科目も担当している。

プログラム

14:30-14:40 趣旨説明

14:40-15:40 話題提供

① 食事とライフスタイル

～ コロナ禍でも出来るカラダ革命～ 宮本 晋一

② 悩まず、簡単に！家族で楽しいおうちごはん

～ ヒントは学校給食！～ 宮城武 ゆりか

15:40-15:55 ブレーク

コロナに負けない！身近なことから始める健康づくり

15:55-16:00 まとめ [コーデイナー] 高橋 健悟



今秋の公開は早稲の作
程を希望の方へLINE
で配属します。下のQR
コードを登録ください！

沖縄大学文化科学研究科、地域文化研究所長
市役所での福祉実務経験を経て、2016年
から沖縄大学教員、厚生労働省との相談支援
に関する研究紙、日本社会福祉士会協会の
普及委員、沖縄県障害者自立支援協議会
委員として20年間、県民生活の向上に関
関について検討を行っている。



沖縄大学地域研究所 公開講座 ③

子どもたちに 健康と命の大切さを育む —教師のためのがん教育—

2021年度から中学校、2022年度から高校で「がん教育」が始まります。「悪性新生物(がん)」は、日本人の死因の第一位であり国民病とも言われています。その中で「がん」そのものの理解やがん患者に対する正しい認識を深める教育は不十分であると考えられており、「学校教育を通じてがんについて学ぶことにより、健康に対する関心をもち、がん理解、適切な態度や行動をとることのできるようになる(がん教育)の在り方に関する検討会」2015より定められています。

また、がん教育は学校教育活動全体で健康教育の一環として保健体育科を中心に学校の実情に応じて教育活動全体を通じて適切に行うことが大切であり、「がん専門医をはじめとする医療従事者やがん経験者等、学校外の人材を積極的に活用すること」が重要(文部科学省、2016)となります。特に「中学校・高等学校」では主に科学的根拠に基づいた理解をすることを主な役割とする(文部科学省、2016)という方針を踏まえ、がん教育は保健体育科を中心としながら(※)外部機関との連携によって子どもたちにがんの認識を深めていくことが求められています。

そこで、本講座は、医療従事者とがん教育の中学校を担う保健体育教員による現状理解とその共有を通じて、がん教育の充実に向けた一助にしたいと考えています。

申込先

メールアドレス: chicken-staff@okinawa-u.ac.jp
(件名に「10月9日公開講座申込」本文に「氏名・電話番号」を記載)

「Zoomカベナー」でオンライン講座をお届けします。ネットに接続し、PC・スマホ・タブレットなどから視聴できます。事務局より、視聴する際に接続するオンラインURLを講座の前日までにメールでご案内します。



※本講座は、医療従事者とがん教育の中学校を担う保健体育教員による現状理解とその共有を通じて、がん教育の充実に向けた一助にしたいと考えています。

開催概要

日 時: 2021年 **10月9日(土)**
14時～15時30分

形式: Zoomオンライン配信(無料)

主 催: 沖縄大学地域研究所(お問合せ: 098-832-5599)

協 力: 人文学部福祉文化学科 健康栄養学部管理栄養学科

後 援: 沖縄 南部こども会

プログラム

◆ 話題提供

- ① 医療の立場から
「中学生に伝えたい沖縄のがんの話」 山代 寛
- ② 学校の立場から
「学校におけるがん教育の現状と諸課題について」 笠原 健市
- ③ 学校の立場から
「新学習指導要領における
“がん”の取り扱いと指導の実例」 砂川 龍馬

◆ フリートーク 「コデイナー」 嘉数 健悟
「子どもたちに健康と命の大切さを育むがん教育とは」

山代 寛

(沖縄大学健康栄養学部管理栄養学科教授)
20年以上外科医としてがんの臨床に関わり、がん、生活習慣病予防の観点から健康増進を主張し発言。2016年より東京世代健康教育事業生活習慣病研究。

笠原 健市

(沖縄県立那覇中学校保健体育科教師)
2018年、「医療従事者の教育」に関する研究発表を通じて健康教育に関わる。現在は、文部科学省委託事業における「がん教育教材検討委員会」を担当。

砂川 龍馬

(那覇市立白田中学校保健体育科教師)
国立教育政策研究所教育課程開発部施設校事業をはじめ、学校体育研究発表大会等で発表を続け、県教育委員会所管主任補(保健体育)。

嘉数 健悟

(沖縄大学人文学部福祉文化学科准教授)
教師教育や、保健体育科教育、県内の小中学校の先生たちと体育、保健体育科の授業研究に取り組んでいる。

沖縄大学地域研究所 公開講座 ④

女性リーダーの育成 —ロールモデルからの提言—

少子高齢化に伴う労働力人口の減少、女性の社会進出が叫ばれながらも育児・介護と仕事の両立など社会的整備はまだまだ難しく、その役割の多くは女性に依存されています。

沖縄県中小企業家同友会の女性経営者部会「碧の会」は、企業経営に携わる女性の資質向上を目指し1989年9月に設立され、「生活者視点の企業経営で、新たな峰にチャレンジし、女性経営者が目指す北極星になろう」、そして「働く人が希望を掲げる未来に向け、学び実践する質の高い女性経営者が目指します」を掲げています。

本講座では、本学キャリアデザイン入門講義での学生への講話を通じて、その事業活動から多様性が生かした生産性の高い経営の実現と環境の整備と、性別に関係なく若者の意識改革につなげることを目的としています。

申込先

メール： chicken-staff@okinawa-u.ac.jp
（件名に「11月29日公開講座申込」、本文に氏名・電話番号」を記載）

「Zoomウェビナー」でオンライン講座をお届けします。ネットに接続し、PC・スマホ・タブレットなどから視聴できます。事務局より、視聴の際に接続するURLを講座の前日までにメールでご案内します。



今後の入場回数が多い場合は希望の回のみ申し込み可能です。7008コードが添付されます。



開催概要

日時：2021年11月29日（月）

16時20分～17時50分

形式：授業「キャリアデザイン入門」（学生）＋オンライン（一般公開）

※ 沖大の授業をオンライン公開する形で実施します。

共催：沖縄大学、沖縄県中小企業家同友会 碧の会

協力：沖縄大学経済法商学部経済法商学科

問合せ：沖縄大学地域研究所（TEL 098-832-5599）

プログラム

◆「碧の会」について
 沖縄県中小企業家同友会 碧の会 政策委員会委員長 石川 京美 氏

◆ 事例報告

①「人が育つ環境づくり～女性も活躍できる職場づくり～」
 友寄 利律子 氏

②「人のために、社会のために愛をもって行動」
 与那覇 依子 氏

③「幸せの一步は勇気から、成長実感と成長予感」
 大城 恵美 氏

◆フューチャー（コーディネータ）**島袋 隆志**

大城 恵美（株式会社恵美代表）
 父から引継ぎ2代目女性社長として8年目。理念経営を体現すべく日々実践。行動力だけとはどカーの元気づ。『やりたくないと思ったらいいよ』が口癖。小中高3姉妹の子育て、親の介護等の両立を自ら実践中。

与那覇 依子（株式会社 樹栄代表）
 持ち帰り弁当事業と運送業。日々女性リーダーの育成に奮闘中。「責任をもって仕事を進めることの楽しさ」を多くの女性社員が感じ、自らの能力に挑戦していきける会社になりたいと、社会のために愛をもって行動できる人

友寄 利律子（フイアサポート代表）
 同級生である前代表と立ち上げ、平成25年2月に経営者となる。突然の事業承継で戸惑い不安もあったが、持ち前の努力と根性で経営について学んだ。打たれ強いのが私の強み。現在は来年4月に3代目への事業承継を向かっています。好きな言葉「念ずれば花開く、いっすべあらんし〜すぶと〜。感謝・感謝、希望

第 1 4 回琉球弧研究支援

2021 年度 第 14 回 琉球弧研究支援（募集要項）

1. 趣旨

沖縄大学地域研究所では、学生とともに研究・実践活動に取り組み、本学の理念である「地域共創・未来共創」の発信地となることを目指しています。そこで、琉球弧(沖縄県内沖縄本島・離島・奄美含む)をフィールドとした研究や実践活動をしてみたい学生を募集します。

2. 対象

琉球弧をフィールドとした研究や実践活動をしたいという冲大生（卒論を形にしたい方も大歓迎！）。

個人もしくはグループでの応募可（研究助成費：個人 3 万円まで、グループ 5 万円まで）。

3. 内容

社会科学、自然科学を問わず、その島や地域の特色あるテーマについて研究・実践活動をする。

例) 法律、経営、教育、まちづくり、福祉、言語、文化、スポーツ、文学、歴史、経済、環境、社会学、心理学、映像、その他

4. 助成

【予算補助目安】個人 3 万円まで、グループ 5 万円まで

（沖縄本島内及び離島までの往復旅費・研究にかかる消耗品費等を実費支給）。

※報告書の提出及び最終報告会での発表が支給条件となります。

（約 2,000～3,000 字（A4 用紙 2 枚程度（1 ページ：40 字×40 行＝1,600 字が目安です。）

※消耗品等の購入については必ず事前に地域研究所までご相談ください。

※助成金は申し込みの班数に応じて調整します。

5. 図書館ライティングセンター利用を推奨（レポート作成の手助け）

レポートを書くのが苦手な学生でも、図書館のライティングセンターからレポート（応募書類、中間報告書・最終報告書 等）作成の指導が受けられるので安心です。

6. 全体のスケジュール

①応募（様式①を作成し、締め切り日までに地域研究所窓口にて提出）

②書類選考・選考結果発表（選考結果 2021 年 6 月 11 日(金)発表予定）

③研究

④中間報告書の提出（2021 年 11 月 5 日(金)）17：00 必着

⑤最終報告書・最終報告会資料の作成

⑥最終報告書・最終報告会資料の提出(2022 年 1 月 21 日(金)) 15：00 必着

⑦最終報告会にて成果発表（2022 年 2 月 17 日(木)）

※領収書の提出を基にその都度、経費は支給します。

7. 募集締め切り

2021 年 5 月 28 日（金）15:00 必着

2021 年 4 月 1 日

沖縄大学地研究所

Eメール：chiken@okinawa-u.ac.jp

2021 年度 琉球弧支援研究応募者一覧

個人の部					
No	学籍番号	氏名	学科	指導教員	研究・実践テーマ
1	20G004	毛 屹峰	大学院	前田 舟子	清代琉球王国の進行貿易について—進貢品の分析を中心に—
2	21S054	大城 響	経法商学科	糸数 哲	沖縄の化石を用いた古環境の解析
3	19S010	安里 一希	経法商学科	前田 舟子	泡盛の現在—沖縄の若者たちの泡盛観—
4	21G002	兼城 夏芽	大学院	前田 舟子	近世期における琉球の国家プロジェクト

2021 年度 第 14 回 琉球弧研究支援 最終報告プログラム

日時：2022 年 2 月 17 日（木）13 時～14 時 30 分

場所：オンライン（Zoom ミーティング）

進行：地域研究所事務長 城間尚樹

13:00 開会挨拶（地域研究所所長：島村聡）						
13:05～14:05 研究発表：（発表10分＋質疑応答5分）× 4 件						
	No.	発表者	学科	研究・実践テーマ	指導教員	時間目安
	1	大城響	経法商学科 (1年次)	沖縄の化石 ―リュウキュウに生きた生物を知る―	糸数哲	13:05
	2	安里一希	経法商学科 (3年次)	泡盛の現在 ―沖縄の若者たちの泡盛観―	前田舟子	13:20
	3	毛屹峰	現代沖縄研究科 沖縄・東アジア地域研究専攻 (M2)	清代琉球王国の進行貿易について ―進貢品の分析を中心に―	前田舟子	13:35
	4	兼城夏芽	現代沖縄研究科 沖縄・東アジア地域研究専攻 (M1)	近世期における琉球の国家プロジェクト	前田舟子	13:50
14:05 講評（盛口学長、島村所長）（各5分以内 x 2名）						
14:15 指導教員講評（糸数：約3分、前田：約10分）						
14:28 閉会挨拶（地域研究所副所長）						

2021 年度 第 14 回琉球弧研究支援
最終報告書

研究テーマ：

清代琉球王国の進行貿易について
—進貢品の分析を中心に—

大学院
毛屹峰
(指導教員：前田舟子)

1、研究の目的

本研究では、なぜ中国と琉球との間に「冊封・朝貢関係」が築かれることになったのか、中琉関係の大前提である歴史的背景についてまとめていきたい。その後で、本研究の主題である「進貢貿易」について研究したいと考えている。

現在、進貢貿易に関する研究は中国と日本において非常に盛んであり、その研究蓄積は豊富である。しかしながら、進貢品に関する研究はほとんど行われていない。そこで筆者は、そもそもなぜ中国と琉球との間で物品の贈与が行われるようになったのか、という点に着目し、中国と琉球との間を往来した物品に焦点を当てて研究を行う予定である。赤嶺守氏監修の『中国と琉球人の移動を探る―明・清時代を中心としたデータの構築と研究』（彩流社、初版 2013 年）などの研究データを踏まえつつ、琉球の外交文書集である『歴代宝案』を利用し、自身で新たなデータベースを作成し、物品の内容やその時代的変遷を探り、当時の中琉間においてなぜその物品がやり取りされたのかを明らかにし、その背景として時代ごとの中琉関係について探っていきたい。

2、進貢品の分析について

清代、琉球の進貢貿易における諸制度は明のそれを踏襲している。しかし、進貢品として琉球から清朝皇帝に進呈される礼物は、進貢の目的によって品目が異なっている。以下、清代に琉球国王から皇帝へ進呈された進貢品についての分析を試みたい。

通常、進貢品として皇帝に進呈されたのは、主に次の 24 項目である。馬、刀剣、馬鞍、金銀粉匣、金銀罐、摺扇、硫黄、貝、螺殻、煉熟白剛錫、赤銅、蘇木、胡椒、香木、烏木、丁香、土絲綿、土苧布、蕉布、糸煙、圍屏紙、護壽紙、金彩書圍屏、磨刀石。

一方、琉球の進貢に対して、清朝皇帝から琉球国王や王妃へ下賜された返礼品は、絹織物や磁器などであった。『歴代宝案』によると、常例進貢の貢物には硫黄、馬、海螺殻、紅銅、煉熟白剛錫などがある。明代初期から進貢された硫黄の数量は生硫黄2 万斤であったが、『歴代宝案』によれば、明末崇禎 11 年（1638）に煎熟硫黄1 万 2,600 斤に変化している。明清交替後、清朝への貢物として煎熟硫黄1 万 2,600斤が引き継がれた。明代以来の常例貢物である馬は清代初期にも進貢されていたが、康熙 20 年（1681）に皇帝の諭旨により糸煙と併せて免貢になっている。この馬の免貢の諭旨に対し、琉球は馬の代わりに紅銅 3,000斤に改貢（変更）している。以後、紅銅 3,000斤は常例進貢の貢物として定着するようになった。また、康熙 29 年（1690）までは、進貢年ごとに海螺殻 3,000 個ずつを進貢していたが、康熙 30 年には海螺殻の免貢を命じられている。この海螺殻の免貢に対して、琉球は煉熟白剛錫 1,000斤に改貢して献上している。このように、明朝以来の常例進貢品が清朝によって固辞された場合、琉球はその項目を削除するのではなく、代替品を用意して進貢していたことが分かる。結果的に、康熙 31 年以降の常例進貢物は、煎熟硫黄1 万 2,600斤、紅銅 3,000斤、煉熟白剛錫 1,000斤が定例となった。

とはいえ、これらの常例進貢品はすべて琉球の自国産という訳ではなかった。中には、煎熟硫黄のように、琉球王国が領有する硫黄島で採掘されたものもあるが、それ以外は薩摩を経由して調達されていた。琉球産ではない銅や錫が清朝に進呈されていた理由は、清朝の宮廷内の装飾品に使用する材料として、清朝側の需要が高かったためである。次に、常例進貢品である硫黄・紅銅・煉熟白剛錫について概要をまとめてみたい。

(1) 硫黄

煎熟硫黄は琉球王国の硫黄島で採掘し加工されたもので、正貢品の中で唯一の本国産である。硫黄は活火山から放出されるガスに含まれる硫黄成分が空気中で冷やされて凝結することによって生じる。このため、純度の高い天然硫黄は、日本・琉球・台湾・東南アジア島嶼など環太平洋火山帯沿った地域で産出される。これに対して、活火山がほとんどない中国では天然硫黄の産出は乏しい。とはいえ、硫黄は火薬など火器の製作には欠かせない原料ともなるので、戦争など争いの続く明・清朝において、硫黄は非常に重宝された重要物資であった。その需要は清代に入っても変わらず、琉球は生硫黄を加工する技術を習得しながら、餅状にして運搬しやすい形にし、毎回の進貢で清朝に進呈していた。清代の档案資料によれば、福建到着後、福州で荷下ろしした硫黄は北京へは運ばず、福建の藩庫（地方行政の倉庫）で保管されていた。

(2) 赤銅

赤銅は硫化物または酸化物銅鉱石から製錬された純銅であり、鑄銭や銅器物の製造などにも利用することができる。赤銅は硬度が低いが、敲くだけでいろいろな道具や装飾品を作ることができる。この赤銅は、康熙 21 年（1682）から常例進貢品として清朝に進貢されるようになった。赤銅を進貢する代わりに、それまでの常例進貢品であった琉球馬の供給を停止させる論旨が康熙帝から出された。実はそれ以前に、琉球からは複数回にわたって赤銅が進呈されている記録がある。しかしいずれも「加貢」という通常の進貢品に追加するという名目で、進呈回数や数量は不定であった。具体的には、康熙 5 年（1666）は 600 斤、7 年は 600 斤、11 年は 1,000 斤、17 年は 1,000 斤、19 年は 1,000 斤であった。しかし、赤銅が琉球馬に代わって正貢品になると、その数量は 3,000 斤に増量された。

(3) 煉熟白剛錫

煉熟白剛錫は、康熙 31 年（1692）以降、海螺殻に代わって正貢品となったものである。もともとは琉球側の意向であった。近年、中国第一歴史档案馆が整理した『清宮内務府奏銷档』には、「尚お未だ進呈せざる所有の貢物の内、硫黄一万二千六百觔を除き、已に例に照らして福建省藩庫に留貯せしめ、工部より取用せしめよ。其の紅銅三千觔・白剛錫一千觔は応に内務府に交して査収せしめるを請う。」と記載されている。つまり、正貢品三種のうち、硫黄だけは福建省内で保存し、残りの赤銅と煉熟白剛錫は、進貢使節団によって北京まで運ばれ、北京到着後、その連絡を受けた礼部が進貢使節の宿舎である会同館に役人を派遣して受領させ、礼部が皇帝に奏聞（報告）したのである。礼部を経由して最終的に進貢品は工部や内務府などに分配されたのである。琉球から進貢した煉熟白剛錫は、内務府に届けられた後、清朝の皇室御用達の錫器の材料として使用されたと推測される。

3、おわりに

琉球は、三山時代であった洪武 5（1372）年に初めて明朝と正式な外交関係を樹立して以来、光緒 5 年（1879）の「琉球処分」に至るまで、約 500 年にわたり中国（明・清）と宗属関係を維持してきた。朝貢体制は過去の東アジア地域における独特の国際秩序であり、その最も主要な特徴は「中国」を中心として、周辺の夷狄諸国が冊封を受け入れたことである。進貢品について、清朝は明朝と同じように貢期（進貢時期）や進貢品の種類・数量まで明確に細かく規定しているが、進貢品目については変遷が見られた。その理由として、もともと騎馬民族である満洲人と

って運搬用の馬は必要なかったのかも知れないし、沿海の住民ではない彼らには海螺殻の使い道はなかったのかも知れない。ともかく、この 2 品目がそれぞれ赤銅と錫に変更されたが、それは琉球からの申し入れによるものであった。清朝は琉球の進貢の負担を少しでも軽減しようと、不要な馬と海螺殻の進貢を免除し、代替品は不要としたが、琉球にとってそれは負担が軽くなるどころか、かえって中琉交流に痛手を負うものと捉えられ、免除されることに琉球は必死で抵抗した。その結果、代替品として代わりに進呈されたのが赤銅と錫であり、どちらも清朝での需要に適っていたことから康熙帝は進呈を許可し、以後、定例化することになった。このように、進貢は琉球王国にとって最大かつ最重要な外交手段であり、それを維持することは琉球の死活問題であった。そのため、品目一つの変更に際しても、琉球は必死で抵抗したり代替案を探して進呈していた。たとえそれが自国で調達できないものであっても、琉球を支配する薩摩を逆に利用して調達していたのは、琉球が王国を維持する知恵だったのかも知れない。

本稿では、清代の正貢品である三つの進貢品について分析したが、そこから分かったのは、それぞれの進貢品について、項目が決定するまでには琉球側の様々な葛藤や外交戦術があったということである。琉球を懐柔するために項目を減らそうとする清朝側と、項目が減らされては進貢貿易が成り立たないと必死に食い下がる琉球側とで、双方の朝貢体制に対する捉え方に違いが見えて興味深い。琉球は物品調達に、薩摩との関係をうまく利用するなど、琉球のしたたかな戦略もうかがい知ることが出来る。このように、進貢品の変遷過程やその背景には、当時の中琉両国の需要と供給が関係しており、そのバランスは琉球を取り巻く薩摩や中国との外交といった政治状況と密接に拘わっていることが分かる。

4、 先行研究・参考文献

- ・喜舎場一隆「明末・清初の朝貢と薩琉関係」『近世薩琉関係史の研究』国書刊行会、1993 年
- ・朱徳蘭「十五世紀朝貢與琉球的亞洲外交貿易」『第二屆琉中歴史関係国際学術会議論文集』琉中歴史関係国際学術会議実行委員会、1989 年
- ・田名真之「北京故宮博物院所蔵の琉球貢文物について」『第十屆中琉歴史関係学術会議論文集』中琉文化経済協会、2007 年
- ・陳碩炫「清代琉球使節の進貢日程に関する研究」琉球大学大学院博士学位論文、2008 年
- ・丁春梅、林京搭「清政府封琉球朝貢貿易政策初探」『海交史研究』2007 年第 1 期
- ・辺土名朝有『琉球の朝貢貿易』校倉書房、1998 年
- ・真栄平房昭「琉球の進貢貿易論をめぐる一視点—貿易品の需要と消費の接点を探る」『沖縄文化研究』25、法政大学沖縄文化研究所、1999 年
- ・松浦章『清代中国琉球貿易史の研究』榕樹書林、2003 年
- ・宮田俊彦「清朝の招諭と琉清貿易の盛況」『南島史学』7、南島史学会、1975 年
- ・頼正維「清康熙嘉慶時期的中琉貿易」『中国社会經濟史研究』2005 年第 3 期
- ・頼正維「清代中琉冊封貿易述略」『寧徳師專学報（哲学社会科学版）』2005 年第 2 期
- ・李金明「明代中琉封貢関係:是“藩属”抑或“貿易伙伴”」『第十二屆中琉歴史関係国際学術会議論文集』北京図書出版社、2010 年
- ・劉蘭青「清代中琉の封貢と貿易の関係について」『第三屆琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』沖縄県教育委員会、1996 年
- ・『歴代宝案（校訂本）』（一）～（十五）、沖縄県歴代宝案編集委員会、1992～2016 年

5、指導教員コメント

毛さんは、本研究で分析した常例進貢（通常の進貢／2年に1回）の他に、特殊進貢と呼ばれる①「慶賀」（皇帝の即位や誕生日を祝う）、②「冊封謝恩」（琉球国王への冊封の御礼）、③「御書謝恩」（皇帝から下賜された四字の扁額を頂いた御礼）での献上品についても分析を行っている。しかし、今回は字数制限の関係で常例進貢品のみの報告となっている。

「進貢貿易」という研究テーマは、琉球史研究や中琉交流史研究を志す者が必ず学習するテーマではあるが、それは「進貢貿易」なしには琉球王国は成立せず、琉球史も存在しなかったからだといえる。そのため、毛さんが冒頭で述べているように、「進貢貿易史研究」を行おうとすれば、その研究蓄積は膨大であり、後学が研究する隙はないようにも思える。しかし、その隙を毛さんなりに上手く見つけてくれたのが、この「進貢品に見る中琉関係の変遷」という視点である。言われてみれば、なぜ琉球がそれらの物品を中国皇帝へ献上していたのか、なぜ中国皇帝はそれを欲しがったのかについては不明な点が多い。例えば、琉球が明朝に琉球馬を献上し続けた理由について、おおよそのところ、漢民族国家の明朝では運搬用として頑丈な琉球馬が必要であったが、騎馬民族国家の清朝では、自分たちの馬よりも背丈が低くやや胴長短足である琉球馬は必要なかったとされている。しかし、史料には馬の献上を取りやめた明確な理由はなく推測の域を出ないが、それでも清代になって新たに加わった赤銅と錫について、なぜ清朝が必要としたのか、なぜ琉球がそれを献上したのかを検討することで、馬の提供を取りやめた遠因が見えてくるような気がした。

そもそも琉球では、進貢のことを「進貢貿易」と呼び慣わしているが、中国ではあくまで「朝貢」であり、そこに「貿易」の概念はない。しかし琉球にとっては、北京にいる中国皇帝に進貢品を献上して終了するのではなく、福建に滞在して、王府予算と薩摩藩経費を使って中国商品を購入することも国家運営の大事な任務であった。こうした双方の捉え方の違いがより顕著に示されたのが、毛さんの指摘した、馬と海蝶殻を赤銅と錫に変更するという琉球の外交戦術であった。中国皇帝は、その二項目を免除（削除）することで琉球への懐柔を示したつもりが、琉球にとっては、進貢が減少し、中国との外交関係が希薄になることを懸念させる恐ろしい提案として受け止められた。そのために琉球は必死で代替案を提示したのだが、その代替品が琉球では産出せず、薩摩を経由して調達されていたにも関わらず、これまでの「加貢」（通常の進貢にプラスした貢品のこと）でまですまずの手応えを得ていた赤銅と錫を候補に選び、常例進貢としての項目数の維持を図ったのである。

このように、1つの物品や1項目に関しても、決して“テーゲー”に判断することなく、琉球王国としての命運を懸けて必死に対応していた様子を見ると、500年に及ぶ「進貢貿易」が、およそ500年間の中琉交流史を支えた最大の要因であったことが頷ける。

まだまだ研究の余地はあるが、毛さんの進貢品の分析研究は今後の「進貢貿易研究」に一石を投じる重要な研究だといえる。

（前田舟子）

2021 年度 第 14 回琉球弧研究支援 最終報告書

研究テーマ：

沖縄の化石を用いた古環境の解析

経法商学科
大城響
(指導教員：糸数哲)

I. はじめに

沖縄本島は化石が保存されやすい石灰岩¹⁾で形成されており、ジュラ紀²⁾から新生代にかけての化石が多く発見されている。これまでに発見されている化石の主な種類はシカ、イノシシ、貝類、微古生物等がある。現在、沖縄本島にシカは生息していないが後期更新世の琉球列島では、数種のシカ類が生息していたことが報告³⁾されている。

II. 目的、動機

故郷である沖縄の、化石の発掘と文献との照合によって、化石を含む地層や岩石の特徴を、地層年代と関連させて学習する。この学習を通し、沖縄本島の古生物の種類や出現時期について理解を深める。この調査をレポートにまとめることで古生物に関心がない人にも興味を持ってもらうきっかけになることを目的とした。

III. 研究方法

調査する場所は、本部半島、伊計島、泡瀬干潟、知念半島とし、本部半島、伊計島、知念半島では露頭⁴⁾からの調査を行う。報告されている調査研究レポートや論文を参考にして、化石が産出された場所に行き、新たな化石の発掘と採集を試みる。沖縄各地の化石産出地を巡回する(8月～9月)。沖縄各地の化石産出地を巡回する(8月～9月)。もしくは、写真撮影する。

発見した化石は、県立博物館に持ち込み、調査を申し込む(12月)。または、発掘した化石を、過去に産出された化石の種類とその地質年代に照らし合わせて、検証した内容をレポート形式でまとめる。

IV. 結果

本部半島では、アンモナイト化石(写真①)を発見した。アンモナイト化石は美ら海水族館裏の海岸の砂浜にある。チャート⁵⁾は、別名で火打石と呼ばれており、黒色と灰褐色をしており火薬のような匂いがした。また、露頭は傾斜(写真②)していた。含まれている化石は印象化石⁶⁾に分類される。

伊計島では、伊計島の赤い橋の下にて、哺乳類化石と思われる化石を発見した(写真③)。露頭には貝化石や礫なども含まれていた。その化石は露頭から1cmほどしか露出していなかった。鉋物ハンマーを用いて採取することができた。採集した化石は沖縄県立博物館⁷⁾の学芸員に種の判定を依頼した。現生のシカの肋骨と比較すると形状が非常によく似ている。また、伊計島では、今回発見した場所と異なる地域でもシカ化石が発見されているため、この化石がシカ化石である可能性は高いと考えた。1) CaCO_3 を主成分とする殻を持つ生物などの生物の遺骸が集まって固結したもの。

2) 下記の年代表を参照

3) 大城逸朗、野原朝秀『琉球列島における鹿化石産出地について』沖縄県立博物館紀要第3号(1977年3月)

4) 地層や岩石が観察できる場所。

5) SiO_2 主成分とする放散虫などの遺骸が集まって固結したもの。

6) 古生物の遺骸自体は保存されず、その形態の鋳型だけが残った化石。

7) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1

年代表

地質年代	紀（世）		絶対年代
新生代	第四紀	完新世	1 万年前
		更新世	2 6 0 万年前
	第三紀	新第三紀	2 3 0 0 万年前
		古第三紀	6 6 0 0 万年前
中生代	白亜紀		1 億 4500 万年前
	ジュラ紀		2 億 100 万年前
	三疊紀		2 億 5200 万年前
古生代			5 億 4100 万年前
先カンブリア時代			46 億年前



写真② 傾斜している露頭（海洋博公園）

V. 考察・分析

1. アンモナイト化石

＜分類＞軟体動物頭足類 *Arietoceltites arietitoides*

＜産地＞沖縄県国頭郡本部町石川

＜サイズ＞1～6cm

＜母岩＞チャート、中・古生代の古期石灰岩

＜地層名＞今帰仁層

＜地質時代＞三疊紀

アンモナイト¹⁾は、古生代から中生代にかけて世界中の海で生息していた。沖縄県本部半島は、沖縄で一番古い地層のある場所で直径 1～6cm のアンモナイト化石（写真①）が含まれている。本部大石原のアンモナイト化石²⁾は琉球列島の地史を知るために重要な示準化石であるため、県指定天然記念物に指定されている。そのため、一般の方でも比較的容易にアクセスすることが可能である。



写真① アンモナイトの化石

- 1) アンモナイトは炭酸カルシウムからなる殻を持ち、ジュラ紀～白亜紀にかけて大繁栄した。セラタイト目のアンモナイトは三畳紀末に絶滅した。

- 2) 沖縄県国頭郡本部町石川（海洋博公園）

2. 哺乳類化石

<分類> 不明

<産地> 沖縄県うるま市与那城池味

<サイズ> 3 cm

<母岩> 石灰岩

<地層名> 琉球石灰岩

<地質時代> 第四紀更新世

伊計島では、転石の中に哺乳類化石（写真③）と思われる化石を発見した。県立博物館の学芸員に調査を依頼し、判定結果を待っている。前回調査の進行状況について電話をいただいた時は、塩酸をかけてみたが、溶けなかったので恐らく何かの化石であることは間違いないという報告があった。しかし、哺乳類専門の学芸員の方は離島への出張が多いため、判定に時間がかかるとのことだった。また、洞窟や貝塚ではないところで化石が見つかることは非常に珍しいことであるらしい。



写真③ 哺乳類化石

3.巻貝化石

<分類>軟体動物腹足類

<産地>沖縄県知念

<サイズ>7cm

<母岩>石灰岩

<地層名>琉球石灰岩

<地質時代>第四紀更新世

表面が削れて貝の中が見えるようになっていた。巻貝化石（写真④）の中に、琉球石灰岩が詰まっており、置換化石となっていた。貝の形は、生きている化石²⁾と呼ばれている、現生の巻貝オキナエビス³⁾に似ていた。



写真④ 巻貝化石

- 1) 元の成分が別の成分に置換された化石。
- 2) 形態や特徴をほとんど変えることなく現世まで生き続けている生物のこと。
- 3) 軟体生物のオキナエビスの出現は、カンブリア紀にまでさかのぼる。 VI. 今後の展望

沖縄は、恐竜などの大型の化石が見つかる可能性はとても低い。だが、絶滅した生物の化石は多く存在している。化石と言えば、中生代がクローズアップされがちだが、小さな子供たちに、昔は沖縄本島にもシカは多く存在し先祖はそれを食べていたと教えることで化石に興味を持つきっかけになるかもしれない。今、沖縄で有名な化石と言えば港川原人だと思う。人間だけでなく、その時代に生息していた生物の生態系はどのようなものだったのか、また気候や気温など現代とどう異なるのか興味深いことはまだまだある。多くの人に関心を持ってもらえるようにこの研究がもっと発展し、化石は歴史を知る手がかりとしてもっと身近なものになってほしいと思う。

VII. おわりに

今回調査することができたポイントは、県指定天然記念物の場所も含まれているため、多くの人にぜひ足を運んでほしい。アンモナイトなどは、恐竜が生きていた時代に海で生息していた生物なので、実物を見れば長い年月の流れを肌で直接感じるができると思う。また、沖縄は比較的新しい地層でできた島なので、恐竜時代の生物の化石を多く発見することは困難だと考える。しかし、今回の調査で見つけたように巻貝化石などは比較的容易に見つけることができるかもしれない。今回の学習を通して、博物館で展示されている化石と自然の一部として存在している化石とでは、リュウキュウを生きた生物として同じ化石でも異なる印象を受けた。

VIII. 参考文献

大八木和久、(2015)『産地別 日本の化石 750 選』、築地書館
 相場博明、(2016)『化石ウォーキングガイド 全国版』、丸善出版家正則、他 (2019)『地学図録』、数研出版版浅野俊雄、他 (2019)『地学』、数研出版版
 土屋健、(2019)『日本の古生物たち』、(芝原暁彦)、笠倉出版
 大城逸朗、野原朝秀『琉球列島における鹿化石産出地について』沖縄県立博物館紀要第 3 号 (1977 年 3 月)
 藤田祐樹、久保(尾崎)麦野『リュウキュウジカ研究における近年の成果と課題』沖縄県立博物館紀要第 9 号 (2016 年 3 月)

IX. 指導教員コメント

沖縄本島北部から南部までの露頭を対象に現地調査を行い、実際に化石の可能性のある資料を発見したことは大きな成果と言える。本研究の成果によって化石に興味を持つものが増えることが期待され、今後の化石研究の発展にも寄与しうる研究である。

2021 年度 第 14 回琉球弧研究支援
最終報告書

研究テーマ：

泡盛の現在
-沖縄の若者たちの泡盛観-

経法商学科
安里一希

(指導教員：前田舟子)

2021 年度 第 14 回琉球弧研究支援

1、はじめに

泡盛は、沖縄を代表する伝統的な蒸留酒であり、沖縄県内の宴会ではおなじみのお酒であり、県内各地の居酒屋には必ずと言っていいほど泡盛が販売されている。

ところが、近年のメディア報道では、県内の泡盛の生産量が減少の一途を辿っており、特に若者の泡盛離れが顕著だという。また、2019 年度末から拡大した新型コロナウイルスのパンデミックにより、沖縄県も緊急事態宣言がたびたび発令され、不要不急の外出の自粛が呼びかけられ、飲食店の時短営業に伴い、店内での酒類の提供が制限されるようになった。そのため、いわゆる「宅飲み」と呼ばれる自宅での飲酒が日常の風景となっているが、何より大打撃を受けたのは、飲食店や酒造メーカーであろう。特に、若者離れが著しい泡盛業界はどのような状況になっているのか、それが気になり、今回のテーマとして調べてみたいと考えた。

本稿ではまず、泡盛の基本的な歴史について先行研究からまとめ、次に県内の若者にアンケートを実施し、泡盛に対する率直な意見や感想について聞いたことをまとめてみた。そして、今後、泡盛の生産や伝統が途絶えないようにするためにはどうすれば良いのか、沖縄県に住む若者の一人として私自身で課題を探ってみた。本研究をきっかけに、泡盛の魅力を広く県内外や海外の人々にも知ってもらい、飲む／飲まないに関わらず、県内の若者が地元産の泡盛を誇りに思うようになって欲しいと願っている。

2、泡盛の歴史

泡盛の特徴として次の 4 点が挙げられる。まず、泡盛の原料にはタイ米を使用しており、黒麹を用いている。仕込みは一回だけの全麹仕込みで、単式蒸留器で蒸留する。

名称の由来はいくつか存在するが、一般的に言われているのは、泡盛を造る原料が元は粟を用いていたからという原料起源説や、蒸留の仕立てでは泡が盛り上がる様子から泡盛となったと考える泡由来説がある。他には、薩摩藩が九州の焼酎と区別するために名付けたとする薩摩命名説や、古代インドの文語であるサンスクリット語で酒を意味する「アワムリ (awamuri)」に由来するという説など多岐にわたる。現段階では、蒸留の工程で見られる「泡を盛る」技法がタイ族に伝承されていることや、琉球王国と交易をしていた福建省福州地区でも見られることなどから、「泡を盛る」お酒としての泡由来説が最も有力だと考えられているようだ。

その泡盛の起源については 2 つのルートがあるとされる。一つは、タイの「ラオ・ロン」を起源とする、海洋貿易に伝来した「南ルート」で、もう一つは、同じくタイを起源として、中国雲南省や福建省を経由して陸路を通して伝来した「北ルート」である。いずれのルートであれ、伝えられた技術は先人たちの創意工夫によって沖縄の気候風土に適した醸造法に改良され、現在に伝えられているという。最も有力なのは「南ルート説」で、これは東恩納寛淳がタイで「ラオ・ロン」を賞味した際に、「泡盛は香気・風味ともにラオ・ロンと全く同一であることに感慨を受けた」と「泡盛雑考」(1934 年) に著したことがきっかけである。

かつて琉球王国時代に首里王府は、泡盛を薩摩や江戸への重要な貿易品として醸成しており、泡盛造りは首里城裏手の崎山・赤田・鳥堀(いずれも現在的那覇市)の首里三箇に限られ、古来より泡盛を造り続けてきた 30 人の本職とこれに 10 人の重職を加えた合計 40 人の専門職人が泡盛を造っていたという。万が一失敗すれば、軽いもので蒸留器の没収の罰が下され、重いもので家財没収となり、さらに島流しの刑に遭うという。それほど泡盛は大変貴重なものとして取り扱われ、王府直属の監視の下、その管理・保存が徹底され重宝されていたのである。

1879 年の「琉球処分」により、琉球王国は滅亡し、沖縄県として新時代を築くことになるが、それにより、従来の身分制や行政が大きく改変され、その影響は泡盛にまで及んだ。沖縄県になって以降は、それまで首里三箇にのみに許されていた泡盛製造が自由化されたことで、泡盛製造業者が 447 戸にまで膨れ上がった。そして、次第に沖縄を代表する産業に発展していった。また、酒造りの自由化によって泡盛は市場に流通するようになり、酒税法で価格が本土の焼酎の 6 割ほどに設定されたことで、その人気ぶりは鹿児島産の焼酎をしのぐ勢いであった。1888 年に「沖縄県酒類出航税」が公布されると、県内出荷の税額はそのままであったが、県外出荷には税が加算され、値段がおよそ 2 倍にまで高騰した。しかし、このような税制の変化の影響があったとはいえ、泡盛の生産は順調に伸び続けた。その結果、何度も増額され、最終的には酒税のかけ方が変わり、度数が高くなるとともに税額が重くなるという仕組みになっていった。この増税により泡盛の県外移出は不振に陥ったといわれる。その後、第一次世界大戦による世界的不況の影響で、泡盛業界はさらに不振に陥り、第二次世界大戦では戦時統制化で泡盛産業も国策から自由にできずに進展することは不可能であった。

沖縄戦でかつての王都首里も多大な被害を受け、各地にあった泡盛製造工場もろとも焼失し、

そのために蒸留器などの設備が完全に破壊されてしまった。ニミッツ布告により酒造が禁止されると、琉球列島米穀軍政府の許可なしに酒類の販売・製造を行うことができなくなってしまった。しかし、そうした状況の中でも人々の泡盛製造への情熱は失われなかった。というのも、戦後に入手が困難となったタイ米に変わって、黒糖やトウモロコシなど発酵性のあるものを探して出しては原料とし、密造を行っていたのである。収容所のある地域では、手製の道具やあり合わせの蒸留器を使って公然と泡盛の密造が行われていたようである。この蒸留器は、米軍の水筒や水管、燃料缶を集めて作ったもので、材料を提供してくれた米兵にも泡盛が流されていたという。こうして密造が一般化され始めると、あちこちで「ヤミ酒」が広まるようになり、泡盛を含むこれらのヤミ商品によって、物資や食料の乏しかった沖縄の人々の喉を潤し、やがて戦後復興の礎が作られていったのである。そして1972年に沖縄が日本に復帰すると、泡盛製造は民営化され、沖縄の代表するお酒となって日本全国、海外にまでその名が知られるようになった。

3、研究の方法および調査期間

本研究では、県内在住の若者（20代）を中心にアンケート調査を実施したり、実際に泡盛製造の工場を訪れてお話を伺った。その調査の方法と期間については下記の通り。

○研究方法

- ・文献調査
- ・工場見学
- ・Google フォームを使用し泡盛に関する意識調査

○対象地域

- ・那覇を中心とした酒造メーカー

○調査期間

- ・6月～7月 泡盛に関する文献資料の収集
- ・7月～8月 若者層へのアンケート調査を実施し、データを取りまとめる。
- ・9月～12月 泡盛酒造所に現地調査

4、調査概要

1. 沖縄大学の学生に102名を対象にアンケート調査

アンケートは下記の16項目で構成し、Google フォームを使用して回答を得た。

(1) 質問項目

タイトル：「現代沖縄における泡盛と若者」の意識調査	
【質問1】	性別（一択選択）
【質問2】	学年（一択選択）
【質問3】	好きなお酒の種類（複数選択）
【質問4】	苦手なお酒の種類（複数選択）
【質問5】	お酒を購入や注文する際に気にしているポイント（複数選択）
【質問6】	お酒を飲むシーンについて、よく行うものを選択してください。（複数選択）
【質問7】	泡盛に対する印象を自由に記入してください。（自由記述）
【質問8】	泡盛の消費量が下がっている中、泡盛の消費量を増やすにはどうすべきだと思いますか。（複数選択）

(2) 結果

1. 性別

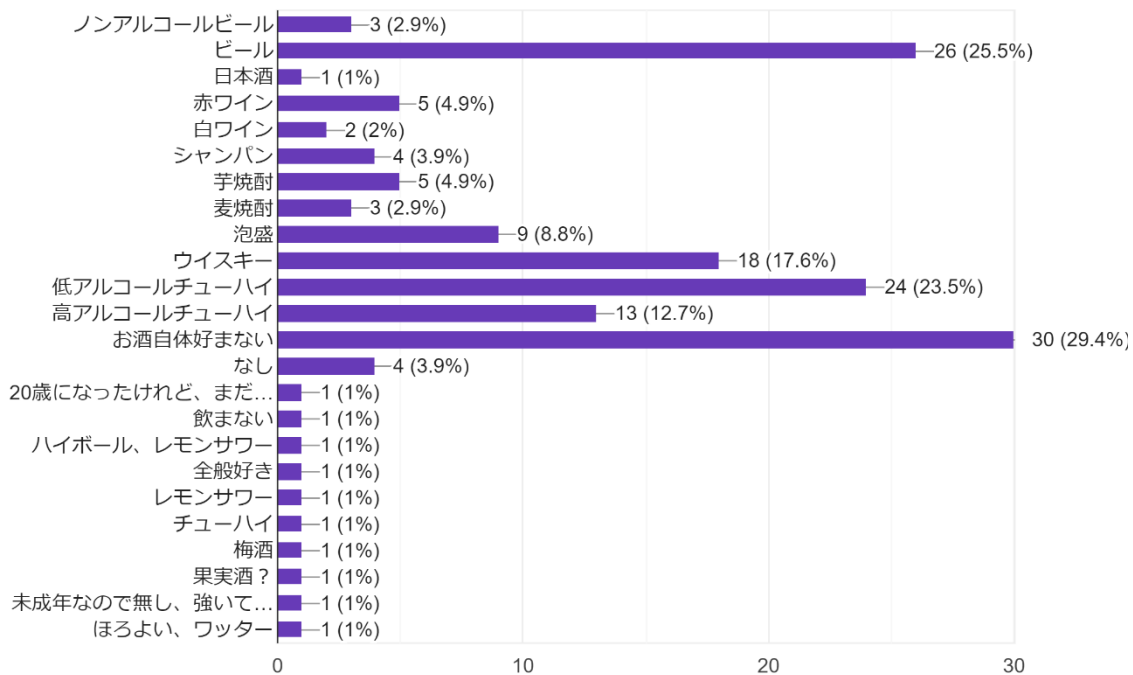
男性 73 名	女性 29 名
---------	---------

2. 学年

1 年次	2 名
2 年次	46 名
3 年次	36 名
4 年次	18 名

3. 好きなお酒の種類を選択してください。

102 件の回答

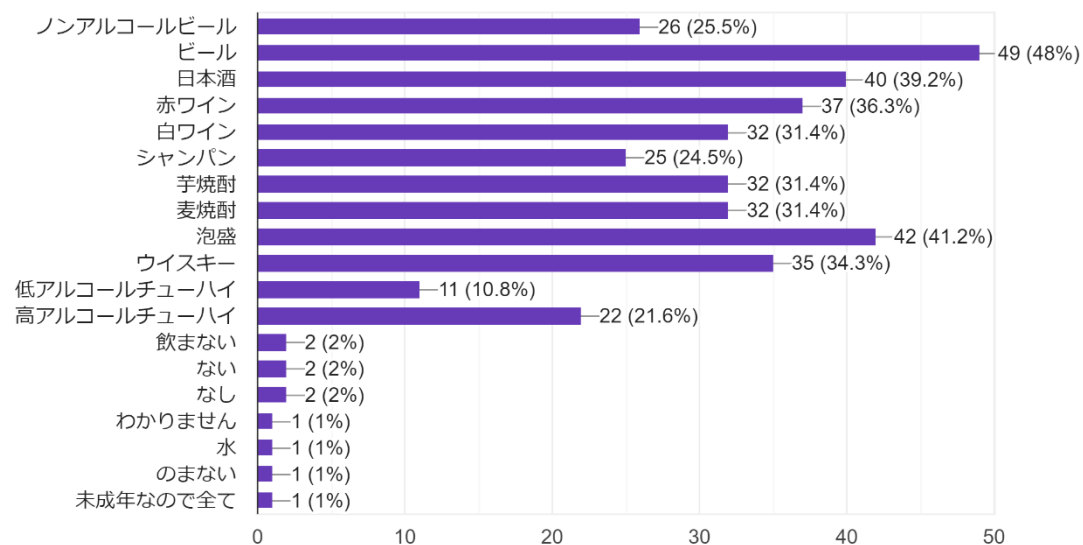


好きなお酒を聞くための設問であったが、最も多かった回答としてはは、「お酒自体好まない」という回答であり、30 票と全体の約 3 割に相当する。次に多かったのはビールで、26 票であった。その次に、低アルコールチューハイが 24 票で、続いてウイスキーが 18 票という結果になった。今回の研究対象の泡盛は 9 票であり、若者から好まれていない現状が伺えた。

結果として、若者に好まれているお酒は、すべて缶で販売されているものが多く、それは手軽に飲める利便性が最大の要因であると考えられる。

4. 苦手なお酒の種類を選択してください。

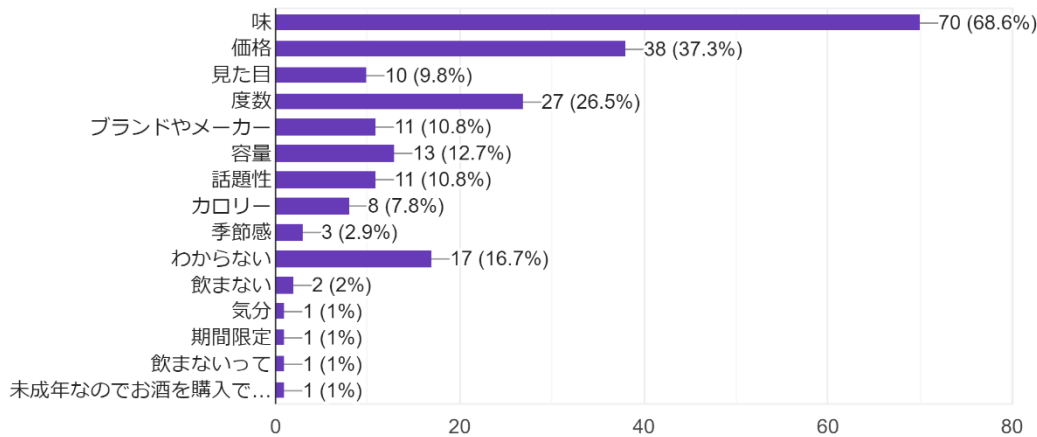
102 件の回答



ビールが、49 票であり、約半分が苦手であると答えた。次に回答が多かったのは泡盛であり、42 票であった。その次に日本酒が 40 票であり、それぞれの共通点として味に癖があり、アルコールの味を感じさせるものが苦手になる傾向が多いと理解できる。

5. お酒を購入や注文する際に気にかけているポイントを選択してください。

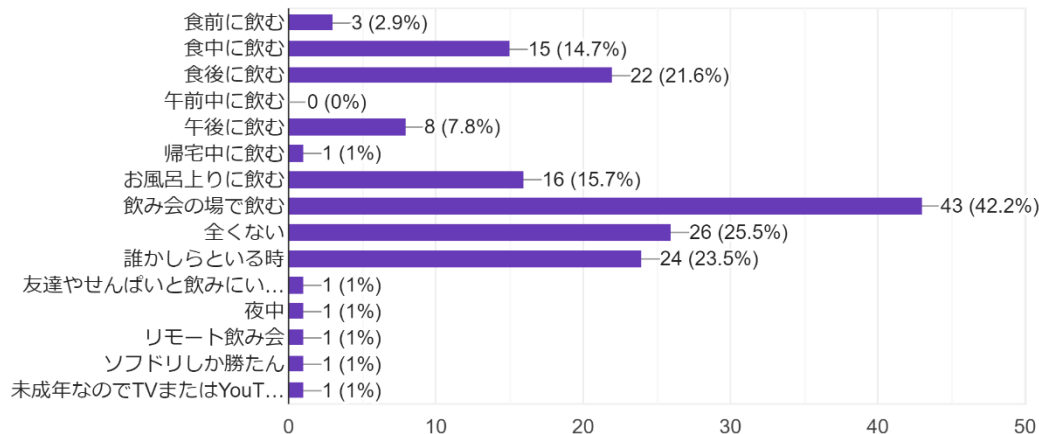
102 件の回答



購入する際に気を付けている点として、最も多く票が集まったのは「味」であり、70 票であった。次に「価格」が 38 票で、その次が「度数」で 27 票であった。この結果から、「味」が最も重視されており、それが若者の泡盛に対する苦手意識に結びついていることが伺えた。

6. お酒を飲むシーンについて、よく行うものを選択してください。

102 件の回答



お酒を飲む場面では、「飲み会」と答えた人が 43 票と最も多く、次に「全く飲まない」26 票という結果になった。その次に、「誰かという時に飲む」という回答があったが、ここから、お酒は一人で飲むよりも複数の人と楽しむために飲むという若者の意識と傾向が伺えた。

7. 泡盛に対する印象を自由に記入してください。

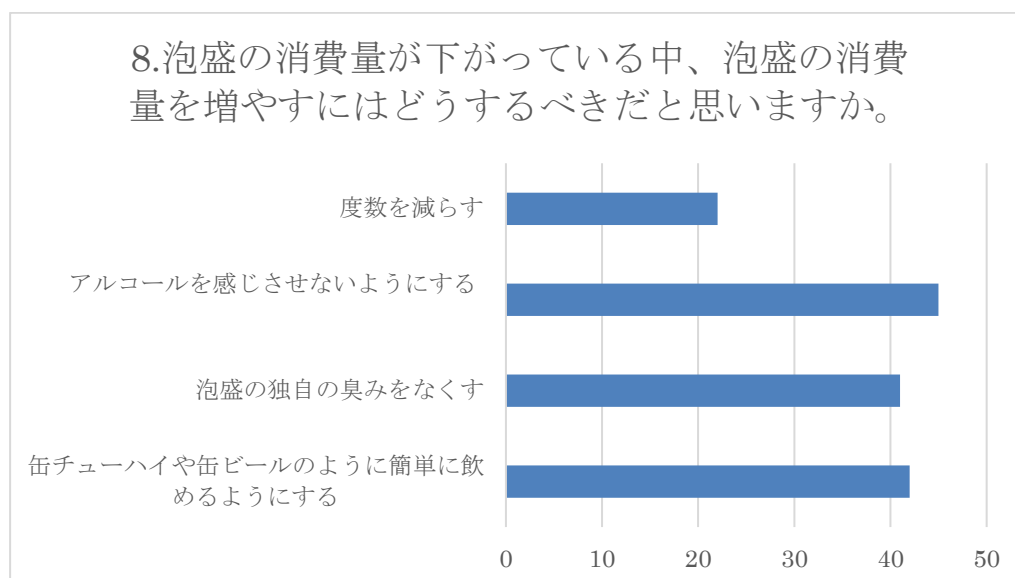
結果

美味しくない
飲まない
なし
まずい
沖縄のお酒

特になし
アルコール度数が高い
苦手
沖縄って感じがする
度数が強い
ない
瓶以外で見たことがない
大人な味がしそう
年配の方が好きそう
匂いが強い
次の日まで匂いしてしまう飲み物。
辛い、くさい
あまりおいしいとは思わない
飲んだことないので難しいですが、若者が好みなようなイメージがあります。
アルコール度数や口当たりが強い印象
飲みにくい。
苦い
臭い。沖縄の伝統感。年寄りとヤンキーが飲んでいる印象。
酔いが早く回りそう
上級者
大人の飲み物
度数が高くて飲み会の後半に飲むイメージ
アルコールつよい！
アルコール度数が高く、飲みにくいイメージ
泡盛は飲めるけど、酔いやすいイメージ
くさい
沖縄らしい
おじさんが飲んでいるイメージ。
酒豪が飲む
きつそう！！
きつい
20代はあまり飲まないイメージ。
癖のある匂い
大人の味
匂いが強そう
アルコール度数がきつい
沖縄
最高
ブランド力は強いと思う。若い世代にはあまり人気がない。
手がつけづらい
沖縄の強いお酒
もうちょい美味しければなーと
とくにない
中年男性が飲んでいる印象が強いです。
沖縄独自の酒
親が飲んでいるイメージ
おじーが飲む酒
郷土のお酒という印象
安く酔っ払える
泡盛＝沖縄
おじさんが飲むもの
よくわからない

沖縄の人に愛されているお酒で、次の日に匂いが残りやすい。
最近は色々な酎ハイなどが出てきて、飲む機会が減っていると思うけど、沖縄の泡盛をなくすわけにはいけないので、若者も飲んだ方がいい
においがきつそう
飲める人が限られている。
度数が強い、身体に悪い
おじさんに人気
度数が高い
微妙、まだ飲めない
おじいちゃんが飲んでそう
泡盛残波をよくCMで耳にするので泡盛残波の印象
やばい
美味しいとは思わない
きつそう
大人の人が飲むような印象です。
悪酔いする。
いい
若者にはまだ早いお酒
沖縄が有名という印象
高い
無理
楽しくなる
アルコールが強そう

この自由記述の結果から、大半の回答者が泡盛への苦手意識が強いということが分かった。「若者にはまだ早い」や「おじさんに人気」、「親が飲んでいるイメージ」などから、私たち若者世代（20代）の味覚にはあまり合わず、そのために好まれにくい傾向があることが分かった。



このアンケート結果では、「アルコールの風味を感じさせないようにする」の回答が多く、現代の20代が求めているお酒というのは、特に飲みやすさを重視しているということが分かった。また、「缶チューハイや缶ビールのように簡単に飲めるようにする」が次に多く、気軽に飲めるのであれば手に入るきっかけなることが分かった。その次に、「泡盛独自の臭みをなくす」が多く、お酒というよりも泡盛特有のにおいが苦手と感じている人がいることが分かった。

4、アンケート結果からの考察

以上のアンケート調査の結果から、若者が抱いている泡盛への印象として、大半が「苦手なお酒」という認識が多いことが分かった。若者がお酒を飲む際には、飲みやすさや味覚を重視する

傾向が強く、さらにコロナ禍で友人同士集まってお酒を飲む場面が減っていることから、若者の泡盛への購買意欲はますます減少するのではないかと感じた。しかし逆に、若者の嗜好に合わせて、いつでも気軽に手に取れる缶で販売され、味も若者が飲みやすい果実系の味付けにするなどすれば、若者の泡盛への関心は増すかもしれないと思った。

5、おわりに

以上のように、泡盛という沖縄伝統の蒸留酒は、若者からあまり受け入れられていないという現状が分かった。今後の泡盛の消費量を上げるためには、苦手意識が根強い沖縄の若者層をターゲットにするのではなく、泡盛と同じように蒸留酒を好む地域、例えば中国や台湾、東南アジアなどの国々の若者をターゲットにしても良いかも知れないと思った。それでも、1990年代の沖縄ブームに乗って、全国各地に沖縄系居酒屋が登場したり、本土でも泡盛が気軽に購入できる時代になったことで、泡盛という存在は日本でもよく耳にするようになったと思う。あとは、泡盛業界と県内の若者たちが一緒になって泡盛の良さをアピールする活動ができれば、双方にとってお互いの苦手意識を克服するきっかけ作りができるのではないかと考えた。

今後の展望として、今回の研究ではコロナ禍の制限もあり、オンラインのみでの聞き取り調査となってしまったため、次は実際に泡盛を飲みながら同世代の若者たちと泡盛の将来について語り合ったり、県内で広めるための方法を模索していきたい。

最後に、コロナ禍にも関わらず、インタビュー調査に応じてくれた泡盛業者の関係者の方には心より感謝申し上げたい。

6、参考文献

萩尾俊章『泡盛と文化史〈新装改訂版〉』ボーダーインク、2016年（初版2004年）

宮城正勝『泡盛浪漫—アジアの酒ロードを行く—』ボーダーインク、1996年

長峰安一『ヴァイオリストの沖縄文化論 泡盛カンタービレ!』ボーダーインク、2018年

佐久本政敦『泡盛とともに』瑞泉酒造株式会社、1999年（初版1998年）

7、教員コメント

若者の泡盛離れが叫ばれる昨今、若者である安里さん自身が「なぜ泡盛は若者に人気がないのか」という点に着目したのは大変興味深かった。特に、学生時代から泡盛に慣れ親しんできた私（の世代?）からすると、県内の若者が泡盛を苦手としているという現状が不思議で仕方なかった。しかし、単に「泡盛が苦手」と言って突き放すのではなく、その原因を突き止め、県民の幅広い世代から泡盛が愛されるように解決方法を模索する、という安里さんの意気込みには感心した。

安里さんは本研究を遂行するに当たって、受講している他の講義の担当教員にお願いし、コロナ禍の影響でほとんど大学に来られない学生たちにオンラインでアンケートを実施させてもらっていた。このように、コロナ禍においても可能な限り方法を模索し、工夫を凝らしていた点は評価したい。また、夏休み期間には、泡盛工場や販売所を直接訪問するなどして実際に現場で泡盛の生産量や販売量などの現状を調べたり、対面が叶わない場合はメールで問い合わせるなどして泡盛業者の方の声を拾っていた。それにより、泡盛の生産者側と消費者側双方の意見を聞き取ることができた。そのため、今後は泡盛の需要と供給についてより深い考察ができればと期待している。

今回安里さんが実施した泡盛マイスター協会へのインタビュー調査は、紙幅の関係で掲載を断念したようだが、泡盛業者側も若者の意見を伺いたいという意向を示していたので、今後はぜひ安里さんが若者と泡盛を繋ぐ架け橋になり、双方のニーズを満たす方法を模索して欲しいと思う。そして、本研究が泡盛の課題解決の一助になればと期待している。今後も泡盛研究を継続し、可能な限り県内各地（離島含む）の泡盛酒造を訪問し、それぞれの特徴や創意工夫について調べ、安里さんが若者向けに泡盛の良さをPRする日を心待ちにしている。

2021 年度 第 14 回琉球弧研究支援 最終報告書

研究テーマ：

近世期における琉球の国家プロジェクト

大学院
兼城夏芽
(指導教員：前田舟子)

1. はじめに

1609年の薩摩による琉球侵攻を契機として始まる近世期（1609～1879年）は、薩摩役人が那覇に常駐して港を監視するなど、薩摩との関係が琉球の国家運営に大きな影響を及ぼした時代であった。首里王府にとって、中国外交と薩摩関係との両立は容易ではなかったが、そうした時代に輩出された有数の政治家たちによって、琉球は王国としての地位を維持してきた。本研究では、近世中期にあたる18世紀頃、琉球に登場した政治家の蔡温¹によって実施された複数の国家プロジェクトに焦点をあてたいと考えている。なぜなら私は、修士論文で蔡温の事業に従事した首里士族の家譜を紐解き、蔡温の時代に首里士族がどのような生活を送っていたのかを調査しているからである。そのためには、基礎知識として蔡温の事業がどのような契機で計画され、何を目的に実行されたのかを把握しておく必要がある。

まずは、蔡温が主導した国家プロジェクトの概要を整理し、各事業を結びつけることで、近世琉球における国家プロジェクトの歴史的背景と全体像とを出来る限り明らかにしたいと思う。そして、修士論文で取り組んでいる、18世紀の首里士族社会の実態解明にも役立てていきたい。

2. 研究方法・期間

(1) 研究方法

- ・史料および関連資料の収集・分析
- ・参考文献の収集・読み込み・整理

(2) 実施期間と内容

2021年度

- | | |
|--------|--|
| 6月～9月 | 参考文献のリスト作成及び先行研究の収集・読み込み・整理
史料・関連資料の収集 |
| 9月～11月 | 史料・関連資料の読み込みと分析 |
| 11月～1月 | 首里士族・八重山在番に関する先行研究の収集、読み込み、整理
杣山事業・乾隆検地に関する調査 |
| 1月 | 最終報告書の作成 |

3. 蔡温による国家プロジェクトの概要について

(1) 河川改修事業（1736～43年）

近世琉球における河川改修事業は、雍正13年（1735）の「羽地大川改修²」を契機に、乾隆元年（1736）から乾隆8年（1743）までの8年間に渡って実施された。河川改修の規模は、北は国頭間切の辺野喜川、南は玉城間切の富名腰前下川までと広範囲に渡って実施され、乾隆5年（1740）には八重山島の名蔵川で改修工事が行われたことから琉球全域に及ぶ大事業であったことが分かる。

この大規模な河川改修事業の目的は、大雨が降った際に発生する河川の氾濫・決壊を防ぐことで耕地の損耗を回避し、耕地面積を安定させることにあった。その背景には、1609年の琉球侵攻以降、毎年、薩摩藩への年貢上納の義務が課されていたことと、琉球国内の人口増加に伴う食料需要の増大があったと考える。首里王府は、河川改修工事を実施することで耕地面積の拡大とその安定化を目指し、作物の収穫量を増加させて琉球社会の経済規模を拡大することを見据えていたのではないだろうか。

(2) 杣山政策（植林事業・1736年頃～）

杣山とは、主に王府の御用木を生産するために区分された山林³のことである。古琉球時代以降、村落共同体による山林の模合利用を基本としていた琉球王国は、森林枯渇の危機を迎えていた。当時の琉球は、住宅建築・造船・砂糖生産による木材の需要が増加したことで、琉球国内での木

¹ 久米村出身の政治家。生没年は1682～1761年。国家プロジェクトの主導者として活躍していた当時は、三司官と呼ばれる国政を掌る職に就いており、その在任期間は1728～1752年の24年間におよんだ。

² 雍正13年（1735）7月、暴風雨により甚大な被害を受けた羽地間切大浦川の改修工事。主導者の蔡温は、羽地大川改修におよそ10万7380人もの百姓を動員し、わずか3ヶ月という短期間で工事を完竣させた。

³ 仲間勇策「杣山政策の戦略」『琉球の築土構木—土木・技術からみた琉球王国—』一般社団法人沖縄しまたて協会、2016年、51頁

材確保が困難となっていたのである。順治 17 年（1660）と康熙 48 年（1709）に相次いで首里城が焼失した際には、再建のための資材が国内で調達できず、薩摩に資材提供を願い出た。さらに、山の境界、間切・村ごとの管理体制が整備されていないことで森林荒廃を招いていた。そこで首里王府は、杣山政策を施行することにより、山林の管理責任の所在を明確に示し、琉球国内で木材を調達する体制を築くことができれば、王府の財政圧迫も軽減されたと考えた。これらの理由により、王府は杣山の管理システムを確立し、森林資源の培養と自給自足化を図ったのである。

また、近世琉球における杣山制度の確立は、杣山の境界測量が田畑の測量と時を同じくして実施していたことから、「乾隆検地」と関係があるとされている⁴。その杣山制度を確立させた「乾隆検地」については、以下に述べていく。

（3）乾隆検地（1737～50 年）

乾隆 2 年（1737）から乾隆 15 年（1750）の約 15 年間にわたって、琉球全土を測量する「乾隆検地」が実施された。乾隆検地とは、1609 年の慶長検地以来の土地測量事業で「大御支配」または「御支配」とも呼称された。慶長検地が薩摩藩主導で実施されたのに対して、乾隆検地は首里王府主導による独自の内検であった。王府が内検を実行した背景には、薩摩藩が藩内の内検を 1720 年代に実施し、琉球国に対しても薩摩藩同様に検地の実施をせまった⁵ことが挙げられるが、薩摩からの度重なる盛増（増税）を警戒して、検地の実施を断っている。しかし、王府は自国がどのくらいの山野・農耕地を保有しているのか把握しておらず、国土全体を測量する必要があった。さらに、杣山政策を推進するうえでも杣山の境界を測量して区域を定めておく必要があり、土地測量は喫緊の課題であったと思われる。

乾隆検地の目的は主に、（1）国土全体を掌握すること、（2）薩摩藩に定められた石高の矛盾を見直して適正な課税を行うこと、（3）生産高を増やすために村を新設して集落移動を行うこと、

（4）検地時の耕作地とその耕作者を記録すること、（5）杣山を丈量して森林資源の自給自足体制を強化すること、などが挙げられる。

乾隆検地の成果について述べると、検地後の田畑面積は、17 世紀初頭の名寄帳に記録されたデータと比較して、田方の耕地面積は約 2.3 倍、畑方の耕地面積は約 2.4 倍に増加していた⁶、と指摘されており、検地の目的であった生産力の向上が実現されていたことが示唆される。また、乾隆検地後に作製された「間切島針図」や「琉球国之図」、「琉球国惣絵図」を目にすれば琉球の役人たちが如何に精度の高い測量技術を用いて事業を遂行していたのか窺い知ることができる。乾隆検地で用いられた測量技術についても述べたいところであるが、紙幅の都合上、本報告書では割愛させていただきたい。

4. おわりに

以上、18 世紀の 30～50 年代に琉球王国において実施された、三つの国家プロジェクトを概観してみると、プロジェクト一つ一つが独立したものでなく、互いに繋がりを見せていることが明らかとなった。

例えば、雍正 13 年（1735）の羽地大川改修を契機に、翌年以降、琉球全土で河川改修工事が実施されたことは、杣山制度の確立と乾隆検地の事前準備であったと位置づけることができる。その理由として、河川改修事業は、水田開発をも兼ねており、耕地面積の拡大を実現させ、安定的な作物の収穫を確保することを目的としていたからである。河川改修によって耕地を安定化させておかなければ、次にくる乾隆検地で正確な測量を行うことはできない。さらに、耕地面積が広ければ広いほど生産高が上がり、それに伴う租税収入の増加を目論む王府にとって、安定化した耕地の確保は優先度の高い課題だったのである。

また、乾隆検地は、杣山政策を確立するにあたり重要な役割を担っていたことが明らかとなった。その理由は、杣山の境界を画定するためには、その周囲を測量することが必須であり、その工程を担ったのが検地事業であったからである。検地を実施したことによって、杣山と村山野など、地目の区別を明確にすることができ、近世琉球における杣山のシステムティックな管理体制の構築に繋がったのだと考える。

一方で、杣山政策の一環で行われた山林視察が乾隆検地に関係していることも述べておきたい。

⁴ 仲間勇栄「杣山と村落共同体」『新琉球史 近世編（下）』琉球新報社、1990 年、120 頁

⁵ 豊見山和行・真栄平房昭「琉球における身分制社会の成立」『沖縄県の歴史』山川出版社、2004 年、173 頁

⁶ 前掲『沖縄県の歴史』山川出版社、2004 年、175－176 頁

それは、乾隆元年（1736）に蔡温が部下の役人たちを率いて中頭・国頭の山林を視察した際、山林の広狭を考慮して、間切内の村落移動を実施⁷していたことである。中頭・国頭の山林視察は、杣山政策の一環として実施されたものであるが、村落を新設して管轄間切を改めることは、乾隆検地が開始される前にしておくべき下準備でもある。土地測量を進める前に村落の場所を定めておかなければ、検地事業の円滑な遂行を妨げ、結果として王府の目論見である生産高の向上による歳入アップが見込めない可能性も考えられる。王府役人たちは、そのようなことも念頭に置きながら作業を進めていたのかもしれない。

このように、同時期に実施された国家プロジェクトの概要を整理し繋ぎ合わせることで、各プロジェクトが単一的なものではなく、互いに関連しあいながら近世琉球という時代のインフラを構築していったのだと整理することができた。また、事業の担当役人たちが複数の任務を同時に遂行していく様子から、主導者である蔡温は、緻密な計画を立てて事業を推進していたことが窺えた。

今後の課題として、本研究でまとめることのできなかった、蔡温の国家プロジェクトが当時の琉球社会に与えた影響について追求していく必要があると考える。また、先行研究を調べていると、主導者である蔡温の功績に焦点が置かれている研究が多いと感じるので、修士論文ではプロジェクトの担当役人の事績を収集・整理し、彼らが担っていた役割について解明していきたい。

5. 参考文献・調査協力

安里進他編『沖縄県の歴史』山川出版社、2004年

一般社団法人沖縄しまて協会編『琉球の築土構木ー土木・技術からみた琉球王国ー』同、2016年

沖縄県緑化推進委員会編『蔡温ーシンポジウム記録と資料集成ー』琉球書房、2012年

沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄県史 各論編 第4巻 近世』沖縄県教育委員会、2005年

「沖縄の土木遺産」編集委員会編『沖縄の土木遺産ー先人の知恵と技術に学ぶー』沖縄建設弘済会、2005年

崎浜秀明編『蔡温全集』本邦書房、1984年

田里修『蔡温年譜』文部科学省科学研究費補助金、基盤研究（A）「沖縄近代法の形成と展開ー沖縄の特殊性と普遍性ー」（平成17年度～平成20年度）、2009年

豊見山和行編『琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館、2003年

豊見山和行・高良倉吉編『琉球・沖縄と海上の道』吉川弘文館、2005年

仲間勇栄『蔡温と林政八書の世界』榕樹書林、2017年

名護市教育委員会文化課市史編さん係『名護市史・資料編 5 文献資料集 1 羽地大川修補日記』名護市役所、2003年

真栄田義見『蔡温 伝記と思想』文教図書、1976年

琉球新報社編『新琉球史 近世編』上下、琉球新報社、1989～90年

⁷ 仲間勇栄『蔡温と林政八書の世界』、榕樹書林、2017年、14頁

包括連携協定

2021 年度 包括連携協定先一覧

協定締結先	協定内容	締結日
那覇市	(1) 地域の人材育成のための連携 (2) 地域づくりのための連携 (3) 健康福祉社会づくりのための連携 (4) 教育文化振興のための連携	2015年2月18日
沖縄県中小企業家同友会	(1) 地域の発展の関わる共同研究・調査等の推進 (2) 大学と地域・企業との学習循環システムの確立 (3) 企業における教育・人材育成の推進に関すること (4) 学生の教育、就職支援、インターンシップ等の現地学習に関すること (5) 地域の産業、企業の振興・発展に関すること (6) その他両機関が必要と認める事項	2019年8月5日
琉球フットボール株式会社	(1) 教育・人材の育成に関する事項 (2) インターンシップに関する事項 (3) リカレント教育に関する事項 (4) 研究に関する事項 (5) その他相互が認める事項	2020年2月27日
沖縄県障がい者スポーツ協会	(1) 障がい者スポーツに関わる教育及び人材の育成・交流に関する事項 (2) スポーツによる障がい者の健康の保持・増進に関する事項 (3) 障がい者スポーツの普及・発展に関する事項 (4) 障がい者の健康増進及びスポーツ活動に関連する調査・研究に関する事項 (5) その他相互が必要と認める事項	2021年10月19日

子どもの貧困対策 ソーシャルワーク研修

2021年度子どもの貧困ソーシャルワーク研修（那覇市・豊見城市）

目 的

自治体と沖縄大学が協力して、子どもの貧困対策に取り組む支援員及び居場所職員等を育成し、
 活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展に寄与することを目的に実施します。

定 義

子どもの貧困とは、親の経済的貧困に起因する社会的文化的格差により、子どもたちが本来獲得できたであろう能力や共有すべきであった価値感を失った状態であり、社会的損失である。

方 法

支援者や居場所職員等が貧困家庭の課題を抱える子どもに寄り添い、子どもが適切な人や社会資源と出会い直すことも含めて、子どもの前向きな力を引き出していくための支援（エンパワメント支援）の力量を高めていくために、各種フオロアップを行う。

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
1 実情と背景 - 子どもの貧困の実情とその背景を理解する。 - 貧困家庭の親と子どもの心理的社会的な理解。	島村 6/4								島村 2/18
2 価値と倫理 - SWとしての価値と倫理を理解する。 - 福祉コミュニティと連動した支援のあり方を学ぶ。									
3 家族基盤SW - 家族を基盤としSWを進める技術を学ぶ。 - 家族に多く見られる精神疾患とその治療を学ぶ。									
4 スーパービジョン(演習) スーパービジョンの意義と方法を学ぶ。	長岡 6/8	谷口 7/15		菫目 9/17				山野 1/11	
5 スクールソーシャルワーク(講義) スクールソーシャルワークを進める技術を学ぶ。					谷口 10/29	松本 11/10	長岡 12/9	菫目 1/21	
6 ソーシャルワーク(派遣講師)			松本 8/30		名城 10/12	名城 11/16			
7 現場実習(施設訪問) 小中学校、高校、保育所、児童館、児童養護施設、児童保育、居場所、こども食堂、学習支援					谷口 10/28				

県外講師

県内講師

沖大講師

実習先

環境レポート 2020

沖縄大学 環境レポート 2020

地域共創・未来共創の大学へ



〒902-8521
沖縄県那覇市国場 5 5 5 番地

「沖縄大学環境レポート2020」

編集 沖縄大学環境管理委員会
発行 沖縄大学地域研究所
電話 098-832-5599
FAX 098-832-3220
E-mail chicken@okinawa-u.ac.jp

はじめに

沖縄大学は「地域共創・未来共創の大学へ」という理念のもと、これまで環境教育・活動を進めてきました。2002年に環境分野の国際規格であるISO14001を認証取得し、その後3年毎の更新審査を三度受け、2014年には自己適合宣言を行いました。2019年には新たなエコ・キャンパス宣言（沖縄大学環境方針）を行い、大学独自の方法で環境問題に取り組んでいく事としました。

エコ・キャンパス宣言(沖縄大学環境方針)

基本理念

21世紀を迎え、私たちはこれまでの大量消費文明、競争型社会ではもはや人間の幸福が保証されないことに気づきはじめています。

これから求められるのは、「他者」に配慮し、私たちを取り巻く自然・社会環境と「共に生きていこう」という想像力／実践力ではないでしょうか。

大学の使命は、こうした時代の流れを受け止めながら教育や研究活動を行い、公正で活力ある社会、今日だけでなく明日以降も持続する社会をつくり出していく若者を世に送り出すことにあります。

沖縄大学は、日本の最南端に位置する「地域に根ざし、地域に学び、地域と共に生きる、開かれた大学」です。海に囲まれた島には、すべての生きもの、すべての人々と共に生きる「共生の思想」がごく自然に息づいています。しかし、沖縄は「青い空、青い海」に象徴されるすばらしい自然に恵まれた地域であると同時に、小さな島に過大な軍事基地と大型公共事業を抱え、環境が破壊されているところでもあります。

沖縄大学はこうした現状を見据え、教育と研究とを通じて地域の課題の改善を図ることのできる若者を育成していくことを目指します。そのためにまず足元の大学キャンパスを「共生」の実践の場とし、私たちを取り巻く環境を考える「エコ・キャンパス」に変えていきます。「地域共創・未来共創」の可能性を胸に、地域社会との協働を通じてさまざまな課題に取り組み、沖縄大学が、地球環境・平和社会実現に向けて小さくても確実な活動のできる実践の場としたいと思います。

基本方針

1. 沖縄大学は、「エコ・キャンパス」を実践する大学として、次のことに取り組みます。
 - ・省資源・省エネルギーに努めます。
 - ・事故及び緊急事態によって生じる汚染を予防します。
 - ・地域に求められる先進的な教育・研究を実践します。
 - ・地域社会と協力し、環境保全に努めます。
2. 本学の活動に関連する環境関連法並びに地域との協定を遵守します。
3. 環境管理に関する目標を設定し、学内の教職員、学生、常駐する事業者が一致協力して実践していきます。
4. 内部監査をととして、環境管理の体制について継続的に見直しを行っていきます。

2019年10月21日
学長 盛口 満

環境負荷

沖縄大学の過去5年間における資源やエネルギー使用量のデータを下記のとおりまとめました。この5年間の概要として大きなものは、2017年度にはアネックス共創館が、2019年度には健康栄養学部の新設に伴い、4号館の供用がそれぞれ開始されました。

2020年度データを前年度と比較すると、電力使用量で約3.2%減、水使用量で約41.5%減、コピー用紙使用量で31%減、ガソリン使用量で約30.3%減、LPG使用量が約59.7%減となりました。これらの数字を見ても分かるように、2020年度はコロナ禍の中での大学運営となり、遠隔講義等の導入で大学のエネルギー使用量が減少する状況になりました。今後はアフターコロナとなり通常の大学運営が戻った中で、いかに無駄なエネルギーの使用を抑えていくのが課題となります。

	2016	2017	2018	2019	2020
電力使用量 (kWh)	1,418,055	1,475,245	1,441,926	1,547,617	1,498,604
水使用量 (m ³)	3,315	4,742	3,818	3,850	2,253
コピー用紙使用量 (A4枚)	2,242,500	2,630,000	2,527,500	2,250,000	1,552,500
公用車ガソリン使用量 (L)	2987.04	3479.19	3726.41	2534.49	1766.47
LPG使用量 (m ³)	352.1	370.9	298.9	364.8	147.1

※電力、水、LPGは16年度は本館、17～18年度は本館＋アネックス、19～20年度は本館＋アネックス＋4号館

※紙、ガソリンは全て本館のデータ



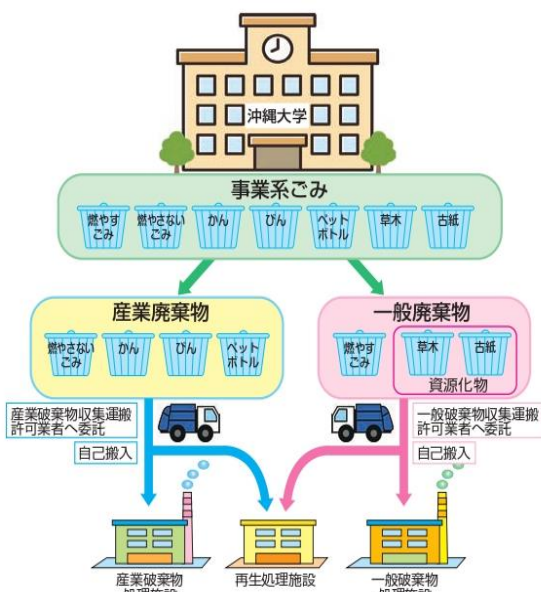
ごみ処理について

本学の事業活動に伴って生じたごみは「事業系ごみ」として処理されます。学生や教職員の生活活動（飲食等）に伴って生じたごみも事業系ごみとして扱われます。事業系ごみは産業廃棄物と一般廃棄物に区分されます。

産業廃棄物は廃棄物処理法及び法施行令で定められた種類・区分に則り、委託契約を結んだ業者に収集と処分を委託しています。具体的には「燃やさないごみ」、「資源化物（カン類、ビン類、ペットボトル）」、電化製品、廃液などの実験廃棄物、グリーストラップの汚泥や廃油があります。

一般廃棄物については「燃やすごみ」と「資源化物（古紙類、草木）」に分けて、収集業者と委託契約を結び収集と処分を委託しています。

これらの廃棄物について、どのようにモニタリングを進めていくかが課題となっています。



環境負荷軽減への取組み

水の節約・再利用のため、本学のトイレでは「中水」を使用しています。中水とは污水处理後の処理水と雨水のことで、通常私たちが飲み水として使用している上水と使用後の下水の中間の水のことです。具体的には2号館の屋上、3号館及び本館の地下に貯めている雨水を利用している他、2号館、3号館では本学独自の污水处理施設で処理された水を雨水と混ぜ、トイレの洗浄水としています。本学の污水处理施設は「回分式活性汚泥法」による設備で、水問題への取り組みで知られる故・宇井純名誉教授が設計したシンプルな仕組みです。この他、水栓の蛇口に節水金具を設置し、水の節約に努めています。

省資源のため、電気のデマンドコントロールを導入しており、夏場のクーラー使用時の電力負荷の軽減に努めています。またエネルギー消費が少ないLED電球の導入も進めています。

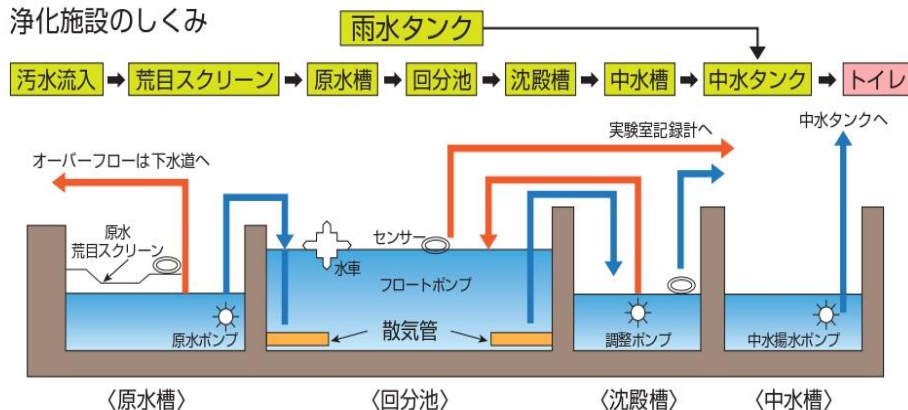


2号館屋上の雨水プール



回分式浄化槽

浄化施設のしくみ



リスク管理

リスク管理の中で、環境に関して以下のガイドラインやマニュアルがあります。

- 沖縄大学 緊急時の広報マニュアル
- 電話・SNS等による爆破予告・威力業務妨害フローチャート
- 沖縄大学における新興感染症伝播に対応するマニュアル
- 沖縄大学において実験・実習を安全に行うために
- 沖縄大学廃棄物処理マニュアル

環境保全のための教育・研究

1. 環境に関連するカリキュラム

沖縄大学では副専攻として環境学を選択することができます。

以下の「環境関連活動」及び「選択科目」の要件を満たすことが必要です。

● 環境関連活動

下記の1・2から選択。

1. 学内外における環境関連活動に参加し、2000字以上のレポートの提出
2. 環境社会検定（eco検定）の合格

● 選択科目

以下の科目より24単位以上修得

科 目 名	科 目 名
沖縄の自然	地域環境生態学Ⅰ
沖縄の地理	地域環境生態学Ⅱ
環境と社会	自然地理学Ⅰ
自然科学概論	自然地理学Ⅱ
生物保全Ⅰ	地域と農業Ⅰ
生物保全Ⅱ	地域と農業Ⅱ
人類の進化と適応	地理学
地域環境計画	地誌Ⅰ
環境概論	地誌Ⅱ
環境マネジメント演習	人文地理学Ⅰ
地球の科学と災害	人文地理学Ⅱ
まちづくりⅠ	環境保護と市民運動
まちづくりⅡ	衛生・公衆衛生学
環境と経済	

2020年度ハンドブック17頁参照

2. 外部資金を活用しての環境に関する研究

2020年度は1件の研究がありました。

● 環境研究総合推進費

自然共生領域	侵略的外来哺乳類の防除政策決定プロセスのための対策技術の高度化	城ヶ原貴通
--------	---------------------------------	-------

環境に関する社会貢献

1. 環境に関する公開講座・シンポジウム等の実施

2020年度は以下の環境を扱った公開講座・シンポジウム等が実施されました。

● 「国民との科学・技術対話」の実施

エコプロ online2020 11/25～11/28	生物多様性保全に向けた取り組み ～希少種保全と外来種防除～	城ヶ原貴通
タイトル	大分の自然と外来リスー高島の生態系の回復をはかるためにー	
開催日時	2020年11月19日	
開催場所	大分県 大在公民館	

環境に関する意識調査

2020年2月25日に、全学生・全選任教員・全職員（常勤、非常勤、嘱託職員）に向けて環境に関するアンケート調査を実施しました。アンケートは-googleフォームを使い、メールにて回答を依頼しました。回答者数は219人で、対象となるのは2,166人（専任教職員、非常勤・嘱託職員、全学生・全大学院生）なので、今後はアンケートの回収率をあげて行くことも課題として捉えられました。

問1 あなたの所属は

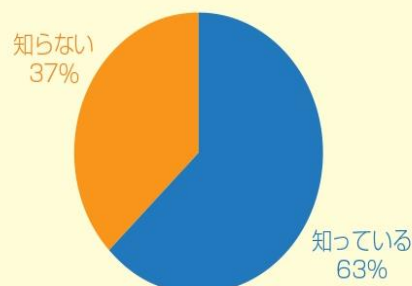
(教員)		(学生)	
経 法 商	14	経 法 商	37
国 コ ム	7	国 コ ム	16
福 祉 文 化	12	福 祉 文 化	40
こども文化	5	こども文化	10
管 理 栄 養	9	管 理 栄 養	19

(事務職)
含常勤、非常勤、嘱託職員
48

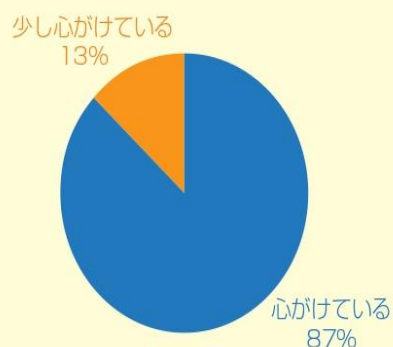
不明
2

問2 沖縄大学がエコ・キャンパス宣言をしている事を知っていますか？

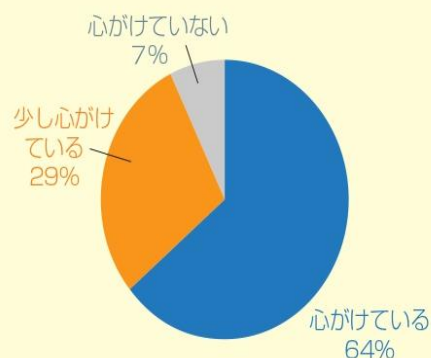
(回答者 219 人)



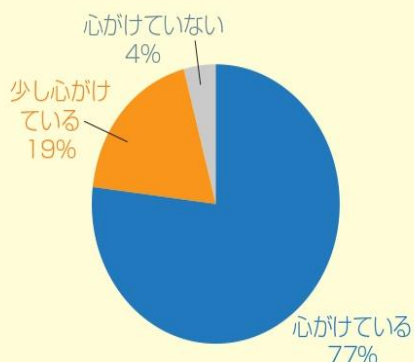
問3 ゴミ分別を心がけていますか？



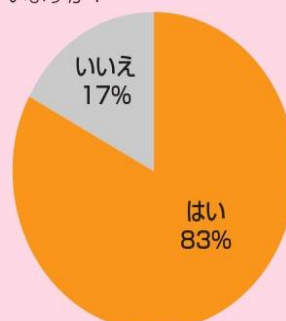
問4 節電を心がけていますか？



問5 節水を心がけていますか？



問6 (学生への質問) 環境関連の講義を受講したことはありますか？ 又は受講していますか？



問7 (学生への質問)

前問で「はい」お答えの方へ質問です。
受講した講義名を教えてください。

公衆衛生学	6
地域環境生態学	1
地域環境計画	1
地理学	2
市民社会とボランティア	1
沖縄の自然	2
環境と社会	1
環境マネジメント演習	1
環境概論	7
生物保全	1

問8 沖縄大学がもっと取り組むべき環境問題は何だと思えますか？(複数回答可)



※その他の意見としては以下のものがありました
 ●再生可能エネルギー ●太陽光パネル設置
 ●沖縄の水問題 ●SDGsへの取り組み

問9 沖縄大学の環境に関する事でご意見や要望があればお書き下さい。

※以下の意見のほか多数の回答がありました

- 太陽光発電等の再生可能エネルギーへの設備整備や交通問題解消を目指した那覇 LRT やバス等の公共交通の誘致を強化できないか。
- 大学全体で SDGs への取り組みを行うことで、地域や社会に対し、本学の姿勢を示すことができるのではないかと思います。
- 学校全体で、または学科でクリーン活動などのイベントがあれば楽しく参加できそう。
- 各種申請書、会議資料等のペーパーレス化が遅れていると思います。
- 今回は遠隔授業が多かったためか、無人でもクーラーが稼働している教室があり、消そうとしたら集中管理にて操作できず残念に思うことがあった。
- もっとお花や緑が多くあってほしい。
- ファッションや食べ物など興味を持ちやすい方向から環境をみた講義など、環境保全のボランティアの広報などに力を入れてほしい。

最後に

2019年10月に策定された新しいエコ・キャンパス宣言(沖縄大学環境方針)のもとに「地域環境の保全を大学が社会的責任を果たしていく上での重要な課題のひとつとして認識し、エコキャンパス作りの推進とともに、地域の環境と安全を守るための研究・教育を実践していく。」という沖縄大学の教育研究等環境の整備に関する方針が立てられ、その方針に従い年間報告書が昨年度再開、「沖縄大学環境レポート2019」として発刊されました。今年度も昨年度に引き続き「沖縄大学環境レポート2020」を発刊します。データを見ますと新型コロナウイルス感染症対策によって、遠隔授業、テレワークなどによる配布資料のデジタル化、教室使用率の低下などにより、電力使用量、水道使用量、A4コピー用紙使用量などすべて前年度を下回り環境負荷の低減につながっていますが、ポストコロナ時代の社会変化を見据え、この環境負荷低減を維持していくようPDCAを回して行く必要があります。

ところでみなさん、沖縄大学長期ビジョン(OKIDAI VISION 2028)の4つの重点課題の2つ目は「地域を軸にしたSDGsの推進」であることをご存知でしょうか?エコ・キャンパス宣言を踏まえ大学主体のSDGs貢献に向けた取り組みを推進していくことは沖縄大学の重点課題なのです。数年後にはESD教育(Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育)を受けた「SDGsネイティブ」の学生が入学してきます。彼らの手になるよう、また「環境の沖大」と称されていた沖縄大学の歴史に恥じることがないよう、大学に集う教職員、学生が情熱を持って「地域を軸にしたSDGsの推進」に取り組む必要があります。この報告書やアンケート調査が、みなさんが情熱的にSDGsに取り組む助けになることを願っています。

学内所員

2021 年度 学内所員

経法商学部 経法商学科		人文学部 国際コミュニケーション 学科		人文学部 福祉文化学科		人文学部 こども文化学科		健康栄養学部 管理栄養学科	
1	小野 啓子	19	王 志英	24	石原 端子	37	喜屋武 政勝	42	山代 寛
2	我部 聖	20	宮城 公子	25	久貝 興徳	38	須藤 義人	43	逸見 幾代
3	小西 吉呂	21	吉井 美知子	26	島村 聡	39	宮城 能彦	44	喜屋武 ゆりか
4	島袋 隆志	22	劉 剛	27	高良 沙哉	40	宮島 基	45	國仲 小織
5	崔 珉寧	23	渡邊 ゆきこ	28	玉木 千賀子	41	盛口 満	46	下地 みさ子
6	豊川 明佳			29	名城 健二				
7	成定 洋子			30	宮本 晋一				
8	春田 吉備彦			31	吉川 麻衣子				
9	圓田 浩二			32	金 蘭姫				
10	吉本 篤人			33	山野 良一				
11	若林 千代			34	朴 賢貞				
12	糸数 哲			35	西 章				
13	岩垣 真人			36	中山 健二郎				
14	石川 公彦								
15	城ヶ原 貴通								
16	朱 愷雯								
17	島田 尚徳								
18	前田 舟子								

2021 年度地域研究所
所長・副所長

2021 年度 地域研究所所長・副所長

役職	氏名	所属
所 長	島村 聡	沖縄大学人文学部福祉文化学科教授
副所長	島袋 隆志	沖縄大学経法商学部経法商学科教授
副所長	山野 良一	沖縄大学人文学部福祉文化学科教授

2021 年度地域研究所
企画運営委員

2021 年度 地域研究所企画運営委員

氏名	所属
島袋 隆志	沖縄大学経法商学部経法商学科教授・沖縄大学地域研究所副所長
豊川 明佳	沖縄大学経法商学部経法商学科教授
黒木 義成	沖縄大学人文学部国際コミュニケーション学科教授
島村 聡	沖縄大学人文学部福祉文化学科教授・沖縄大学地域研究所所長
山野 良一	沖縄大学人文学部福祉文化学科教授・沖縄大学地域研究所副所長
喜屋武 政勝	沖縄大学人文学部こども文化学科教授
吉村 壮明	沖縄大学人文学部こども文化学科教授
城間 尚樹	沖縄大学地域研究所事務長
後藤 哲志	沖縄大学地域研究所主幹

地域研究所規程

○沖縄大学地域研究所規程

（1988年 5月15日制定）

改正 1996年12月26日 2006年12月11日
1998年 3月30日 2009年 2月16日
2001年 3月28日 2011年 3月28日
2003年 3月 5日 2012年 1月30日
2005年 7月11日 2014年 5月19日

第1章 総則

（名称）

第1条 沖縄大学学則第59条に基づき、本学に地域研究所（以下「研究所」という。）を置く。

（目的）

第2条 研究所は、琉球弧及びアジア地域の社会・文化・自然環境等に関する調査・研究及び地域共創・未来共創（以下、地域共創という）にかかる事業を行うことを目的とする。

（事業）

第3条 研究所は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- （1）研究所独自による調査・研究
- （2）地域住民、行政機関等からの委託による調査・研究
- （3）研究資料の収集・整理及び保管
- （4）調査・研究成果の発表
- （5）地域共創に関する事。
- （6）その他、目的達成に必要な事業

第2章 組織

（構成）

第4条 研究所は、学内所員、特別研究員、事務職員等によって構成する。

（研究部門）

第5条 研究所に地域研究部門を置く。

2 地域研究部門は次の事業を行う。

- （1）特定課題を調査研究する研究班の設置
- （2）研究会、研究シンポジウム等の開催
- （3）紀要、年報等の発行
- （4）ブックレット、叢書等の発行
- （5）その他地域研究に関する事業

（地域共創センター）

第6条 研究所に地域共創センターを置く。

2 地域共創センターは次の事業を行う。

- （1）土曜教養講座、移動市民大学等地域へ知の還元活動
- （2）ジュニア研究支援、離島研究プロジェクト等の未来共創活動
- （3）地域共創の教育に関すること

第8編 研究施設等（沖縄大学地域研究所規程）

- (4) 地域との連携・交流、ボランティアの養成・派遣等地域と大学をつなぐ活動
- (5) 学内の環境の維持、改善に関すること
- (6) その他地域共創に関する事業

（所長及び副所長）

第7条 研究所に所長を置く。必要に応じて副所長を置くことができる。

（所長の職務）

第8条 所長は、職務を統轄し、研究所を代表するとともに、総会の議長を兼ねる。

（副所長の職務）

第9条 副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときは所長の職務を代行する。

（事業計画及び経過報告）

第10条 所長は、当該年度の事業経過及び次年度の事業計画を学長に提出する。

（所長及び副所長の選出）

第11条 所長は、学長が指名し、総会及び全学教員会議の承認を得るものとする。副所長は、所長が指名し、総会の承認を得るものとする。

（所長及び副所長の任命）

第12条 前条によって選出された所長及び副所長は、常任理事会の議を経て、学長が任命する。

（所長及び副所長の任期）

第13条 所長及び副所長の任期は、3年とする。ただし、再任を妨げない。

2 所長及び副所長が欠けたとき、その後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

（専任所員）

第14条 研究所に専任所員若干名を置くことができる。

2 専任所員は、学内所員とし、第5条に基づく研究部門に属する。

（専任所員の任務）

第15条 専任所員は、研究所の事業計画に基づき調査・研究、及びその他研究所の事業に従事する。

2 専任所員は、研究活動及び研究成果を「年報」等で報告しなければならない。

（学内所員の任務と職免）

第16条 学内所員は、研究所の任務に従事するが、本学での講義担当の責務を免除することはできない。

（学内所員の選任）

第17条 学内所員は、本学専任教員の申請に基づいて、総会の議を経て決定する。

2 前項の学内所員は、全学教員会議の承認を経て学長が委嘱する。

（学内所員の任期）

第18条 学内所員の任期は、原則として、3年とする。ただし、再任を妨げない。

（特別研究員）

第19条 研究所に学外との学術交流を目的として、特別研究員若干名を置くことができる。

2 特別研究員は、本学専任教員以外の者の中から総会において候補者を選定し、全学教員会議の議を経て学長が委嘱する。特別研究員に関する細則は、別に定める。

3 特別研究員は、研究所の事業計画に基づく調査・研究に協力する。

4 特別研究員の任期は、原則として、3年とする。ただし、再任を妨げない。

（事務職員）

第8編 研究施設等（沖縄大学地域研究所規程）

第20条 研究所に事務職員を若干名置く。

2 事務職員は、所長の監督のもとに研究所の庶務を処理する。

第3章 運営

（総会）

第21条 研究所の運営のため総会を置く。

2 総会は、必要に応じて所長がこれを招集し、次の事項を審議する。

- (1) 事業計画に関する事項
- (2) 受託事業に関する事項
- (3) 管理及び運営に関する事項
- (4) 予算に関する事項
- (5) 研究所の人事に関する事項
- (6) その他、研究所に関する事項

（総会の構成）

第22条 総会は、次の者によって構成する。

- (1) 所長
- (2) 副所長
- (3) 学内所員

2 事務職員は、総会に参加し、意見を述べることができる。

（企画運営委員会）

第23条 研究所の運営のために企画運営委員会を置く。

2 企画運営委員会は、必要に応じて所長がこれを招集し、総会の委任を受けた事項及び日常業務について審議する。

（企画運営委員会の構成）

第24条 企画運営委員会は、次の者によって構成する。

- (1) 所長
- (2) 副所長
- (3) 学内所員から選出された者若干名
- (4) 事務職員

（会議の成立及び議決）

第25条 研究所に関する会議は、構成員の過半数の出席をもって成立する。

2 前項の会議における議決は、出席者の過半数以上の同意を必要とする。

第4章 予算

（予算）

第26条 予算の編成及び執行は、本学諸規定の定めるところによる。

第5章 改廃

（改廃）

第27条 この規程の改廃は、総会の議を経て、全学教員会議及び理事会の承認を得なければならない。

附則

- 1 この規則は、1988年 5月15日から施行する。
- 2 研究所は、本学創立30周年記念日の1988年 6月10日に設立するものとする。

附則（1996年 12月 26日）

この規則は、1996年12月27日から施行する。

附則（1998年 3月 30日）

第8編 研究施設等（沖縄大学地域研究所規程）

- 1 この規則は、1998年 4月 1日から施行する。
- 2 この規則第17条は、2001年 4月 1日以降の早い時期において、見直すものとする。

附 則（2001年 3月28日）

この規則は、2001年 4月 1日から施行する。

附 則（2003年3月5日改正）

この規則は、2003年 4月 1日から施行する。（第17条、第17条の2）

附 則（2005年 7月11日）

この規則は、2005年 7月11日から施行する。（第4条、第7条、第10条、第13条、第14条、第15条、第17条、第18条、第19条、第20条、第22条、第23条、第24条、第25条、第28条改正）

附 則（2006年12月11日）

この規則は、2007年 4月 1日から施行する。（第16条修正）

附 則（2009年 2月16日改正）

この規則は、2009年 4月 1日から施行する。（第2条、第3条、第6条改正）

附 則（2011年 3月28日改正）

この規則は、2011年 3月22日から施行する。（第12条改正）

附 則（2012年1月30日改正）

この規則は、2012年4月1日から施行する。（第2条、第3条、第4条、第5条、第6条、第11条、第14条、第16条、第19条、第22条、第23条、第24条、第25条改正）

附 則（2014年5月19日改正）

この規程は、2014年5月19日から施行する。（第6条、第14条、第15条、第23条、第27条改正）